

2024（令和 6）年度 人間発達環境学研究科
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科における令和6(2024)年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した集積となっている。

令和6年度は、これまで本研究科が取り組んできた多様な活動を継続・発展させるため、研究科として解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、教員らが専攻をこえて協働できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な学生の積極的獲得の必要性などの観点からの取り組み・検討をさらに進めた。また、学域制（教員組織と教育研究組織の分離）や教員人事のポイント制のもとで、教員の新規採用および昇任について人事計画を進め、教育研究組織の活性化による機能強化につとめた。

第4期中期目標・中期計画期間に向けて、神戸大学として各種評価指標の目標値を設定し、部局にも応分の目標設定を求められ、この評価の中で本研究科の強みを見つける作業も必要となった。また、令和4年度から神戸大学が採択された国立大学改革・研究基盤強化推進事業「異分野共創研究教育グローバル拠点」にも参画し、その中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに運営している。また、高大接続卓越グローバル人材育成センターに本研究科の教員が関わり、“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム（ROOTプログラム）を中心的に運営し、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている。さらに、本研究科に強みである異分野融合を打ち出して企業との連携に組織的に取り組む準備を進めている。

こうした中でも、本研究科がこれまで唱えてきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティを守り、さらに発展させていく必要性を感じている。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、他部局との協力のもと、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めて行く施策がさらに重要になると考える。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2024(令和 6)年度
人間発達環境学研究科 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 令和6年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1. 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	2
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」	2
1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織	3
1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標(KPI: Key Performance Indicator)	4
2. 学部・大学院運営	4
2.1. 学部・大学院運営組織	4
2.2. 管理運営	5
2.2.1. 学域人事委員会	5
2.2.2. 研究科運営委員会	8
2.2.3. 中期計画推進委員会	10
2.2.4. 教員活動評価委員会	11
2.2.5. 自己評価委員会	11
2.2.6. 安全衛生委員会	12
2.3. 予算	13
2.3.1. 予算に関する特記事項	13
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	13
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	14
2.4. 広報及び情報公開	14
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	14
2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ	14
2.4.3. ホームカミングデイ	15
2.5. 環境設備	16
2.5.1. 教育・学習環境の整備	16
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	17
2.6. 教員研修	17
2.6.1. FD	17
2.6.2. 初任者研修	17
3. 入試	17
3.1. 一般選抜入試	17
3.1.1. 入学試験委員会	17

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	19
4. 国際交流活動	19
4.1. 学術交流協定	19
4.2. 留学生	20
4.3. ダブルディグリー	21
4.4. Innovative Asia	21
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	22
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	22
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	23
5. 教育	24
5.1. 教育課程	24
5.1.1. 今年度の特徴	24
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	24
5.1.3. 教職教育	24
5.1.4. ESD サブコース	25
5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	25
5.2. 各専攻講座の教育	26
5.2.1. 人間発達専攻	26
5.2.2. 人間環境学専攻	49
6. 進路	52
6.1. キャリア形成支援	52
6.1.1. キャリアサポートセンター	52
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	54
6.2. 卒業・修了後の進路	55
7. 研究	55
7.1. 今年度の特長	55
7.1.1. 研究動向	55
7.1.2. 学生の受賞	56
7.2. 学術 Weeks	58
7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー	58
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	64
7.4. 高度教員養成プログラム	68
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	69
7.6. 研究推進	70
7.6.1. 研究倫理審査委員会	70
7.6.2. 紀要編集委員会	70
7.7. 各専攻の研究	70
7.7.1. 人間発達専攻	70

7.7.2. 人間環境学専攻	129
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	151
8.1. 産官学共同プロジェクト	151
8.2. 地域連携プロジェクト	156
9. 社会的活動・震災復興支援	159
9.1. 災害地への支援活動	159
10. 附属施設	159
10.1. 発達支援インスティテュート	159
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	159
10.1.2. 心理教育相談室	160
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	161
10.1.4. のびやかスペースあーち	169
10.1.5. サイエンスショップ	175
10.1.6. 教育連携推進室	179
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	184
10.2. 実習観察園の運営利用状況	187

1. 令和6年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1. 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

R4年度から第4期中期目標・中期計画が始まった(R9年度まで)。平成27年6月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の3つの重点支援の枠組みの重点支援の内、神戸大学は③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択し、第4期からは規模や組織体制の観点からさらに2つのグループに細分化され、グループが⑤つとなり、現在に至っている。

神戸大学は、「学理と実際の調和」を建学の理念とし、「真摯・自由・協同」の学風のもと、真理の探究と社会実装を旨として学問の継承と発展に寄与し、人々の智と徳を高め、もって社会の基盤を築き、産業・経済を活発にするとともに、様々な社会的課題解決に貢献してきた。この伝統を継承するとともに人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命医学系諸分野における強みを社会に活かし、「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」として進化・発展し続けることを神戸大学長期ビジョンとしている(図参照、KU VISION 2030)。



(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上、組織間の教員配置の最適化、柔軟な改組の実現、教員数及び若手ポストの増加をねらいとし、教員の教育研究組織からの分離、ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

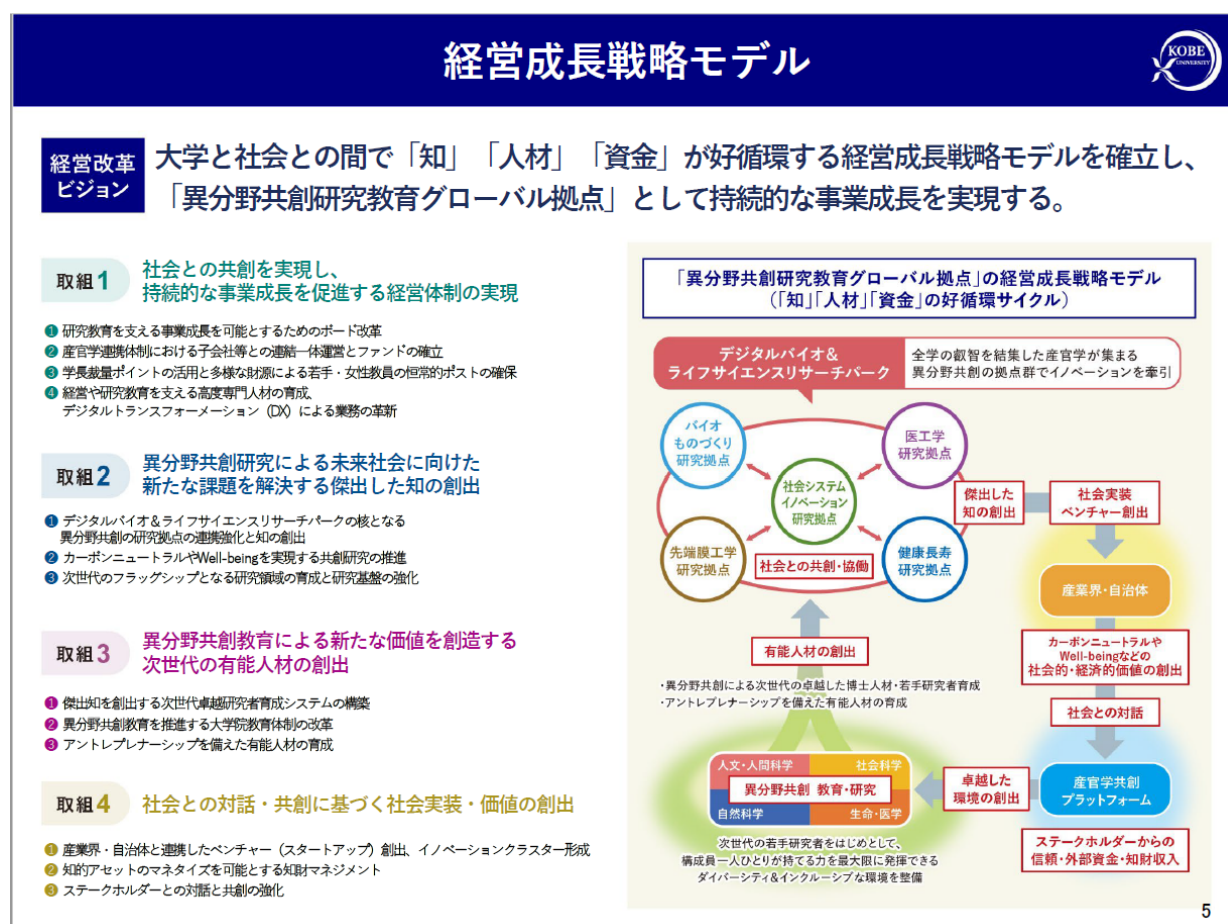
平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され、当研究科教員の全員が人間発達学域の所属となった。また、同時に教員人事委員会が設置され、教授人事の審査、及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして、平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され、現在に至っている。

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する異分野共創研究の推進」

神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」に向けた取り組みとして、国立大学改革・研究基盤強化推進事業が令和4年10月から採択され、これを中心に神戸大学ではビジョン実現が推進されている。中心的なデジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパークの一つの拠点である、健康長寿研究拠点のウェルビーイング先端研究センターを、保健学研究科とともに立ち上げ、神戸大学全体の教育研究に寄与してきている（図参照、KU VISION 2030）。



この推進のため、先端的異分野共創研究プロジェクト、『異分野共創による資源循環イノベーション』と『神戸市デジタルツインによる防災減災・社会経済シミュレーション分析：世界初「地震シナリオの網羅的シミュレーション」による異分野共創先端研究』が推進されており、いずれのプロジェクトに本研究科に教員が参加している。また、本学のフラッグシップ研究の候補となり得る異分野共創研究ユニットの創出及び育成が行われており、『環境 DNA 研究の総合化ユニット』、『ゼニゴケ産業利用（機能性野菜と有用物質生産）のためのプラットフォーム開発』にも本研究科の教員が参画し（前者のユニットは本研究科教員がユニットリーダーである）、研究科のプレゼンスを高めるとともに、神戸大学ビジョン「知と人を創る異分野共創研究教育グローバル拠点」の推進に大きく貢献している。

令和 6 年度からは戦略的事業経費の支援を受け、適応的スキル発達をめぐる異分野競争先端研究を推進している。

さらに、異分野共創研究教育グローバル拠点のもとに推進された高等学術研究院テニュアトラック教員制に 5 名（A 制度 1 名、B 制度 4 名）の教員が採択されており、また、高等学術研究院の卓越教授 1 名、卓越准教授 1 名が選ばれ、神戸大学の改革・研究基盤強化推進を支援している。

1.2.2. 異分野共創研究教育を推進のための組織

人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の 5 専攻から成る研究科として平成 19 年 4 月に設置された。その後、平成 25 年 4 月に、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の 4 専攻をまとめ人間発達専攻とし、人間発達専攻と人間環境学専攻の 2 専攻体制で教育・研究を行っている。

平成 26 年 4 月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に取り組みについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成 29 年および 2020 年度には外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は発展・深化を続けており、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、より多くの教員が専攻を越えて協働できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

人間発達環境学研究科では、国際人間科学部の最初の卒業生が入学してくるのを機に、人間発達専攻内の 4 つの系講座（こころ系、表現系、からだ系、教育系）および人間環境学専攻の 2 つの講座（環

境基礎講座，環境形成講座）をそれぞれに1講座にまとめ，各専攻を1講座で編成し，それまでの講座を教育研究分野に移行する組織再編が令和3年度に行われた。この組織再編により研究・教育活動における連携をさらに進める体制ができ，それを具体化するための施策が，今後さらに必要となる。

このような中，令和5年度からさらに教育研究を連携させるための組織について将来検討委員会で検討を始め，令和6年度にはこの委員会から研究科運営委員会への検討結果の答申が行われ，それをもとに教員会議で意見交換を行った。

1.2.3. 第4期中期目標期間の大学評価と部局独自指標（KPI: Key Performance Indicator）

第4期中期目標期間では大学指標に基づき，各部局にも指標が設定され（部局独自指標，意欲度指標含む），これをもとに部局運営を実施することとなった。令和5年度の各指標の評価は達成できていない指標が多かった。特に，WoS論文，国際共同研究に関係する国際共著論文数の目標達成が十分でなかった。一方，外部資金獲得額や共同研究・受託研究費は目標を上回っていた。次年度以降，国際共同研究推進のための研究科での支援方法，また，独自指標の著書数の達成率低下の原因の検討が必要である。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科は，以下の組織で運営している。

＜教授会等＞

人間発達環境学域会議，神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会

以下に委員会等の組織を列記する。

＜管理運営＞

学域人事委員会，教員活動評価委員会，研究科運営委員会，予算委員会，学舎検討委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，交流ルーム運営委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，

＜研究＞

研究紀要編集委員会，研究倫理審査委員会

＜教務・学生＞

教務委員会，学生委員会

＜入試＞

入学試験委員会，学生委員会（編入学入学者の募集及び選考に関わる事務），オープンらぼワーキンググループ

＜国際交流＞

国際交流委員会，学術 WEEKS ワーキンググループ

＜広報＞

情報メディア委員会，研究科案内作成ワーキンググループ

＜附属施設等＞

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，サイエンスショップ運営委員会，教育連携推進室運営委員会，アクティブエイジング研究センター運営委員会

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は，教員の採用及び昇任等，ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して，学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は，学域長，副学域長，人間発達環境学研究科専攻長，国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）の8名体制であり，令和6年度の委員は近藤徳彦学域長（委員長），津田英二副学域長，佐藤春実副学域長，木下孝司人間発達専攻長，近江戸伸子人間環境学専攻長，岸本吉弘国際人間科学部発達コミュニティ学科長，太田和宏国際人間科学部環境共生学科長，山下晃一国際人間科学部子ども教育学科長である。また，長谷川浩樹事務部長，豊嶋江梨子総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については，以下に記す。

	検討事項
第1回（4月3日）	1. 令和6年度人間発達環境学域人事方針について 2. ポイントについて 3. 有期雇用契約における「10年特例」について 4. 准教授，講師または助教採用人事について 5. 助教の准教授昇任人事について 6. 高等学術研究院テニュアトラック教員（B制度）の推薦について 7. その他
臨時：4月12日	1. 有期雇用契約における「10年特例」について 2. その他
第2回（4月26日）	1. 臨床心理学コースについて 2. 准教授，講師または助教採用人事について 3. 助教の准教授昇任人事について 4. その他
臨時：5月14日	1. 准教授，講師採用人事について 2. 准教授，講師または助教の採用人事の公募について 3. その他
第3回（6月7日）	1. 准教授昇任人事について 2. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 准教授，講師又は助教の採用人事の公募について

	4. 准教授、講師または助教の採用人事に係る専門分野について 5. 助教の講師または准教授昇任人事について 6. テニユア審査について 7. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程の一部改正について 8. 任期の定めのない助教とするための審査基準の一部改正について 9. その他
第4回（7月5日）	1. 准教授、講師または助教の採用人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 3. 講師または助教の採用人事の公募について 4. 公募を行わない採用人事について 5. 助教の講師または准教授昇任人事について 6. その他
第5回（8月30日）	1. 教授昇任人事について 2. 准教授、講師または助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 3. テニユア審査の報告について（2件） 4. 公募を行わない採用人事について 5. テニユアトラック規定について 6. 助教の昇任について 7. 教員の異動について 8. ポイントについて 9. その他
第6回（10月11日）	1. 教授昇任人事について 2. 外部資金による特命助教の採用人事について 3. 講師または助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 4. 外部資金により雇用する特命教員の任期更新について 5. 今後の人事及びポイントについて 6. 名誉教授の推薦について 7. 採用人事の期間について 8. その他
第7回（11月1日）	1. 准教授採用人事について 2. 講師または准教授昇任候補者について 3. 職務規定に係る昇任案件について 4. 教授昇任候補者について

	5. 今後の採用人事について 6. 昇任_採用人事での配布物について 7. その他
第 8 回（12 月 6 日）	1. 准教授，講師または助教採用人事について 2. 教員の割愛について 3. 准教授昇任人事に係る人事選考委員会の設置について 4. 教授昇任候補者の選考について 5. テニユア審査について 6. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規定の一部改正について 7. 人間発達環境学域教授昇任人のためのガイドラインの一部改正について 8. その他
第 9 回（1 月 10 日）	1. 採用人事について 2. 教授昇任候補者の選考について 3. テニユア審査報告について 4. その他
第 10 回（1 月 31 日）	1. 採用人事計画について 2. テニユア審査報告について 3. テニユアトラック教員の任期について 4. 教員（特命）の異動について 5. 神戸大学人間発達環境学域テニユアトラック制に関する規程の一部改正について 6. 人間発達環境学域教授昇任人事のためのガイドラインの一部改正について 7. その他
持ち回り：2 月 28 日	1. みらい開拓人材育成センターへの教員配置要望について 2. 国際連携推進機構への教員配置要望について
第 11 回（3 月 7 日）	1. 准教授昇任人事について 2. 講師または助教の採用人事の公募について 3. 採用人事について 4. テニユア審査について 5. 職務規定について 6. その他
臨時：3 月 17 日	1. 採用人事について 2. 国際連携推進機構への教員配置要望について 3. その他

（学域人事委員会委員長 近藤徳彦）

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長（2名），その他委員会が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた8名体制で，研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。検討事項は，以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月3日）	1. 研究科運営課題について 2. 予備審査委員会委員候補者について 3. 学内・部局内プロジェクト等について 4. 共同研究について 5. G棟改修について 6. 国際人間科学部について 7. その他 ・ 将来検討委員会 ・ オープンらぼワーキンググループ
第2回（4月26日）	1. 将来検討委員会 2. 博士後期審査基準（参考論文：学術論文の取り扱い） 3. 2023（令和5）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」報告書について 4. 優秀若手研究者賞 5. 博士課程後期の大学院生室 6. ハラスメント現状と対策（教育研究分野） 7. 教員活動評価 8. 大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業 9. Bad Boys 対応 10. 施設更新（G棟，食堂，グラウンド・テニスコート・体育館・プール：ミズノ） 11. 初年次セミナー＋グローバルイシュー演習
第3回（6月7日）	1. 2024（令和6）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」の選考結果について 2. 2022（令和4）年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」報告書について 3. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における客員協力研究員の称号付与に関する内規の制定について 4. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科におけるハラスメントの防止等に関する内規の一部改正について 5. その他
第4回（7月5日）	1. 将来検討委員会からの報告

	2. 2024 (令和 6) 年度人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」の選考結果について 3. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における客員協力研究員の称号付与に関する内規の制定について 4. 博士学位論文審査委員について 5. 国際人間科学部の運営体制 6. 紀要 7. 課題 ・博士論文の基準(参考論文) ・研究科運営での課題・要望集約 8. その他
第 5 回 (8 月 30 日)	1. 予算について 2. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における研究員の称号付与に関する内規の改正について 3. 研究科運営課題について 4. その他
第 6 回 (10 月 11 日)	1. 予算方針について (教育, 研究, 管理運営) 2. 将来検討委員会答申の取扱いについて 3. 研究教育拠点について 4. G 棟改修について 5. DC_PD 結果について 6. 「保健体育 (中・高専修免)」の課程認定取り下げ (教職課程委員会) について 7. デジタルバイオ&ライフサイエンスリサーチパーク_健康長寿研究拠点について 8. ハラスメント対策 9. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科における研究員等の称号付与に関する内規 (案) について 10. 国際人間科学部 (Badboys, GSP_GCP, 電動アシスト自転車) 11. その他
第 7 回 (11 月 1 日)	1. 学科長の任期について 2. 研究科予算について 3. 鶴甲小学校の活動支援について 4. 将来検討委員会答申の取扱い 5. 令和 8 年度概算要求について (多世代縦断研究教育拠点) 6. 寄附講座について 7. 非常勤講師の年齢について 8. その他

第 8 回（12 月 6 日）	1. 教員免許科目における非常勤講師の割合について 2. 概算要求について 3. 現況分析について 4. 将来検討委員会の答申の取扱いについて 5. 寄附講座について 6. その他
第 9 回（1 月 10 日）	1. 将来検討委員会の報告について 2. 寄附講座について 3. 予算編成について 4. 博士学位論文審査委員会委員候補者について 5. その他 ・課題 ・G 棟 食堂改修
第 10 回（1 月 31 日）	1. 予算編成について 2. その他 ・課題 ・G 棟 食堂改修
持ち回り：2 月 13 日	1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要規程の一部改正について
第 11 回（3 月 7 日）	1. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科計量管理規定の一部改正について 2. その他 ・課題

（研究科運営委員会委員長 近藤徳彦）

2.2.3. 中期計画推進委員会

令和 6 年度は、研究科長（委員長・近藤徳彦）、副研究科長（津田英二、佐藤春実）、入学試験委員会委員長（津田英二）、国際交流委員会委員長（加藤佳子）、教務委員会委員長（大田美佐子）、学生委員会委員長（中谷奈津子）、キャリアサポートセンター長（澤宗則）、情報メディア委員会委員長（宮田任寿）、自己評価委員会委員長（蘆田弘樹）、事務部長（長谷川浩樹）の構成員に加え、総務係長（豊嶋江梨子）が出席し、令和 5 年度より研究科運営委員会との合同会議を開催した（計 10 回）。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「中期目標・中期計画管理表」における令和 6 年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2.2.4. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて 11 年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第 3 条に基づき、学域長、副学域長、専攻長に、その他学域長が必要と認めた者として国際人間科学部学科長（グローバル文化学科長を除く）を加えた 8 名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6 月 7 日、7 月 5 日、8 月 2 日、11 月 1 日、12 月 6 日に開催した。

（教員活動評価委員会委員長 近藤徳彦）

2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、副研究科長（津田英二、佐藤春実）、委員長（蘆田弘樹）、副委員長（橋本直人）、委員（坂本美記、關典子、高見和至、北野幸子）、事務課長の 9 名の構成員ならびに総務係長（豊嶋江梨子）が出席した。6 回の委員会（メール会議 4 回を含む）の開催によって、以下の事項について取り組んだ。

(1) ファカルティ・ディベロップメント

・授業のピアレビュー

大学院の授業を対象にピアレビューを実施している。各専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換が行われ、授業 2 科目を対象にそれぞれ教員 1 名が参加した。次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

・ファカルティ・ディベロップメント講演会

大学教員としての能力開発を目的として、3 回のファカルティ・ディベロップメントを実施した。参加者の延べ人数は、245 名（教員 230・職員等 15）であった。今年度のテーマは、競争的研究費制度に関するもの、論文オープンアクセス義務化に関するもの、知的財産に関するものであった。

(2) Voice Box（「学生の声」投稿箱）への対応

本年度投稿はなかった。

(3) 各種アンケートの実施と検討

研究科前期課程について、学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振り返りアンケート、卒業・修了時アンケートを実施し、結果の分析を行った。また来年度に向け、研究科独自の質問項目を設定するかどうかについて検討を行った。

(4) 教育の内部質保証に関する自己点検・評価

令和 5 年度「教育の内部質保証に関する自己点検・評価」に関する一次点検・評価を行い、報告書を作成した。

(5) 令和 6 年度「年次報告書」、「現況分析に関する報告書」の担当

令和 6 年度の研究科における教育・研究活動を集約した「年次報告書」の執筆依頼をするとともに、「現況分析に関する報告書」の一部を取りまとめた。

（自己評価委員会委員長 蘆田弘樹）

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 令和6年度委員

委員長（木村哲也），副委員長（勅使河原君江），委員（余田有希子，谷篤史，福田博也，長谷川浩樹（事務部長），豊嶋江梨子（総務係長），篠原千亜紀（附属図書館人間科学情報サービス係長），浅野志織（総務係員），笠原真人（総務係員），山中康弘（会計係長））

2) 委員会の開催

対面にて4回開催した（5月21日，9月11日，11月15日，2月14日）。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し，各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・定期点検箇所の見直しについて
 - ・前年度からの検討課題であった研究室等の巡視について，本年度は衛生管理者による巡視を2ヶ月に1回程度行うという方針が委員会で承認された。
- ・衛生管理者による巡視の実施とその対応について
 - ・C棟，D棟，E棟，F棟，G棟について，前年度の巡視（2023年11月30日）で指摘のあった箇所を中心に，衛生管理者巡視を7月16日に実施した。要改善点は改善を依頼した。
 - ・A棟について，前年度の巡視（2023年11月30日）で指摘のあった箇所を中心に，衛生管理者巡視を8月8日に実施した。要改善点は改善を依頼した。
 - ・A棟5～7階の衛生管理者巡視を10月7日に実施した。要改善点は改善を依頼し，改善確認のための再巡視を11月19日に行った。結果について，教授会（12月20日）と全学安全衛生委員会（12月26日）で報告した。
 - ・運動場，運動場附属施設，テニスコート，駐輪場，体育館等について，衛生管理者巡視を12月17日に実施した。要改善点は改善を依頼した。また，施設利用者に向けた注意喚起の掲示を行った。
- ・防災管理点検結果への対応について
 - ・9月9日に実施された防災管理点検の結果，棚等の転倒防止措置がされていない部屋があったとの指摘があったため，教授会で該当する部屋を報告し，改善を依頼した。今年度については本研究科の固定基準に該当するものについては，研究科でとりまとめて固定することとした。
- ・固定基準の決定について

- ・本研究科における棚等の固定基準を委員会で決定し、教授会（12月20日）で周知した。

6) 課題

- ・転倒、落下防止措置についての注意喚起を継続する。
- ・化学物質の管理徹底についての注意喚起を継続する。

（安全衛生委員会委員長 木村哲也）

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 令和5年度（2023）決算について

収入決算額は2億642万5,634円、支出決算額は2億543万2,634円となり、収入決算額との差額99万3,000円は令和6年度へ繰り越した。また、学生・教職員への福利厚生サービスの拡充のため学内資金の預り・貸付制度を利用して食堂リノベーション事業費として2,500万円を令和7年度に繰り越した。

(2) 令和6年度（2024）当初予算配分再編成（5月）について

学生当経費について5月1日現在の大学院生の員数確定及び博士実験系の申請に基づき再編成を行った。

(3) 令和6年度（2024）当初予算配分再編成（10月）について

学生当経費の研究生の人数が確定したことによる再編成を行った。また、G棟改修事業費として2,500万円を令和8年度まで預け入れをした。

(5) 令和7年度（2025）当初予算配分について

収入予算額は実質、対前年度比で1,024万5,499円の減となった。これら収入減に伴い、支出予算項目の研究経費、附属施設経費、委員会経費を減額調整した。

（予算委員会委員長 丑丸敦史）

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1) 令和5年度（2023）決算について

令和6年5月14日の予算委員会、令和6年5月17日の教授会において審議・承認された。

(2) 令和6年度（2024）当初予算配分再編成（5月）について

令和6年5月14日の予算委員会、令和6年5月17日の教授会において審議・承認された。

(3) 令和6年度（2024）当初予算配分再編成（10月）について

令和6年10月15日の予算委員会、令和6年10月18日の教授会において審議・承認された。

(4) 令和7年度（2025）当初予算配分について

令和7年3月13日の予算委員会、令和7年3月19日の教授会において審議・承認された。

（予算委員会委員長 丑丸敦史）

2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

外部資金の獲得状況については、その詳細を資料編（特に「11-3-1～5」参照）に掲載しているため、ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

令和6年度科学研究費補助金の獲得は、61件（新規：25件）、総額121,700千円であった。内訳は、学術変革領域研究(A)公募研究：1件、基盤研究(A)：1件、基盤研究(B)：18件（新規：8件）、基盤研究(C)：21件（新規：10件）、挑戦的研究（開拓）：2件（新規：1件）、挑戦的研究（萌芽）：5件、若手研究：9件（新規5件）、研究活動スタート支援：2件（新規：1件）、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）：2件、となっている。基盤研究(A)をはじめ基盤研究(B)(C)の採択数の堅調な増加が特徴的である。

引き続き、研究科運営委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員について、令和6年度はDC14名（新規：1名）、DC25名（新規：2名）、PD2名、RPD1名が採用され、昨年より新規採択数は減ったが、継続も含めると12名と多数採択されている。10年以上にわたって毎年開催している学生委員会主催の申請に係る説明会に加えて、学術研究推進機構学術研究推進室（URA室）の支援を得て、計画調書（申請書）の書き方セミナーや推敲のためのワークショップの開催により、申請数の増加につながった。

受託研究について、令和6年度は12件、総額6,115万円（令和5年度11件、総額6,774万円）、共同研究については、18件、総額4,131万円（令和5年度15件、総額2,827万円）となった。

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

2026年4月入学者向け研究科案内（研究科案内2026）を作成した（発行は2025年4月1日予定）。研究科案内2026は24ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト（<http://www.h.kobe-u.ac.jp>）は、2021年度に最新のCMS（コンテンツ管理システム）用で作成したデザインテンプレートを導入し、全面改装を行っている。研究科案内の情報に基づいた最新情報や入試情報を掲載した。また、研究科における様々なニュースや在学生向けの教務情報や学生生活に関わる情報を掲載した。なお、ウェブサーバは老朽化のため、近いうちにリプレースを必要とする。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

オープンらぼとは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科前期課程に進学を考えており、研究や研究内容について詳しい話を聞いて進路の参考にしたい、興味のある研究分野や教員と話をしながら進学を考えてみたいという方々のために人間発達環境学研究科が独自に運営するプログラムである。平成

28 年度から始めているこの取り組みは、「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うというものである。

令和 6 年度に関しては、面談者の希望に応じて対面あるいは遠隔のいずれかで実施した。オープンらぼ春シーズンは、面談期間を 6 月 10 日から 7 月 5 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 68 名、人間環境学専攻での面談者は 18 名、計 86 名であった。令和 4 年度から始めたオープンらぼ秋シーズンは、面談期間を 11 月 11 日から 12 月 6 日までとした。その結果、人間発達専攻での面談者は 27 名、人間環境学専攻での面談者は 9 名、計 36 名であった。

令和 7 年度人間発達環境学研究科入試は、人間発達専攻、人間環境学専攻ともに受験者数が堅調であった。オープンらぼ実施の成果であるとともに、SNS (X (旧 Twitter), Instagram) での情報発信の効果が含まれていると思われる。これらでは、院生・教員の研究成果情報の公開や、研究科で実施される各種イベント情報を公開している。

オープンらぼ開催の目的は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験者を増加させる点にある。教育研究分野によっては、十分な受験者数を確保できていないところもあるため、情報発信と相談を有効に組み合わせることで、引き続き受験者数増加に努める必要がある。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 津田英二)

2.4.3. ホームカミングデイ

2024 年度第 18 回神戸大学ホームカミングデイの学部企画（師範学校・教育学部・発達科学部・国際人間科学部）は、10 月 26 日（土）午後 1 時 30 分～午後 6 時に、鶴甲第二キャンパス A 棟 2 階大会議室にて開催された。参加者は 36 名で、昨年に引き続き、神戸大学発達科学部鶴甲会との合同開催であった。

企画内容は以下の通りであった。例年通り、現役教員・学生と卒業生・修了生・退職教員との交流が行われ、参加者から好評を得た。

(1) 学内探検ツアー

3 つのグループに分かれて、A 棟、C 棟、F 棟、G 棟を巡回した。

(2) 各種挨拶

近藤徳彦研究科長・副学部長、福井啓太紫陽会副会長、平山洋介鶴甲会世話人より挨拶があった。

(3) 紫陽会賞授賞式

藤室玲治氏（福島大学地域未来デザインセンター特任准教授）、岡本果林氏（発達コミュニティ学科）への授賞が行われた。

(4) 紫陽会記念講演

藤室玲治氏による講演「「ボランティア元年」から 30 年を振り返る」が行われた。

(5) 現役教員・学生との交流

現役教員および学生との交流が実施された。

(6) 鶴甲会記念講演

伊藤真之教授による講演「高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラム ROOT と神戸大学における早期人材発掘・育成の取組への展開」が行われた。

(7) 懇親会

参加者による懇親会が催された。

(第 18 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 山口悦司)

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

教育・学習環境を充実させるため、以下の施工を行った。

- ・門衛所等外壁補修工事
- ・講義棟 (B) の渡り廊下補修工事
- ・屋外フェンス設置工事

(事務課長 長谷川浩樹)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、2021 年度に、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN 用のアクセスポイントを合計 13 箇所 (A 棟に 1 台、B 棟に 5 台、C 棟に 1 台、F 棟に 5 台、G 棟に 1 台) を増設しており、昨年度は学生食堂に、今年度は人間科学図書館にそれぞれアクセスポイントを増設している。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織 (コースなど) 単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、部局内の 3 箇所に設置されている電子掲示板の運用も行なっている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

(3) 図書館運営・整備

昨年度までに引き続き、本年度においても、全学の附属図書館運営委員会はオンライン会議、人間科学図書館図書委員会はオンライン会議とメール回議であった。人間科学図書館委員会の計4回の各委員会の議題は以下の通りであり、第1回委員会：令和5年度人間科学図書館決算報告、令和6年度人間科学図書館予算、外国雑誌購読の見直し、令和6年度学生用推薦図書、雑誌の廃棄、資料の不用決定、第2回委員会：図書の不用決定、図書の所属換、雑誌の廃棄、第3回委員会：令和6年度学生用推薦図書追加募集および高額図書の募集、資料の不用決定、第4回委員会：高額図書の採択、資料の不用決定。以上の各議題において、本図書館事務担当者からの詳細な状況把握とモニタリングデータに基づき、図書館運営の充実を目的とした協議と共に、図書館機能の向上に向けての具体的内容が図られた。

(図書委員会委員長 長ヶ原誠)

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年は大学生活は通常になったものの、交流ルームは感染対策を万全にして、平日11時～16時まで運営し、食事と飲み物を提供した。展覧会「青、たゆたう私」を開催し、どちらも好評を得た。詳細は下に記す。

体制

今年度は、2名のスタッフ（非常勤職員）および、知的障害のあるスタッフ3名で運営を行い、常時2名体制を敷くことができた。

活動状況

- ・今年のオープンキャンパス（8月9日）では、スタッフ5名と学生アルバイト6名、ボランティア2名で飲料と食事を提供した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。

展示について

- ・博物館実習×小谷泰子 1日だけの展覧会「青、たゆたう私」（9月27日）を行った。

（交流ルーム運営委員会委員 大田美佐子）

2.6. 教員研修

2.6.1. FD

研究科FD記録、及び神戸大学HP 大学教育推進機構「FD活動」FDカレンダーより抜粋したFDについて、以下に記す。

- (1) 7月19日 科研費とその他競争的研究費制度について
- (2) 11月15日 オープンアクセス義務化について
- (3) 12月15日 知財セミナー

（人間発達環境学研究科長 近藤徳彦）

2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して、情報セキュリティに関する研修会を開催している。今年度、2024年9月に1名に対して研修会を開催した。

（情報メディア委員会委員長 宮田任寿）

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

入学試験委員会は、2名の副研究科長、人間発達専攻長、人間環境学専攻長、学生委員会委員長、研究科長、全学入試委員会委員によって構成され、委員長を津田英二副研究科長が務めた。今年度の委員会での活動は以下の通りである。

第1回：4月17日

- 1) 令和7年度博士課程前期課程入試 募集要項について
- 2) 令和7年度博士課程後期課程入試 募集要項について
- 3) 1年履修コース入試 募集要項について

第2回：7月17日

- 1) 令和7年度博士課程前期課程推薦入学試験合格者の判定について
- 2) 令和7年度博士課程前期課程入試における受験上の特別配慮について
- 3) 入試方法およびアドミッションポリシーの変更について

第3回：9月3日

- 1) 令和7年度博士課程後期課程入学試験（I期）合格者の判定について

第4回：9月24日

- 1) 令和7年度博士課程前期課程入学試験（第I期）合格者の判定について
- 2) 令和7年度博士課程前期課程（2次募集）募集要項について

第5回：11月5日～15日（持ち回り審議）

- 1) 令和7年度大学院入試の入試情報の開示基準について

第6回：12月3日～9日（持ち回り審議）

- 1) 令和7年度博士課程後期課程入学試験に係る個別の入学資格（出願資格事前）審査について

第7回：1月15日

- 1) 令和7年度博士課程前期課程入学試験（第2次募集）合格者の判定について
- 2) 令和7年度博士課程前期課程1年履修コース入学試験合格者の判定について
- 3) 令和8年度入学試験日程について

第8回：3月5日

- 1) 令和7年度博士課程後期課程人間発達専攻，人間環境学専攻（第II期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
- 2) 令和7年度博士課程前期課程人間環境学専攻推薦入学試験募集要項について
- 3) 令和8年度入学試験日程について

今年度議事の特記すべき事項として，人間発達専攻博士後期課程及び人間環境学専攻（第II期）の入試と公認心理士試験の日程が重なる可能性が高く，博士後期課程受験希望者の不利益になることがありえるため，令和8年度入試より日程を早める検討がなされた。

（入学試験委員会委員長 津田英二）

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は、関係各位の尽力により大過なく遂行された。平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となった。人間環境学専攻では、令和 4 年度入学試験より推薦入学試験が導入された（募集人員 18 名）。

博士課程前期課程の令和 7 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、入学定員 51 名に対し、志願者数 90 名（志願倍率 1.76 倍）、合格者数 52 名であった。人間環境学専攻では、入学定員 36 名に対し、志願者数 44 名（志願倍率 1.22 倍）、合格者数 32 名であった。人間環境学専攻では、合格者数が定員に達しなかったため、募集人員を若干名とする第二次募集を実施した。人間環境学専攻第二次募集の結果は、志願者数 8 名、合格者数 7 名であった。外数としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学定員 4 名に対しては、志願者数 8 名、合格者数 5 名であった。これらの入試の結果、研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 150 名（志願倍率 1.65 倍）、合格者数 97 人となった。博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願者数 17 名（志願倍率 1.55 倍）、合格者数 11 名、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 6 名（志願倍率 1.00 倍）、合格者数 6 名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては、定員 17 名に対し、志願者数 23 名（志願倍率 1.35 倍）、合格者数 17 名となっている。

人間環境学専攻は、博士課程前期課程に関し、合格者数が定員を下回り、第二次募集の実施が必要となったことは、受験者の確保が引き続き課題になっていることを示している。この課題に取り組むため、(1)人間環境学専攻については、2020 年度から英語での受験を可能とした、(2)両専攻とも、2021 年度入試から社会人特別枠における英語の配点割合を下げ、専門科目を重視した採点を行うことで、社会人受験生の増加を図る、(3)人間環境学専攻に関し、2022 年度入試から推薦選抜を実施する、などの一連の制度改革を進めた。大学院受験生の確保のあり方を引き続き検討していきたい。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 津田英二）

4. 国際交流活動

国際交流活動を通じた積極的な研究と教育が展開された。特に留学生の数は前年度からおよそ 1.4 倍に増加し、国を超えて本研究科で学ぶ学生との国際交流活動が活発化している。その一方で、海外に赴く学生への支援を目的としている紫陽会グローバル人材育成資金への申請がみられず、国際交流運営資金への申請も少なかった。本研究科の学生の海外での学びにさらに注目し、これへの支援を推進するための工夫を図りたい。

4.1. 学術交流協定

(1) 新規

- ・FH ヨアネウム応用科学大学 (Erasmus+ IIA)

(2) 更新

・タリン大学 (Erasmus+ IIA)

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.2. 留学生

(1) 本年度、本研究科で学んだ留学生は115名、概要（性別・国籍別・学年別・専攻・国費/私費別）は次表の通りである。

		前期	後期	計
性別	女性	40	45	85
	男性	13	17	30
	計	53	62	115

		前期	後期	計
国籍	中国	49	58	107
	韓国	2	2	4
	ドイツ	1	0	1
	カーボベルデ	0	1	1
	キューバ	1	1	2
	計	53	62	115

		前期	後期	計
学年	D3	6	6	12
	D2	5	5	10
	D1	4	4	8
	M2	11	11	22
	M1	17	17	34
	大学院特別聴講学生	1	0	1
	教育研修生(大学院特別研究生)	0	0	0
	大学院研究生	9	19	28
	計	53	62	115

		前期	後期	計
専攻	人間発達	27	32	59
	人間環境学	26	30	56
	計	53	62	115

		前期	後期	計
国費/私費	国費	2	4	6
	私費	51	58	109
	計	53	62	115

(2) チューター制度

留学生の渡日直後の生活条件の整備，諸手続き遂行，また論文作成において補助を要するものに対して，チューターを配して学生生活への円滑な適応，および論文執筆における支援を図った。

(3) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係において，過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ，学生を対象に閲覧を継続している。

(4) メーリングリストの利用

留学生のメーリングリストを作成し，就活セミナーやイベントなどについて一斉メールで案内を送付した。

(5) 来年度に向けて

COVID-19により停滞していた海外渡航環境の回復・改善も進んでおり，学生の派遣，受け入れも活発化してきた。またインフレや円安などの経済的要因等が，留学生の動きにも関連している側面もみられた。学生への支援についても円滑に進んでいることから，今後も派遣学生，受け入れ学生，共に丁寧な支援を継続したい。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.3. ダブルディグリー

ダブルディグリー・プログラムの新規開拓は，引き続き困難な状況が続いているが，可能性について模索を続けたい。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.4. Innovative Asia

新規受入について，2019 年度以降は申請していない。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

- ・本研究科における国際学会開催への援助事業

2024年5月：近藤徳彦 教授

「The Asia Pacific Seminar of Environmental and Applied Human Sciences 2024」

- ・学生の国際学会発表への援助事業助成

2024年6月：人間発達専攻 2名 韓国

「20th International Conference on Environmental Ergonomics」

2024年8月：人間発達専攻 1名 日本

「PECERA Annual Conference 2024」

(2) 紫陽会グローバル人材育成資金

今年度においては、申請はなかった。

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2024年度				
2023/3/22～ 2024/7/31	Kim Jung Sung (金貞成)	大韓民国	Department of Forest Science, College of Agriculture, Life & Environment Sciences, Chungbuk National University	近江戸 伸子
2023/6/1～ 2026/3/31	Khalif BENZID	アルジェリア	-	谷 篤史
2024/6/17～ 2024/8/27	Linnéa Saaranen	スウェーデン	ストックホルム大学 大学院民族学・宗教 史・ジェンダー研究科	稲原 美苗
2023/12/19 ～ 2024/8/30	WANG JUNJIE (王 俊杰)	中国	華南師範大学, Distinguished Research Fellow (准 教授相当)	源 利文
2024/8/16～ 2024/9/16	Dian Marlina	インドネシア	Universitas Setia Budi, Assistant Professor	佐藤 春実

2024/10/1～ 2024/10/30	Aveek Samanta	インド	Department of Botany, Prabhat Kumar College, Assistant Professor	近江戸 伸子
2024/6/1～ 2024/11/30	Jesdakorn Ongkulee	タイ	Chiang Mai Univeristy	源 利文
2024/9/1～ 2024/11/30	Simón-Martín, Meritxell	スペイン	Lleida University, Spain, Ramón y Cajal Senior Research Fellow	川地 亜弥子
2025/2/8 ～ 2025/3/12	James Noboru Imamura	アメリカ 合衆国	University of Oregon Professor Emeritus	伊藤 真之
2025/2/1 ～ 2025/2/28	Balagopal Raveendranath	インド	Texas Tech University Assistant Professor	野中 哲士
2025/2/8 ～ 2025/3/12	Thomas A. Stoffregen	アメリカ 合衆国	Professor, University of Minnesota	野中 哲士

(国際交流委員会委員長 加藤佳子)

4.7. 「英語による授業の実践-ESD 研究」

グローバル化に対応して英語で行われる授業を増やしていくことが期待されてきた。多様な国籍の学生が、ESD（持続可能な開発のための教育）をテーマに互いの専門性・当事者性をクロスさせることをねらいとして、2008 年から大学院に ESD サブコースが開設され、その授業科目のうち、「ESD 研究 1・2 (ESD study1・2)」は、完全に英語によるコミュニケーションだけで実施・運営されている。

本研究科の教員 4 名（太田和宏、稲原美苗、津田英二、松岡広路）がチームとなって運営・コーディネートし、毎回、履修生が英語でショートスピーチを行いながら、英語でグループディスカッションを行う。一切日本語は使われない。2024 年度の履修生は 6 名で、人間発達専攻 4 名、人間環境学専攻 2 名であった。

主なテーマは「How to think of the relationships with SDGs」で、参加者各自の問題意識・研究テーマ・方法論と持続可能な開発に関連する問題との関係が議論された。参加者からは「複数の先生と英語で話す機会を得て有意義であった」「英語で考えることによって持続可能な開発と自分の専門を改めて接続しなおすことができた」などの感想を得た。

夜間ということもあって履修院生数が少なかったが、持続可能な開発に関連する研究をしている院生の数は、この程度ではないはずである。今後も ESD を軸としたグローバルを意識し得る学びの場が求められるように思われる。

(人間発達専攻 松岡広路)

5. 教育

5.1. 教育課程

5.1.1. 今年度の特徴

令和6年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) 研究指導計画書

令和3年度から実施している研究指導計画書の提出時期及び提出先について再検討を行ったが、これまで通りとすることにした。

(2) 他研究科と連携した教育プログラムの構築

理学研究科化学専攻との連携で互いの大学院と学部の授業を履修できる「環境・化学プログラム教育コース」を実施・運営しており、理学の知識と環境に関する知識を与え合うことで、社会において多様な問題解決に対応できる人材育成を可能にしている。さらに、令和6年度から保健学研究科との連携で互いの大学院の授業を履修できる「ウェルビーイング教育プログラム（発達・保健）コース」を実施・運営し、健康・発達・環境の領域から生涯にわたるWell-beingを掲げ、少子高齢化社会での深刻な課題解決に資する専門的能力を習得した人材の育成を行った。

(3) 成績評価基準の確認

秀・優の割合など、成績評価基準についての確認を行った。

（教務委員会委員長 大田美佐子）

5.1.2. 研究科、専攻共通科目

(1) グローバルリサーチ演習Ⅰ・Ⅱ

大学院学生の国際的な研究活動に対しては、研究会の開催や出席に対して経済的な支援が得られる機会を提供するなど、従来から積極的に奨励して来たところであるが、新たに専攻横断型の「グローバルリサーチ演習Ⅰ」（前期課程）と「グローバルリサーチ演習Ⅱ」（後期課程）という授業科目を開設し、国際的な研究活動の集積が所定の条件を満足する場合に単位を付与することとした。

研究の専門性を高め、その成果を広く国内外に発信する高度な実践能力を身につけることを目標として、指導教員による指導のもと海外および国内での学会・研究会への参加・発表やスタディツアーなどへの参加を積み重ねた上で、学術WEEKSなどの国際的な研究会や活動の企画を行うことを通じて実践能力を習得することを目指す。

（教務委員会委員長 大田美佐子）

(2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

例年どおりさまざまな領域で研究を志す院生が受講し、知を横断する対話の創出に力点を置く授業を行った。受講生各人の研究関心に関わる意味あるテーマについて熱心な対話を展開することができた。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田が務めた。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究 主担当 津田英二）

5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

令和6年度の教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園10名、小学校38名、中等教育45名、特別支援学校16名であった。令和7年2月20日に附属校園との実習反省会(国際人間科学部)を行い、令和6年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が73名、専修免許状が15名であった。

(教務委員会委員長 大田美佐子)

5.1.4. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育)をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型の全学の教育コースとして、2008 年度より開講されている。2015 年度より国際教養教育院に ESD 教育部会が設置されたものの、中核的運営は人間発達環境学研究科が担っている。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、松岡広路(人間発達専攻教授)で、実務的には、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)と松岡によって、「ESD コース」は運営されてきた。

今年度も、「ESD 基礎」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」「ESD 実践論」および「ESD 演習 I・II」を開講した。全学の ESD 関係教員の協力を得て、オンラインによる授業、ワークショップを中心とした授業を行った。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのヒューマン・ネットワークである。とりわけ、同センターが事務局を担う RCE 兵庫-神戸の ESD 実践者らにゲストスピーカーとして登壇してもらい、現場の臨場感をできるだけ学生が触れることができるように工夫した。基礎科目群と各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で学びの総合化・交流を行う、という学びのシーケンスをもつ ESD コースは、新しいサービス・ラーニング(学校と社会サービスの連結した学習スタイル)のモデルである。

参加部局が全部局に広がり、全学部参加のコースとして本格的に動き始めてきた。SDGs(持続可能な開発目標)の推進が多領域において求められているなか、その推進を担う人材づくりの方法は、神戸大学の教育の中心的な柱の一つになることが期待されよう。それに応えられるコースを運営・維持するためには、本研究科及びヒューマン・コミュニティ創成研究センターの積極的な支援が欠かせない。次年度は、ESD コース改め、オープンバッジ「ESD プログラム」へと展開されることが決まっているが、引き続き、本研究科およびヒューマン・コミュニティ創成センターが中心となって実施されることとなっている。

(ESD サブコース運営委員会委員 松岡広路)

5.1.5. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

令和6年度は、前期(第1, 2Q)4件、後期(第3, 4Q)2件の計6件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけ

るきめ細かい指導の実現や、学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレーニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント（SA－時給 1070円），大学院生をティーチング・アシスタント（TA－前期課程：時給 1220 円，後期課程：1420 円），同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント（STA－時給 1500 円）とし，従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した。実施報告書（学生用・教員用）からは，担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0 名 TA 1 名 STA 0 名 計 1 名

後期 SA 0 名 TA 0 名 STA 0 名 計 0 名

（教務委員会委員長 大田美佐子）

5.2. 各専攻講座の教育

5.2.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は，4 つの教育研究分野（心理系，表現系，行動系，教育系）に所属している。専攻の運営は，基本的に各教育研究分野を中心に行われている。運営にあたっては，専攻長と各教育研究分野代表により構成された人間発達専攻運営会議を組織し，年間 10 回の運営会議のほか，メール審議により，専攻に関わる重要案件（人事，予算，入試等）の審議等を行った。教員人事は，学域人事委員会が策定した方針に基づきつつ，専攻運営会議では，今後の採用人事方針について議論を重ねて，人間発達について，学際的に教育研究を進めるための基盤づくりを目指した。

(2) 予算

予算は，専攻に配分されたものを従来通り各教育研究分野に振り分けた。共通経費は設定していない。

(3) 入学試験

博士課程前期課程入試について，一定の受験者を確保できているが，合格者のうち他大学院への進学などの理由による辞退者もいた。さらに本専攻の各分野の魅力を発信しつつ，特に学部からの進学者を増やす努力をしていきたい。後期課程入試では，進学者，入学者ともに志願者が多く，優秀な学生を迎えられている。本専攻博士後期課程では，コンスタントに学位取得者を出しており，今後も専攻の理念を実現すべく研究者養成を進めていきたい。

(4) 教育

以下，教育研究分野別に内容を学生の実績を中心に列举する。

●心理系

心理系では、心理学を総合した観点から、心身の発達や健康、その促進・阻害要因の探究と複雑な相互関係の把握に努め、広い視野と深い専門性をもって人間発達の様相を追究している。また臨床心理士・公認心理師の養成も行っており、心理臨床の専門職として高度な知識とスキルを獲得することをめざし教育を展開している。このような教育体制を受け、学生の研究発表についても、国内で優れた学会発表や学術論文に関する報告がされた他、国際学会でも複数の発表が行われた。

(1) 学生の論文

査読付き論文

オルランド ヤコボ (2024) 動作訓練法初学者の継続的な実践に伴う困難に関する探索的研究, 応用心理学研究, 50 (2), 162-163

生田邦紘 (2024) 知的障害における障害受容と代替概念をめぐる研究の展望 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 18, 51-66.

Kato, T & Ito, T(2024). Exploring play experience with Japanese science, technology, engineering, and mathematics undergraduates in interactive art making: A qualitative study. The Arts in Psychotherapy, 90, 1-10

加藤哲子・伊藤俊樹 (2025) 理工系学生のアイデンティティと感情ー非理工系学生との比較による探索的検討ー神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 18(2) (印刷中)

中園佐恵子 (2024). 複線径路等至性アプローチによる大学生の自伝的推論の詳細な過程の検討 TEAと質的探究, 2(2), 99-115.

中園佐恵子 (2025). 大学生を対象としたポジティブ・ネガティブな出来事 of 自伝的推論とアイデンティティ, well-being との関連. 応用心理学研究, 50(3) (印刷中)

劉 娟・山根 隆宏 (印刷中). 在日中国人家庭における子どもの問題行動がソーシャルサポートを媒介して育児ストレスに与える影響：発達障害の有無による比較. 発達心理学研究

査読無し論文

石井正幸 (2025) 楽しいフィットネスプログラム「サーキットトレーニングのコースづくり (スポーツ共創) : キッズエクササイズ」『健康づくり』, 561, 16-17.

石井正幸 (2024) 楽しいフィットネスプログラム「サーキットトレーニング : キッズエクササイズ」『健康づくり』, 560, 16-17.

中垣啓・浅川淳司・小澤郁美・生田邦紘(2024). 対話で紡ぐ, 思想としての発達〈連載 2〉中垣啓氏と紡ぐ, ピアジェの発達思想. 発達, 180, 82-91.

(2) 学生の学会発表

国際会議

Tetsuko Kato, Toshiki Ito, Yoshiko Kato. Burnout among Psychologists: A Qualitative Meta-synthesis. The International Council of Psychologists 82nd Annual Conference. July 19-20, 2024, Prague, Czechia.

Tetsuko Kato. Exploring Identity, Playfulness, and Personality Traits in STEM and non-STEM Undergraduates. 33rd International Congress of Psychology, July 21-26, 2024, Prague, Czechia.

Liu, J. (2024). Factors Influencing Identification and Rehabilitation in Overseas Child Development. 33rd International Congress of Psychology (ICP) 2024, July 24, Prague, Czech Republic.

国内学会

村田康徳・加藤佳子 攻撃的ユーモアの受け取り方の性差について ―漫画による場面想定法を用いて―. 日本応用心理学会 第 90 回大会, ポスター発表, 2024 年 8 月.

加藤佳子・村田康徳・小島亜未 自律的動機づけおよび統制された動機づけと MetS 関連指標の関連 ―健康のために運動を行う動機づけに注目して―. 日本応用心理学会 第 90 回大会, ポスター発表, 2024 年 8 月.

オルランド ヤコポ・加藤佳子 精神科看護師のワークモチベーションに関する探索的研究. 日本健康心理学会 第 37 回大会, ポスター発表, 2024 年 11 月.

呉文慧 (2024) ハイデガー「で」研究する臨床哲学の展開―自閉スペクトラム症と関わる教師の実践知の現象学 ハイデガー研究会 2024 年 11 月例会

生田邦紘・松田香織・松本伊織・中谷響・赤木和重 (2024) なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか: 学化テストの影響に注目して 障害児教育の教育目標・評価に関する研究会

石井正幸 (2024) 知的障害児の不器用さの改善は維持されるのか (その 2): サーキットトレーニング実施から 1 年後の再調査 日本特殊教育学会第 62 回大会

加藤哲子. 高等専門学校の学生に対する MSSM の発達促進作用の検討―「遊び」としての継続実施によるアイデンティティ形成への影響から. 日本心理臨床学会第 43 回大会 2024 年 8 月 25 日

横田慧・赤木和重 (2025) 自閉症幼児の要求行動はポジティブな情動を伴うのか? 日本発達心理

学学会第 36 回大会

松田華織・生田邦紘・松本伊織・中谷響・赤木和重(2024). なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか：固定効果モデルを用いた多変量解析. SNE 学会第 30 回記念研究大会.

劉 娟・山根隆宏 (2025) 発達障害が有する在日中国人の子どもの障害の気づきから診断告知までの影響要因 日本発達心理学会第 36 回大会 ポスター発表

豊泉慶佳・山根隆宏・青木みのり (2025) 合理的配慮に対する一般大学生のイメージ：学校への適応感とソーシャルサポートの関連 日本発達心理学会第 36 回大会 ポスター発表

平岡優実・榊原久直・山根隆宏 (2025) 感覚処理特性と親子の情緒・行動上の問題との関連 (1)：子どもの年齢，知的発達水準，障害種の観点から 日本発達心理学会第 36 回大会 ポスター発表

榊原久直・平岡優実・山根隆宏 (2025) 感覚処理特性と親子の情緒・行動上の問題との関連 (2)：子どもの情緒行動上の問題と親の精神的健康に焦点を当てて 日本発達心理学会第 36 回大会 ポスター発表

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

生田邦紘：日本学術振興会特別研究員 (DC1) (2022 年度—2024 年度)

横田 慧：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト生 (2024 年 10 月～2027 年 3 月)

石井正幸：科学研究費奨励研究 (2024 年度)

劉 娟：異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト生 (2022 年 4 月～2025 年 3 月)

●表現系

表現系の教育では例年と比べて大きな変化はないが，3 名の助教が戦力としてすっかり定着し，ゼミを受け持ち，修士論文審査会，修士論文中間発表会など，様々な場面で院生たちに新たな刺激となり，それが良い効果をもたらしつつあることが実感される。

(1) 学生の論文

査読付き論文

Nishiyama, R., & Nonaka, T. (2024). Can a human sing with an unseen artificial partner? Coordination dynamics when singing with an unseen human or artificial partner. *Frontiers in Robotics and AI*, 11, 1463477.

<https://doi.org/10.3389/frobt.2024.1463477>

青井郁美・野中哲士 (2024). 入園直後の 0 歳児クラスの保育場面において保育士はいかにモノを利用するのか. 認知科学, 31(3), 481-495.

<https://doi.org/10.11225/cs.2024.023>

青井郁美・野中哲士 (2024). 0 歳児クラスの乳児の物との関わり方はいかに変化するのか—物・出来事・大人の関わりに着目して. 保育学研究, 62(2), 43-54.

https://doi.org/10.20617/reccej.62.2_43

青井郁美・野中哲士 (2024). 座位獲得以前の乳児の自発的な手の動きを契機とした養育者の言動：育児記録における検討. 生態心理学研究, 16(1), 3-28.

https://doi.org/10.24807/jep.16.1_3

西晃平 (2024) 「斎藤佳三の芸術観—ドイツ表現主義とワシリー・カンディンスキーの影響から」『四天王寺大学紀要』第 74 号, pp. 101-121.

工藤源也 (2024) 「日本男性ファッション史における『Made in U.S.A. catalog』：方法としてのモノの即物的描写と「伝統性＝実用性」の表象」『Fashion Talks…』第 16 号, pp. 48-55.

松井典子 (2024) オーストラリアの音楽試験システムの構築とその背景に関する研究—19 世紀末から 20 世紀初頭の社会変容との関連に着目して—. 公共と文化 2, pp. 57-68.

査読無し論文

五十棲亘 (2024) 「愛の万華鏡——華麗なる変身」『LOVE ファッション—私を着がえるとき』京都服飾文化研究財団編, pp. 200-205。

五十棲亘 (2025) 「美術館から装いを問い直す」『おりもの』西陣織物研究会, 第 68 巻 2 号, pp. 9-13

鈴木彩希「時代を紡ぐ『きもの』——近代日本におけるファッション文化と幸田文の服飾観」『ユリイカ』56(8), 青土社, 2024 年, pp. 173-181

喩璐「技術革新メディアの受け手であるビデオゲームプレイヤーインタラクティブと権利, 新しい空間, 身体」神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要 18(1), pp. 35-41.

(2) 学生の学会発表

青井郁美・野中哲士 (2025). 乳児とモノの関わりについての縦断研究：姿勢発達に伴う変容過程. 日本発達心理学会第 36 回大会, ポスター発表, 2025 年 3 月, 明星大学

朝比奈茉穂・野中哲士 (2024). 保育園の乳幼児クラスにおける歌・リズムを伴うやりとりの様相.

日本発達心理学会第 36 回大会，ポスター発表，2025 年 3 月，明星大学

西山理奈・野中哲士（2024）. 人は歌声合成ソフトと歌えるか：歌唱時における音声の協調ダイナミクスの検討．日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会，ポスター発表，2024 年 12 月，神戸大学

村上瞳・鎌田紗弓・野中哲士（2024）. 雅楽演奏の時間構造はどのように他者と共有されるのか：唱歌の師弟間の伝承の発達の検討．日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会，ポスター発表，2024 年 12 月，神戸大学

西晃平「斎藤佳三の芸術観 ―「表現浴衣」におけるデザイン実践」意匠学会大会- 地域の芸術文化と市民の創造性 -第 66 回，2024 年 8 月 22 日

工藤源也，「小林泰彦の 1970 年代のイラストレーションと執筆：男性ファッション誌『メンズクラブ』の分析を中心に」，服飾美学会 2024 年度第 2 回研究会，2024 年 10 月 27 日

坂田万青，「戦後日本のファッション文化におけるジュエリー産業の興隆―ヴァンドーム青山を事例に」，第 66 回 意匠学会大会，2024 年 8 月 22 日

五十棲亘「ファッション・キュレーション―京都服飾文化研究財団の実践より―」，シンポジウム「ファッション展の現在とキュレーション―歴史・批評・ミュージアム」2024 年 11 月 4 日

工藤源也「1990 年代の『BOON』における衣服の表象：ヴィンテージ・ファッションの消費実践」，学術 Weeks2024「メンズファッションの歴史を考える―ストリートと雑誌メディア」2024 年 11 月 30 日

Kyoko Hatsuda, Two Directions for Skill Development of Basic Latin American Dance Movements, the 46th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 27, 7, 2024

初田響子，熟達ラテンダンサーの体肢間協調がもたらす美しい動作の軌跡，第 41 回日本認知科学会，2024 年 10 月 13 日

初田響子，ラテンダンスの基本動作に見る熟達の 2 つの方向性，第 4 回日本ダンス研究会，2024 年 10 月 26 日

初田響子，熟達ラテンダンサーにおける 2 者間の円滑な動作協調，第 15 回日本ダンス医科学研究会 学術集会，2025 年 2 月 23 日

江頭志穂・岡野真裕（2024）. ダンスを通して形成される人格に関するパイロット調査．第 15 回日本

ダンス医科学研究会学術集会，ポスター発表，2025 年 2 月，神戸女子大学

Hasizawa K., & Okano, M. (2024). Do Low Tones delay in Musical Ensemble? A Brief Overview of Musicians' Awareness and Solutions. Adaptive behavior and its ecological foundations 2025, Poster session, February 2024. Kobe University

橋澤慧 (2024)『合奏における低音遅延言説』から探る演奏家の同期方略，第 2 回 認知科学・社心若手リーグ，口頭発表，2025 年 2 月，関西学院大学

稲垣七海・岡野真裕 (2024). 続・金管楽器奏者における演奏不安経験の実態調査—注意焦点と運動制御の観点から—，日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会，ポスター発表，2024 年 11 月，神戸大学

橋澤慧・岡野真裕 (2024). 合奏で低音が遅れる？：演奏家の意識と対処方略，日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会，ポスター発表，2024 年 11 月，神戸大学

松田怜子・岡野真裕 (2024). 声楽練習時の思考と行動—音楽的意思決定のプロセスの熟達差—，第 36 回音楽の科学研究会，口頭発表，2024 年 7 月，神戸大学

稲垣七海・岡野真裕 (2024). 金管楽器奏者における演奏不安—不安感情が運動制御の変化を引き起こすプロセス—，第 36 回音楽の科学研究会，口頭発表，2024 年 7 月，神戸大学

稲垣七海・岡野真裕 (2024). 金管楽器奏者における演奏不安経験の実態調査—注意焦点と運動制御の観点から—，日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会，口頭発表，2024 年 6 月，神奈川大学

味園可穂子，回転運動で生じる左右差と上肢の動きとの関連：クラシックバレエ・ピルエットの分析から，第 15 回日本ダンス医科学研究会学術集会，2025 年 2 月 23 日

五十棲亘「LOVE ファッション—私を着がえるとき」（於：京都国立近代美術館，2024 年 9 月 13 日-11 月 24 日。於：熊本市現代美術館，2024 年 12 月 21 日-2025 年 3 月 2 日）

佐野翔 (2025). アーティスティックトワール. 日本ダンス医科学研究会第 15 回学術集会，招待パフォーマンス，2025 年 2 月，神戸女子大学ポートアイランドキャンパス

舞踊ゼミ：市川愛弓・岩佐夕佳・中山心結・三浦日菜 (2025). ニゲシカ〜太宰治『人間失格』より〜. 日本ダンス医科学研究会第 15 回学術集会，招待パフォーマンス，2025 年 2 月，神戸女子大学ポートアイランドキャンパス

コミコミ展(美術系学生有志 14 名展), 9 月 13 日ー16 日, 宝塚芸術文化センター1F キューブホール,
期間中に 2 回のテクスチャーアート教室も開催

(3) 特別研究員, 外部資金獲得など

青井郁美: 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2023 年度ー2024 年度)

朝比奈茉穂: 異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2023 年度ー2025 年度)

初田響子: 異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2023 年度ー2025 年度)

橋澤慧: 異分野共創による次世代卓越博士人材育成プログラム (2024 年度ー2026 年度)

(4) 学生の受賞

西山理奈: 日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会 ポスター発表選奨

初田響子: 日本認知科学会第 41 回大会 発表賞

(5) その他の執筆

鈴木彩希「集え, ファッション LOVERS——ファッション展を問い直すための方法と課題」『視る』534
号, 京都国立近代美術館, 2025 年, pp. 6-7

五十棲亘『LOVE ファッションー私を着がえるとき』京都服飾文化研究財団編, 2024 年 9 月 (共著,
書籍内の解説等執筆)

岡田美鈴 令和 6 年度「芸術・文化の薫るまち・灘」魅力発信事業『音で彩るアート作品～Nada～』
のための音楽《sky bottle-Kobe-》を制作。(JR 灘駅前に 2029 年 3 月まで常設予定)

(6) ゲストスピーカーの招へいなど

講師: Razi Yazdanmehr

題目: 「イラン音楽のリズム理論について」

日程: 2024 年 4 月 15 日, 6 月 24 日

実施授業: 「民族音楽演奏演習 1・2」「音楽民族学特論 1-A, 1-B」

講師: 宮永英典(株式会社スクウェア・エニックス サウンドディレクター)

藤原達也(株式会社スクウェア・エニックス サウンドプログラマー)

講演題目 「ゲームサウンドクリエイター&サウンドプログラマーの世界」

講演日: 2024 年 7 月 24 日 (水)

実施授業: 「サウンドデザイン」「音楽・音響デザイン特論 1」(担当: 余田有希子)

講師: Matthias Lindermayr(作曲家・トランペット奏者・ドイツ在住)と 大田麻佐子(ピアニスト・
即興パフォーマー・作曲家・ドイツ在住)

講演題目 音楽文化のトランスボーダー ― 即興と異ジャンル交流

講演日：2024 年 4 月 23 日(火)

講師：山口慧（関西二期会 オペラ歌手）

講演題目 イタリア・オペラとパーセルの『ディドとエネアス』

講演日：2024 年 6 月 11 日(月)

講師：Dr. Aron Weigl (Educult director・オーストリア在住)

講演題目 Cultural Policy for Young People in Vienna and Austria

講演日：2024 年 9 月 17 日(木)

講師：山口恭子（作曲家・ドイツ在住）

講演題目 ドイツでの創作活動，自作の作品について

講演日：2024 年 10 月 17 日(月)

講師：長木誠司(音楽学)

講演題目 ベルリンのシェーンベルク

講演日：2024 年 11 月 17 日(月) 学術 WEEKS 「B 面のシェーンベルクとその時代」

講師：岩田達宗（オペラ演出家）

講演題目 オペラの歴史は三千年，その集大成こそ『ファルスタッフ』

講演日：2024 年 12 月 16 日(月)

講師：島崎麻美（振付家・コンテンポラリーダンサー・女優）

題目：エッセンシャルムーブメントクラスの紹介と海外のダンス人生について

日程：2024 年 4 月 25 日

実施授業：「舞踊表現特論 I -1」「身体表現論」合同（担当：関典子）

講師：奥野亜衣（バレエダンサー・バレエ講師）

題目：バレエ入門

日程：2024 年 5 月 30 日

実施授業：「舞踊表現特論 I -1」「身体表現論」合同（担当：関典子）

講師：檜崎如乃（振付家・コンテンポラリーダンサー）

題目：深海ダンス図鑑

日程：2024 年 7 月 11 日

実施授業：「舞踊表現特論 I -2」「身体表現論」合同（担当：関典子）

講師：いいむろなおき（マイム俳優・演出家）

題目：マイム入門

日程：2024 年 11 月 5 日

実施授業：「舞踊表現特論演習 1」「コンテンポラリーダンス」合同（担当：関典子）

講師：工藤聡（振付家・コンテンポラリーダンサー）

題目：コンテンポラリーダンスとは何か：モーション・クオリア体験

日程：2024 年 11 月 26 日

実施授業：「舞踊表現特論演習 1」「コンテンポラリーダンス」合同（担当：関典子）

講師：若林絵美（バレエ講師・薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタント）

題目：バレエ『瀕死の白鳥』舞踊譜を読み解き、踊る。

日程：2024 年 12 月 10 日

実施授業：「舞踊表現特論演習 2」「コンテンポラリーダンス」合同（担当：関典子）

講師：Balagopal Raveendranath（テキサス工科大学助教授）

講演題目「Bimanual Perception of Hand-held Objects」

講演日：2025 年 2 月 13 日（木）

講師：Thomas A. Stoffregen（ミネソタ大学教授）

講演題目「Higher Order Affordances」

講演日：2025 年 2 月 20 日（木）

（7）学術 Weeks シンポジウム

【企画名】「メンズファッションの歴史を考える—ストリートと雑誌メディア」

【日程】2024 年 11 月 30 日（土）14:00～16:00

【参加者】20 名

【概要】本企画は、日本のファッション史におけるメンズファッションの歴史を再検討したものである。とりわけ 20 世紀後半の日本のメンズファッションの展開においてメディアが果たした役割を、雑誌に描かれたイメージや言葉のみならず、それらを受け取った読者、さらにストリートへと繰り出した男性たちの姿を浮かび上がらせることを目的とした。前半では 3 名の登壇者が発表を行った。具体的には、百々徹氏（大阪成蹊短期大学教授）が、メンズファッション史と VAN をはじめとするメンズファッションブランドの詳細について、また岩井祐二氏（元カジカジ編集長）が雑誌『カジカジ』の編集からみたストリートファッションの動向について、そして工藤源也氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程）が 1990 年代の古着の動向と雑誌『BOON』の表象について報告を行った。後半では、前半の話題を踏まえ、登壇者および司会が、雑誌とストリートの関係性、メンズファッションの盛衰、流行の歴史化の問題について、研究者と編集者のそれぞれの視点から討議を行い、日本のメンズファッション研究の問題と展望を明らかにした。

【企画名】音楽文化のトランスボーダーvol.8 「B面のシェーンベルクとその時代」

【日程】2024年11月18日（月）18：00～20：15

【参加者】80名（一般30名，学生50名）

【概要】

シェーンベルクの生誕150年に、東京大学名誉教授の長木誠司氏を招き、「ベルリンのシェーンベルク」について講演をして頂いた。本学で実技を指導するピアニスト前田裕佳氏，声楽家の太田真紀氏がシェーンベルクの「B面」Brettli Lieder（キャバレー・ソング），後半にはシェーンベルクを憧憬しつつ，異なる道を選んだクルト・ヴァイルのソングが演奏された。

【企画名】環境と調和するスキルの可能性を探る VOL.4 運動・スポーツスキルの先端研究

【日程】2024年8月21日（金）14:00～17:00

【場所】KOBE Co CREATION CENTER（三宮センタービル9階）

【参加者】約30名

【講演者】「元気な高齢者がなぜ転ぶ？：“適応性の喪失”に対する認知科学的アプローチ」樋口 貴広（東京都立大学）

「データ駆動型アプローチに基づく運動スキルの解明」瀧山健（東京農工大）

「蹴動作からみる全身運動の適応」森山真衣（京都大学）

【指定討論者】野中 哲士（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

【概要】本企画は，動的な環境と自在に切り結ぶ「スキル」を糸口として異分野を横断し，現代社会の課題との接点をさぐるシリーズの第四弾である。スポーツ，運動スキル研究の第一線の研究者が集い，最新の研究成果を発表し，指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

【企画名】「インドとイランの打弦楽器を比較する—サントゥールを事例に—」

【日程】2024年10月15日（火）15：10～16：40

【参加者】75名

【概要】

打弦楽器とは、台形の共鳴胴の上に張り巡らされた多数の弦を撥で打つ楽器である。本シンポジウムでは、インド・ムンバイを中心に活躍するインドサントゥール演奏者新井孝弘と、本研究科のイラン音楽研究者およびイランサントゥール演奏者の谷正人を中心として、インドとイランのサントゥールの類似性と差異性を民族音楽学的観点から探る試みが行われた（司会：M2生 宮本夏実）。

「民族音楽演奏特別演習」「エスノミュージコロジー1」受講生をはじめ、学外からイラン研究者や音楽研究者など70名超の聴衆が参加した。

●行動系

行動系は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでおり，これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し，課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に，大学院生には，それぞれの分野の学会での発表することのみならず，学内での各種発

表会・研究会などの実質的な計画・準備・運営に参画し、積極的参加を推奨している。本年度も国内外での学会等で研究発表を行い、積極的な研究活動を展開している。今後の課題としては、国際誌への論文掲載成果と共に、国際学会での発表活動が望まれる。

1. 学生の論文

1) 査読付き論文

乾順紀・長ヶ原誠(2024) 就学期を通じてのフィジカルリテラシー形成プロセスに関する研究：定期的な運動習慣を有する成人に着目して. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 51-62.

乾順紀・長ヶ原誠(2024) 日本語版フィジカルリテラシー評価尺度作成に関する研究：わが国の高校生への適用可能性. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 63-76.

三浦敬太・長ヶ原誠・谷めぐみ(2024) 現在のスポーツ参画志向が将来のスポーツ参画志向意図に与える影響：2つの市民調査データを用いて. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 17-27.

竹下誠隆, 原田和弘, 田村進. (2024). 大学生の運動意図・行動に関連する促進・阻害要因の検討. 健康支援, 26: 137-144

太田幸志, 原田和弘. (2024). 他者との運動実践の多様性と高齢者の運動継続・ソーシャルサポートとの縦断的関連. 健康支援, 26: 129-136

Oriyama, K., Mukai, K., Harada, K., & Masumoto, K. (2024). Relationship Between Habitual Use and Degree of Emotion Regulation: Age Differences in Cognitive Reappraisal and Expressive Suppression. *Experimental Aging Research*, 1-14.

<https://doi.org/10.1080/0361073X.2024.2315917> (WoS 収録論文)

2) 査読無し論文

松川晃徳, キムナヒョン, 陳思楠, 片桐恵子, 中村匡秀. (2024) 音声対話エージェントが在宅高齢者の孤独に与える影響：対話ログと孤独感尺度による分析. 信学技報 vol.124, no.245, SC2024-25, pp.13-20.

雑賀淳朗・キム ナヒョン・陳 思楠・片桐恵子・中村匡秀. (2025) 高齢者の孤独孤立を解消するためのオンラインサークルサービスの提案. 信学技報 no. 245, SC2024-25, pp.13-20. 124(245, SC2024-25) 13-20.

2. 学生の学会発表

1) 国際会議

Connecting Threads: Social Participation's Role in Reducing Loneliness Among Older Adults

Nahyun Kim, Keiko Katagiri

GSA 2024 Annual Scientific Meeting 2024 年 11 月

The Paradox of Connection: Mutual Following' s Impact on Loneliness among Older Adults in Online Networks

Nahyun Kim, Keiko Katagiri

GSA 2024 Annual Scientific Meeting 2024 年 11 月

Mitigating Social Isolation and Loneliness among Residents in Suburban Housing Complexes in Japan

Keiko Katagiri, Nahyun Kim GSA 2024 Annual Scientific Meeting 2024 年 11 月

2) 国内学会

高見哉多, 「太平洋戦争期における日本陸上競技界の「戦技」化について ―戦争と陸上競技をめぐる歴史研究―」, スポーツ史学会第 38 回大会, 早稲田大学, 2024 年 12 月 1 日

橋本紳之亮, 丹波夏希, 兵頭和樹, 松田哲也, 高岸治人, 石原暢. (2024). 発達期の運動経験と向
社会行動の関係: fNIRS ハイパースキャンニング研究. 第 78 回日本体力医学会.

丁同芳, 韓天放, 林拓也, 松田哲也, 石原暢. (2024). 身体的健康は脳皮質微細構造および認知
機能の個体差と関わる. 第 78 回日本体力医学会.

韓天放, 丁同芳, 松田哲也, 林拓也, 石原暢. (2024). 脳内機能的結合に対する時間帯の影響およ
び睡眠の調整効果. 第 78 回日本体力医学会.

多治見春樹, 西谷正太, 山田順子, 仁科国之, 佐々木哲彦, 松田哲也, 村山美穂, 高岸治人, 石原
暢. (2024). 身体活動と顔魅力度の関係: エピジェネティック年齢による媒介効果の検討. 第 32
回日本運動生理学会大会.

Shinnosuke Hashimoto, Masanori Serikawa, Natsuki Tamba, Kazuki Hyodo, Tetsuya Matsuda,
Haruto Takagishi, Toru Ishihara (2024). Relationship between concussion and prosocial
behavior: An fNIRS hyperscanning study. NEURO2024.

西野葵, 木伏紅緒. “小趾外転筋に焦点を当てたタオルギャザーエクササイズが立位バランスに及
ぼす影響”. 第 6 回韃ひろば. 2024. 6. 22. 立命館大学.

乾 順紀・長ヶ原 誠 (2024) 高校生のフィジカルリテラシーを高める体育授業プログラムの開発
日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会 (口頭発表), 2024. 8. 30.

乾 順紀・長ヶ原 誠 (2024) 高校生のフィジカルリテラシーを高める体育授業プログラムの開発に関する研究 日本生涯スポーツ学会第 26 回大会 (口頭発表), 2024. 10. 27.

三浦敬太・乾順紀・山下耕平・長ヶ原誠 (2024) スポーツボランティア実現要因の探索的検討と属性による特性. 兵庫体育・スポーツ科学学会 第 35 回大会 (口頭発表), 甲南女子大学, 2024. 5. 25.

水野風紗・記藤陽亘・松野有沙・渡邊碧・三浦敬太・長ヶ原 誠 (2024) スポーツ参画が主観的気力年齢に及ぼす影響～年代・性別に着目して～. 日本生涯スポーツ学会 第 26 回大会 (ポスター発表), 流通科学大学, 2024. 10. 26-27.

竹下誠隆, 原田和弘, 田村進. (2024). 大学生の運動意図・行動に関連する促進・阻害要因の検討. 第 25 回日本健康支援学会年次学術大会. 口頭発表

竹下誠隆, 原田和弘. (2024). 運動の肯定的感情調整尺度の作成と運動行動との関連性の検討. 日本心理学会第 88 回大会. ポスター発表

大西竜生, 前田正登 (2024) 投球におけるボールの重量及び大きさがボール速度やコントロールに及ぼす影響. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 35 回大会.

恵藤伸泰, 神事努, 前田正登 (2024) ダウンヒルスプリントが平地スプリントに及ぼす影響. 兵庫体育・スポーツ科学学会第 35 回大会.

大西竜生, 前田正登 (2024) 遠投におけるボールの大きさや重量がリリースパラメーターに及ぼす影響. 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会.

恵藤伸泰, 高見哉多, 前田正登 (2024) アップシューズ及びスパイクシューズ着用時における加速局面の疾走比較. 第 35 回スプリント学会.

小川まどか, KIM Nahyun, 片桐恵子 (2024) 都市賃貸集合住宅に暮らす中高年の老後の準備行動への取り組みの年齢による違い. 日本老年社会学会 第 66 回大会 2024 年 6 月

張芯月, 片桐, 恵子 (2024) 中国高齢者の余暇活動における仲間関係がもたらす効果 ―南京市広場ダンシングの参加者へのインタビュー調査から―. 日本老年社会学会, 第 66 回大会.

片桐恵子, Kim Nahyun, 小川まどか (2024) 賃貸集合住宅居住者の緩やかな絆の形成を目指すアクションリサーチ ～生涯学習による社会的孤立・孤独の一次予防～. 日本老年社会学会, 第 66 回大会.

KIM Nahyun・片桐 恵子（2024）別居子がいる高齢のみ世帯の社会的ネットワークと生活満足度の関連 ―JGSS-2017/2018 データを用いた二次分析―，日本老年社会科学会，第 66 回大会。

3. 特別研究員，外部資金獲得など

石原暢，高岸治人，寿秋露，丹波夏希，橋本紳之亮．運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤―fNIRS ハイパースキャニング研究―．公益財団法人明治安田厚生事業団第 38 回若手研究者のための健康科学研究助成。

KIM Nahyun（2024）社会的相互作用における高齢者の瞬間的孤独感の変動―経験サンプリング法を用いた試み，公益財団法人 SOMPO 福祉財団 2024 年度 福祉諸科学事業 ジェロントロジー研究助成

木伏紅緒，朱織雨，壺井達也．筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価．公益財団法人ヒロセ財団

恵藤伸泰，前田正登．陸上競技未経験者を対象にした短距離走における疾走中の足部接地様態―疾走局面の変化に着目して―．令和 6 年度兵庫体育・スポーツ科学学会学術研究助成。

4. 学生の受賞

受賞者：Kim Nahyun

受賞名：日本社会心理学会 大学院生・若手研究者海外学会発表制度

受賞者：Kim Nahyun,

受賞名：若手フロンティア研究会 2024 オープン部門（部門賞）優秀賞

受賞演題：VA(バーチャル・エージェント)を活用したリアルワールドデータ分析

受賞者：水野風紗・記藤陽亘・松野有沙・渡邊碧・三浦敬太・長ヶ原 誠（2024）

受賞名：日本生涯スポーツ学会 第 26 回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題：スポーツ参画が主観的気力年齢に及ぼす影響～年代・性別に着目して～

受賞者：西野葵

受賞名：発表賞

機関：第 6 回 韃ひろば

受賞理由：投稿した査読付き審査論文と口頭発表が優秀であると認められたため。

●教育系

本年度は，新型コロナウイルス感染症に伴う制限が解除されたこともあり，大学院生の国内外の学

術活動が積極的になされた。学会発表数は国際会議，国内学会を含め 39 本が見られ非常に旺盛である。論文発表も，査読付論文数 16 本等十分な成果がみられる。また，特別研究員，外部資金獲得も多数なされており，加えて受賞も 2 件あり，対外的にも高い評価が得られていると考えられる。来年度は一層高い研究的水準を備えた大学院教育の発展が期待される。

(1) 学生の論文

査読付き論文 (WoS 収録論文はその旨記入)

宇賀神一・加藤優汰・蓑毛智樹 (2024) 「神戸大学教育学部附属幼稚園・附属明石小学校における幼小連携教育課程編成—研究開発学校制度草創期の教育課程改善に関する実証的研究—」神戸大学教育学会『研究論叢』第 30 号，2024 年 6 月，35-45 頁。

蓑毛智樹 (2024) 「『文検修身科』試験問題に見る国民道德論の研究—試験委員・井上哲次郎を中心に—」教育史学会『日本の教育史学』第 67 集，2024 年 10 月，21-34 頁。

蓑毛智樹 (2025) 「『文検修身科』における試験委員の学説と試験問題の関係—【国民道德】登場以降の【日本倫理学史】【東洋倫理学史】分野の試験問題を中心に—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第 18 巻第 2 号，2025 年 3 月掲載予定，頁未定。

枝廣直樹 (2024) 「セレスタン・フレネの興味観の変遷」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 18 巻・第 1 号，2024 年 10 月，25-34 頁。

枝廣直樹 (2025) 「セレスタン・フレネによる『興味の複合』の教育的開拓の意義—フレネ技術による学習材の変遷と連関に注目して—」世界新教育学会『教育新世界』第 73 巻，2025 年 3 月掲載予定，頁未定。

枝廣直樹 (2025) 「フレネ教育運動による作文集の変遷と意義」日本国語教育学会『国語教育研究』2025 年 8 月掲載予定，頁未定。

小尾麻希子 (印刷中)．1950 年代の神戸大学教育学部附属幼稚園における「明石附幼プラン」の改革過程—「一人一人を生かす」カリキュラム構成の検討を中心に—．『保育学研究』，63(1)．

松本圭朗 (2025) 「Z 短期大学における「教育方法論」の実践報告」大学評価学会年報『現代社会と大学評価』第 20 号，pp. 158-172。

星川佳加 (2025) 「戸田唯巳「学級というなかま」実践におけるケアに関する一考察」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 18 巻第 2 号，2025 年 3 月予定 (掲載確定)，頁未定。

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Matano, M., & Murayama, R. (in press). An intervention study on primary students' socioscientific decision-making regarding the risks and benefits of gene drives. Proceedings of the XXI International Organization for Science and Technology Education (IOSTE) 2024.

Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., Matano, M., & Murayama, R. (in press). Scaffolding primary school students' tradeoff practices between risks and benefits in socioscientific decision-making. Proceedings of the XXI International Organization for Science and Technology Education (IOSTE) 2024.

田中達也・大西鮎美・寺田努（印刷中）「ゲーミフィケーション要素を取り入れた教員対象の防災指導力向上プログラムの開発と評価」『防災教育学研究』第5巻，第2号．

松田華織（2025）「米国におけるスタンダードに基づく教育政策と障害児教育政策の相互変容過程と統合的作用—学力テスト政策から展望される包摂性に注目して—」『比較教育学研究（日本比較教育学会）』第70号，pp.84-106。

澤田淳（2024）小学校3年生における関係的思考の発達過程—たし算に関わる式の分析に焦点を当てて— 科学教育研究 Vol.48 No.4 2024.12月 日本科学教育学会，査読あり

赤川峰大・岡部恭幸（2024），理由を説明することに関わる小学生の実態；小学校第5学年「図形の内角の和」に焦点を当てて，数学教育学会誌，65（1・2），pp.25-38，査読あり．

赤川峰大（2024），小学校算数科における演繹的な説明についての研究；命題間の関係に焦点をあてた学習方法の開発，日本数学教育学会誌，106，pp.2-11，査読あり．

査読無し論文

枝廣直樹（2025）「セレスタン・フレネにおける学習文庫の変遷—1932-54年を中心に—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第18巻・第2号，2025年3月掲載予定，頁未定。

枝廣直樹（2025）「フレネ教育の成立とフレネの思想変遷の歴史的考察」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第28巻，2025年3月，pp.21-29。

大部慎之佑（2025）「GIGAスクール構想以降の学校現場におけるICT教育：兵庫県宍粟市立河東小学校の実践を事例として」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第28号，2025年3月，pp.31-40。

松本圭朗 (2024) 「1930 年代の北陸三県（富山県・石川県・福井県）における生活綴方をめぐる状況調査」近畿大学生物理工学部『近畿大学生物理工学部紀要』51 号, pp. 13-28。

瀬川千裕, 星川佳加 (2024) 「教師に求められる力とは: 道德教育及び ICT 活用の変化に焦点を当てて」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『教育科学論集』第 27 巻, pp. 43-49。

星川佳加 (2024) 「人間を客体とすることへの抵抗としてのケア: 岡野八代「ケアに満ちた民主主義」への応答の試み」神戸大学教育学会『研究論叢』第 30 巻, pp. 49-58。

妹尾歩美・宇佐見伊吹・中谷奈津子 (2024) 「保育所等保育者と児童養護施設職員におけるストレス要因 : 先行研究レビューを通じた比較分析」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 18 巻第 1 号, 77-88。

長尾悠里 (2024) 「(図書紹介) 荻野亮吾・丹間康仁編著『地域教育経営論—学び続けられる地域社会のデザイン』」『日本教育政策学会年報』第 31 号, pp. 218-219。

俣野源晃 (2024. 5) 「アーギュメントにおける証拠の認識的理解に焦点を当てた, 複数の証拠の利用を促す授業実践例: 小学校第 4 学年「物の温度と体積」を例に」日本理科教育学会『理科の教育』2024 年 5 月号, 52-53。

田中達也 (2024. 11) 「アーギュメント自己評価能力の向上を目指した授業」日本理科教育学会『理科の教育』2024 年 11 月号, 46-47。

田中達也・深川幹 (2025. 2) 「中学校理科教員養成課程の STEM 教育における ICT 活用能力育成プログラムの構想」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 39 巻, 第 3 号, 11-14。

田中達也 (2025. 2) 「児童主体の避難訓練: 児童主体の行動選択と動画活用型事後学習の提案」神戸教育文化研究所・神戸市教職員組合『語りをつなぐその先へ』11-12。

(2) 学生の学会発表

国内学会

小尾麻希子. 戦後初期の「明石附幼プラン」改革過程における保育者の専門的力量形成, 日本保育学会第 77 回大会口頭発表 (Web 開催・主催校: 神戸大学), 2024 年 5 月 11 日

梁格 (2024) 「女子生徒の STEM 分野の進学意識に関する研究日中比較—教師の教育姿勢の影響を中心に」日本科学教育学会第 48 回年会 2024 年 9 月 13 日, 函館工業高等専門学校。

三島泰樹 & Erkki T. Lassila (2024) 「教育現場外で育てられる教師の資質能力の検討」日本教師教育学会第 34 回研究大会, 2024 年 9 月 21 日, 島根大学。

松本圭朗（2024）「Z 短期大学における「教育方法論」の実践報告」大学評価学会第 21 回大会，2024 年 3 月 3 日，早稲田大学。

松本圭朗（2024）「勝田守一の幼児教育論に関する一考察」日本保育学会第 77 回大会，2024 年 5 月 11 日，神戸大学。

松本圭朗（2024）「1950 年代の北陸三県（富山県・石川県・福井県）における生活綴方をめぐる状況調査」中部教育学会第 72 回大会，6 月 22 日，愛知文教大学。

松本圭朗（2024）「勝田守一の生活綴方概念の再検討」日本教育方法学会第 60 回大会，2024 年 10 月 14 日，北海道大学。

増田莉子（2024）「中学校家庭科家族領域の指導案分析—シティズンシップ教育を視点として—」日本家政学会家族関係学部会 第 44 回 家族関係学セミナー（東京家政学院大学），口頭発表

岩尾正貴・田中達也（2024. 6）「集めて使おう！防災すごろくの開発」『防災教育学会 第 5 回大会 予稿集〈上巻〉』12-13.

沖本可奈・山中朱美・田中達也（2024. 6）「学校園所の教育時間中における大災害発生時の『一斉帰宅抑制』と『児童引き渡し方法』の不一致について」『防災教育学会 第 5 回大会 予稿集〈上巻〉』20-21.

田中達也（2024. 6）「世代を超えた新たな防災教育の地平」防災教育学会第 5 回大会シンポジウム・パネリスト.

山口智史・田中達也（2024. 6）「『当事者』意識の高まりを目指した避難訓練意識改革プログラムの開発」『防災教育学会 第 5 回大会 予稿集』51-52.

田中達也・大城亜水・光成研一郎（2024. 8）「初年次教育科目『まなぶる➤ときわびと』を基盤とした教育学部生協働学習組織『STEP Project』の構想」『初年次教育学会 第 17 回大会 要旨集』55.

高松基広・森田篤・横川耕二・大庭慎一郎・青木良太（2024. 9）「主体的・対話的なイノベーション教材の研究開発：教師への負担軽減を目指した問題解決能力育成教材」『AI 時代の教育学会第 6 回年次大会発表集録』21-22.

田中達也・山口悦司（2024. 9）「教員志望学生のアーギュメント構成能力とアーギュメント指導的評価能力の関係性の検討」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 23 号，135.

坂本美紀・山口悦司・山本智一・俣野源晃・村山留美子（2024. 9）「科学技術のリスクとベネフィッ

トを踏まえた意思決定を目指す教育プログラム：賛否とリスク重視傾向の観点での成果評価」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 23 号，220.

山口悦司・坂本美紀・山本智一・俣野源晃・村山留美子（2024. 9）「科学技術のリスクとベネフィットを踏まえた意思決定を目指す教育プログラム：リスクとベネフィットの重み付けとリスク対策提案の観点での成果評価」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 23 号，221.

俣野源晃・山口悦司（2024. 9）「アーギュメントにおける証拠の認識的理解に焦点を当てた小学校理科授業デザインの改善と評価：適切な証拠の十分な利用が求められる学習問題に着目して」『日本理科教育学会全国大会論文集』第 23 号，299.

田中達也・山口悦司（2024. 9）「アーギュメント評価能力の向上を目指した教員志望学生対象の教師教育プログラムの有効性の検証」719-720.

俣野源晃・山口悦司（2024. 9）「証拠の質と強さの認識的理解の深化とアーギュメントにおける複数の証拠の利用の関係性」『日本科学教育学会第 48 回年会論文集』721-722.

坂本美紀・山口悦司・山本智一・俣野源晃・村山留美子（2024. 9）「科学技術のリスクとベネフィットを踏まえた意思決定を目指す教育プログラム：小学生のリスク認知に関する成果評価」『日本教育心理学会第 66 回総会発表論文集』428.

田中達也（2024. 12）「教員志望大学生対象の理科教育アーギュメント指導力育成プログラムの開発：アーギュメント自己評価能力に着目して」『神戸常盤大学学術フォーラム』.

田中達也・大城亜水・京極重智・深川幹（2024. 12）「チームビルディングを軸としたこども教育学科リエゾン・モデルの評価 ～STEP Project は学生のキャリア形成にどのような役割を果たしたか～」『神戸常盤大学学術フォーラム』.

坂本美紀・山口悦司・山本智一・俣野源晃・村山留美子（2025. 3）「科学技術のリスクとベネフィットを踏まえた意思決定の教育プログラム：複数プログラムの学習を通した小学生の意思決定とリスク認知」『日本発達心理学会第 36 回大会発表論文集』435.

窪田騎士・田中達也（2025. 3）「中学校理科『動物の分類』への理解深化を目指したゲーム型 ICT 教材の開発」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第 24 号，40.

松田華織（2024）「現代米国における障害児教育をめぐる保護者－学校間の合意形成過程」日本教育行政学会第 59 回大会，神戸大学，2024 年 10 月 27 日.

山下晃一・永岡珠瑠・松田華織・松本伊織・綾香音 (2024)「米国における地元教員輩出 Grow Your Own Teacher の実践と政策ー教員養成における地域主義あるいは当事者主権の検討ー」日本教育行政学会第 59 回大会, 神戸大学, 2024 年 10 月 26 日。

松田華織・生田邦紘・松本伊織・中谷響・赤木和重 (2024)「なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか: 固定効果モデルを用いた多変量解析」日本特別ニーズ教育学会第 30 回記念研究大会, 日本大学, 2024 年 10 月 19 日。

松田華織 (2024)「現代米国における包摂性を志向した通常教育教員と特別教育教員の協働のあり方ー「高い資質を持つ教員」の構想に着目してー」基礎教育保障学会第 9 回研究大会, 神戸大学 (オンライン), 2024 年 8 月 31 日。

生田邦紘・松田華織・松本伊織・中谷響・赤木和重 (2024)「なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか: 学力テストなどの影響に注目して」障害児教育の教育目標・評価に関する研究会 (オンライン), 2024 年 6 月 16 日。

永岡珠瑠 (2024)「現代米国における地域コミュニティの位置をめぐる議論の展開ー”地域協力型”教員養成の潜在的意義ー」日本教育行政学会第 59 回大会, 神戸大学, 2024 年 10 月 27 日。

高島駿・岡部恭幸 (2025) Reasoning Up and Down による小学校第 5 学年までの分数指導: Unitizing・Norming の発達に着目して. 近畿数学教育学会第 77 回大会, スライド発表, 2025 年 2 月

三好杏乃 (2025) 小学校第 4 学年における「角」概念の形成過程に関する研究-R. Brandom の推論主義の視座から-. 近畿数学教育学会第 77 回例会, 研究発表, 2025 年 2 月.

Atsushi Sawada (2024) THE RELATIONSHIP BETWEEN UNDERSTANDING EQUIVALENCE AND RELATIONAL THINKING. Psychology of Mathematics Education Conference (PME 47) , 口頭発表, 2024 年 7 月.

澤田淳 (2024) 関係的思考を育てる学習指導. 日本数学教育学会第 106 回全国算数・数学教育研究 (大阪) 大会, 口頭発表, 2024 年 8 月.

澤田淳 (2024) 小学校 1 年生の関係的思考に関する実態調査ーたし算に関わる式の分析に焦点を当ててー. 日本数学教育学会第 57 回秋期研究大会, 口頭発表, 2024 年 11 月.

枝廣直樹 (2024)「セレスタン・フレネによる『興味の複合』の教育的開拓の意義ーフレネの理論と教育運動実践の変遷と連関に注目してー」世界新教育学会令和 6 年度国際教育フォーラム, 玉川大学, 2024 年 9 月 29 日。

加藤優汰 (2024)「梅根悟の三層構造によるカリキュラム論に関する研究ー1950 年代のカリキュラム

論の展開に着目して一」神戸大学教育学会総会，神戸大学，2024年8月3日。

加藤優汰（2024）「梅根悟の戦後新教育期カリキュラム論における基礎学習の位置づけ—愛知学芸大学附属春日井小学校の「基礎課程」に着目して—」日本教育方法学会第60回記念大会，北海道大学，2024年10月14日。

中田崇彦（2024）「生活を綴り語り合うインクルーシヴ教育実践」第9回基礎教育保障学会研究大会（オンライン）2024年8月31日。

井上太一・澤井正弘（2024）「大学で学ぶことの意味についての対話」知的・発達障害青年の自立と学びを考える全国フェスティバル（愛知県立大学）2024年10月13日。

(3) 特別研究員，外部資金獲得など

蓑毛智樹（2025）上廣倫理財団（令和6年度）研究助成「藤井健治郎による『教育学の基礎学としての倫理学』の試みの研究」

枝廣直樹（2024）「子どもの主体性を重視する学校教育の研究 —セレスタン・フレネの興味の複合から—」令和6年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

加藤優汰（2024）「戦後新教育期における梅根悟のカリキュラム論に関する研究」令和6年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

大部慎之佑（2024）「戦後新教育期の柳田国語科に関する研究：『話し方・聞き方』の教育実践に着目して」令和6年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

小尾麻希子（研究代表者）※単独

研究課題：1950年代における幼稚園カリキュラムの発展過程と保育者の力量形成に関する実証的研究

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：1950年代の国立大学附属幼稚園におけるカリキュラムの発展過程と保育者の専門的力量形成過程について当時の実践関係史料に基づいて明らかにする。

研究期間：2024年4月～2029年3月

増田莉子（2024）日本学術振興会特別研究員（DC1），研究課題「家庭科における市民性育成の可能性—サービス・ラーニングを視点として」特別研究員奨励費

俣野源晃（2024）奨励研究「適切なエビデンス選択能力の向上を図る GIGA 端末活用型の小学校理科授業の開発」（課題番号 24H02427）

田中達也（2024）研究活動スタート支援「変革を起こすコンピテンシーを育成する防災教育の開発：探究型アーギュメントへの着目」（課題番号 23K18885）

松田華織（2024）日本学術振興会特別研究員（DC2）採用，研究課題「現代米国における『学力向上』と『インクルーシブ教育』の共存可能性に関する研究」

松田華織（2024）科研費・特別研究員奨励費「現代米国インクルーシブ教育における学力向上との相互矛盾および対応過程に関する研究」（課題番号 24KJ1677）

赤木和重・山下晃一・生田邦紘・松田華織（2024）「なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか：学力テストの影響に注目して」公益財団法人前川財団 2023 年度（2024 年 7 月 31 日まで）家庭教育研究及び実践活動助成

永岡珠瑠（2024）「米国の“地域イマージョン型”教員養成に関する研究—日本での社会実装を目指して—」令和 6 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

松本伊織（2024）「教育ビッグデータを用いた教員の多忙化緩和を目指す定量的効果測定の可能性」令和 6 年度 神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」採択（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム）

赤川峰大（2024）奨励研究 「小学校算数科における推移律の研究」（課題番号：24H02410）

(4) 学生の受賞

蓑毛智樹（2024）教育史学会・研究奨励賞受賞

田中達也（2024）日本科学教育学会・奨励賞受賞

(5) ゲストスピーカーの招へいなど

下吉美香（2024）初等理科教育論・ゲストスピーカー

(6) その他の執筆

小尾麻希子「4・5 歳児の発達をふまえた援助とは」開仁志『幼児教育・保育方法論』教育情報出版，2025 年 1 月，pp. 112-113.

小尾麻希子「日常の遊びと行事の在り方とは」開仁志『幼児教育・保育方法論』教育情報出版，2025年1月，pp.147-148.

学術 Weeks シンポジウム

森唯花「ESD プラットフォーム WILL の概要」『ESD 実践研究集会 2024』2025 年 12 月 7, 8 日，神戸大学。

(人間発達専攻長 木下孝司)

5.2.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は，例年どおり，人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は，専攻長と各コースの主任の計 5 名から構成される。今年度は，運営会議を 3 回開催し，人事，入試，教務等に関わる重要案件を審議決定した。

今年度は，教員採用の学域方針に沿って，准教授ならびに講師人事に関連する人間環境学セミナーを 5 回開催し，研究内容の議論も行った。その結果として，准教授採用人事の検討と選考を 2 件、昇任人事を 3 件行なった。

(2) 予算

各コースの学生の下記の所属人数に応じて配分した。（休学を 0.5 としてカウント）

表 博士課程前期課程ならびに後期課程の在席学生数

	博士課程前期課程	博士課程後期課程
自然環境論	26	14
数理情報環境論	6	1
生活環境論	17	12
社会環境論	12	5
計	61	32

(3) 入試

前期課程入試については推薦入試（7 月），1 次（9 月），2 次（12 月）を行った。推薦入試については，プレゼンテーション，口頭試問，書類審査，ならびに外国語科目試験を総合的に評価した。1 次については，試験区分ごとに専門科目について筆記試験を行い，口頭試問，外国語科目試験とともに総合的に評価した。2 次については，試験区分ごとに専門科目について口述試験を行い，外国語科目試験とともに総合的に評価した。本年度は推薦入試，2 次については遠隔入試を，1 次については対面入試を実施した。

後期課程入試は 1 次（8 月），2 次（2 月）に行った。後期課程入試に関しては，「受験生のプレゼンテーション，主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ，各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。本年度の 1 次，2 次とも対面入試を実施した。

(4) 教育

大学院生は修士論文、博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、学生に対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが多い。本年度は、原則的に指導は通常の対面方式に戻った。BEEF ならびに Teams を併用することで、遠方のゲストスピーカーの依頼が可能となり、時間ならびに空間も柔軟に効率的に学生指導できるなど、コロナ禍前より多角的に教育指導を行うことができた。

今年度の修士号の取得は 24 名、博士号取得者は 5 名となった。

表 修士号ならびに博士号の取得学生数

	修士号	博士号
自然環境論	13	2
数理情報環境論	1	1
生活環境論	7	1
社会環境論	3	1
計	24	5

(5) 広報

博士課程前期受験検討者に対し、オープン・ラボの期間が設けられ、受験相談を行った。春シーズンおよび秋シーズンのオープン・ラボウィークスの実績は合計で 自然 11 名、数理 0 名、生活 9 名、社会 7 名であった。

(6) 学外研究者を招いての国際講演・シンポジウム等

Plant systematics for understanding the plant diversity and evolution (植物の多様性と進化を理解するための植物系統学)

担当教員:近江戸伸子

日程:令和 6 年 5 月 22 日 (水)

場所:鶴甲第 2 キャンパス B 棟 101

大韓民国 忠北大学 Kim Jung Sung (キム・ジョンソン) 氏をスピーカーに招いての国際学術セミナーを実施した。参加者 25 名

Topological Data Analysis and Representation Theory 2025

(位相的データ解析と表現論 2025)

担当教員:エスカラ エマソン ガウ

日程:令和 7 年 2 月 12 日 (水), 13 日 (木)

場所:鶴甲第 2 キャンパス A 棟 739

韓国の KAIST から Woojin Kim 氏や沖縄科学技術大学院大学から Kaveh Mousavand 氏などを招き、国内の主要研究者を集めた研究集会を実施した。参加者 28 名

(7) 学生の受賞

在学中の大学生ならびに大学院生が以下のように受賞した。

受賞者：平山一槻（博士課程後期課程 2 年，指導教員：源利文）

賞の名称：第 72 回 日本生態学会大会ポスター賞最優秀賞（保全部門）

受賞対象：環境 DNA における精子特異的メチル化状態を利用したカワバタモロコの繁殖検出

受賞年月：令和 7 年 3 月 15 日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松尾莉子（博士課程前期課程 2 年，指導教員：源利文）

賞の名称：第 72 回 日本生態学会大会ポスター賞最優秀賞（生態系管理・生態学教育・普及部門）

受賞対象：環境 DNA を用いたタイ肝吸虫検出系の開発および感染症生態学への応用

受賞年月：令和 7 年 3 月 15 日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：岡田淳史（学部 4 年，指導教員：源利文）

賞の名称：第 7 回環境 DNA 学会つくば大会ポスター賞優秀賞（基礎部門）

受賞対象：琵琶湖におけるブラックバス類の時空間的分布動態の解明

受賞年月：令和 6 年 12 月 3 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：松尾莉子（博士課程前期課程 2 年，指導教員：源利文）

賞の名称：第 7 回環境 DNA 学会つくば大会ポスター賞優秀賞（応用部門）

受賞対象：ラオスサバナケット州におけるタイ肝吸虫の分布要因の推定

受賞年月：令和 6 年 12 月 3 日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：夏天（博士課程後期課程 6 年，指導教員：高見泰興）

賞の名称：Stearns Graduate Student Prize, European Society for Evolutionary Biology

受賞対象：Reproductive isolation via divergent genital morphology due to cascade reinforcement in *Ohomopterus* ground beetles

受賞年月：令和 5 年 9 月 16 日

受賞理由：2023 年に発表した論文が優秀と評価されたため

受賞者：石黒更（博士課程後期課程 1 年，指導教員：近江戸伸子）

賞の名称：令和 6 年度神戸みどりの夢基金 神戸市の緑に関する普及・啓発に寄与する調査・研究 優秀論文賞

受賞対象：アジサイ新品種コウベイチゴウ～親はどれ？新品種開発に向けてのゲノムからのアプローチ～

受賞年月：令和 7 年 3 月 12 日

受賞理由：上記の論文が優秀と評価されたため。

受賞者：周 俊男（博士課程前期課程 2 年，指導教員：田畑智博）

賞の名称：博士後期課程学生研究奨励賞（クリタ研究賞）

受賞対象：将来における木質バイオマスの供給ポテンシャルの推計に係るシミュレーション手法の開発

受賞年月：令和 6 年 9 月 9 日

受賞理由：環境科学分野における新規性、注目度、社会的有用性、将来などの観点から、研究内容が優秀と評価されたため

（人間環境学専攻長 近江戸伸子）

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（鶴 2CSC）は、発達科学部・国際人間科学部の学部生と人間発達環境学研究科の大学院生を対象に、学生のキャリア形成を実践的にサポートする活動を行った。これらは、就職活動及びキャリア形成支援、情報発信の 3 つに大別される。以下、それぞれの活動に関し詳述する。

（1）就職活動及びキャリア形成支援

例年通り、就職活動中の学生を対象に、下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接
- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は 536 人であり、その内訳は、発達科学部：4 人，人間発達環境学研究科：162 人，国際人間科学部：374 人，海洋政策学部：8 人，理学部：5 人，法学部：4 人，文学部：3 人，農学部：1 人，経営学部：1 人，理学研究科：1 人，人文学研究科：1 人，農学研究科：1 人，システム応用学研究科：1 人であった。（※ 2 月 22 日時点の人数です）

さらに、下記のセミナー・説明会を開催した。

- ・就職活動全般
- ・教員採用試験対策（公立、私立）
- ・自治体教育委員会による教員採用試験に関する説明会
- ・心理・福祉職，環境職，デザイン・クリエイティブ枠に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーのタイトルは、下記の一覧を参照されたい。セミナーの総数は 36，総参加人数は 580 人であった。（※セミナーの総数は開催予定分を含み，総参加人数は 2 月 27 日時点の実績）

上記に加え，今年度も，発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科の OBOG 訪問の仲介を実施した。

- ・OBOG 訪問受付件数：85

（※2 月 27 日時点の実績）

また、昨年度と同様、「内定者獲得紹介システム」を運用した。本紹介システムは、鶴 2CSC の仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・国際人間科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。

具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録人数：22
- ・内定先（企業か官公庁等）の数：57
- ・内定獲得者と下級生との面談回数：5

（※2 月 27 日時点の実績）

（2）情報発信

キャリア支援に関する各種情報の発信を行った。

- ・企業からの大学推薦の求人情報
- ・公立・私立の教育機関（幼稚園，保育園，小中高）からの求人情報
- ・心理・福祉系の外部機関からの求人情報
- ・他大学の大学院募集情報
- ・学内セミナー（当センター主催分と学内の他の支援組織の主催分の両方）の開催情報
- ・外部業者から入手した関連情報

上記の情報を、学生向け一斉メール（鶴 2CSC ニュース）、掲示板、Twitter 等の媒体を使って発信した。

（3）教員採用勉強会の支援

- ・学生主体の教員採用勉強会の支援を行った。

教員採用勉強会の開催総数は 59 回、総参加人数は 472 人であった。

【今年度開催セミナー一覧】※オンラインまたは対面

1. 4 月 15 日（月） 就職活動支援 「就職活動スタートアップまるわかり講座」
2. 4 月 16 日（火） 就職活動支援 「自分に合う組織を見つけるための自己分析講座」
3. 4 月 18 日（木） 教員採用 「京都府教育委員会採用選考試験説明会」
4. 4 月 23 日（火） 教員採用 「神戸市教育委員会選考試験説明会」
5. 4 月 25 日（木） 教員採用 「兵庫県教育委員会採用選考試験説明会」
6. 5 月 9 日（木） 就職活動支援 「エントリーシート講座」
7. 5 月 13 日（月） 就職活動支援 「インターンシップ対策講座 業界研究講座」
8. 5 月 15 日（水） 就職活動支援 「インターンシップ対策講座 職種研究講座」
9. 5 月 16 日（木） 教員採用 「私学教員スタートアップガイダンス」
10. 5 月 17 日（金） 就職活動支援 「インターンシップ対策講座 一面接編一」
11. 5 月 21 日（火） 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
12. 6 月 6 日（木） 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
13. 6 月 18 日（火） 公務員 「心理・福祉系公務員セミナー」
14. 6 月 20 日（木） 公務員 「行政職公務員セミナー」

15. 10 月 1 日 (火) 就職活動支援 「インターンシップ活用講座」
16. 10 月 3 日 (木) 就職活動支援 「企業研究講座」
17. 10 月 10 日 (木) 就職活動支援 「職業研究講座」
18. 10 月 17 日 (火) 就職活動支援 「夏インターンシップ振り返り講座」
19. 10 月 22 日 (火) 公務員 「徳島県警察少年補導職員業務説明会」
20. 11 月 12 日 (火) 公務員 「心理・福祉系公務員セミナー」
21. 11 月 13 日 (水) 公務員 「神戸市福祉職説明会」
22. 11 月 14 日 (木) 公務員 「行政職公務員セミナー」
23. 11 月 19 日 (火) 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
24. 12 月 5 日 (木) 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
25. 12 月 10 日 (火) 教員採用 「大阪府豊能地区教職員人事協議会採用選考試験説明会」
26. 12 月 12 日 (木) 教員採用 「京都府教育委員会採用選考試験説明会」
27. 12 月 17 日 (火) 教員採用 「兵庫県教育委員会採用選考試験説明会」
28. 12 月 17 日 (火) 教員採用 「私学教員セミナー」
29. 12 月 19 日 (木) 教員採用 「神戸市教育委員会採用選考試験説明会」
30. 12 月 19 日 (木) 教員採用 「私学教員セミナー」
31. 1 月 21 日 (火) 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
32. 1 月 28 日 (火) 就職活動支援 「キャリアデザイン講座」
33. 2 月 6 日 (木) 就職活動支援 「インターンシップ&就活準備」
34. 2 月 18 日 (火) 公務員 「神戸市デザイン・クリエイティブ枠 採用説明会」
35. 2 月 27 日 (木) 就職活動支援 「グループディスカッション練習会」
36. 3 月 25 日 (火) 就職活動支援 「自己 PR・ガクチカ作成講座」

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催の「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを令和6年4月3日(水)に対面(大会議室)で実施した。

青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明, 近江戸伸子教授より審査委員経験を踏まえた申請書作成などに関するアドバイスがなされた。さらに, 人間発達環境学研究科で採用された特別研究員2名により, 採用に至る経験談や申請や審査に関わる留意点などの紹介がなされた。当日は30名と多くの参加者があった。昨年と同様に今回も好評であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

・日時: 令和6年4月3日(水)11:00~12:30 対面(大会議室)開催

- 1) 特別研究員制度の概要と本研究科の現状(青木茂樹 教授)
- 2) 審査・選考の実際-審査経験者の立場から(近江戸伸子 教授)
- 3) 申請の実際-応募者の立場から(1)(人間環境学専攻大学院生)
- 4) 申請の実際-応募者の立場から(2)(人間発達専攻大学院生)

(学生委員会委員長 中谷奈津子)

6.2. 卒業・修了後の進路

令和6年度の発達科学部卒業生・国際人間科学部卒業生の就職状況は、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者数や進学者数ほぼ例年通りであった。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、特に研究職の場合は公募による就職が主となるため年度ごとに様相が異なるが、常勤の大学教員および学振特別研究員（PD、RPD）が3名など、専門性を活かしたキャリア選択を実現しており、就職状況は概ね良好であった。進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

（学生委員会委員長 中谷奈津子）

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

（1）本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。令和6年度の活動（KUIDをもとに調査）は、「論文」315件、「著書」48件となっておりここ数年の値と同等である。「研究発表等」については新型コロナウイルスの影響により低い数字が続いていたが、例年に近い数字に戻ってきている。

	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
論文	319	326	396	365	339	315
著書数	53	63	45	53	45	48
研究発表等	440	282	349	372	428	423

（2）研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本（社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係、社会的結束力）の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究（人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究）をより一層推進することを目的として、今年度は国際共同研究に重点配分し、若手教員による積極的な申請を奨励した。

令和6年度に研究科運営委員会にて選定した共同研究は、以下のとおりである。

- ① 研究課題：日本とスペインにおける教師教育関連史料の保存とその活用に関する研究：神戸大学とリエイダ大学における1930年代史料を中心に
研究代表者：渡邊隆信

共同研究者：川地亜弥子, Simon-Martin, Meritxell

決 定 額：800 千円

- ② 研究課題：繊維・糸の研究手法を応用した昆虫外骨格の物理特性評価法の開発と柔軟な外骨格の生物学的意義の解明

研究代表者：高見泰興

共同研究者：井上真理, 青沼仁志

決 定 額：350 千円

- ③ 研究課題：神戸のアジサイ遺伝資源の解析と日欧育種への応用

研究代表者：近江戸伸子

共同研究者：Tony Heitkam, Nicola Schmidt, Stefan Wanke

決 定 額：550 千円

- ④ 研究課題：発達障害を有する子どもの身体活動と認知機能の関係およびその脳機構

研究代表者：石原暢

共同研究者：Sebastian Ludyga, Nóra Bunford

決 定 額：500 千円

(人間発達環境学研究科長 近藤徳彦)

7.1.2. 学生の受賞

令和6年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

【人間発達専攻】

受賞者：西山理奈

受賞名：日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会 ポスター発表選奨

受賞者：初田響子

受賞名：日本認知科学会第41回大会 発表賞

受賞者：Kim Nahyun

受賞名：日本社会心理学会 大学院生・若手研究者海外学会発表制度

受賞者：Kim Nahyun,

受賞名：若手フロンティア研究会 2024 オープン部門（部門賞）優秀賞

受賞演題：VA(バーチャル・エージェント)を活用したリアルワールドデータ分析

受賞者：水野風紗・記藤陽亘・松野有沙・渡邊碧・三浦敬太・長ヶ原 誠 (2024)

受賞名：日本生涯スポーツ学会 第26回大会学生ポスター発表最優秀賞

受賞演題：スポーツ参画が主観的気力年齢に及ぼす影響～年代・性別に着目して～

受賞者：西野葵

受賞名：第6回韃ひろば 発表賞

受賞理由：投稿した査読付き審査論文と口頭発表が優秀であると認められたため。

受賞者：蓑毛智樹

受賞名：教育史学会・研究奨励賞受賞

受賞者：田中達也

受賞名：日本科学教育学会・奨励賞受賞

【人間環境学専攻】

受賞者：平山一槻（博士課程後期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：第72回 日本生態学会大会ポスター賞最優秀賞（保全部門）

受賞対象：環境DNAにおける精子特異的メチル化状態を利用したカワバタモロコの繁殖検出

受賞年月：令和7年3月15日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松尾莉子（博士課程前期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：第72回 日本生態学会大会ポスター賞最優秀賞（生態系管理・生態学教育・普及部門）

受賞対象：環境DNAを用いたタイ肝吸虫検出系の開発および感染症生態学への応用

受賞年月：令和7年3月15日

受賞理由：発表ポスターが最も優秀であると評価されたため

受賞者：松尾莉子（博士課程前期課程2年，指導教員：源利文）

受賞名：第7回環境DNA学会つくば大会ポスター賞優秀賞（応用部門）

受賞対象：ラオスサバナケット州におけるタイ肝吸虫の分布要因の推定

受賞年月：令和6年12月3日

受賞理由：発表ポスターが優秀と評価されたため

受賞者：夏天（博士課程後期課程6年，指導教員：高見泰興）

受賞名：Stearns Graduate Student Prize, European Society for Evolutionary Biology

受賞対象：Reproductive isolation via divergent genital morphology due to cascade reinforcement in *Ohomopterus* ground beetles

受賞年月：令和5年9月16日

受賞理由：2023年に発表した論文が優秀と評価されたため

受賞者：石黒更（博士課程後期課程1年，指導教員：近江戸伸子）

受賞名：令和6年度神戸みどりの夢基金 神戸市の緑に関する普及・啓発に寄与する調査・研究
優秀論文賞

受賞対象：アジサイ新品種コウベイチゴウ～親はどれ？新品種開発に向けてのゲノムからのアプローチ～

受賞年月：令和7年3月12日

受賞理由：上記の論文が優秀と評価されたため。

受賞者：周 俊男（博士課程前期課程2年，指導教員：田畑智博）

受賞名：博士後期課程学生研究奨励賞（クリタ研究賞）

受賞対象：将来における木質バイオマスの供給ポテンシャルの推計に係るシミュレーション手法の開発

受賞年月：令和6年9月9日

受賞理由：環境科学分野における新規性、注目度、社会的有用性、将来などの観点から，研究内容が優秀と評価されたため

（学生委員会委員長 中谷奈津子）

7.2. 学術 Weeks

学術 WEEKS は「国内外の学術交流活動を通して，大学院生・学部学生の視野を広げ，研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資すること」を目的とした本研究科独自の取り組みである。毎年，秋期を中心として海外・国内から多くの研究者を招聘し，研究集会等の学術交流を行っている。多様な研究領域を擁する本研究科の特色が存分に生かされた取り組みであり，良質な領域横断的プログラムが提供されてきた。多くの大学院生・学部生にとって，様々な分野の国際交流を通して，自分の研究を見つめ直し，研究会の企画，運営，発表などの多くのスキルを習得するための有益な機会となっている。

昨年度に引き続き本年度も，対面で企画が開催できるようになった。企画内容としては，教育，音楽，ダンス，ファッション，スキル，共生，発達の領域を中心に，国内外の研究者・実践家との連携を通じて，人間発達をめぐる最先端の課題について大学院生，学生を交えた活発な議論や意見交換がなされるシンポジウム形式での試み，多文化的，文化伝承的な視点から芸術の新たな可能性を模索する試みなど，グローバルな視点での取り組みが活発に展開された。若手教員からの企画提案も増え，人間発達環境に関わる研究の活発化につながるものであった。個別の企画内容に関しては以下の例を参照されたい。

（学術 WEEKS2024WG 主査 谷篤史）

7.2.1 学術 Weeks の各事業・セミナー

（1）環境と調和するスキルの可能性を探る VOL.4 運動・スポーツスキルの先端研究

【日 程】2024 年 8 月 21 日（金）14:00～17:00

【場 所】KOBE Co CREATION CENTER（三宮センタービル 9 階）

【参加者】約 30 名

【講演者】

「元気な高齢者がなぜ転ぶ? : “適応性の喪失” に対する認知科学的アプローチ」樋口 貴広 (東京都立大学)

「データ駆動型アプローチに基づく運動スキルの解明」瀧山健 (東京農工大)

「蹴動作からみる全身運動の適応」森山真衣 (京都大学)

【指定討論者】野中 哲士 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

【概要】本企画は、動的な環境と自在に切り結ぶ「スキル」を糸口として異分野を横断し、現代社会の課題との接点をさぐるシリーズの第四弾である。スポーツ、運動スキル研究の第一線の研究者が集い、最新の研究成果を発表し、指定討論者および学生を含めた活発なディスカッションが行われた。

(人間発達専攻 野中哲士)

(2) 国際シンポジウム「ヒトと蜂の共存」を考える

【日程】2024年9月2日(月) 10:00~12:00, 2日(月) ~5日(木)

【参加者】18名

【概要】

英国の University College of London の Seirian Sumner 教授, Cintia Akemi Oi 研究員, ニュージーランドの Manaaki Whenua Landcare の Robert Brown 研究員, 岡山大学の藤岡春菜助教を招待し、ヒトと蜂の共存に関する講演を行なった。9月2-5日には、上記の招聘者に加え、国際人間科学部4年生と人間発達環境学研究科博士前期課程1年生の学生2名も参加し、蜂の子食文化がある岐阜県東濃地域、愛知県石野地区にてシダクロスズメバチとオオスズメバチの採集方法を地元の住民から学び、食体験を行なった。学生らは主体的に地元住民と招聘者との通訳を行い、英語力に対する自信を高めるだけでなく、蜂と共存する文化への理解も深めた。



愛知県石野地区の住民らとのオオスズメバチの採集をした。

(人間環境学専攻 佐賀達矢)

(3) シンポジウム：インドとイランの打弦楽器を比較する—サントウルを事例に—

【日程】2024年10月15日(火) 15:10~16:40

【参加者】75名

【概要】

打弦楽器とは、台形の共鳴胴の上に張り巡らされた多数の弦を撥で打つ楽器である。本シンポジウムでは、インド・ムンバイを中心に活躍するインドサントウル演奏者新井孝弘と、本研究科のイラン音楽研究者およびイランサントウル演奏者の谷正人を中心として、インドとイランのサントウルの類似性と差異性を民族音楽学的観点から探る試みが行われた(司会:M2生 宮本夏実)。「民族音楽演奏特別演習」「エスノミュージコロジー1」受講生をはじめ、学外からイラン研究者や音楽研究者など70名超の聴衆が参加した。

まずデモ演奏として、イラン音楽には Yazdanmehr Razi (イランパーカッション: トンバク),

インド音楽には藤澤ばやん（インドパーカッション：タブラ）が参加し、それぞれ 30 分程度の演奏を行った。

後半では、打弦であることとその楽器構造ゆえの、声を模倣する上でのディスアドバンテージと、そうした立場を克服するための関係者の試行錯誤などが報告・議論された。また質疑応答では調律システムの問題やその改善をめぐる両文化の試みや差異、などが議論された。

両文化は、人間の声をいかに模倣するかという共通した課題を抱えている。しかし議論から明らかになったのは、早い段階でイランサントウルがそれをある意味「諦め」て器楽志向にシフトしたことで演奏者人口を爆発的に増やしたのに対して、インドサントウルは、声の模倣に真摯に向き合いながらも、それによって演奏者人口を大きく増やすのには至らなかったという点である。両文化が同じ課題を抱えつつ異なった帰結を迎えたのは大変興味深いといえよう。

参加者からのフィードバックでは、「全てについて、「歌」を基本にしておられることがよく分かりました。が、共通点もありながらなんと出てくる音楽の違うことか...」

「インドでのサントウルの変化の件、新井氏の恩師の改革について（谷正人氏の）著書にも書かれていました。改革前の状態の音楽を聴いてみたい（できれば見てみたい）です。」などの意見がみられた。

（人間発達専攻 谷正人）

(4) 教師教育とライフ・ライティング—スペイン第二共和制下におけるリエイダ地方の事例をもとに—

【日程】2024 年 11 月 28 日（月）13:20～15:00

【参加者】24 名

【概要】学術 Weeks ライティングシンポジウム「ライティング（書くことの）評価はどうあるべきか—『ループリック評価』の批判的検討—（2022 年度）」、「ライティング指導の挑戦—アカデミック・ライティングを超えて—（2023 年度）」「教師教育における書くことの展開と可能性：書くことを教える、教えることを書く（2023 年度）」に続く企画である。1930 年代のスペイン第 2 共和制下の教師教育の構成や、教師教育の記録におけるライフ・ライティングの活用について、日本との比較やフレネ教育との関係で議論を深めた。教員採用の評価対象となる記録でありながら、率直な思いが記されたことの歴史的意味について今後も検討していく必要がある。

登壇者は以下の通り。話題提供者：メリチェル・シモン-マーティン（スペイン・リエイダ大学研究員）、指定討論：枝廣直樹（神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程）、司会：川地亜弥子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

(5) 音楽文化のトランスボーダー vol.8 今、感じて考える「B 面のシェーンベルクとその時代」

【日程】2024 年 11 月 18 日（月）18:00～20:15

【参加者】80 名（一般 30 名、学生 50 名）

【概要】

シェーンベルクの生誕 150 年に、東京大学名誉教授の長木誠司氏を招き、「ベルリンのシェーンベルク」について講演をして頂いた。冒頭は前田裕佳氏によるピアノで 1911 年の 6 つのピアノ小品 (Op. 19), そして、長木氏の講演後には、太田真紀氏の歌、前田氏のピアノでシェーンベルクの「B 面」Brettli Lieder (キャバレー・ソング)、後半にはシェーンベルクを憧憬しつつ、異なる道を選んだクルト・ヴァイルのソングも演奏された。

ベルリン時代のシェーンベルクのキャバレー・ソングは、旋律とリズムのその優美さにウィーンの音楽性が色濃く、また後期のシェーンベルク作品の解釈に、新たな視点を与えてくれる。反対に、ヴァイルが志向していた 20 世紀前半のモダニズムの変容という現象の再評価にも通ずる。最後に実践と学術的な発想との相互作用に関連して、長木氏のアフタートークでの言葉を引用する。

「シェーンベルクの耳でヴァイルを聴き、ヴァイルの耳でアイスラーを聴き、ドイツ語を聴いた耳で日本語を聴く体験の面白さにあらためて気づく、こういう機会はぜひ続けていってほしい」

2014 年に始めた「音楽文化のトランスボーダー」は今回で vol. 8。多様性が称揚される時代の「異なる世界」に、様々なアプローチで橋をかけるという試みは、他者を理解するうえで、芸術の世界から現実の社会問題にもインパクトを与え得るのではないかとあらためて考えさせられた。



(人間発達専攻 大田美佐子)

(6) 高校生・私の科学研究発表会 2024

【日程】2024 年 11 月 23 日 (土・祝) 10: 00~15: 50

【参加者】214 名

【概 要】

知識基盤社会の市民として、また社会の持続可能な発展への寄与に向けて、科学的な思考や探求・研究的能力を高めることの重要性が高まっており、近年、高等学校の教育でも探究活動が重視されている。このような背景のもと、高校生の科学研究活動の成果発表の場をつくり、大学の研究者、学生等の参加者も含めた議論・交流を通じて、高校生の研究活動への意欲・関心を高め、研究活動の発展に寄与することを目的として上記の企画を実施した。神戸大学百年記念館を会場とし、兵庫県、大阪府、奈良県、広島県、鳥取県、徳島県から、18 校の高校生 152 名、高校教員 28 名他が参加して、口頭 15 件、ポスター 34 件の研究発表が行われた。なお、このイベントは、兵庫県生物学会との共同で開催した。生物学以外の分野で最も優れた研究発表 2 件に対して、サイエンスショップから優秀賞を授与した (生物学分野の優れた発表は兵庫県生物学会が表彰した)。

(人間環境学専攻 伊藤真之)

(7) ダンスから探る 2 者間の身体性コミュニケーションの可能性

【日程】2024 年 11 月 23 日（土・祝）10:30～15:00

【参加者】4 名

【概 要】

ボールルームダンサーである松岡貞行氏を講師として招き、松岡（初田）響子が講師・司会を務め、2 者のコンタクト（身体接触）により可能となる身体動作の探索を中心としたワークショップを行った。ワークに入る前に、ワークショップでペアとなった相手と簡単な自己紹介をし合い、その後自身の好きなものなどをジェスチャーで伝えるアイスブレイクを行った。ワークの前半では「Lead & Follow」として、リーダーとフォロワーの役割分担を行い、視界を塞いだ状態で相手の背中に片手のひらを当てて相手の動きに追従するワーク、相手とコンタクトする部位を変化させながら、コンタクトにより可能となる動作を探索するワーク、についてそれぞれ役割を交代しながら行った。ワークの後半は「Lead & Against」として、相手との力を拮抗させて均衡を保つカウンターバランスを体験した後、相手の動作に反発するワークを、前半と同様にコンタクトする部位を変化させながら行った。ワーク全体を通じて探索した相手とのコンタクトにより可能となる動作のレパートリーを総合させながら、ペアごとに 30 秒～1 分程度の作品を創作し、1 ペアずつ発表した。ワークを通じて、相手とコンタクト部分を通じて行われる身体性コミュニケーションの豊かさや、それにより喚起される情動、身体表現としての効果などを意識した。最後の指定討論では、清水大地が指定討論者を務め、ワークを経験して得られた感覚や他チームの作品鑑賞を通じて感じたことについて、参加者を中心に意見・感想を交換しながら、他者とのコンタクトに対する新たな視点や気づきや多様な可能性について議論・共有した。

（人間発達専攻 清水大地）

(8) 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL.5 ワーキングメモリの基礎と児童発達支援の実際—Warabeuta Approach わらべうたアプローチからみえてきたこと

【日 程】2024 年 11 月 28 日（木）16:00～18:00

【参加者】24 名（附属幼稚園，附属小学校，附属特別支援学校から 7 人を含む）

【講演・話題提供】「ワーキングメモリの基礎と児童発達支援の実際—Warabeuta Approach わらべうたアプローチからみえてきたこと—」 湯澤美紀（ノートルダム清心女子大学）

【司会進行】林 創（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

【指定討論】「障害者心理学の立場から」 山本健太（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

「応用身体運動科学の立場から」 石原 暢（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

「教育現場の立場から」 黒川陽司（神戸大学附属特別支援学校）

【概要】

人間発達環境学研究科のプロジェクト「適応的スキル発達をめぐる異分野共創研究」では、毎年いくつかのシンポジウムを企画しており、その 1 つとして、附属学校部および教育連携推進室との共催となる「ワーキングメモリの基礎と児童発達支援の実際」をオンライン（Zoom）で開催した。教育実践場面を意識しつつ、ワーキングメモリという認知心理学に基礎的概念をもとにした特別支援の実際について、フロアも交えて活発な議論を行った。当日は、人間発達環境学研究科の教員や院生をはじ

め、附属学校の教員なども多数の方が参加され、盛況なシンポジウムとなった。

(人間発達専攻 林 創)

(9) シンポジウム「メンズファッションの歴史を考える：ストリートと雑誌メディア」

【日程】2024年11月30日(土)14:00~16:00

【参加者】20名

【概要】

本シンポジウムは、日本のファッション史におけるメンズファッションの歴史を再検討したものである。とりわけ20世紀後半の日本のメンズファッションの展開においてメディアが果たした役割を、雑誌に描かれたイメージや言葉のみならず、それらを受け取った読者、さらにストリートへと繰り出した男性たちの姿を浮かび上がらせることを目的とした。前半では3名の登壇者が発表を行った。具体的には、百々徹氏(大阪成蹊短期大学教授)が、メンズファッション史とVANをはじめとするメンズファッションブランドの詳細について、また岩井祐二氏(元カジカジ編集長)が雑誌『カジカジ』の編集からみたストリートファッションの動向について、そして工藤源也氏(神戸大学大学院人間発達環境学研究科 博士課程)が1990年代の古着の動向と雑誌『BOON』の表象について報告を行った。後半では、前半の話題を踏まえ、登壇者および司会が、雑誌とストリートの関係性、メンズファッションの盛衰、流行の歴史化の問題について、研究者と編集者のそれぞれの視点から討議を行い、日本のメンズファッション研究の問題と展望を明らかにした。

(人間発達専攻 平芳裕子)

(10) 第7回ESD実践研究集会：「再開するESD、再会する実践者たち～〇〇〇のススメ～」

【日程】2024年12月21日(土)11:00~17:00・22日(日)10:00~16:30

【参加者】のべ95名

【概要】

12月7日・8日、神戸大学鶴甲第二キャンパスにて、第7回ESD実践研究集会「再開するESD、再会する実践者たち～〇〇〇のススメ～」が開催された。1日目(12/7)午前は、「100年前から振り返る」イントロワークショップとして、ESDをめぐる社会全体の動き・ライフスタイルの変化を再確認した。午後には、兵庫・神戸でESD実践に取り組む実践者・大学生/院生・高校生によるポスター発表が行われた。



2日目(12/8)午前は、3つの分科会(①5年後の未来を描く、②30年後の未来を描く、③100年後の未来を描く)に分かれて参加者それぞれの考えを共有し、午後の総合討議で2日間全体の総括を行った。企画・運営に関わった学生も含め、多様な領域のESD実践者・研究者・ユースが互いの関心を持ち寄りながら交流を深めることのできる会となった。

(人間発達専攻 後藤聡美)

(11) 米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー

【日 程】2025 年 3 月 15 日 (土) 10:00~12:00

【参加者】61 名

【概要】上記に続くライティングシンポジウム第5弾である。アメリカとフランスという、アカデミック・ライティングのスタイルが大きく異なる2国の、特に高等教育に絞って話題提供があった。アメリカでは、ライティングのスタイルが教育との関係、特に評価との関係で成立してきたことが明快に示された。フランスの取り組みとしては、貧困地域にあり中退率が極めて高い大学での、初年次教育における日誌教育の事例の報告を中心に行われた。フランスでは書くことの教育を通じた能力形成が話すことにも影響を与えることが明確に意識されており、大学の中だけで通じる能力の形成とは考えられていないことが示された。指定討論では、両国ともにパーソナル・ライティングが重要となっているという共通点が示されると同時に、学問の世界におけるポストモダンが浸透する中で、アカデミック・ライティングの教育はいかに研究・実践されていくべきかについて議論が行われた。

登壇者は以下の通り。話題提供者：森本和寿（大阪教育大学総合教育系特任講師）、田川千尋（滋賀大学教育学部特任准教授）、指定討論：渡邊雅子（名古屋大学教育発達科学研究科教授）、司会：川地亜弥子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）、石田智敬（神戸大学大学院人間発達環境学研究科・特命助教、日本学術振興会特別研究員 PD）。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

(1) 日本とスペインにおける教師教育関連史料の保存とその活用に関する研究：神戸大学とリエイダ大学における 1930 年代史料を中心に

1. 研究の概要

神戸大学附属小学校は、大正新教育のメッカの一つである兵庫県明石女子師範学校附属小学校を源流に有し、日本における進歩主義的な教育を代表する学校の一つとして注目されてきた。とりわけ大正期から戦後初期の史料について、同校敷地内にある神戸大学及川記念館が中心となって保管・整理を進めている。申請者は、前校長、現附属学校部長としてこれら史料のよりよい保存・活用について模索してきた。スペイン・カタルーニャのリエイダ大学では、1931-36 年の教員養成の記録を保管し、その活用を模索している。以上を背景として、教員養成機関史料のよりよい保存と活用について、1930 年代を中心に、神戸大学・リエイダ大学の共同研究を行う。なお、原史料保存の観点から、デジタル化し、デジタルデータを主に使用する。

2. 研究組織

①代表者：渡邊隆信（人間発達専攻）

②共同研究者：川地亜弥子（人間発達専攻）

: Simon-Martin, Meritxell (University of Lleida, Spain)

3. 研究実績の概要

①及川記念館の資料保存

現物資料の保存を進めた。劣化の速度を遅くするため、外部業者に委託し、脱酸性化処理を行っ

た。

②及川記念館の重要資料のデジタル化

重要な資料に関して、デジタル加工を進めた。神戸大学の図書館、文書保存の専門家に機材などの助言をもらい、デジタルカメラで撮影、保存した。撮影・保存は、及川記念館の資料に詳しい学芸員が進めた。

③及川記念館の資料（現物及びデジタル）を活用した教師教育研究

リエイダ大学で行われている方法を及川記念館でも用いることができるか、パイロットスタディを行った。教員志望の学生に調査協力を依頼し、戦後初期の教育実習の記録を現物とデジタル版とで読んでもらい、インタビュー調査を行った。

④リエイダ大学における 1930 年代の教師教育研究と保管資料の活用に関する研究

共同研究者の Meritxell Simon-Martin 博士を中心に、2 度のセミナーを開催した。主に教師教育におけるライフ・ライティングについて議論し、大学院生も交えて今後の研究の可能性について深めた。

4. 研究成果発表

共同研究の成果を国際共著論文としてまとめ、川地亜弥子・Meritxell Simon-Martin「スペイン・カタルーニャ地方における書くことの教育と教師教育」（松下佳代・川地亜弥子・森本和寿・石田智敬編著『ライティング教育の可能性—アカデミックとパーソナルを架橋する—』勁草書房、2025 年所収）として公刊した。

5. 研究費の申請

研究成果をもとに、科学研究費補助金（基盤研究(C)）に申請し、採択された。研究課題名は「「明石附小」における新教育の思想と実践の継承に関する研究」（研究期間 2025－2027 年度）である。

（担当 渡邊隆信）

(2) 繊維・糸の研究手法を応用した昆虫外骨格の物理特性評価法の開発と柔軟な外骨格の生物学的意義の解明

1. 研究目的の概要

キチンとタンパク質によって構成される昆虫の外骨格はしばしば柔軟性をもち、シンプルな構造で高度な機能を果たすことを可能にしていると考えられる。しかし、外骨格の物性を測定することは難しいため、外骨格の物性が昆虫の多様化にどのように寄与しているのかについての研究は限られる。そこで本研究は、繊維や糸の物性測定法を応用してこの問題を解決し、種の多様化に関わる交尾器の柔軟性と機能を明らかにすることを目的とした。

2. 研究組織

①代表者：高見泰興（人間環境学専攻）進化生態学

②共同研究者：井上真理（人間環境学専攻）衣環境学
：青沼仁志（理学研究科）行動生理学

3. 研究実績の概要

国内で著しい多様化をとげているオオオサムシ類の雄交尾器を研究対象として、異種間交尾が生じやすい地域で、壊れにくい柔軟な交尾器が進化していることを定量的に明らかにした。また、柔軟な交尾器の発生において、変形を許容する過程の存在を見出した。さらに、大型化した交尾器部位の操作には柔軟な射精管が役立っており、そこには弾性タンパク質であるレジリンが豊富に含まれることを明らかにした。

4. 研究発表

第 72 回日本生態学会大会にて、2 件のポスター発表を行った。今後は、これらの結果を複数の査読付き国際誌に発表する予定である。

5. 研究費の申請

研究成果をもとに、学内の研究資金（4 月応募予定）と外部研究資金（科研費等）に応募する予定である。

（担当 高見泰興）

(3) 神戸のアジサイ遺伝資源の解析と日欧育種への応用

1. 研究目的の概要

植物リピートーム解析と細胞遺伝学的解析を組み合わせることにより、これまで未整備であった日本および欧州の園芸植物アジサイの野生種などの遺伝資源を評価し、カタログ化する。これにより、日本とヨーロッパにおける品種改良の基礎情報を提供し、今後の育種研究の発展に貢献することを目指す。

2. 研究組織

①研究代表者：近江戸伸子

②共同研究者：Tony Heitkam アーヘン工科大学, Nicola Schmidt ドレスデン工科大学,
Stefan Wanke ゲーテ大学・ゼンケンベルク自然史博物館（ドイツ）

3. 研究実績の概要

本研究の予算を活用し、申請者は 12 月にドイツの 3 大学を訪問し、リピートームデータ解析、論文執筆および今後の共同研究方針について協議を行った。本研究に関連する論文では、後期課程学生が筆頭著者、申請者が責任著者、共著者は国際共同研究者として執筆を進めることができた。

4. 研究成果発表

①国際誌論文の出版（OA）

Ishiguro S⁺, Taniguchi S⁺, Schmidt N, Jost M, Wanke S, Heitkam T, Ohmido N* (2025). Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution

and domestication. Ann. Bot., mcae184. <https://doi.org/10.1093/aob/mcae184>

(*本専攻博士後期課程 DC1 ならびに卒業生, *責任著者)

②実験生物学研究所 (チェコ), シレシア大学 (ポーランド) での招待講演 3 件

5. 研究費の申請

申請研究種目: JSPS「二国間交流事業共同研究」3 件 (2 件は不採択)

申請研究種目: 萌芽研究「リピートームを基盤とした木本性アジサイの高精度系統分類のためのマーカー開発」(不採択)

科研費 B「次世代型高度顕微鏡による植物染色体ナノ構造と機能解明」(採択)

(担当 近江戸伸子)

(4) 発達障害を有する子どもの身体活動と認知機能の関係およびその脳機構

1. 研究目的の概要

神経発達症 (注意欠如・多動症, 自閉スペクトラム症, コミュニケーション障害, 学習障害, 運動障害) を持つ子どもの身体活動およびそのマーカー (体力, 体格など) と認知機能の関係を調べることを目的としている。

2. 研究組織

①研究代表者: 石原暢 (人間発達専攻)

②共同研究者: Sebastian Ludyga (University of Basel), Nóra Bunford (HUN-REN Research Centre for Natural Sciences)

3. 研究実績の概要

神経発達症全体を対象とした分析において, 身体活動量, 体力 (筋力, 持久力, 手指巧緻性など) は認知機能 (言語機能, 実行機能, 社会機能, 学力など) および大脳皮質体積と正の相関を示した。注意欠如・多動症, 自閉スペクトラム症, コミュニケーション障害, 学習障害, 運動障害を個別に検討した場合においても同様の結果が得られ, 神経発達症の種類によって上記の関連に大きな違いはないことが示された。このことから, 運動は診断名を問わず適用可能な横断的介入手段として有効である可能性が示唆された。

4. 研究成果発表

①石原暢, Nóra Bunford, Sebastian Ludyga. (2024). 発達障害児の身体活動, 体力・体格, 社会環境要因と大脳皮質構造および認知機能の関係. 第 32 回日本運動生理学会大会.

②石原暢. (2025). 運動と脳の解剖学的発達について考える. 日本発達発達学会第 23 回大会. シンポジウム「運動と脳の発達について考える」.

5. 研究費の申請

申請研究種目： 学術変革領域研究 (A) (計画班)「認知神経発達を修飾するライフスタイルの脳・分子生物機構」(不採択)

今年度の申請に向けて、領域代表者と調整を進めている。本成果を発展させる課題を JST 創発的研究支援事業に応募し、現在審査中である。

(担当 石原暢)

7.4. 高度教員養成プログラム

2013 年以降、開発研究部門において高度教員養成プログラムを企画・運営している。本プログラムは、グローバル化する知識基盤社会において、教育実践のアクション・リサーチを含む理論を踏まえた実践的研究に主導的に携わり、かつ、国際的にも通用する高度な教育能力および研究能力を備えた教員養成を行うことを目的とし、本学附属学校部と連携しながら実施した。

参加者は人間発達環境学研究科博士課程前期課程の大学院生であり、教員専修免許取得予定の受講希望者 3 名が、国内外を代表する研究者による教員を目指す大学院生等を対象とした高度教員セミナー（詳細 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/775>）を受講した。なお、第 3 回は神戸大学学術講演会として位置づけ、附属幼稚園において開催し、学内からの参加者 10 名に加えて、附属幼稚園の保護者等 140 名が参加し、盛会となった。

最終報告会において受講生は、自らのアクション・リサーチの研究成果を報告・共有し、本学研究科と附属学校部による修了証を得た。

高度教員養成プログラムセミナーの内容

第 1 回

テーマ：高度教員養成プログラムへ参加するために

講師：本学教員、本学附属学校部担当者

日時：2024 年 5 月 17 日（金）17:00～18:00

会場：F255（対面開催）

第 2 回

テーマ：創造性教育の理論的・実践的研究について

講師：清田哲男氏（岡山大学・教授）

日時：2024 年 6 月 18 日（金）17:00～18:30

会場：F255（対面開催）

第 3 回

テーマ：これからの子ども子育て

講師：下村岳人大豆生田啓友氏（玉川大学・教授）

日時：2024 年 6 月 22 日（土）10:30～11:30

会場：神戸大学附属幼稚園

第4回

テーマ：授業で話し合うことの価値についての検討 -授業内での認知の変容課程の分析を通して-

講師：下村岳人氏（島根大学・講師）

日時：2024年10月18日（金）17:00～18:30

会場：F255（対面開催）

第5回

テーマ：「自分で自分を振り返ること」と教育の結び目を解きほぐす

講師：安喰勇平氏（神戸市外国語大学・准教授）

日時：2024年12月20日（金）17:00～18:30

会場：F255（対面開催）

第6回

テーマ：リサーチ報告会

講師：國土将平（中京大学・教授）

日時：2024年1月19日（金）17:00～18:30

会場：F255（対面開催）

（教育連携推進室長 北野幸子）

7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、人間発達環境学研究科の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、附属中等教育学校生徒が参加したプログラムとして、「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム（ROOTプログラム）」といった人間発達環境学研究科が実施するグローバルな課題に関するプログラム等が挙げられる。さらに、附属中等教育学校のインターンシップ学習「KU トライやる」に対して、人間発達環境学研究科の教員が協力し、附属中等教育学校生徒を受け入れた。

また、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む「課題研究」に、人間発達環境学研究科のSS推進アドバイザーなど複数の教員が、研究の進め方や分析の仕方についての助言などを行ったり、プログラムを実施した。また、優秀者発表会においても講評を行った。附属中等教育学校で開催された「授業研究会」及び「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）報告会」において、人間発達環境学研究科の教員が多数指導助言を行った。また、このことは、日本生態学会の第71回大会における高校生ポスター発表会において、「日本の旧翅目の翅の撥水性とナノ突起構造に関する研究」をテーマにポスター発表し、最優秀賞（全国1位）を受賞したことや、日本学生科学賞兵庫県コンクールで兵庫県教育長賞を受賞したことなどの成果に繋がるきっかけとなった。

（神戸大学附属中等教育学校 SS研究アドバイザー 林創）

7.6. 研究推進

7.6.1. 研究倫理審査委員会

本年度は 130 件の申請があり、84 件が承認、23 件が条件付承認、23 件が変更の勧告であった。なお、昨年度の申請件数は 139 件であり、昨年度と同程度の申請件数であった。

また、今年度は、より適切・迅速に審査を行うために、研究倫理審査申請書の改訂作業を行った。

(研究倫理審査委員会委員長 増本康平)

7.6.2. 紀要編集委員会

昨年度までに引き続き、本年度においても、委員会会議はオンライン会議とメール回議であった。

「神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要」第18巻第1号と第2号を編集・発行した。第1号(2024年9月30日発行)は、研究論文7編、研究報告4編であった。第2号(2025年3月31日発行)は、研究論文4編、研究報告4編であった。

(研究紀要編集委員会委員長 長ヶ原誠)

7.7. 各専攻の研究

7.7.1. 人間発達専攻

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：林 創

共同研究者：Robin Banerjee (University of Sussex), Michaela Gummerum (University of Warwick)

研究課題：社会性の発達を左右する認知バイアスに関する心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C)(代表者：林 創)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、社会性の発達について心理学的視点から検討することを目的とする。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：Schwerdtfeger Andreas (Graz university), Roswith Roth (Graz university),

Rominger Christian (Graz university), Yamane Takahiro (Kobe university)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))(代表者：加藤佳子)

研究概要：心の支援を行う支援関係者の心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標を開発することを目的とする。

本専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：Rosemary Gibson (Massey University)

研究課題：国際比較に基づく有職介護者のライフスタイルと睡眠の分析：女性の仕事と介護両立への具体的支援策の提案

研究資金：国際共同研究者養成プログラム

研究概要：日本とニュージーランドの有職介護者におけるライフスタイルおよび睡眠の性差に関連す

る要因を明らかにする。

本専攻研究者：安達 友紀

共同研究者：Kiyoka Enomoto (Osaka University), Anupa Pathak (University of Sydney), Lisa C. Murphy (Independent), Mark P. Jensen (University of Washington), Melissa Day (University of Queensland), and Saurab Sharma (University of Sydney)

研究課題：The Behavioral Inhibition System-Behavioral Approach/Activation System model of chronic pain: A scoping review

研究資金：該当なし

研究概要：慢性痛に対する行動抑制・行動接近モデルの適用についてスコーピングレビューを行う。

本専攻研究者：安達 友紀

共同研究者：Kiyoka Enomoto (Doshisya University) and Ephrem Fernandez (The University of Texas at San Antonio)

研究課題：The Japanese Validation Study of Anger Parameter Scale

研究資金：該当なし

研究概要：感情の継時性を考慮した、怒りの測定尺度である Anger Parameter Scale 日本語版を開発する。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：林 創

研究課題：社会性の発達を左右する認知バイアスに関する心理学的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(C) (代表者：林 創)

研究概要：子どもと大人を対象に、特に認知バイアスについて着目し、こうしたバイアスが社会性の発達において重要であることを実証的に明らかにする。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：村山留美子（本専攻）、大島律子（静岡大学）、山口悦司（本専攻）、川崎弘作（岡山大学）、長沼祥太郎（九州大学）

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)(代表：坂本美紀)

研究概要：教育心理学と学習科学、リスク学、科学教育などの学際的な研究として、リスクリテラシー教育プログラムの実証研究に取り組んでいる。

本専攻研究者：坂本美紀

共同研究者：村山留美子（本専攻）、山口悦司（本専攻）

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究(萌芽)(代表：坂本美紀)

研究概要：教育心理学とリスク学などの学際的な研究として、指導法と評価法の開発に取り組んでい

る。

本専攻研究者：山本健太

研究課題：成人自閉症者の対人感情調整とメンタルヘルスの関連性の検討

研究資金：前川財団家庭教育研究助成

研究概要：成人 ASD 者が他者を慰める/慰めてあげるなどの他者との関係性のなかでおこなう対人感情調整を日常生活でどの程度おこなっているのか明らかにする。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：内山愉太（本専攻）、喜屋武亨（琉球大学）、高倉実（名桜大学）、佐藤真行（本専攻）、丑丸敦史（本専攻）、原田和弘（本専攻）、香坂玲（東京大学）

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 B（代表：内山愉太）

研究概要：生態系サービス受給の格差と効果を解析し、最終的に生態系管理と健康の統合的改善手法を提言を目指す。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：稲垣成哲（立教大学）、増本康平（本専攻）、楠房子（多摩美術大学）、小川義和（立正大学）、寺田努（神戸大学工学研究科）、江草遼平（千葉商科大学）、石田弘明（兵庫県立大学）、岩崎誠司（独立行政法人国立科学博物館）、鳥居深雪（神戸大学名誉教授）

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 A（代表：稲垣成哲）

研究概要：ニューロダイバーシティ（ND）の立場から科学系博物館における発達障害（ASD, LD, ADHD 等）のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発、さらには具体例としての実践モデルを提案する。

本専攻研究者：山本健太

共同研究者：津田英二（本専攻）、稲原美苗（本専攻）、赤木和重（本専攻）、川地亜弥子（本専攻）、殿垣亮子（神戸大学附属特別支援学校）、橋田慈子（本専攻、特別研究員 PD）

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 A（代表：津田英二）

研究概要：さまざまな学びの機会や場面から排除されてきた人たちも含めて、すべての人やコミュニティが学びを通して生き生きとした生活を実現し、同時に共生社会を構築していくというビジョンの実現をめざす中核的な試みとして、障害者の生涯学習をテーマとした実践的な研究を行う。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：黒川通典（摂南大学）、黒川浩美（大阪青山大学）、高橋路子（神戸大学附属病院）、山本育子（神戸大学附属病院）、三ヶ尻礼子（神戸大学附属病院）

研究課題：行動科学を活用する食習慣改善支援ツールの開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：加藤佳子）

研究概要：食習慣改善を支援する専門職支援者を対象に、行動科学に基づいた食習慣改善支援に必要なスキルを明確化する。そしてその熟達度に応じたスキル獲得のためのツールを開発する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：高橋路子（神戸大学附属病院）、山本育子（神戸大学附属病院）、三ヶ尻礼子（神戸大学附属病院）

研究課題：生物心理社会モデルに基づく相談・支援型食生活改善プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表者：加藤佳子）

研究概要：食生活を改善するためには、要支援者のストレスや心情など心理社会的要因をくみ取った支援を行う必要がある。そこで病態栄養にもとづく食生活指導に、心理社会的要因に配慮した相談・支援型の食生活改善支援を融合することが期待される。したがって本研究では相談・支援型食生活改善プログラム評価指標および専門職支援者研修用プログラム評価指標を開発することとした。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：丸山祐丞（株式会社 テアラクソン）

研究課題：労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究

研究資金：株式会社テアラクソンから出資

研究概要：大型商業施設の労働者を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：ポーター倫子、野上慶子、鈴木田英里

研究課題：自閉スペクトラム症児の親におけるウェルビーイングの維持・向上の影響因の縦断的解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（代表：山根隆宏）

研究概要：本研究は自閉スペクトラム症児をもつ親のコホートを構築し、ライフコースアプローチを用いて、縦断調査からそれらの親がウェルビーイングの実現に至る中長期的な多様なパターンとそれらの変化に関わる要因の解明を目的とする。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：西田健志（神戸大学大学院国際文化学研究科）、寺田努（神戸大学大学院工学研究科）、村中泰子（神戸大学インクルーシブキャンパス&ヘルスケアセンター）

研究課題：発達障害のある児童を周囲と仲立ちするインクルーシブ教育支援システムのデザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（代表：西田健志）

研究概要：本研究は、周囲にいる大人と子どもを支援することで交流機会を増やす方針に立ち、コミュニケーション支援システムを設計・開発する。本研究の目的は、周囲にいる人を支援するシステムによって発達障害のある子どもを間接的に支援することができるか実証的に明らかにすることであ

る。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：谷口あや（三重大学）、野上慶子（奈良女子大学）

研究課題：就学後児童の問題行動と養育スタイルの関連：父母ペアデータを用いた検討

研究資金：公益財団法人前川財団 2024 年度家庭教育研究及び実践活動助成（代表：谷口あや）

研究概要：就学後の児童の問題行動と父母の養育スタイルの影響関係について、縦断的に父母ペアデータを収集し、その解明を目指す。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：原田新（岡山大学）、江上弘晃（神戸大学附属特別支援学校）

研究課題：成人期知的障害者家族におけるウェルビーイングへの「働くこと」・余暇の態度の影響

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（代表者：山根隆宏）

研究概要：本研究は知的障害者やその重要な他者（親，施設職員）を対象に，賃金労働に限らず広い意味で社会の一員として活動する「働くこと」及び余暇活動に対する態度に焦点を当て，混合研究方法など多様なアプローチからウェルビーイングもたらす影響を解明する。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：ポーター倫子（北陸学院大学）

研究課題：二重 ABCX モデルを用いた自閉スペクトラム症児の母親のストレス適応の解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：ポーター倫子）

研究概要：二重 ABCX モデルを援用し，自閉スペクトラム症児をもつ母親のストレスと適応のメカニズムを日米比較から解明を行う。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：辻井正次（中京大学）、内山登紀夫（福島学院大学）、日詰正文（独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）、小林真理子（山梨英和大学）、大塚晃（上智大学）、岡田俊（国立精神・神経医療研究センター）、中村和彦（弘前大学）、本田秀夫（信州大学）、上野修一（愛媛大学）、伊藤大幸（お茶の水女子大学）、浜田恵（中京大学）、高柳伸哉（愛知東邦大学）、明翫光宜（中京大学）、村山恭朗（金沢大学）

研究課題：療育手帳の交付判定及び知的障害に関する専門的な支援等に資する知的能力・適応行動の評価手法の開発のための研究

研究資金：厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）（代表：辻井正次）

研究概要：療育手帳の交付判定に必要な判定基準の統一化をおこない，交付判定に利用できる簡便な知的能力及び適応行動を評価できる指標を開発する。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：通常学級から特別支援学級・学校への転籍理由とプロセスの解明：小学校時期を対象に

共同研究者：下木なつみ（神戸大学附属特別支援学校）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：赤木和重）

研究概要： 小学校時期において，通常学級から特別支援学級・学校に転籍する理由やプロセスを，保護者・教員への質問紙調査および聞き取り調査を通して明らかにすることである。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：なぜ特別支援学級・学校在籍児は増加するのか：学力テストの影響に注目して（代表：赤木和重）

共同研究者：山下晃一，生田邦紘，松田華織（神戸大学）

研究資金：公益財団法人前川財団 家庭・地域教育助成 2023 年度（代表：赤木和重）

研究概要： 特別支援学級・特別支援学校の在籍率について，学力テストが影響していることを，学校基本調査などの統計資料を用いて明らかにする。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究

共同研究者：塩崎美穂（東洋英和女学院大学），加藤繁美（東京家政大学），川田学（北海道大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表：塩崎美穂）

研究概要：日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムについて比較検討を行う。

本専攻研究者：赤木和重

研究課題：対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究

共同研究者：山田康彦（三重大学），森脇建彦（武庫川女子大学），根津知佳子（日本女子大学）ほか

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：山田康彦）

研究概要： 教員養成課程の大学の授業カリキュラムについて，対話的事例シナリオを用いた実証的研究を通して明らかにする。

本専攻研究者：相澤直樹

研究課題：幼児期の表象する心のめばえを探るーインクブロット法を用いて

共同研究者：田中孝尚（神戸大学神戸大学附属学校部），木下孝司（神戸大学），渡邊隆信（神戸大学），松本恵（大阪大学）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 C（代表：相澤直樹）

研究概要： インクブロット法を用いて幼児期の表象発達の様相を解明する。

専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：佐藤幸治（本専攻），福田博也（環境学専攻），近藤徳彦（本専攻）

研究課題：心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果検証

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（C）（代表：古谷真樹）

研究概要：不眠と対応する代表的な生理指標とその基準を明確にし，不眠のスクリーニングツールの

開発および効果検証を行う。

専攻研究者：古谷真樹

共同研究者：林光緒（広島大学）、田中秀樹（広島国際大学）、笹澤吉明（琉球大学）、樋口重和（九州大学）、山本隆一郎（江戸川大学）、田村典久（広島大学）、綾部直子（秋田大学）、高田律美（人間環境大学）

研究課題：睡眠改善の促進妨害要因の解析と集団特性に応じた新たな睡眠教育プログラムの構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）（代表：岡靖哲）

研究概要：国内多地域の調査データを比較・統合できる共通フォーマットに基づいてデータベースを構築し、睡眠改善を促進あるいは妨害する環境要因の解析から、集団特性に応じた睡眠改善プログラムのフォーミュラを構成し実証的に検討する。

本専攻研究者：安達友紀

研究課題：慢性神経障害性疼痛に対する痛み焦点化催眠と催眠認知療法の効果検証

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究（代表：安達友紀）

研究概要：慢性神経障害性疼痛患者への催眠療法と催眠認知療法の効果を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：水野泰行（関西医科大学）、吉野敦雄（広島大学）、中村亨（大阪大学）、藤野陽生（大阪大学）、横山仁史（新潟大学）、北川裕利（滋賀医科大学）、中西美保（滋賀医科大学）

研究課題：行動抑制・行動賦活モデルに基づく慢性痛への催眠の作用機序の多面的検証による解明

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（代表：安達友紀）

研究概要：慢性痛患者対象の遠隔・集団式催眠プログラムを実施し、質問紙・Ecological Momentary Assessment・インタビューにより、その有効性と作用機序を検証する

本専攻研究者：安達友紀

共同研究者：細越寛樹（関西大学）、岩佐和典（大阪府立大学）、福森崇貴（徳島大学）、高岸百合子（国立精神・神経医療研究センター）、大江悠樹（杏林大学）、平子雪乃（杏林大学）、吉野敦雄（広島大学）、横山仁史（新潟大学）、柴田正彦（奈良学園大学）

研究課題：慢性痛に対する認知行動療法の無作為化比較試験およびその普及と集団版の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（代表：細越寛樹）

研究概要：本研究では対面・個人形式の慢性痛に対する認知行動療法（CBT-CP）の有効性を臨床試験で検証する。加えて、CBT-CP がどのように有効なのか、わが国ではどれだけ普及しているかも踏まえながら、医療現場で実際に使用可能な資材を開発する。

本専攻研究者：河崎佳子（研究統括責任者）

共同研究者：酒井邦嘉（東京大学）、武居渡（金沢大学）、特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

研究課題：手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

研究資金：日本財団助成事業

研究概況：脳科学，心理発達，言語獲得（日本手話・日本語），学習能力（理解・思考）の4分野から，手話言語を獲得・習得して成長する聴覚障害児の真の言語力を適正に評価することを目指す。

(3) 論文

国際共著論文

Web of Science 収録誌掲載論文 * (10%論文にはマークを付す)

Hayashi, H., Matsumoto, A., & Akagawa, M. (2025). Children's and adults' evaluations of praise with incongruence between what the praiser is praising and what led the recipient to succeed. *European Journal of Developmental Psychology*, 22, 57-79.

Porter, N., Loveland, K. A., Honda, H., & Yamane, T. (2025). What is a Good Mother of Children with Autism?: A Cross-Cultural Comparison Between the U.S. and Japan. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 55, 739-751.

Kato, T & Ito, T. (2024). Exploring play experience with Japanese science, technology, engineering, and mathematics undergraduates in interactive art making: A qualitative study. *The Arts in Psychotherapy*, 90, 1-10

Yokoyama, S., Adachi, T. & Yoshino, A. (2024) Unraveling pain experience and catastrophizing after cognitive behavioral therapy. *Scientific Reports* 14, 17176.

<https://doi.org/10.1038/s41598-024-68334-6>

査読付き論文

Sakamoto, M. & Yamaguchi, E. (2024). Undergraduate students' decision-making and Web searches on the socio-scientific issue of energy. Kaya, G., Sardag, M., & Gul, K. (Eds.) (2024). *Proceedings Book Series-III of the ESERA 2023 Conference. Connecting Science Education with Cultural Heritage*, 8 (co-eds. Evagorou, M. & Belova, N.), (pp. 196-208). Cappadocia, Türkiye. Nobel Bilimsel Eserler.

Sakamoto, M., Yamaguchi, E., Yamamoto, T., Matano, M. & Murayama, R. (in press). An intervention study on primary students' socioscientific decision-making regarding the risks and benefits of gene drives. *Proceedings of XXI IOSTE Symposium*.

加藤佳子・小島亜未 (2025). 労働者のメタボリックシンドロームおよび食習慣・運動習慣の状況と生活習慣改善に対する行動変容ステージ —S 県行政職員を対象とした特定健康診査の標準的な質問票に注目して—. *保健師ジャーナル*, 81, 50-57.

加藤佳子・小島亜未 (印刷中). 労働者の睡眠休養感と首尾一貫感覚 (Sense of coherence: SOC), ソーシャル・サポートおよび生きがい意識との関連 福井県立大学論集

野上慶子・山根隆宏（印刷中）発達障害児の親のピアサポートによる家族認知行動療法の実践．神戸大学発達・臨床心理学研究，24，1-8

Nogami, K. & Yamane, T. (2025). Online parent-mediated family cognitive-behavioral therapy for high levels of anxiety symptoms in children with developmental disorders: a pilot study. *Minerva Psychiatry*, 65(4), 348-357.

村山恭朗・浜田恵・明翫光宜・高柳伸哉・山根隆宏・小林真理子・内山登紀夫・辻井正次（印刷中）．療育手帳の交付児者を対象としたウェクスラー式知能検査と田中ビネー知能検査／新版 K 式発達検査の関連．児童青年精神医学とその近接領域

谷口あや・山根隆宏・野上慶子・安達友紀・伊藤俊樹・河崎佳子・吉田圭吾・相澤直樹・清原舞子（2024）．新型コロナウイルス感染症流行第一波から第二波期の遠隔心理支援実施が心理職の心理的ストレスおよび精神的健康に及ぼした影響：日本国内における検討．神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，18，43-49.

明翫光宜・伊藤大幸・白石雅一・望月直人・小倉正義・高田晃治・松田綾・鈴木康之・鈴木勝昭・高柳伸哉・村山恭朗・山根隆宏・水間宗幸・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢明美・曾我部哲也・辻井正次（2024）．救護施設入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査．臨床精神医学，53(8)，1031-1042.

山根隆宏（2024）．自閉スペクトラム症児の親における援助要請促進要因の縦断的検討 心理学研究，95，88-97.

生田邦紘・赤木和重（2025）．軽度知的障害のある生徒における障害受容の変容について教師はどのように捉えているか．発達心理学研究，36(1)，1-15.

加藤哲子・伊藤俊樹（2025）理工系学生のアイデンティティと感情—非理工系学生との比較による探索的検討—神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，18(2)（印刷中）

相澤直樹（2025）．自己愛傾向に対する敵意帰属と怒りの効果—有意領域アプローチによる調整効果の検討— 神戸大学発達・臨床心理学研究，24（印刷中）

査読なし論文

赤木和重（2024）オルタナティブスクールの「形」ではなく「プロセス」を学ぶ 教育

赤木和重（2024）イタリアにおける学校園訪問で感じた「かみあわなさ」から考えるインクルーシブ教育 子ども発達臨床研究，21 59-66.

相澤直樹・田中孝尚（2025）. インクブロット法を用いた幼児のシンボル表象発達に関する予備的研究 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 18(2)（印刷中）

（4）著書

共編著

赤木和重（2025）PBL 事例シナリオ教育で対人援助専門職を育てる：学習者が制作する事例シナリオがひらく新たな対話の可能性 三恵社

分担執筆

山根隆宏（2025）発達の基本理論 加藤寿宏・松嶋佳苗（編）人間発達学第3版, 医学書院, pp. 20-38.

赤木和重（2025）特別支援学級の方法 教育方法学辞典 学文社

赤木和重（2025）発達の困難 教育方法学辞典 学文社

呉文慧・赤木和重（印刷中）竹沢清『子どもの真実に出会うとき』全障研出版部 について 田中耕治（監修）「シリーズ学級経営」 ミネルヴァ書房

古谷真樹（2024）家庭における（乳幼児向け）睡眠衛生教育 日本睡眠学会（編） 睡眠学の百科事典 丸善出版

（5）シンポジウムの開催など

林 創, 山本健太, 石原暢 （附属学校部および教育連携推進室共催）学術 Weeks シンポジウム（2024 年 11 月 28 日開催）「ワーキングメモリの基礎と児童発達支援の実際 Warabeuta Approach わらべうたアプローチからみえてきたこと」

古谷真樹, Rosemary Gibson. Massey University との共同開催セミナー（2025 年 2 月 18 日）Balancing Sleep with Caregiving and Work: Reflections from Japan and New Zealand

◆総説・書評など

赤木和重（2025）書評：子どもの声からはじまる保育アセスメント—大人の「ものさし」を疑う— ことの科学, 240, 136.

赤木和重（2024）こだわりの世界に入ってみる みんなのねがい, 709,

赤木和重（2024）「透明人間, 入りまーす」 はあとブリッジ, 455, 1.

赤木和重（2024）正論にためらいを（書評 頭木弘樹「口の立つやつが勝つってことでいいのか」 青土社） 教職研修, 625, 114.

赤木和重 (2024) 書評：中原一步「小山田圭吾 炎上の「嘘」」文藝春秋 はあとブリッジ, 453, 7.

(7) 心理系講座の研究の総括と課題

教育，発達，健康，発達支援などにおける心理に関する課題の解決に向けた研究が，活発に行われた。これらの研究は人々の QOL (Quality of Life) の向上につながる貴重な研究である。そのため本講座で得られてきた研究成果は，研究としてとどめ置かれることなく，きれめなく，社会へとつながっている。2024 年度も産官学共同プロジェクトや地域連携プロジェクトなどの形として，心理系の研究が展開していることが報告された。地方公共団体や民間からも多くのファンドの提供があり，心理系への社会からの期待の高さがうかがわれる。また，複数の国際共同研究の取り組みが報告された点も評価される。

●表現系

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Fumiya Iida (ケンブリッジ大学)，中嶋浩平 (東京大学)，永野光 (京都工芸繊維大学)

研究課題：「探索器官としての手」の創発：能動的探索が生み出す情報の解明

研究資金：国際共同研究加速基金 国際共同研究(B) (代表者：野中哲士)

研究概要：多様な環境に際して，知覚すべき対象や形成すべき環境との関係に応じて，課題特定的なかたちで「探索する手」の動作パターンが柔軟かつリアルタイムで創発する原理の理解に向けた共同研究をケンブリッジ大学工学部 Bio-Inspired Robotics 研究室と行う。

本専攻研究者：野中哲士 (研究代表者)

共同研究者：Thomas A. Stoffregen (ミネソタ大学)，Balagopal Raveendranath (テキサス工科大学)

研究課題：適応的スキル発達とアフォーダンス

研究資金：神戸大学国際共同研究強化事業・C 型

研究概要：道具使用等の複雑な環境とのインタラクションを伴う身体—環境系の知覚制御において，多重時間スケールにおける身体の受動ダイナミクス情報を検討する。

本専攻研究者：清水大地 (研究分担者)

共同研究者：工藤和俊 (東京大学教授)，宮田紘平 (東京大学助教)，鎌田紗弓 (東京文化財研究所研究員)，高岡明 (桜美林大学教授)，Clayton Martin (Durham University, UK, Professor)

研究課題：日本伝統音楽合奏時に演者間に生じる巧みな間の検討

研究資金：三島海雲記念財団 2024 年度共同研究奨励金

研究概要：日本の伝統音楽である長唄等の合奏場面において，演者間にどのような協調・非協調の間の関係が生じているのかを，呼吸や運動の観点から量的・質的に検討する研究を進めている。2023 年度では，実際に演奏者達を集めて合奏を行い，その際の運動・呼吸データを測定する予備実験を実施した。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol J. Oja (Harvard University)

研究課題：Revisiting the Role of U.S. Music during the Postwar Occupation of Japan:
A Bicultural Perspective

研究資金：Reischauer Institut of Japanese Studies at Harvard University (代表者 Carol J. Oja),
JSPS 科学研究費 基盤研究C(代表者 大田美佐子)。

研究概要：音楽・音楽劇をめぐる音楽文化史のトピックをトランスナショナルな視点、対話のプロセスを重視して共同で研究する。2025 年 1 月 24 日のシンポジウム「Music Theatre Studies and Transnational History」を協力して開催する。

本専攻研究者：余田有希子

共同研究者：Craig Stuart Sapp(スタンフォード大学)

研究課題：Photoplay Music analysis using symbolic information

研究資金：個人研究費

研究概要：音楽分析ソフトウェア Humdrum Toolkit の開発・研究を進めている Craig Stuart Sapp 氏とともに、サイレント映画期の伴奏譜集の収録楽曲を対象としたプログラム開発および関連ツールの日本語バージョンの作成を進めている。2024 年度は使用音域、装飾音の分析プログラムの検討を行った。

研究代表者：河瀬諭 (神戸学院大学)

共同研究者：岡野真裕(本専攻教員), Toni Amadeus Bechtold, Olivier Senn(共に Lucerne University, Switzerland)

研究課題：Experience of Groove Questionnaire: Japanese Translation and Validation

研究資金：個人研究費

研究概要：「音楽を聴いたとき身体を動かしたくなるような快い衝動」として定義される「グルーヴ」をどの程度感じたかについて尋ねる「グルーヴ体験質問紙」の日本語訳と標準化を行った。論文は2024 年 10 月に Music Perception 誌に受理された。

(2) 国内共同研究等

本専攻研究者：野中哲士 (研究代表者)

共同研究者：中嶋浩平 (東京大学), 永野光 (京都工芸繊維大学), 木伏紅緒, 清水大地 (神戸大学)

研究課題：身体の摂動ダイナミクスを情報資源として用いる身体一環境系の知覚行為制御

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓) (代表者：野中哲士)

研究概要：本研究では、環境と相互作用する豊かな身体のダイナミクスが、知覚行為制御にいかなる「情報」をもたらし得るのかという新たな視点から、「情報の媒質」としての身体とそのダイナミクスを捉え直し、身体一環境系制御理論の刷新を目指す。

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：西尾千尋（甲南大学）、山崎寛恵（東京学芸大学）

研究課題：乳児の「探索する手」を起点とする発達カスケードの実証的理解

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 B（代表者：野中哲士）

研究概要：乳児が環境を「探索する手」の自発的動作が起点となり、発達の諸相に影響が及ぶ「発達カスケード」現象の統合的な理解を目指す。

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：青沼仁志（神戸大学理学研究科）、小谷野由紀（神戸大学人間発達環境学研究科）

研究課題：適応的な行動の発現をめぐる学際共創研究（代表者：野中哲士）

研究資金：神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画・創出委員会異分野共創ユニット

研究概要：環境と結びついて合目的的な挙動を生成する行動の発現をめぐって、動物生理行動学、認知科学、非線形物理学という異なる分野の研究者が協働し、行動の時間スケールで環境に適応する原理をめぐる新たな学術パラダイムの創成を目指す。

本専攻研究者：野中哲士（研究代表者）

共同研究者：林創、木村哲也、石原暢、山本健太、木伏紅緒、岡野真裕、清水大地

研究課題：適応的スキル発達をめぐる異分野共創先端研究（代表者：野中哲士）

研究資金：人間発達環境学研究科学研究推進支援経費

研究概要：変化する環境と柔軟に切り結ぶ人間の「スキル」の原理を深く探求し、異分野の連携を通して傑出した研究成果を創出する。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学）、井上雅人（武庫川女子大学）、蘆田裕史（京都精華大学）、安城寿子（阪南大学）、小形道正（大妻女子大学）、鈴木彩希（四天王寺短期大学）、五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ファッションスタディーズの樹立に向けた日本的課題解決のための挑戦的研究

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究

研究概要：日本のファッションスタディーズにおける制度的問題、歴史的問題、ジェンダーの問題への取り組むことによって、分野の発展と若手の育成を目指す。

本専攻研究者：平芳裕子（研究代表者）

共同研究者：本橋弥生（京都芸術大学）、蘆田裕史（京都精華大学）、小形道正（大妻女子大学）、鈴木彩希（四天王寺短期大学）、五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の日本的展開に関する総合研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）

研究概要：日本のミュージアムにおけるファッション展の成立と現代における展開を明らかにする。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：岡田猛（東京大学教授）

研究課題：知覚ベースの創造性促進のメカニズムの解明とその教育的応用

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：芸術家などの優れた創作者の創造活動に特徴的に見られる、豊かな知覚体験が創造性にもたらす影響とそのメカニズムを実験によって定量的に検討する。定量的な検討方法としては、伝統的な創造性測定の手法に加え、非線形力学の手法を応用・活用する。

本専攻研究者：清水大地（研究分担者）

共同研究者：新藤浩伸（研究代表者、東京大学准教授）、岡田猛（東京大学教授）、福留東土（東京大学教授）、高木紀久子（東京大学助教）

研究課題：大学における芸術教育プログラムおよびその効果検証方法の構築に向けた基礎的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：絵画・ダンス・音楽などの芸術表現において重要とされる知覚体験や感性・情動・身体体験などの観点を取り入れた大学教育の具体的な授業方法をデザインし、その授業を実施する。また、そこで生じた学生の体験・変化についても短期・中長期双方の視点から質的・量的双方の観点から検証する。

本専攻研究者：大田美佐子（研究代表者）

研究課題：多文化共生時代の舞台芸術文化のダイナミクス ― 亡命・占領・共生の視点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C（代表者：大田美佐子）

研究概要：20世紀以降の音楽文化のグローバルな状況に着目し、1920年代から2020年の一世紀にわたる長いスパンで、舞台芸術に及ぼした教育・鑑賞・批評・上演のダイナミクスを《三文オペラ》を例に実証的側面から調査し、日本の音楽劇にもたらしている社会派音楽劇の影響を「世界史的視座」から検証することを目的とする。2024年6月、ニューヨーク公共図書館における「Song, Stage & Screen」学会で口頭発表、2025年1月24日に国際シンポジウム「Musictheatre Studies and Transnational History」を内外の音楽学、演劇学研究者5名と共に神戸大学で開催。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究課題：オールオーバー絵画の萌芽期における研究―ジャクソン・ポロック「壁画」を中心に―

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、アメリカ抽象表現主義の旗手であるジャクソン・ポロックの円熟期のオールオーバー絵画以前の萌芽期・形成期の作品を対象とする。なかでも1940年前半の代表作品「壁画」に着眼し、通史的・美学的な解釈に留まらず、技法・材料的な視点による分析を加え、その上で完成度の高い「再現制作」を試みることで制作プロセスを再現（追体験）することが大きな特徴である。国際的なパンデミックの影響から予定をしていた現地調査が困難な状況下からのスタートであったが、5年を費やすことにより最終年度の本年には再現制作を終えた上で、最終の口頭発表（12月実施）

と論文報告（3月刊行）も終了し総括とした。

本専攻研究者：余田有希子（研究代表者）

共同研究者：なし

研究課題：無声映画伴奏譜集にみられる楽曲構造の分析

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究

研究概要：無声映画伴奏譜集に収録された楽譜資料をもとに、情景・感情・アクションなどがどのように音楽構造に表出されるのか、楽譜分析ソフトウェアツールを用いながら、作品・作家単位ではなくマクロな視点から通底する要素を明らかにする。

本専攻研究者：余田有希子（研究代表者）

共同研究者：なし

研究課題：無声映画伴奏譜集にみられる楽曲構造の分析

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：サイレント映画期のオーケストラ伴奏における、管弦楽法・楽器法の定量的な分析により、当時のオーケストラ伴奏の実態を明らかにする。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：紅林亘（弘前大学教育推進機構）、近藤聡太郎（慶應義塾大学環境情報学部）、橘亮輔（産業技術総合研究所）

研究課題：合奏の個性を形作る時間的協調ダイナミクスの解明

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：ヒトの動作の同期に関するタイミング調節特性の調査、タイミング調節特性に影響する因子の特定、バーチャルパートナーやHumanizerの開発を通し、合奏における「息が合う」という感覚の正体、つまり名演の背後にある時間的協調ダイナミクスについて検討する。Humanizerに関する論文を執筆し、Plos One 誌に投稿した。現在リバイス作業を進めている。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：なし

研究課題：感覚運動同期研究のアップデート：パフォーマンスに特有な動作や環境の影響の検討

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：演奏家やダンサーのリズム感の基礎研究には、指タッピング課題が多く用いられてきた。しかし近年の研究の進展から、パフォーマンス特有な動作や環境を考慮した研究も必要な可能性が明らかになってきた。動作や環境の違いがパフォーマーの振る舞いにどう影響するかという、研究と現場をつなぐ研究は、まだ手薄なままになっている。本研究では楽器特性や運動器という身体的特性と、リズム刺激のグローヴという外的環境が、リズム同期課題におけるタイミングのずれやそのばらつき、修正反応に与える影響について検討し、基礎研究をパフォーマーのためにカスタマイズする足がかりを得ることを試みる。

本専攻研究者：岡野真裕（研究分担者）

共同研究者：楠本未来（研究代表者），饗庭絵里子（電気通信大学），津崎実（京都市立芸術大学），

研究課題：声楽教育における個人に適切な呼吸法の究明——腹式呼吸と胸式呼吸

研究資金：科学研究費助成研究 基盤研究（C）

研究概要：歌唱に適した呼吸は腹式呼吸であるとされることが多いが，腹式呼吸が体質に合わないとして，胸式呼吸を用いていると述べる歌手がプロの中にもいる。本研究では腹囲・胸囲の伸縮，姿勢のゆらぎ，声の同時計測を通して，行われている呼吸法の実態や，個々人に適した呼吸法をどのように見極めるか等について検討する。

本専攻研究者：岡野真裕（研究代表者）

共同研究者：伊坂忠夫（立命館大学スポーツ健康科学部），赤澤健太郎（立命館大学スポーツ健康科学部），三浦哲都（早稲田大学人間科学学術院）

研究課題：ポップダンスにおける「ヒット」動作の運動制御

研究資金：立命館大学学内予算，COI 基盤形成費

研究概要：ポップダンスの基本技術である「ヒット」の運動制御についての理解を深めるため，上半身のヒット動作における筋肉の活動量と活動タイミングのばらつき，およびそれらの熟達差について明らかにする。

本専攻研究者：岡野真裕（研究協力者）

共同研究者：三浦哲都（早稲田大学人間科学部・研究代表者），伊藤栞（早稲田大学人間科学学術院），惠谷隆英（慶應義塾大学 SFC 研究所），干場拓真（早稲田大学スポーツ科学学術院），片倉麻衣（東京科学大学整形外科教室），

研究課題：Quantification of auditory-motor coordination as a potential return-to-dance criterion after anterior cruciate ligament reconstruction

研究資金：科研費基盤研究（B）（代表：東京大学工藤和俊氏，分担者：三浦哲都氏）

研究概要：前十字靱帯を損傷したストリートダンサーのリハビリテーション過程において，膝屈伸による感覚運動同期能力の変化について検討し，報告した。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：岡田猛（東京大学教授）

研究課題：アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関する研究

研究資金：株式会社 SIGNING 共同研究費

研究概要：絵画・音楽・ダンスなどの芸術表現の持つ知覚や相互作用に働きかける特異的な特徴を活用した，創造性促進のための「表現ワークショップ」と「その定量的な効果検証方法」を開発し，ビジネスパーソンを対象に実際に実施・検証する。定量的な効果検証方法としては，伝統的な創造性測定の手法に加え，非線形力学の手法を応用・活用する。

本専攻研究者：清水大地（研究代表者）

共同研究者：O JUN（研究代表者，東京藝術大学名誉教授），戸田将平（エキスパートダンサー）

研究課題：絵画とダンスとの融合による新たな芸術パフォーマンスの探索とその過程における個人の創造的熟達の探索過程の解明

研究資金：個人研究費，ミヅマアートギャラリー

研究概要：絵画とダンスという異なる領域に位置付けられる表現を融合したパフォーマンスを生成し，実際に展覧会・パフォーマンスとして公的にその成果を披露する。また，その過程で各芸術家個人に生じうる感覚やスタイルの変化などを抽出し，創造的な熟達過程に対して他領域との協働がもたらす影響を具体的に検証する。

本専攻研究者：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（多摩美術大学教授），吉川民仁（武蔵野美術大学教授），小川佳夫（ロゾー絵画教室主宰）小池隆英（画家）

研究課題：現代美術（絵画）における抽象表現の可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びロゾー絵画教室（民間企業）

研究概要：現代における本格的な抽象美術（絵画）の有り様や可能性を追求すべく，研究会「Studio 138」を2019年に結成した。これは表現者や美術評論家，美術史家等で構成される研究会で，岸本はその創立メンバーである。本年度は3回の研究会を東京・神楽坂のロゾー絵画教室において開催した。また年1度の研究冊子刊行，大島徹也氏監修の展覧会も開催し，結成当初からの予定期限の5年を迎え3月末で解散をした。

本専攻研究者：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校教諭），圓城寺繁誉（大阪府内公立高校教諭），河合美和（大手前大学講師），善住芳枝（親和学園教諭），真木智子（画家），渡辺信明（京都市立芸術大学教授），コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立美術館館長）

研究課題：ペインターリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い，拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時にトークイベントも併催し，抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（2024年8月開催。リーフレット「PEINTERLINESS 2024」も作成し，テキスト「最後のペインターリネス」を尾崎信一郎が執筆し，各画家たちも自身の創作論としてのエッセイを同誌に掲載した。）

本専攻研究者：関典子

共同研究者：斎藤慶子（早稲田大学文学学術院講師：任期付）

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション第33回企画展「薄井憲二生誕100周年記念：薄井憲二の仕事：バレエの世界に架橋する」

研究資金：兵庫県立芸術文化センター

研究概要：2021年に実施した国際学術・実践会議での口頭発表「Ballets Russes にインスピレーションを得て：薄井憲二のユニークなコレクション」（ロシア・サンクトペテルブルク国立舞台芸術図書館 265 周年記念 国際学術・実践会議「過去を大事にしながら未来を創り出そう」），および，2023 年度に実施した劇場実験プロジェクト「蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究」（京都芸術大学舞台芸術研究センター）の発展的共同研究として，兵庫県立芸術文化センターロビー（2 階）展示室ポッケにて開催（2024 年 9 月 18 日～10 月 14 日）。プログラム・台本・葉書・書籍・映像など，約 60 点を展示。

本専攻研究者：関典子

共同研究者：古後奈緒子（大阪大学），工藤聡（振付家／映像作家），佐藤一紀（作曲家／ヴァイオリニスト），三浦栄里子（ピアニスト／兵庫県立芸術文化センター），古田弘珠・矢嶋紅（神戸大学国際人間科学部発達コミュニティ学科アートコミュニケーションプログラム），鷺尾華子（衣裳家／HANA DESIGN ROOM），サイトウマコト（振付家／ダンサー／斉藤ダンス工房主宰），竹内暢（兵庫県立芸術文化センター），ほんまなほ（大阪大学）

研究課題：「人形の生と死『ペトルーシュカ』のリエンアクトメント」

研究資金：大阪大学，令和 6 年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」

研究概要：2022 年度から継続している大阪大学中之島芸術センター・大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館アート人材育成プログラム「中之島に甦りを放つ」リサーチ・フレーム「アートとその分身～人間／人形の境界を超えて～」の第 3 回，最終年度として，セミナー（2024 年 9 月 8 日，中之島芸術センター）を実施。および，2025 年 2 月 14～15 日，兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター 中ホールにて，『人間を脱出したモノたちへ』公演として，新作ソロダンス作品『ペトルーシュカとロベルト・モンテネグロ』を初演（同時上演：いいむろなおき演出：浄瑠璃人形を用いたファリャのオペラ『ペドロ親方の人形芝居』）。約 222 名の観客が参加し，Chacott Web Magazine DANCE CUBE などにも掲載された。

(3) 論文

国際共著論文

Kawase, S., Okano, M., Bechtold, M., & Senn, O. (in press). Japanese Version of the Experience of Groove Questionnaire (EGQ-JA): Translation and Validation. *Music Perception*.

Wang, H., Hughes, J., Nonaka, T., Abdulali, A., Lalitharatne, T. D., & Iida, F. (2025). AI-Powered Musical and Entertainment Robotics. *Frontiers in Robotics and AI*, 12, 1572828. <https://doi.org/10.3389/frobt.2025.1572828>

Web of Science 収録誌掲載論文 *（10%論文にはマークを付す）

Nonaka, T. (2024). Selective engagement with specific invariants in the perception of art. *Ecological Psychology*, 36(2), 81-94. <https://doi.org/10.1080/10407413.2024.2355896>

Nishiyama, R., & Nonaka, T. (2024). Can a human sing with an unseen artificial partner? Coordination dynamics when singing with an unseen human or artificial partner. *Frontiers in Robotics and AI*, 11, 1463477.

<https://doi.org/10.3389/frobt.2024.1463477>

Miura, A., Ito, S., Etani, T., Okano, M., Katakura, M., & Hoshiba, T. (in press). Quantification of auditory-motor coordination as a potential return-to-dance criterion after anterior cruciate ligament reconstruction: A case report. *Medical Problems of Performing Artists*.

査読付き論文

青井郁美・野中哲士 (2024). 入園直後の 0 歳児クラスの保育場面において保育士はいかにモノを利用するのか. *認知科学*, 31(3), 481-495.

<https://doi.org/10.11225/cs.2024.023>

青井郁美・野中哲士 (2024). 0 歳児クラスの乳児の物との関わり方はいかに変化するのか—物・出来事・大人の関わりに着目して. *保育学研究*, 62(2), 43-54.

https://doi.org/10.20617/reccej.62.2_43

青井郁美・野中哲士 (2024). 座位獲得以前の乳児の自発的な手の動きを契機とした養育者の言動：育児記録における検討. *生態心理学研究*, 16(1), 3-28.

https://doi.org/10.24807/jep.16.1_3

岡野真裕・山下咲希・森博文・伊坂忠夫. (in press). ホルン演奏時の顔面および頸部の筋活動動態：中級者と熟達者のケーススタディ. *音楽知覚認知研究*.

平芳裕子「現代衣服の源流」を遡る—日本におけるファッション展の成立について」

田畑暁生 (2025)「地域情報化政策と「平成の大合併」」博士論文（東京大学）

査読無し論文

Tani, M., Nonaka, T., & Okano, M. (2024). Motor coordination in santūr players: Implications for santūr education. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要*, 18(1), 1-14.

田畑暁生『市町村の DX 推進計画』神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要 18(1), pp. 99-108.

岸本吉弘「オールオーバー絵画の萌芽期—ポロック《Mural》の再現制作を通じて」『Studio 138』5 号, Studio138 事務局刊行, 2025 年 3 月刊行, p. 76-89.

招待論文

野中哲士・山崎寛恵・西尾千尋. (2024). 発達カスケード. 発達心理学研究, 35(4), 171-172.
<https://doi.org/10.11201/jjdp.35.4sp.editorial>

清水大地. (2025). 創造・創発・共有の結実としてのブレイキン-認知科学からの視座-. 人工知能, 40(1), 1041-1048.

児玉謙太郎, 安田和弘, 牧野遼作, & 清水大地. (2025). リハビリテーション場面における身体協調-Recurrence Analysis を用いた対人インタラクションの評価-. 人工知能, 40(1), 1049-1056.

岡野真裕・向井香瑛 (accepted). 同期研究への誘い：機能・仕組み・方法・発展的課題. 生態心理学研究.

(4) 著書

単著

平芳裕子『東大ファッション論集中講義』ちくまプリマー新書, 2024年9月

平芳裕子『日本ファッションの一五〇年：明治から現代まで』吉川弘文館, 2024年11月

分担執筆

Nonaka, T. (2024). Description of the world that agential systems fit into. In M. Mangalam, A. Hajnal, & D. G. Kelty-Stephen (Eds.) *The Modern Legacy of Gibson's Affordances for the Sciences of Organisms*. Routledge.
<https://doi.org/10.4324/9781003396536-11>

平芳裕子「アメリカのメディアと既製服」「アメリカのファッションデザイン運動」「アメリカンフィフティーズ」『ファッションヒストリー 1850-2020』ブックエンド, 2024年6月, pp. 4

大田美佐子 「COVID-19 ショックと舞台芸術—代替を超えて, 進化への期待」, 『コロナ下での芸能実践— 場とつながりのレジリエンス』(吉田ゆか子, 増野亜子編集), 春風社, 2025年3月28日.

岸本吉弘「線 (ストライプ) の多様性」『PEINTERLINESS 2024』(ギャラリー白編集) ギャラリー白発行, 2024年8月刊行, p. 6.

岸本吉弘「絵画・ストライプのための断章」『岸本吉弘 垂直性の周辺 2022—2024』(ギャラリー白編集) ギャラリー白発行, 2024年11月刊行, p. 10-13 (和英対峙).

翻訳

ウォン・カーウアイ+ジョン・パワーズ，田畑暁生訳『ザ・シネマ・オブ・ウォン・カーウアイ』星海社，2024.

アンガス・フレッチャー，田畑暁生訳『世界はナラティブでできている』青土社，2024.

マーク・クーケルバーク，田畑暁生訳『ロボット倫理学』青土社，2024.

総説・書評など

平芳裕子「現代の皮膚感覚をさぐる 言葉，表象，身体」『表象文化論学会 REPRE49』2023 年 10 月

平芳裕子「バーバー『女の仕事』－「見えない」歴史から衣服をたどる」『現代思想+ 15 歳からのガイドブック』2024 年 6 月臨時増刊号，pp. 138-142.

平芳裕子「皮膚感覚と情動：メディア研究の最前線」『表象 18』（飯田麻結・渡邊恵太・水野勝仁・

高村峰生・難波阿丹によるシンポジウム録）2024 年 6 月，pp. 16-48.

平芳裕子「皮膚感覚と情動：表象から現前のテクノロジーへ（ブックガイド）」『表象 18』2024 年 6 月，p. 103.

余田有希子「サイレント映画期における音楽と感情：映画伴奏用楽譜集を題材として」，『音楽表現学』，Vol. 22，p. 31, 2024.

大田美佐子，「関西地域のオペラ活動 2023」（『日本のオペラ年鑑 2023』所収 p. 61-66）文化庁/ 学校法人東成学園/ 昭和音楽大学オペラ研究所，2025 年 3 月.

大田美佐子 オペラ評「むしろラディカルな栗山イズムのアプローチーびわ湖の三文オペラ」，『関西音楽新聞』（873），2025 年 3 月.

大田美佐子 巻頭評論「クルト・ヴァイル作曲『三文オペラ』を味わい尽くす」，『関西音楽新聞』（870），2024 年 12 月.

大田美佐子 書評「阿部万里江『ちんどん屋の響き一音が生み出す空間と社会的つながり』」，『神奈川大学評論』（105），188-189.

大田美佐子 解説「日本オペラ史 meets 演出家・栗山昌良の世界」，兵庫県立芸術文化センター 佐渡裕プロデュースオペラ『蝶々夫人』プログラム，2024 年 7 月.

大田美佐子 評論「東西文化の交感 オペラの奥深さー 佐渡裕プロデュースオペラ「蝶々夫人」, 読売新聞, 2024 年 8 月 30 日.

斎藤慶子・関典子「薄井憲二生誕 100 周年記念：薄井憲二の仕事：バレエの世界に架橋する」, 兵庫県立芸術文化センター, 「薄井憲二バレエ・コレクション」第 33 回企画展リーフレット, pp. 1-4, 2024.

関典子「モーリス・ラヴェル生誕 150 周年：『ダフニスとクロエ』を中心に」, 兵庫県立芸術文化センター, 「薄井憲二バレエ・コレクション」第 34 回企画展リーフレット, pp. 1-4, 2025.

関典子「薄井憲二生誕 100 周年：スターたちから贈られた直筆メッセージ入り資料」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 98 回常設展リーフレット, p. 1, 2024.

関典子「デ・キリコバレエ『舞踏会』」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 99 回常設展リーフレット, p. 1. 2024. (神戸市立博物館「デ・キリコ」展連携事業)

関典子「人形のバレエ『ペトルーシュカ』」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 100 回常設展リーフレット, p. 1, 2024.

関典子「スターたちのバレエシューズ (1) フランス編」, 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第 101 回常設展リーフレット, p. 1. 2025.

(5) 演奏会, 展覧会, シンポジウムなど

シンポジウム

学会名：計測自動制御学会 システム・情報部門 第 37 回自律分散システム・シンポジウム

シンポジウムタイトル：Goal-directed behavior: 物理系から社会まで

開催日：2025 年 1 月 16 日

演者等：大須賀公一（大阪大学）, 野中哲士（神戸大学）, 青沼仁志（神戸大学）, 小谷野由紀（神戸大学）

学会名：日本赤ちゃん学会第 24 回学術集会

シンポジウムタイトル：赤ちゃんに見る多様で連続的な発達

開催日：2024 年 8 月 25 日

演者等：野中哲士（神戸大学）, 皆川泰代（慶應義塾大学）, 野澤祥子（東京大学）, 新屋裕太（東京大学）

「ファッション展の現在とキュレーション-歴史・批評・ミュージアム」

登壇者：小野寺奈津（国立新美術館）, 高木遊（金沢 21 世紀美術館）, 小形道正（大妻女子大学）, 五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

司会：平芳裕子（神戸大学）

開催場所：京都国立近代美術館

開催日：2023 年 11 月 11 日

「ファッション研究次世代研究者フォーラム」

企画：平芳裕子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

登壇者：平芳裕子（神戸大学）本橋弥生（京都芸術大学）、井上雅人（武庫川女子大学）、蘆田裕史（京都精華大学）、安城寿子（阪南大学）、小形道正（大妻女子大学）、鈴木彩希（四天王寺短期大学）、五十棲亘（京都服飾文化研究財団）

開催場所：阪南大学あべのハルカスキャンパス

開催日：2024 年 10 月 5 日

「メンズファッションの歴史を考える-ストリートと雑誌メディア」

登壇者：百々徹（大阪成蹊短期大学）、岩井祐二（元『カジカジ』編集長）、工藤源也（神戸大学大学院博士後期課程）

司会：平芳裕子（神戸大学）

開催日：2024 年 11 月 30 日

第 4 回日本ダンス研究会

企画者・幹事：清水大地（神戸大学）・土田修平（お茶の水女子大学）・宮田紘平（東京大学）・河野由（国立スポーツ科学センター）

開催場所：お茶の水女子大学

開催日：2024 年 10 月 26 日（土）

参加者数：80 名超

概要：スポーツ科学・生理学・認知科学・心理学・工学・文化人類学など、多様な分野においてダンスの研究を行っている研究者が集まり、研究発表・議論を行った。学会では、動作解析ワークショップ・口頭発表・ポスター発表・全体シンポジウムを実施した。

ホームページ：<https://jsds.info/2024/03/25/jsds-4/>

日本音楽知覚認知学会 2024 年度秋季研究発表会

企画者・幹事：日本音楽知覚認知学会・岡野真裕（神戸大学）

開催場所：神戸大学

開催日：2024 年 11 月 30 日（土）～12 月 1 日（日）

参加者数：66 名

概要：音楽学、心理学、音響学、情報科学、音楽教育学、医学・生理学、およびそれらに接する学際領域に関わる研究者が協力し、音楽の知覚・認知に関する研究の進歩を図ることを目的とする学術団体の定例研究発表会である（年 2 回開催）。

ホームページ：<https://jsmpc.org/meetings/>

第 36 回音楽の科学研究会

企画者・幹事：岡野真裕（神戸大学）・正田悠（京都市立芸術大学）・大澤智恵（武庫川女子大学）

開催場所：神戸大学・オンライン（ハイブリッド開催）

開催日：2024 年 7 月 14 日（日）

参加者数：現地 11 名・Zoom 登録者数 32 名

概要：音楽-楽器-演奏者-聴取者を科学的な観点から研究し、関連知識を深めたいと考える人のための研究会である。関連領域の研究者および一般参加者が集まり、研究発表・議論と交流を行った。

ホームページ：<https://sites.google.com/site/ongakunokagaku2/home/>

日本認知科学会第 41 回大会オーガナイズドセッション

「創造性の概念と偏見：日本人の創造性神話とは？」

開催場所：東京大学

開催日：2024 年 10 月 12 日（土）

参加者数：80 名超

企画：石黒千晶（聖心女子大学）・清水大地（神戸大学）・山川真由（名古屋大学）

概要：多様な分野において創造性に関する研究を行っている研究者が集まり、研究発表・議論を行った。特に学会では、創造性信念に関する招待講演・口頭発表・全体ディスカッションを実施した。

東京国際シンポジウム 2024

「クリエイティビティとイノベーション」

開催場所：東京大学

開催日：2024 年 11 月 16 日（土）-11 月 17 日（日）

参加者数：60 名超

企画：岡田猛（東京大学）・縣拓充（千葉大学）・石黒千晶（聖心女子大学）・清河幸子（東京大学），清水大地（神戸大学）・松本一樹（獨協大学）・横地早和子（東京未来大学）

概要：創造性研究に関して国際的に活躍している海外の研究者を多数招き、招待講演・研究発表・議論を行った。2 日間に渡り、計 14 名の国際的な研究者による招待講演が行われた。

登壇者：岸本吉弘，石川裕敏（大阪府内公立中学校教諭），圓城寺繁誉（大阪府内公立高校教諭），河合美和（大手前大学講師），善住芳枝（親和学園教諭），真木智子（画家），渡辺信明（京都市立芸術大学教授），司会：尾崎信一郎（鳥取県立美術館館長）

テーマ：最後のペインターネス

開催場所：ギャラリー白（大阪）

開催日：8 月 19 日

概要：25 年に及ぶ本展の総括とし、ペインターリーな絵画表現を巡り、批評的・創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚、同企画は同ギャラリーで開催されたグループ展「PEINTERLINESS 2024」展の付帯企画である。

登壇者：岸本吉弘， 坂元暁美（上野の森美術館主任学芸員）

テーマ：垂直ストライプについて

開催場所：数寄和（東京）

開催日：11 月 30 日

概要：絵画における垂直ストライプ表現を巡り，批評的，創作論的な立場よりトークイベントを開催した。尚，同企画は同ギャラリーで開催された個展「垂直図絵」展の付帯企画である。

招待講演・口頭発表

Nonaka, T, Gandon, E, Endler, J. A, Coyle, T, Bootsma, R.J. Cultural attraction in pottery practice: Group-specific shape transformations by potters from three communities.

The XXII International Conference on Perception and Action (ICPA 2024) 2024 年 6 月 28 日

平芳裕子「現代衣服の源流」を遡るー 日本におけるファッション展の成立について」第 75 回美学会全国大会．2024 年 10 月 12 日

余田有希子「サイレント映画期における音楽と感情：映画伴奏用楽譜集を題材として」日本音楽表現学会第 22 回大会．2024 年 6 月 22 日～23 日，山梨大学

谷正人「サントゥールの撥の運動制御について」イラン研究会第 43 回研究会．2025 年 3 月 29 日．国立民族学博物館

岡野真裕「芸術なんて科学になるの？実験心理学からのアプローチ」兵庫県立芦屋高等学校高大連携出張講義．2024 年 12 月 19 日

岡野真裕「熟達化の心理学」大阪樟蔭女子大学学芸学部授業「心理学の現場」ゲストスピーカー．2024 年 11 月 27 日．

関典子「大学でダンスを教授／享受しあうこと」，パネルディスカッション「学校現場におけるダンス・審美系スポーツ活動」，日本ダンス医科学研究会第 15 回学術集会，2025 年 2 月 23 日，神戸女子大学ポートアイランドキャンパス

関典子（神戸大学），佐藤一紀（ヴァイオリニスト），三浦栄里子（ピアニスト），福島尚子（制作），ほんまなほ（大阪大学），古後奈緒子（大阪大学）「人形の生と死『ペトルーシュカ』のリエンアクトメント」，大阪大学中之島芸術センター・大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館アート人材育成プログラム「中之島に馳を放つⅢ」リサーチ・フレーム「アートとその分身～人間／人形の境界を超えて～」，2024 年 9 月 8 日，中之島芸術センター

Daichi Shimizu, Shuhei Tsuchida, Ayumi Ohnishi, Tsutomu Terada, & Masahiko Tsukamoto “Dynamics and Sociality of Synchronized Arousal between Dancer and Audience in Breakdance Battle Scenes”，

46th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 7. 26. 2024

Kyoko Hatsuda, & Daichi Shimizu “Two Directions for Skill Development of Basic Latin American Dance Movements”, 46th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, 7. 25. 2024

清水大地, 土田修平, 大西鮎美, 寺田努, 塚本昌彦「ダンスバトルにおける演者－観客間の心拍同期の動性・社会性」, 2024 年 10 月 12 日 日本認知科学会第 41 回大会

岸本吉弘, Studio138 第 15 回研究会, オールオーバー絵画の萌芽期－ポロック《Mural》の再現制作を通じて, 2024 年 12 月 1 日, 主催: Studio138 研究会, ロゾー絵画教室

ワークショップ（企画・開催）

ART ACT「カシヤる鑑賞」

開催場所: SusHi Tech Square

開催日: 2024 年 7 月 31 日（水）, 8 月 24 日（土）, 9 月 11 日（水）

参加者数: 計 30 名程度

企画者: 東京都, 株式会社 SIGNING, 東京大学

ART ACT「だなぁのになぁ鑑賞」

開催場所: SusHi Tech Square

開催日: 2024 年 11 月 20 日（水）, 12 月 18 日（水）

参加者数: 計 25 名程度

企画者: 東京都, 株式会社 SIGNING, 東京大学

ART ACT「リラックス×クリエイティブ鑑賞」

開催場所: SusHi Tech Square

開催日: 2024 年 2 月 26 日（水）, 3 月 8 日（土）

参加者数: 計 30 名程度

企画者: 東京都, 株式会社 SIGNING, 東京大学

展覧会・演奏会・公演

出品者: 岸本吉弘

共同出品者: 石川裕敏, 園城寺繁誉, 河合美和, 善住芳枝, 真木智子, 渡辺信明

展覧会タイトル: PEINTERLINESS 2024

展覧会場所: ギャラリー白, 白 kuro, 白 3（大阪）

展覧会期間: 2024 年 8 月 19 日～8 月 31 日

資金: ギャラリー白企画

概要: 関西近県の活動する抽象画家が集い, 拠点であるギャラリー白（大阪）において大型作品の展

示と同時にトークイベントも併催し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試み（グループ展）を実施した（研究冊子であるリーフレットも刊行した）。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：なし

展覧会タイトル：岸本吉弘 個展「垂直図絵」

展覧会場所：数寄和（東京）

展覧会期間：2023 年 11 月 23 日～12 月 1 日

資金：数寄和企画

概要：大作である「余剰次元」を中心とし、計 20 点の新作油彩画などを展示した。期間中にトークイベントも併催した。

出品者：岸本吉弘

共同出品者：武蔵野美術大学、女子美術大学、東京造形大学などの絵画分野の教授陣 20 名

展覧会タイトル：as if—20 名の美術家が音楽を表現してみた

展覧会場所：数寄和（東京）

展覧会期間：2025 年 3 月 7 日～3 月 22 日

資金：数寄和企画

概要：20 名のベテラン画家たちによるグループ展、音楽をテーマとし各々が油彩画やドローイングなどを出品し、岸本は油彩画 2 点、ドローイング 2 点を出品した。

余田有希子（企画・監修）、令和 6 年度れきはくロビーコンサート『ひょうご伝説紀行～妖怪の世界～ マルチチャンネル音楽作品コンサート』、2024 年 10 月 12 日、兵庫県立歴史博物館

余田有希子（企画・監修）、令和 6 年度「芸術・文化の薫るまち・灘」魅力発信事業『音で彩るアート作品～Nada～』、JR 灘駅前にて常設予定

関典子（ダンス）：『ペトルーシュカとロベルト・モンテネグロ』振付・出演、演出協力：工藤聡、ピアノ演奏：三浦栄里子、作曲：イーゴリ・ストラヴィンスキー／佐藤一紀、美術：古田弘珠／矢嶋紅、特別協力：サイトウマコト／竹内暢、衣裳：鷺尾華子、アドバイザー：ほんまなほ、企画：古後奈緒子、【中之島に鮠を放つⅢ】関連公演「人間を脱出したモノたちへ」公演、主催：大阪大学中之島芸術センター・大阪大学大学院人文学研究科・大阪大学総合学術博物館／令和 6 年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」、2025 年 2 月 14～15 日、兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアター 中ホール

関典子（企画・監修）、斎藤慶子（企画・解説・取材）「薄井憲二バレエ・コレクション」第 33 回企画展「薄井憲二生誕 100 周年記念：薄井憲二の仕事：バレエの世界に架橋する」、2024 年 9 月 18 日～10 月 14 日、兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・監修）,「薄井憲二バレエ・コレクション」第34回企画展「モーリス・ラヴェル生誕150周年：『ダフニスとクロエ』を中心に」,2025年1月21日～3月9日,兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）,「薄井憲二バレエ・コレクション」第98回常設展「薄井憲二生誕100周年：スターたちから贈られた直筆メッセージ入り資料」,2024年3月13日～6月30日,兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）,「薄井憲二バレエ・コレクション」第99回常設展「デ・キリコのバレエ『舞踏会』」,2024年9月5日～12月10日,兵庫県立芸術文化センター（神戸市立博物館「デ・キリコ」展連携事業）

関典子（企画・構成）,「薄井憲二バレエ・コレクション」第100回常設展「人形のバレエ『ペトルーシュカ』」,2024年12月12日～2025年2月20日,兵庫県立芸術文化センター

関典子（企画・構成）,「薄井憲二バレエ・コレクション」第101回常設展「スターたちのバレエシューズ（1）フランス編」,2025年2月22日～5月20日,兵庫県立芸術文化センター

（7）表現系講座の研究の総括と課題

人間発達研究において表現にかかわる専門分野を相互にいかに関係させるかは、当系講座の長年にわたる課題となってきた。教育においてはその相乗作用に一定の成果をあげているが、研究においてはそれぞれの専門性の深まりにともなって、そこに一律に適用できる評価指標を見出すことは難しい。当系講座の教員は各専門分野で顕著な研究活動を展開し、すでに高い評価を得ている。今後も、学術・文化全体の本質でもある多様性は担保しながら、「表現」を核にした学術研究分野としての組織的フィッティングの模索が課題となるだろう。

●行動系

1. 国際共同研究

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Eric S. Drollette (University of North Carolina at Greensboro), Sebastian Ludyga (University of Basel), Charles H. Hillman (Northeastern University), Keita Kamiyo (Chukyo University)

研究課題：一過性運動が認知機能に与える影響

研究概要：認知機能に対する一過性運動の効果およびその調整因子について、IPD メタ分析を用いて検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：Nóra Bunford (HUN-REN Research Centre for Natural Sciences), Sebastian Ludyga

(University of Basel)

研究課題：発達障害を有する子どものライフスタイルと認知機能の関係およびその脳機構

研究概要：神経発達障害児を対象に、運動、睡眠、栄養などのライフスタイルと、磁気共鳴画像法 (MRI) により計測した脳の解剖学的特徴（大脳皮質厚、髄鞘密度など）との関係を検討する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：Soondool Chung, Vivian Lou, 竹内真純, 福沢愛

研究課題：高齢者のソーシャルサポート授受と ICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較

研究資金：国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))

研究概要：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICT を活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者の ICT の利用と効果について精査し、日本での ICT 活用に有効な施策について提言する。

研究代表者：佐藤 幸治

共同研究者：Prof. Gary Wittert (The University of Adelaide, Aus)

研究課題：中高齢女性特有の疾患における新たな予防策の開発

研究資金：国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)

研究概要：肥満や糖尿病、高血圧のメタボリックシンドローム、骨粗鬆症等、特有の疾患が中高齢女性において、増加しており、新たな指標の炎症性サイトカインに着目し予防法を栄養及び運動の観点から明らかにする。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：ワールドマスターズゲームズ開催のホスト活性化効果とレガシー創出に関わるモニタリング指標の開発

共同研究者：Sergey Bubka, Kate Caithness, Manuela Di Centa, David Eades, Ugur Erderner, Sari Essayah, Tom Hollowell, Jens Holm, Poul-Erik Hoyer, Alexander McLin, Ser Miang Ng, Petra Sorling (International Masters Games Association)

研究資金：International Masters Games Association R&D

研究概要：国際マスターズゲームズ協会管轄大会を対象とし、大会がホスト地域に及ぼす活性化効果と持続的影響を可視化するための調査指標とモニタリングシステムを開発する。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：Dr. Robert Walker (University of Bristol, UK)

研究課題：Determinants of exercise behavior among older adults

研究資金：日本学術振興会サマープログラム

研究概要：高齢者の運動行動は、どのような要因によって規定されるのかについて研究を進めている。

2. 国内共同研究など

1) 科研費による研究（代表者）

研究代表者：石原 暢

研究課題：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響：実行機能とオキシトシンの役割に着目して

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：習慣的運動が子どもの社会性に与える影響を、実行機能と唾液オキシトシンの役割に着目して明らかにする。

研究代表者：石原 暢

研究課題：幼少期の運動習慣が中高齢期の認知機能を維持・増進させる神経機構とその個人差の解明

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究(A)

研究概要：幼少期の習慣的運動が中高齢期の認知機能と関わる背景にある脳の構造的・機能的変化を検討する。

研究代表者：打田 篤彦

研究課題：地域共同体における社会関係資本と物理環境の相互作用のモデル化

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：機械学習モデルで大量の景観の画像から物理環境の要素を定量化し、行政機関に蓄積されたオープンデータや意識調査と比較検討することで、市街地での人々の社会関係資本と物理環境の相互作用を動態として把握することを試みる。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：勇上和史 菅原育子

研究課題：ポストコロナ社会の高齢者就労と社会参画：人生 100 年時代における高齢期就労の課題

研究資金：基盤研究(B)

研究概要：高齢者就労が増加しているが、未だ研究は少ない。またコロナ禍において、高齢者の就労や他の生産的活動に対する態度や行動の変化、企業側の感染リスクの高い高齢就労者への対応の変化が生じているのか等現状は明らかでない。ポストコロナ社会において、高齢就労者が高い well-being を実現するような働き方を検討することを目的として、企業と従業員に対して高齢就労者施策や、高齢就労者の会社の就労条件への評価を調べる企業調査、高齢就労者の態度や well-being の変化を調べるパネル調査、既存の縦断研究データの二次分析により検討し、ポストコロナ社会における高齢就労と well-being のモデルを構築する。

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：平山洋介，安里知陽，増本康平，伊藤真之，稲原美苗，中村匡秀，原田和弘，木村哲也，佐藤幸治，石原暢，木伏紅緒，竹内真純，福沢愛，Kim Nahyun

研究課題：研究開発プロジェクト「都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築」

研究資金：JST RISTEX「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）」

研究概要：現在の日本では高齢者夫婦のみや高齢単身世帯が6割を超える。海外と比べて別居子との交流が少ない上に、友人を頼らない傾向があり、孤立リスクが高い。特に退職後の男性は地域社会での知り合いに乏しく、地域デビューは難しく孤立するケースが多い。近年は賃貸住宅に居住する高齢者が増加傾向にあるが、特に賃貸住宅は住民の入れ替わりが激しく、孤立や孤独死のリスクが高い。このように都市の賃貸住宅に住む高齢者は孤立に陥りやすいリスクにさらされている。よって本プロジェクトの目標は、都市の賃貸住宅居住高齢者の豊かな交流を実現し、人生100年時代に備えたレジリエンス・レジリエンスを発達させることである。その実現に向け、身体・認知・心理面を縦断的に測定し、同時にIoTを活用したセンサーとバーチャル・エージェントとの会話による毎日の健康チェックを併用し、多指標マルチモーダルに健康と孤立・孤独との関連を明らかにする。さらに、孤立・孤独を生まない社会の実現のため、リアルとバーチャルが融合するコミュニティの創出、楽しい体験型イベントへの参加から地域のリーダーを育成する仕組みづくり、大学リソースを活用した生涯教育（サードエイジ・ユニバーシティ）の実施、高齢者が自発的に情報を提供する仕組みを作り孤立を予想するモデルを考案、情報共有の有効性の科学的エビデンスの提供を行う。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：心拍・運動リズム間位相同期が歩行安定性に及ぼす効果の解明と応用方法の検討

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：歩行動作では、運動リズムと心拍リズムが整数比となる、心拍・運動リズム間位相同期が生じる。位相同期は生理学的利点があると報告されているものの、運動学的な意義は不明である。そこで本研究課題では、心拍・運動リズム間位相同期の歩行安定化に対する効果と位相同期の応用方法を特定する。

研究代表者：木村哲也

共同研究者：木伏紅緒・佐藤幸治・塩澤成弘

研究課題：循環・呼吸両調節システムとの協働則を踏まえた純粋なバランス調節機能評価指標の確立

研究資金：基盤研究（B）

研究概要：静止立位時に循環調節システムに貢献する姿勢ゆらぎ成分について、その制御則とバランス評価指標に与える影響を明らかにする。

研究代表者：佐藤幸治

研究課題：中高齢者のトゲドコロイモ摂取における機能性とその効能の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（B）

研究概要：加齢に伴い、血中の性ホルモン濃度が低下し、また、メタボリックシンドロームの罹患率が増加しており、運動やトゲドコロイモの摂取は性ホルモン濃度を増加させることが明らかとなっており、中高齢者を対象にメタボリックシンドローム指標や認知機能への影響を検討する。

研究代表者：長ヶ原 誠

研究課題：マスタースポーツメカ大会の開催による地方自治体の地域活性化に関する縦断的検証

研究資金：学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (一般)

研究概要：ワールドマスタースゲームズ関西の開催自治体に着目し、招致期からの開催準備が及ぼす地域活性化について、ホスト圏民と共に自治体の生涯スポーツ振興事業に及ぼす波及効果をモニタリング調査から縦断的に明らかにする。

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口隆晴・佐藤幸治・原田和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的つながりに関する縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (B)

研究概要：高齢期の感情調整機能が社会的つながりに及ぼす影響を縦断データを用いて検討する。また、高齢期の感情調整が社会的つながりの基盤である「他者への信頼」に及ぼす影響を生理的要因、心理的要因をふまえた上で心理実験により明らかにする。

2) 科研費による研究 (分担者)

研究代表者：石黒 千晶

共同研究者：石原 暢

研究課題：学校・家庭教育環境が子どもの創造性発達に与える影響の横断・縦断研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究(B)

研究概要：子どもの創造性が学校や家庭環境の中でどのように発達するかを明らかにする。

研究代表者：紙上 敬太

共同研究者：石原 暢、森田 憲輝

研究課題：体力と集中力の関係：Classroom Neuroscience の確立を目指して (研究代表者：紙上敬太)

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究 (萌芽)

研究概要：子どもの体力と授業中の集中力の関係を調べる。

研究代表者：権藤 恭之 大阪大学，大学院人間科学研究科，教授

共同研究者：

石崎 達郎 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)，東京都健康長寿医療センター研究所，研究部長

石松 一真 滋慶医療科学大学，医療管理学研究科，教授

石岡 良子 大阪大学，大学院人間科学研究科，招へい研究員

西田 裕紀子 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター，研究所 老年学・社会科学研究センター，副部長

神出 計 大阪大学，大学院医学系研究科，教授

研究課題：加齢に対する信念の構造と加齢プロセスに与える影響の検証

研究資金：基盤研究(A)

研究概要：「加齢に対する信念」は、本研究を申請するにあたって新たに提案した概念である。信念は内在化された心的表象であり、価値観を形成する最小単位であり、行動の経験と表出に影響するとされる。本研究では「加齢に対する信念」は、サクセスエイジングの達成／不達成を目標とした価値観を構成する要因と定義する。そしてその構成概念を明らかにするとともに、信念の形成に寄与する要因を明らかにすることを目的とする。

研究代表者：北村 智 東京経済大学，コミュニケーション学部，教授

共同研究者：研究分担者 森 玲奈 帝京大学, 准教授

研究課題：モバイルネット時代における日本人の情報行動の世代間・世代内比較の実証的研究

研究資金：基盤研究(A)

研究概要：本研究の目的は、本研究は「日本人の情報行動」調査プロジェクトの一環として、全国調査を2025年に実施する。本調査では、21世紀初頭からの日本人の情報行動の変遷や加齢効果・時代効果・コーホート効果の分析を行い、日本人の行動情報の変化を全国調査により明らかにすることである。

研究代表者：山口 悦司

共同研究者：杉本 雅則，望月 俊男，坂本 美紀，増本 康平，木村 哲也，佐藤 幸治

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）

研究代表者：増本 康平

共同研究者：谷口 隆晴，佐藤 幸治，原田 和弘

研究課題：感情調整と信頼の加齢変化と社会的繋がりに関する縦断研究

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：古谷 真樹

共同研究者：近藤 徳彦，福田 博也，佐藤 幸治

研究課題：心理的ストレスによる不眠予測およびセルフモニタリングツールの開発とその効果の検証

研究資金：基盤研究C

研究代表者：片桐 恵子

共同研究者：中村 匡秀，増本 康平，原田 和弘，平山 洋介，伊藤 真之，稲原 美苗，木村 哲也，佐藤 幸治，石原 暢，木伏 紅緒，竹内 真純，福沢 愛

研究課題：都市集合住宅高齢者の社会的孤立を予防する持続可能なコミュニティ構築

研究資金：JST 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（RISTEX）

研究代表者：内山 愉太

共同研究者：喜屋武 享，高倉 実，佐藤 真行，丑丸 敦史，原田 和弘，香坂 玲

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究代表者：澤田 享（早稲田大学）

共同研究者：井上 茂（東京医科大学），岡 浩一朗（早稲田大学），小熊 祐子（慶応義塾大学），小野 玲（国立健康・栄養研究所），原田 和弘，宮地 元彦（早稲田大学）

研究課題：健康づくりのための身体活動・運動の実践に影響を及ぼす原因の解明と科学的根拠に基づく対策の推進のためのエビデンス創出

研究資金：厚生労働科学研究費・循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業

研究概要：身体活動推進政策を効果的に推進するための新たなエビデンスを創出し，国民の身体活動量を増加させることを目的とした研究を進めている。

研究代表者：原田悦子

研究分担者：増本康平・榊美知子・須藤智・松室美紀

研究課題：高齢者の新奇事項/事象の学習：感情・動機づけ，時間的展望，熟知度との関係

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

研究概要：新奇事項事象の学習の加齢に伴う変化とその支援可能性を，学習を支える感情基盤・動機づけ，時間的展望の変化，学習内容に対する熟知性が学習過程にもたらす機序等を中心に明らかにし，認知モデルとして提案する。

研究代表者：稲垣成哲

研究分担者：増本康平・楠房子・小川義和・寺田努・江草遼平・石田弘明・岩崎誠司・鳥居深雪

研究課題：科学系博物館におけるニューロダイバーシティの実現：展示手法と実践モデルの提案

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究（A）

研究概要：本研究の目的は，ニューロダイバーシティ（ND）の立場から科学系博物館における発達障害（ASD，LD，ADHD 等）のある来館者向けの展示学習保障ガイドラインの体系化とその展示手法の開発，さらには具体例としての実践モデルを提案することである。

研究代表者：山口悦司

共同研究者：杉本雅則・望月俊男・坂本美紀・増本康平・木村哲也・佐藤幸治

研究課題：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発研究

資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発。

研究代表者：衣笠智子

共同研究者：増本康平・安田公治・羽森 茂之・勇上和史

研究課題：新型コロナウイルス流行の寿命予測と貯蓄行動に対する影響

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：新型コロナウイルス流行で寿命や死亡率に関する意識がどう変化したか、また、その変化が貯蓄行動にどう影響したかを明らかにする。

研究代表者：野中哲士

共同研究者：清水 大地・木伏 紅緒・永野 光

研究課題：身体の摂動ダイナミクスを情報資源として用いる身体一環境系の知覚行為制御

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(開拓)

研究概要：従来の理論枠組みでは捉えにくかった道具使用などの複雑な身体一環境相互作用において、接触や動きを反映する摂動ダイナミクスがどのような情報をもたらすかを再検討し、リハビリや義肢制御に応用可能な新たな知見と柔軟な制御理論の構築を目指す。

研究代表者：木村 哲也

共同研究者：木伏 紅緒・佐藤 幸治・塩澤 成弘

研究課題：循環・呼吸両調節システムとの協働則を踏まえた純粋なバランス調節機能評価指標の確立

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (B)

研究概要：立位時の姿勢ゆらぎが立位バランス、循環、呼吸といった複数の調節システムの協働によって制御されるメカニズムを解明し、その影響を排除した新たな定量指標を提案することで、評価方法の見直しとシステム間協働の理解を目指す。

研究代表者：松本珠希

共同研究者：木村哲也・佐藤幸治

研究課題：月経周期に伴う心身不調と睡眠習慣との関連：精神神経内分泌免疫動態からの探索

研究資金：科学研究費補助金・基盤研究 (C)

研究概要：女性における月経周期による心身の不調と睡眠習慣との関連を、内分泌ホルモンや免疫応答の側面からも解析し、関連性を明らかにする。

3) 地方公共団体・神戸大学など

座長：山口泰雄

研究課題：スポーツと地域社会研究会

研究資金：公益財団法人兵庫県スポーツ協会

研究概要：ひょうごの近代 150 年の中で、スポーツの発展が地域社会にどのような影響を与えたのかを検証する。

研究代表者：石原 暢

研究課題：生活習慣が認知機能に与える影響とその神経科学的・分子生物学的メカニズムの解明

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員 (B 制度)

研究概要：塩基配列を変化させずに遺伝子発現を制御する後天的な仕組みの 1 つである DNA メチル化に着目し、生活習慣が認知機能や脳の解剖学的・機能的特徴を後天的に修飾する分子生物学的メカニ

ズムを調べる。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：高岸治人，寿秋露，丹波夏希，橋本紳之亮

研究課題：運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャンニング研究—

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第38回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

研究代表者：石原 暢

共同研究者：高岸治人，松田哲也

研究課題：子どものライフスタイルと向社会性の関係

研究資金：文部科学省共同利用・共同研究拠点 玉川大学脳科学研究所「社会神経科学研究拠点」

研究概要：子どものライフスタイルと向社会性の縦断的关系を調べる。

研究代表者：石原暢

共同研究者：Nóra Bunford, Sebastian Ludyga

研究課題：発達障害を有する子どもの身体活動と認知機能の関係およびその脳機構

研究資金：2024年度 人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：発達障害を有する子どもの身体活動と認知機能の関係およびその脳機構を検討する。

研究代表者：打田 篤彦

研究課題：都市空間における個人・社会環境・物理環境の相互作用の検討

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（A制度）

研究概要：社会生態学のアプローチを援用し，都市空間において個人の well-being に資する人と環境多層的な環境との循環構造を学際的に可視化し探索する。

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：勇上和史（経済学研究科 教授），鈴木竜太（経営学研究科 教授），久保雄一郎（経営学研究科 助教）

研究課題：高齢就労者と well-being

研究資金：神戸大学国立大学改革・研究基盤強化推進補助金

研究概要：人材不足と高齢人口の増大から，高齢就労者の増加が見込まれている。しかし高齢就労者の実際の就労状況や，かれらの well-being に資するような働き方については，未経験の事態であるため研究はまだ少ない。本研究では，高齢就労者を支援するような会社のシステムが高齢就労者にどのような影響があるのかなどを検討し，高齢就労者の well-being をいかに実現するかについて検討する。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行制御メカニズムの解明と運動改善のためのバイオフィードバック法開発

研究資金：高等学術研究院テニユアトラック教員（B 制度）

研究概要：歩行動作の制御を基軸として、筋間協調/心拍・運動リズム間の協調メカニズムの解明という基礎的研究と、運動改善に効果的なバイオフィードバック手法の開発という応用研究を相互的に進める。

研究代表者：木伏紅緒

共同研究者：朱織雨，壺井達也

研究課題：筋・運動学シナジーを用いたアスリートの移動運動能力評価

研究資金：公益財団法人ヒロセ財団

研究概要：着地，スケーティングの動作中の筋・運動学シナジーを初心者と熟練者の間で比較することで、この新たな評価方法の実用性を探る。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：歩行中の心拍・運動リズム間位相同期を促進するバイオフィードバック法の開発

研究資金：公益財団法人鈴木謙三記念医科学応用研究財団

研究概要：心拍・運動リズム間位相同期を生じさせるバイオフィードバック方法を検討する。

研究代表者：寺田昌弘（京都大学）

共同研究者：相羽達弥（JAXA），神崎素樹（京都大学），石岡憲昭（JAXA 宇宙科学研究所），山田深（杏林大学），田辺弘子（名古屋大学），木伏紅緒（神戸大学）

研究課題：「きぼう」利用（宇宙医学）テーマ「宇宙滞在における筋シナジー制御機構の解明」

研究概要：宇宙飛行士が宇宙空間に滞在する前後（飛行前，飛行直後，飛行半年，1 年後）での，姿勢制御やロコモーション（歩行，障害物回避，ステップなど）の変化を筋シナジーの側面から解明する。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：三古 展弘

研究課題：健康行動変容の個別最適化支援法の構築

研究資金：神戸大学 デジタルバイオ・ライフサイエンスリサーチパーク拠点間連携に向け研究概要：一人ひとりの多様性に合わせて個別最適化された健康行動変容の支援法を構築し，支援効果の検証と社会実装を目指す研究を進めている。

研究代表者：増本康平

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・打田篤彦・近藤徳彦

研究課題：ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：原田和弘・打田篤彦・Kim Nahyun

研究課題：「坂の街神戸」と地域住民の Well-being：坂に息づくコミュニティの構築

研究資金：大学と連携した地域課題の調査研究（神戸市）

研究概要：坂の街神戸における坂に注目し、坂が住民の well-being に与える影響について検討する。

4) 民間共同研究

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：動作計測・分析及びアドバイス

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：スポーツ用衣料による運動パフォーマンス向上を目指した技術開発を目的とし、計測・分析・評価の確認、アドバイスに基づいた製品改良を行う。

研究代表者：木伏紅緒

研究課題：学術相談

研究資金：株式会社本田技術研究所

研究概要：フレイル予防に効果がある歩き方または運動を提示し、継続的に続けられるような仕組みに関して、研究背景や事例、介入方法の紹介を行った。

研究代表者：原田 和弘

共同研究者：太田 幸志

研究課題：運動を通じたつながりの多様性が高齢者のウェルビーイングに及ぼす影響

研究資金：戸部真紀財団 研究助成

研究概要：運動を通じたどのような内容の社会的つながりが、高齢者のウェルビーイングに最も密接に影響しているのかを通じて明らかにする研究を進めている。

研究代表者：秋末敏宏

共同研究者：近藤徳彦・増本康平・原田和弘・打田篤彦・古和久朋・園田悠馬・沖侑一郎

研究課題：地域在住高齢者の認知機能及びウェルビーイングに対する ICT を用いた行動変容が及ぼす影響の検討

研究資金：住友生命保険相互会社

研究概要：歩行数などの身体活動要素を ICT にて計測するとともに、行動変容を惹起させる ICT を用いたプログラムにて介入することにより、認知機能の経時的変化および社会参加に対する変容をとらえることを本研究の目的とする。

3. 論文

1) 国際共著論文

Yu, Q., Zhang, Z., Ludyga, S., Erickson, K. I., Cheval, B., Hou, M., Pindus, D.M., Hillman, C.H., Kramer, A.F., Flack, R.S., Liu-Ambrose, T., Kuang, J., Mullen, S.P., Kamiyo, K., Ishihara, T., Raichlen, D.A., Heath, M., Moreau, D., Werneck, A.O., Herols, F., & Zou, L. (2025). Effects of physical exercise breaks on executive function in a simulated classroom setting: uncovering a window into the brain. *Advanced Science*, 12(3), 2406631.

Morita, N., Ishihara, T., Hillman, C. H., & Kamiyo, K. (2024). Movement boosts memory: Investigating the effects of acute exercise on episodic long-term memory. *Journal of Science and Medicine in Sport*.

Deng, X., Chen, Y., Chen, K., Ludyga, S., Zhang, Z., Cheval, B., Zhu, W., Chen, J., Ishihara, T., Hou, M., Gao, Y., Kamiyo, K., Yu, Q., Hillman, C.H., Kramer, A.F., Erickson, K.I., Delli Paoli, A.G., McMorris, T., Gerber, M., Kuang, J., Cheng, Z., Pindus, D., Dupuy, O., Heath, M., Herold, F., & Zou, L. (2024). A friend in need is a friend indeed: Acute tandem rope skipping enhances inter-brain synchrony of socially avoidant individuals. *Brain and Cognition*, 180, 106205.

Robin, N., Crespo, M., Ishihara, T., Carien, R., Brechbuhl, C., Hue, O., & Dominique, L. (2024). Pre-, Per-and post-cooling strategies used by competitive tennis players in hot dry and hot humid conditions. *Frontiers in Sports and Active Living*, 6, 1427066.

Ludyga, S., Bruggisser, F., Leuenberger, R., Ishihara, T., Kamiyo, K., Brotzmann, M., Trescher, S., Förster, M., & Gerber, M. (2024). Acute effects of exercise on gaze fixation and affective response inhibition in children with autism spectrum disorder: A randomized cross - over study. *Autism Research*, 17(9), 1934-1943.

Yu, Q., Kong, Z., Zou, L., Herold, F., Ludyga, S., Zhang, Z., Hou, M., Kramer, A.F., Erickson, K.I., Taubert, M., Hillman, C.H., Mullen, S.P., Gerber, M., Müller, N.G., Kamiyo, K., Ishihara, T., Schinke, R., Cheval, B., McMorris, T., Wong, K.K., Shi, Q., & Nie, J. (2024). Imaging body-mind crosstalk in young adults. *International Journal of Clinical and Health Psychology*, 24(3), 100498.

Schouten, A., Boiger, M., Uchida, A., Verstaen, A., Paillé, C., Uchida, Y., & Mesquita, B. (2024). Couple conflict observed: Emotions in Belgium and Japan. *Emotion*.

Yamagata M, Kimura T, Chang AH, Iijima H. (2025). Sex differences in ambulatory biomechanics:

a meta-analysis providing a mechanistic insight into knee osteoarthritis. *Medicine & Science in Sports & Exercise*, 57:144-153.

2) Web of Science 収録誌掲載論文

Ishihara, T., Tanaka, H., Kiyonari, T., Matsuda, T., & Takagishi, H. (2025). Multimodal imaging to identify brain markers of human prosocial behavior. *eNeuro*, ENEURO.0304-24.2025.

Uchida, A., Kameoka, T., Ise, T., Matsui, H., & Uchida, Y. (2024). Social factors of urban greening: Demographics, zoning, and social capital. *City and Environment Interactions*, 24, 100160.

Yamagata M, Kiyono K, Kimura T. (2024). Long-range cross-correlations between center of pressure velocity and colored noises provided during quiet standing. *Neuroscience Letters*, 842:138008.

Masumi Takeuchi & Keiko Katagiri (2024). Effects of Workplace Ageism on Negative Perception of Aging and Subjective Well-being of Older Adults According to Gender and Employment Status. *Geriatrics & Gerontology International*. doi.org/10.1111/ggi.14819

Kibushi, B., Maekaku, K., & Kimura, T. (2024). Reduced center of mass acceleration during regular walking with electromyography biofeedback. *Gait & posture*, 108, 335-340.

Kibushi B. (2024). Kinematic stability in cardiac locomotor synchronization during regular walking. *Frontiers in physiology*, 15, 1487465.

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2024). Between- and within-couple concordance for health behaviors among Japanese older married couples: examining the moderating role of working time. *International Journal of Behavioral Medicine*, 31: 215-228

Harada K, Masumoto K, Okada S. (2024). Walking trail access, exercise behavior, and going out-of-home among older adults: Examining longitudinal associations and mediators. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 126: e105534

Uchiyama Y, Kyan A, Sato M, Ushimaru A, Minamoto T, Harada K, Takakura M. (2024). Local environment perceived in daily life and urban green and blue space visits: Uncovering key factors for different age groups to access ecosystem services. *Journal of Environmental Management*, 370: 122676.

Sato K, Kumamoto M, Umekage K. (2024). Comparison of nutritional values for dioscorea esculenta in a cultivated sub-tropical region and a plastic greenhouse in a cold region. South African Journal of Botany, 169, 1-5. <https://doi.org/10.1016/j.sajb.2024.04.013>

Sato K. (2024) Suppression of gp130 attenuated insulin-mediated signaling and glucose uptake in skeletal muscle cells. Scientific Reports. 14, 17496. <https://doi.org/10.1038/s41598-024-68613-2>.

Yasuda, K., Kinugasa, T., Hamori, S., Yugami, K., & Masumoto, K. (2024). Empirical study about the effect of parental and child longevity on child education under COVID-19. International Journal of Economic Policy Studies, 18(2), 341-356.

3) 査読付き論文

秋元忍 (2025) 「書評 古林英一『公営競技史』2023 年, 角川新書」『体育史研究』, 第 42 号, 印刷中.

Yamamoto A, Yanagita Y, Miyamura Y, Tachibana T, Yamamoto Y, Kimura T, Tamagawa M. (2024). Observation of deformation process of elastic tubes for pulsatile flows by impinging jet flows and its application to novel measurement method of blood pressure. Journal of Advanced Research in Fluid Mechanics and Thermal Sciences, 119:149-159.

高見和至 (2023). 日本語版自己報告式習慣指標 (SRHI-J) の開発, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 16-2, pp. 29-40.

高見和至 (2023). 運動習慣の心理的プロセスの探究 —運動・喫煙・パチンコ他における習慣強度の構造—, スポーツ心理学研究, 50-2, pp. 62-75

乾順紀・長ヶ原誠(2024) 就学期を通じてのフィジカルリテラシー形成プロセスに関する研究: 定期的な運動習慣を有する成人に着目して. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 51-62.

乾順紀・長ヶ原誠(2024) 日本語版フィジカルリテラシー評価尺度作成に関する研究: わが国の高校生への適用可能性. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 63-76.

三浦敬太・長ヶ原誠・谷めぐみ (2024) 現在のスポーツ参画志向が将来のスポーツ参画志向意図に与える影響: 2 つの市民調査データを用いて. 生涯スポーツ学研究, 21(1): 17-27.

原田和弘, 上村一貴, 齋藤義信, 根本裕太, 小熊裕子. (2024). 健康寿命延伸に貢献するサステナブルな地域実践研究. 日本健康教育学会誌, 32: 330-334

中村彩希, 稲山貴代, 原田和弘, 荒尾孝. (2024). 成人の野菜摂取行動に関連する態度, 主観的規範, 自己効力感, 行動変容ステージ—世帯収入別にみた多母集団同時分析—. 日本健康教育学会, 32: 136-147

竹下誠隆, 原田和弘, 田村進. (2024). 大学生の運動意図・行動に関連する促進・阻害要因の検討. 健康支援, 26: 137-144

増本康平・原田和弘・谷口隆晴・打田篤彦・近藤徳彦（印刷中）社会的つながりへの介入による超高齢社会のウェルビーイングの実現—介入の理論・方法・評価— 心理学評論.

4. 著書

1) 分担執筆

Benio Kibushi. (2023), Recent Advances in Alternative Medicine : Electromyography Biofeedback to Improve Dynamic Motion, Mordeniz, C. (Ed.). IntechOpen. 1-14

増本康平（2024）高齢期の発達科学（担当箇所：第2章 高齢期の記憶），新曜社

編著

伊藤央二・大勝志津穂・北村尚浩・工藤康宏・長ヶ原 誠. 生涯スポーツ実践論（改訂5版），市村出版，2024年5月

2) 総説・書評など

木伏紅緒（2024）身体運動における筋協調パターンのばらつき．日本神経回路学会．印刷中．

増本康平 記憶と幸福の幸せな関係とは？ 毎日新聞医療プレミア 2023.6

5. シンポジウム開催など

（片桐恵子）

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 国際研究セミナー ‘Overview and future perspectives on digital skills of older people in Estonia

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 第2回国際研究セミナー ‘Overview and future perspectives on digital skills of older people in Estonia ‘Can adult education and lifelong learning address loneliness and isolation in Japan and Ireland? ‘

神戸大学ウェルビーイング先端研究センター 第3回国際研究セミナー ‘Dementia Caregiver Well-being: Cultural Issues and Definitional Problem’ ‘Enhancing the Well-being of Family Caregivers: Cross-country Comparative Studies’

神戸大学ウェルビーイング推進本部&ウェルビーイング先端研究センター‘神大みんなとウェルビーイングをはじめよう！：ウェルビーイング研究実践のためのワイガヤシンポジウム’

(木伏紅緒)

シンポジウムタイトル: 環境と調和するスキルの可能性を探る VOL.4 運動・スポーツスキルの先端研究 【学術 Weeks2024】

開催日: 2024 年 1 月 26 日

場所: KOBE Co CREATION CENTER

演者等: 樋口貴広 (東京都立大学・演者), 瀧山健 (東京農工大学・演者), 森山真衣 (京都大学・演者), 木伏紅緒 (神戸大学・コーディネーター・司会), 木村哲也 (神戸大学・コーディネーター), 野中哲士 (神戸大学・指定討論者)

(佐藤幸治)

京都滋賀体育学会第 153 回大会 シンポジウム

「運動・栄養に中高齢者の肥満・糖尿病予防に向けた基礎的研究」

(増本康平)

増本康平 (企画) 異分野共創で切り拓くウェルビーイング社会 -いっしょに未来の可能性を探るシンポジウム-, 神戸大学ウェルビーイング推進本部, ウェルビーイング先端研究センター主催, 2025. 2. 28

増本康平 社会的つながりの形成による超高齢社会の well-being の実現, MIRAI BOSAI 2025, 神戸大学未来世紀都市学研究アライアンス主催, 2025, 3. 9.

6. 受賞

受賞者: 山下 泰生, 打田 篤彦

第 3 回計算社会科学大会 大会優秀賞, トピックモデルが映すマリア=テレジア時代の政治力学: ウィーン宮廷長官による 35 年間の日誌を対象に, 計算社会科学会

受賞者: 水野風紗・記藤陽亘・松野有沙・渡邊碧・三浦敬太・長ヶ原 誠 (2024)

受賞名: 日本生涯スポーツ学会第 26 回学会大会ポスター発表最優秀賞

受賞演題: スポーツ参画が主観的気力年齢に及ぼす影響～年代・性別に着目して～

受賞者: 原田和弘

受賞名: 第 12 回日本介護予防・健康づくり学会大会優秀発表賞

受賞理由: 第 12 回日本介護予防・健康づくり学会大会の一般研究発表において優秀な発表と認定されたため。

受賞者: 原田和弘

受賞名: 第 13 回前之園記念若手優秀論文賞

受賞理由: Journal of Gerontology 誌に掲載された論文が優秀なものと認定されたため。

行動系の総括と課題

国内外で活動的な研究活動を教員各自が展開し、本年度も研究資金獲得を伴う研究の進展とその成果は着実に挙げられている。国際共同研究もこれまでの継続に加え、新規研究が拡大しており、来年度以降もそれらの成果と発展が表れてくることが期待できる。今後は各研究分野における更なる研究の進展とともに、外部資金の獲得にも注力しつつ、国際的な共同研究をさらに推進したい。課題としては、研究成果の発信や理論化により著書出版の増加や、各研究室の大学院生の研究活動への研究指導と支援による研究成果を行動系より発信していくことが挙げられる。

●教育系

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：北野幸子(共同研究者)

研究代表者：榊原洋一（CRN 所長，お茶の水女子大学名誉教授）

共同研究者(海外)：Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philippine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan), Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal University, China), Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者(国内)：星三和子(十文字女子大学)，佐藤朝美(愛知淑徳大学)，深見俊崇(島根大学)

研究課題：子どもへのレジリエンスの育成を実践につなげるためのインタビュー調査

研究資金：Child Research Net Asia, ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要：8 か国を対象に、レジリエンスと社会情動的スキルという用語を保育者がどのように認識しているかを明らかにするためのインタビュー調査を実施した。また子どものレジリエンスや社会情動的スキルの育成に関する実践例を収集した。今後は、それらのデータを解析し、国際比較を行う予定である。

本専攻研究者：北野幸子(共同研究者)

研究代表者：西田幸代(研究代表者)

共同研究者(海外)：西田幸代 (University of Aberdeen)

研究課題：園と家庭との連携に関する実態調査 Family Involvement in Early Childhood Education: The Perspectives and Experiences of Early Childhood Professionals

研究資金：特になし。

研究概要：保育者と家庭との連携協働や保護者の園へのエンゲージメントの状況について、保育専門

組織の関係者にインタビュー調査を行い、コロナ禍以降、どのように参画が促されたのか、また実施されてきたのか等、を調査し分析している。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark A. Chinn (Rutgers University), Qiuyu Lin (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学）、大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

(2) 国内共同研究等

科研（代表者）

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子（神戸大学）

研究課題：位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金：挑戦的研究（萌芽）（課題番号 23K17616）

研究概要：位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し、養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し、保育者養成教育における活用方法と、活用可能な教材の開発を試みている。

本専攻研究者：木下孝司

研究代表者：木下孝司

研究課題：文化伝達に着眼した幼児期の「集団の育ち」に関する評価

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：幼児期の保育において、「集団の育ち」と言われるものを、文化進化論的観点から文化伝達に着眼して検討して、保育者の集団づくりを分析する研究。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：目黒強（神戸大学）

研究課題：明治期における巖谷小波の評論活動に関する基礎的研究

研究資金：基盤研究（C）（一般）（課題番号 24K03657）

研究概要：明治期における巖谷小波の評論活動について、『大日本婦人教育会雑誌』を中心に検討を加え、小波の婦女子観とお伽口演・お伽嘶観とが相互作用しながら形成される過程を明らかにした。

本専攻研究者：津田英二，稲原美苗，赤木和重，川地亜弥子，山本健太

研究代表者：津田英二

共同研究者：殿垣亮子，橋田慈子

研究課題：アクションリサーチに基づく「兵庫モデル」を基盤とした障害者の生涯学習研究拠点構築

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B）（代表：津田英二）

研究概要：障害者が学びの場から排除されている状況を是正し，障害者の生涯学習実践や生涯学習推進政策を進めていくにあたって，アクションリサーチや理論研究の側面からアプローチする共同研究である。

本専攻研究者：赤木和重・川地亜弥子・勅使河原君江

研究代表者：川地亜弥子（神戸大学）

研究課題：オーラシー育成に関する理論と実践：教育評価・環境デザイン・福祉的支援の観点から

研究資金：基盤研究（B）（一般）（24K00369）

研究概要：オーラシー教育に関する理論と実践について，今年度は教育評価の観点から分析し，日本における授業開発を試みた。

本専攻研究者：石田智敬

研究代表者：石田智敬

研究課題：新しい形成的アセスメントの理論的・実践的構築

研究資金：科学研究費補助金・若手研究

研究概要：本研究では，フィードフォワードやフィードバックを中心原理とするアプローチとは原理的に全く異なる「新しい形成的アセスメント」論を構築することを目的とする。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：中谷奈津子

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大阪公立大学）・春木裕美（関西国際大学）

研究課題：保育所等における個別支援の充実を図る推進事業等に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 23H00950）

研究概要：保育所等における特別な配慮を必要とする子どもや家庭に対する個別支援の推進事業等の実態を把握し，その効果や課題などを明らかにする。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀

研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者：山口悦司，坂本美紀，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，Erkki Tapio Lassila

研究代表者：山口悦司

研究課題：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発
(課題番号 23K17592)

研究資金：2023～2025 年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発を行っている。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：山下晃一（神戸大学）

研究課題：分権型教員人事の存立要件に関する日・米・英比較研究：教員集団への影響に着目して

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：本研究は、公立小学校を主たる対象に絞りながら、各々異なる分権化の度合い・質を持つ米国・英国・日本の現状を比較調査し、分権型の教員人事が教員集団へ与える影響に着目した上で、その存立要件の解明を目的とするものである。

科研（分担者）

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：宮本健市郎（関西学院大学）

研究課題：新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的研究

研究資金：2020～2024 年度・科学研究費助成事業 基盤研究(C) （課題番号 20K02529）

研究概要：新教育を主張した人物の思想、または新教育を実施した学校において、自然保護のための教育がどのような形で構想され、実施されたのかを確認し、それが人間中心（子ども中心）の教育を超える視点があったかどうかを考察した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：藤掛絢子（ノートルダム清心女子大学）

研究課題：実習との往還を図った音楽表現領域における保育者養成教育プログラムと評価の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号 21K02418）

研究概要：保育領域「表現」の特に音楽表現に関して、往還型の養成教育の国内外の実践事例についてのデータを収集した。国内の養成教育における講義・演習と園での実習との往還的養成教育のプログラムとその評価方法の開発の実態を調査した。また実際に開発されたプログラムと評価方法についての考察を加えた。

本専攻研究者：岡部恭幸

研究代表者：下村岳人（島根大学）

研究課題：算数科における「合意形成を図る力」を育成する学習指導モデルの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

研究概要：本研究は、これまでの能力育成に関する研究の延長線上に位置づき、算数科における「合意形成を図る力」の育成を意図した具体的な学習指導モデルを開発し、その効果を事例と共に明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者： ラッシラ，エルッキ・タピオ（分担者）

研究代表者： 隅田学（愛媛大学）

研究課題： ノンフォーマルな特別科学教育が育成する異才とその教育資本

研究資金：2023—2026 年度 科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)

研究概要：我が国では、「特定分野に才能を持つ子供」への教育は、学校外のノンフォーマルな文脈において、科学教育分野を中心に先行的に進みつつある。本研究は、東京、兵庫、愛媛、香川、沖縄をサイトとし、JST グローバルサイエンスキャンパス、ジュニアドクター育成塾、APCG ユースサミット、愛媛大学 Kids Academia に参加する子ども達及びその関連リソースを対象に、アクターネットワーク理論を援用して調査、分析を行い、①日本型「異才」を具象化すると共に、②「アクター」環境要因を抽出し、③教育資本の index を独自に作成し、そのインパクトをモデル化し、④幼年期から青年期におけるその発達のダイナミズムを探る。

本専攻研究者：ラッシラ，エルッキ・タピオ（分担者）

研究代表者：大貫 麻美（白百合女子大学）

研究課題：サステナビリティ・コンピテンシーを培う幼児向け STEAM プログラムの開発と評価

研究資金：2022～2027 年度・基盤研究(B)（22H01067）

研究概要：持続可能性のある社会の構築を能動的かつ協働的に実現していく力（サステナビリティ・コンピテンシー）の涵養は現代の科学教育に強く期待される課題の一つである。本研究では生涯にわたる人間形成の基盤が構築される幼児期に着目し、幼児期に培われるべきサステナビリティ・コンピテンシーを明らかにする。また、こうした国際的な学術的知見をふまえつつ、日本の幼児教育内容との関係性を明瞭かつ平易な日本語で表した、日本の幼児教育実践現場で活用可能なサステナビリティ・コンピテンシー評価規準を作成する。そして、その評価規準に呼応した系統性のある STEAM 教育プログラムを開発する。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：後藤玲子（帝京大学）

研究課題：ケイパビリティ毀損と人間の尊厳—福祉経済政策の倫理と哲学—

研究資金：学術変革研究領域（A）尊厳学の確立：尊厳概念に基づく社会統合の学際的 パラダイムの構築に向けて（課題番号 23H04855）

研究概要：本研究の目的は、ケイパビリティ理論・生命倫理学・現象学などの理論的知見と、精神・身体障害者・認知症患者の尊厳に関する調査を参照させることにより、より包括的な福祉経済政策を提言することにある。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：石田絵美子（兵庫医科大学）

研究課題：病院から地域への精神科看護実践の移行に伴う関係性と連携に関する現象学的研究

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号 23K09943）

研究概要：本研究は、精神障害者への支援を病院から地域というつながりのあるケアシステムの中で捉えた上で、特に精神科看護実践の基盤となる「関係性」に注目しつつ多職種連携による精神科看護実践のあり方を明らかにすることを目的とする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：明治以降の絵葉書に見る児童文学・児童文化の研究－巖谷小波旧蔵資料の分析－

研究資金：基盤研究(C)（一般）（課題番号：24K03683）

研究概要：巖谷小波関連資料の収集・整理を行うとともに、小波門下である竹貫佳水を中心としたネットワークを明らかにした。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表植田健男，2020 年度科研費（2020～2024 年度）基盤研究(A)「学習指導要領体制」の構造的変容に関する総合的研究」。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表浅野慎一，2021 年度科研費（2021～2024 年度）基盤研究(B)「戦後日本の夜間中学にみる公共圏の史変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から」。

本専攻研究者：赤木和重・稲原美苗・川地亜弥子・津田英二・橋田慈子・山本健太

代表津田英二，2024 年度科研費（2024～2028 年度）基盤研究(B)「アクションリサーチに基づく「兵庫モデル」を基盤とした障害者の生涯学習研究拠点構築」。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表本田伊克，2024 年度科研費（2024～2026 年度）基盤研究(C)「教育実践における学習の事実の解明—子どものことばの意味の育ちに着目して」。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：中谷奈津子

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）・木曾陽子（大阪公立大学）・春木裕美（関西国際大学）

研究課題：保育所等における個別支援の充実を図る推進事業等に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号 23H00950）

研究概要：保育所等における特別な配慮を必要とする子どもや家庭に対する個別支援の推進事業等の実態を把握し、その効果や課題などを明らかにする。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：亀崎美沙子（十文字学園女子大学）

共同研究者：鶴宏史（武庫川女子大学）

研究課題：保育における倫理的意思決定モデルに関する基礎研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（課題番号 21K02333）

研究概要：本研究では、国内外の倫理的ジレンマの収集・分析を行い、保育における倫理的意思決定モデルの構築を行う。

本専攻研究者：中谷奈津子

研究代表：木曾陽子（大坂公立大学）

研究課題：3歳未満児保育と小規模保育事業におけるインクルーシブ保育のあり方の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（課題番号 24K05839）

研究概要：3歳未満児保育や小規模保育事業所において、特別なニーズのある子どもに対するインクルーシブ保育の実態と課題を明らかにし、先駆的实践から3歳未満児保育と小規模保育におけるインクルーシブ保育のあり方と必要な支援等を検討する。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム（課題番号 24K00467）

研究資金：2024～2026年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシー教育プログラム開発を行っている。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

研究代表者：坂本美紀

研究課題：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法（課題番号：22K18625）

研究資金：2022～2024年度・挑戦的研究（萌芽）

研究概要：意思決定エージェントとしての市民を育成する変革的リスクリテラシーの指導法と評価法の開発に取り組んでいる。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男（専修大学）

研究課題：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発（課題番号：23H01010）

研究資金：2023～2026年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：矛盾する情報の評価・統合過程をメタ認知し変容する力を育む協調学習プログラムの開発

に取り組んでいる。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

地方公共団体・神戸大学など

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：無藤隆（保育教諭養成課程研究会 理事長）

研究課題：文部科学省「令和6年度幼児教育の学び強化事業」子育ての支援や家庭等との連携強化に関する調査研究 幼稚園等における0～2歳児を受け入れて行うふさわしい活動とその展開の在り方に関する研究

研究資金：文部科学省「令和6年度幼児教育の学び強化事業」

研究概要：満3歳以上の子供を対象とした幼児教育を行っていた幼稚園等で、その特性を活かした保育内容の工夫や子育ての支援がどのように行われているのか、0～2歳児の受入れの実際について調査をおこなった。アンケート調査チームの責任者として、調査分析をおこなった。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：掘越紀香（国立教育政策研究所 幼児教育研究センター 副センター長）

研究課題：幼小接続期における教育の質の基盤形成に関する研究

研究資金：国立教育政策研究所 プロジェクト研究

研究概要：幼小接続期の教育における幼児教育センターの役割・機能に関する研究（センター機能班）の所外研究分担者として、地域の幼児教育センター機能の実態について調査し、各地教育委員会とともに幼児教育アドバイザー等を対象とした試行的な研修開発と実施に従事した。

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：神戸市こども家庭局事業費

研究概要：神戸市事業として乳幼児保育研究部会を立ち上げ、遠隔公開保育の方法の開発、実践事例の可視化と発信方法の開発等、保育の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性についての検討をおこなっている。本年度は特に地域における自立的研修体系の構築方法について検討した。

研究代表者：村瀬瑠美

研究課題：乳幼児の「身体のおかしさ」に関する調査―体と心をつなぐ「身」に焦点を当てた課題発見と異分野共創的課題解決の提案―

研究資金：高等学術研究院テニュアトラック教員（B 制度）

研究概要：現在のわが国の乳幼児が抱える「身体のおかしさ」を「身」の概念に着目して明らかにし、乳幼児期から子どもたちの「身体」を育んでいくための方策を提示することを目的とする。

本専攻研究者：津田英二，赤木和重，川地亜弥子，勅使河原君江，稲原美苗，大田美佐子，関典子，余田有希子，佐賀達矢，松岡広路，生田邦紘，井上太一，輪玉芳野，荒木絃太

研究代表者：津田英二

共同研究者：加戸友佳子，黒川陽司，下木なつみ，黒崎幸子，倉智綾美，藤田雅子，多田千景

研究課題：地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築

研究資金：文部科学省「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」（代表：津田英二）

研究概要：知的障害者に大学教育を開くことをめぐる理論的・実践的課題を明らかにし、大学教育プログラムを開発・実施する実践的なモデル開発研究，及び兵庫県内の障害者の生涯学習機会創出のモデル開発を行なう研究であり，文部科学省からの受託研究として，兵庫県教育委員会と協働連携して実施している。

本専攻研究者：寺村ゆかの，津田英二

研究代表者：津田英二

研究課題：子育て支援拠点プログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市地域子育て支援拠点事業補助金」

研究概要：2005 年より運営している「のびやかスペースあーち」において，子育てに関わる多様な人々との出会いや交流を通して，そこで出会った利用者らが互いの立場を理解し互いに学び合うこと，そしてそこから生まれる新たな価値観を共有するためのプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：津田英二，寺村ゆかの

研究代表者：津田英二

研究課題：子どもの居場所づくりプログラムモデル開発

研究資金：神戸市「神戸市子どもの居場所づくり補助金」

研究概要：2005 年より運営している「のびやかスペースあーち」において，社会参加機会の少ない子どもたちを中心に，多様な人たちのエンパワメントの場として活用できるプログラムモデルの開発を行う。

本専攻研究者：川地亜弥子

代表川地亜弥子，2023 年度北野生涯教育振興会生涯教育研究助成金『中等後教育において「書くこと」を通じた知的障害者の新たな発達の可能性』。研究分担者：津田英二，赤木和重

(3) 論文

国際共著論文

該当なし

査読付き論文

渡邊隆信 (2024) 「教育関係論からみた道德教育—シンポジウムについての覚書—」『道德教育論叢』(日本道德教育方法学会), 第2号, 2024年8月, pp.74-80

赤川峰大・岡部恭幸 (2024), 理由を説明することに関わる小学生の実態; 小学校第5学年「図形の内角の和」に焦点を当てて, 数学教育学会誌, 65 (1・2), pp.25-38, 査読あり.

Lassila, E.T. & Hyry-Beihammer E.K. (2024) . Lahjakkaat oppijat osana inkluusiota: Opettajaopiskelijoiden käsityksiä. Kasvatus 55(5), 538-556.
<https://doi.org/10.33348/kvt.154614>

目黒強(2024)「大正期における副読本としての課外読み物論—『国語教育』を事例として—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科編『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第18巻第1号, pp.15-24, 査読有り。

津田英二「障害者の文化芸術活動と障害認識の向上をつなぐ学び」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.43, 2024年11月, pp.118-129

Mochizuki, T., Chinn, C. A., Oura, H., & Yamaguchi, E. (2024. 6). Recognizing cherry-picked data in scientific information: Epistemic challenge toward understanding comprehensive evidence. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024, 1243-1246.

Oura, H., Mochizuki, T., Chinn, C. A., Yamaguchi, E., & Lin, Q. (2024. 6). The role of instruction in shaping reasoning about bodies of evidence: An experimental comparison. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024, 1263-1266.

Yamaguchi, E., Chinn, C. A., Oura, H., & Mochizuki, T. (2024. 6). Do undergraduates use the criterion of fit with multiple lines of evidence when evaluating conflicting scientific claims? Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024, 2145-2146.

Chinn, C. A., Mochizuki, T., Lin, Q., Yamaguchi, E., & Oura, H. (2024. 6). Resolving expert disagreement by evaluating misrepresentations. Proceedings of International Conference of the Learning Sciences 2024, 2515-2516.

勅使河原君江「英国 Oracy 教育と日本の対話的美術鑑賞実践の架橋—Voice21 資料の視点からの実践検討を通じて—」『教育科学論集』第 28 号, 2025 年 3 月, (印刷中)

査読無し論文

渡邊隆信 (2025) 「フォーゲラーのバルケンホフ労作学校に関する覚書—ドイツ新教育における自然観への一視角—」, 2020~2024年度科学研究費助成事業(学術助成基金)基盤研究(C)(一般) 研究成果報告書「新教育運動期における自然保護運動の昂揚と環境教育の起源に関する比較史的研究」(課題番号 20K02529), pp. 77-89。

渡邊隆信 (2024) 「図書紹介: ディートリッヒ・ベンナー(牛田伸一訳)『一般科学教授学綱要—教員養成・授業・研究のための基礎と方向づけ』」『教育哲学研究』(教育哲学会) 第130号, pp. 137-139。

稲原美苗 (2024) 「つながりの現象学—ケアのコミュニティを考える」, 『東洋学術研究』, 第63巻, 第1号, 公益財団法人東洋哲学研究所, pp. 54-71.

稲原美苗 (2024) 「ジェンダーとセクシュアリティ」, 『臨床心理学—増刊第16号 臨床心理実践サバイバルガイド』, 金剛出版, pp. 58-63.

津田英二・小林洋司・堤英俊・橋田慈子・松田弥花「分断を超克する社会教育・生涯学習の理論的枠組みの提示」『社会教育学研究』第60巻1号, 2024年6月, pp. 89-91

津田英二「障害の問題は社会教育研究と実践に何を問いかけているか」『社会教育学研究』第60巻2号, 2024年11月, pp. 67-76

妹尾歩美・宇佐見伊吹・中谷奈津子 (2024) 「保育所等保育者と児童養護施設職員におけるストレス要因: 先行研究レビューを通じた比較分析」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第18巻第1号, 77-88.

山下晃一, 榎景子, 長尾悠里 (2024) 「教員制度の社会基底としての「地域」再考」『教育制度学研究(日本教育制度学会)』第31号, pp. 209-215。

山下晃一 (2024) 「現代の学校と教員をめぐる自律性と『秩序』問題 —奈良教育大学附属小学校問題の予備的考察—」『季刊教育法』第222号, pp. 20-27。

山下晃一 (2024) 「図書紹介: 濱元伸彦・中西広大『学校選択制は学校の「切磋琢磨」をもたらしたか—大阪市の学校選択制の政策分析から—』」『日本教育政策学会年報』第31号, pp. 212-213。

山下晃一 (2024) 「高度な人材育成への要請をどう受けとめるか」『教職研修』52(8), pp. 34-35。

(4) 著書

単著

石田智敬(2025)『学習評価論における質的判断アプローチの展開：ロイス・サドラー学識の解剖と再構成』京都大学出版。

編著

北野幸子（監修）（2024 春・秋号）『これからの幼児教育』ベネッセ総合教育研究所。

幼稚園・保育所の運営研究会（渡邊秀則・北野幸子・草山充・佐藤暁子・大竹節子）編（2024）『幼稚園・保育所の運営トラブル解決事例集』第一法規。

編集委員会（秋田喜代美・浅井幸子・大方美香・大豆生田啓友・北野幸子・古賀松香・汐見稔幸・砂上史子・松井剛太・無藤隆・矢藤誠慈郎）編（2024 年度月刊誌）『保育ナビ』フレーベル館。

最新 保育士養成講座 総括編纂委員会（秋田喜代美・岩田力・柏女霊峰・北野幸子・山縣文治）編（2024）全国社会福祉協議会。

大豆生田啓友・北野幸子・砂上史子編（2025）『保育内容総論』ミネルヴァ書房。

津田英二・伊藤真木子・鈴木眞理編著『生涯学習と社会教育の基礎』人言洞，2024 年 11 月，全 183 頁

分担執筆

北野幸子（2024）「幼児教育の現代的課題と領域「言葉」」『新訂 事例で学ぶ保育内容 領域言葉』

北野幸子（2024）「乳幼児期からの育ちと学びへの期待と支援」，溝邊和成，松田雅代，永井毅，長田悠佑編著『子どもと教師の学びと育ち ―新時代の探究をひらくポイント 61+α』三学出版，pp. 74-78。

北野幸子(2025)「就学能力をめぐる議論」「モンテッソーリ」『教育方法学辞典』，学文社。

Lassila, E. T. & Hyry-Beihammer, E. K. (2024). Examining cross-cultural spaces and researcher positions in narrative research. In E. K. Hyry-Beihammer, O. Ylitapio-Mäntylä & M. Uitto (eds.) Narratives in educational research - Methodological perspectives (pp.13-32). London: Springer Cham. (ISBN 978-3-031-68349-7)

稲原美苗（2024）「第 5 章 ジェンダー平等社会に向けた人々の学び」，津田英二・伊藤真木子・鈴木眞理編著『生涯学習と社会教育の基礎』，人言洞，pp. 48-62.

石田智敬(2024)「第2章 学習評価」「エッセイ ミネルバ大学訪問記」「第6章 学生からみたミネルバ―長期的インタビューを通じて― 第4節」松下佳代編『ミネルバ大学を解剖する』東信堂。

石田智敬訳(2024)「第10章 学習に向けてアンラーンすること」「第11章 学習の科学」松下佳代監訳『ミネルバ大学の設計書』東信堂(分担翻訳)。

亀崎美沙子・鶴宏史・中谷奈津子(2024)『保育者のための専門職倫理ハンドブック：事例から学ぶ実践への活用法』明石書店

山下晃一(2024)「第2章 教育経営の概念と教育経営学の教育学的特質」元兼正浩編『実践の学としての教育経営学の探究』花書院, pp. 17-31。

総説・書評など

北野幸子(2024)「保育の仕事の魅力発信を」『まことの保育』2024年7・8月号。

矢藤誠慈郎, 北野幸子, 大竹龍, 伊藤唯道(2024)「養成校と連携し, 保育人材をともに育てていく 保育士養成校×保育施設」『ぜんほきょう』2024年7月 pp. 2-7

北野幸子(2024)「地域の学び合いで研修づくり・園づくり 兵庫県神戸市 0～3歳未満児の質の向上・維持のために互いの保育を見て学びあう(前編)」『保育ナビ』2024年8月 pp. 26-28。

北野幸子(2024)「地域の学び合いで研修づくり・園づくり 兵庫県神戸市 0～3歳未満児の質の向上・維持のために互いの保育を見て学びあう(後編)」『保育ナビ』2024年9月 pp. 26-28。

北野幸子(2024)「保育者養成と現場とのつながり」日本保育者養成教育学会ニューズレター9月号

北野幸子(2024)「人材育成わいわい語り場Ⅲ 第7回, 管理栄養士と共に保育をつくる ①子どもの食生活の課題と保護者の悩み」『保育ナビ』2024年10月 pp. 60-63。

小市舞, 北野幸子, 島野有加(2025)「子どもの声を起点にした「架け橋プログラム事業」」『保育の友』2024年11月号 pp. 12-19。

北野幸子(2024)「人材育成わいわい語り場Ⅲ 第8回, 管理栄養士と共に保育をつくる 食にかかわる保護者支援」『保育ナビ』2024年11月 pp. 60-63。

北野幸子(2024)「園における情報機器との新たな関係性を考える」『幼児教育じほう』2024年12月

北野幸子(2025)「世界の乳幼児教育・保育の動向」『保育通信』2025年3月号, pp. 6-9。

大豆生田啓友・北野幸子・岸野麻衣(2025)「令和六年度幼児教育の理解・発展推進事業中央協議会

報告「幼児教育・保育の質の向上に向けた地域における連携体制の構築・展開・発展」 初等教育資料 2025年3月号 pp.74-83。

北野幸子（2024-2025：月1連載）「こどもまんなか時代の保育へ①～④」『遊育』。

稲原美苗（2024）「ジュリア・クリステヴァ（2016 [1980]）『恐怖の権力—くアブジェクション—』試論」枝川昌雄訳 法政大学出版局，山本貴光・吉川浩満編集『人文的，あまりに人文的 No.3 アンケート特集：最後の哲学書』，哲学の劇場，pp.13-19

稲原美苗（2025）「フェミニスト現象学からマイノリティの経験を考える」，『#心とは何か』，金子書房，<https://www.note.kanekoshobo.co.jp/n/nb39075d79910>

村瀬瑠美・市川まや（2024）「人と出会うことから」『女子体育』第67巻，第1号，pp.6-9.（公社）日本女子体育連盟。

中谷奈津子（2024）「特集 孤立・孤独に抗うソーシャルワーク 子育て支援の視点からみた孤立・孤独」『ソーシャルワーク研究』第8号，276-282.

川地亜弥子（2024）「自由な学校と食べること」『兵庫教育』第879号（5月号），p.40。

川地亜弥子（2024）「90年前の教員志望者の記録に出会う」『兵庫教育』第881号（7月号），p.40。

川地亜弥子（2024）「朝の小1の壁」『兵庫教育』第883号（9月号），p.40。

川地亜弥子（2024）「不登校の子の日記の変化」『兵庫教育』第885号（11月号），p.40。

川地亜弥子（2025）「手紙から学ぶこと」『兵庫教育』第887号（1月号），p.40。

川地亜弥子（2025）「学校と人間形成」『兵庫教育』第889号（3月号），p.40。

川地亜弥子（2024）「インタビュー：なかまと共に学ぶ・楽しむ ～ようこそ KUPI へ～」きょうされん『TOMO』第533号，pp.8-9。

木下孝司（2024）子どものうそと発達 みんなのねがい 703，20-23.

(5) シンポジウム開催など

稲原美苗（2024）「教育講演4 多様な当事者のニーズについて考える～ある障害当事者の経験から～」，第62回全国大学保健管理研究集会—時代の変化を意識した大学保健管理，ダイバーシティ（多

様性)に着目して, (2024 年 10 月 17 日・神戸国際会議場), プログラム・抄録集 p. 30. 招待あり.

稲原美苗 (2024)「コロナ禍における障害者の『すこやかさ』について臨床哲学的に考える」, 第 83 回 日本公衆衛生学会総会 メインシンポジウム 3「わかり合えない他者と, すこやかに生きる」 座長:中岡成文, 登壇者 稲原美苗・大北俊全・中岡成文, (2024 年 10 月 30 日・札幌コンベンションセンター), 抄録集 p. 69. 招待あり.

稲原美苗 (2024)「大学における障害者支援の課題と今後の展開: 障害のある教員の立場から考える D&I」, 第 36 回日本生命倫理学会年次大会 学会企画シンポジウム「生命倫理学と障害者差別の解消: 配慮と対話の交錯」, (2024 年 11 月 16 日・立命館大学大阪いばらきキャンパス), 抄録集 p. 72. 招待あり.

稲原美苗 (2025)「ディスアビリティとジェンダーの交差性と障害女性の尊厳—フェミニスト現象学的観点から—」, 学術変革領域研究 (A) 尊厳学の確立: 尊厳概念に基づく社会統合の学際的パラダイムの構築に向けて—B03 主催 ワークショップ 「現象学と尊厳—経験と差別を考える」, (2025 年 2 月 15 日・神戸大学鶴甲第 2 キャンパス).

川地亜弥子 (2024)「5 歳後半から 7 歳 就学に向かう時期の発達」発達保障研究センター主催教育と保育のための発達診断セミナー, オンライン, 2024 年 6 月 2 日, 招待あり.

川地亜弥子「現代の小学校における生活と授業と子どもの表現」日本カリキュラム学会第 35 回全国大会課題研究Ⅱ (研究委員会主催)「多様な学びと学校の課題」, 筑波大学, 2024 年 7 月 6 日, 招待あり.

川地亜弥子 (2024)「生活綴方における表現指導と生活指導」日本カリキュラム学会第 35 回大会自主企画シンポ「ライティング教育の可能性—アカデミックとパーソナルを架橋する—」筑波大学, 2024 年 7 月 6 日 (企画・司会・コーディネータ).

日本カリキュラム学会広報・若手育成委員会主催 (2024)「課題研究Ⅳ カリキュラムの「不易と流行」を語るⅤ—研究としての「面白さ」を語り合う—」, 第 35 回全国大会, 筑波大学, 2024 年 7 月 7 日, 川地亜弥子 (企画・司会・コーディネータ).

日本教育方法学会第 60 回記念大会課題研究Ⅰ (2024)「学習指導要領の教育方法学的検討—学校を主体とした目標づくりと教育課程編成を考える—」北海道大学, 2024 年 10 月 13 日, 川地亜弥子 (企画・司会・コーディネータ, 記録作成).

教育目標・評価学会中間研究集会Ⅱ (2024)「学習指導要領の基準性」オンライン, 2024 年 6 月 15 日, 川地亜弥子 (企画・司会・コーディネータ)

教育目標・評価学会大会課題研究Ⅰ（2024）「調査書（内申書）と接続問題」東海大学，2024 年 12 月 7 日，川地亜弥子（企画・司会・コーディネータ，記録作成）。

学術 Weeks（2024）「ライティング・シンポジウムⅣ：教師教育とライフ・ライティングースペイン第二共和制下におけるリエイダ地方の事例をもとに」人間発達環境学研究科 A427・オンライン併用，2024 年 10 月 28 日，川地亜弥子・枝廣直樹（企画・司会・コーディネータ）。

学術 Weeks（2025）「シンポジウム：米仏のライティング教育文化を読み解くーアカデミックとパーソナルという視点ー」オンライン，川地亜弥子・石田智敬・友永達也・植田涼香・賀内望（企画），2025 年 3 月 15 日。

子ども教育学科国際シンポジウム（2024）「教師教育における記録の可能性ー日西米を架橋してー」人間発達環境学研究科 F257・オンライン併用，2024 年 1 月 25 日，川地亜弥子（企画・司会・コーディネータ）。

松岡広路，後藤聡美，稲原美苗，津田英二（2025），学術 Weeks:ESD 実践研究シンポジウム，神戸大学，2025 年 12 月 7, 8 日

(6) 受賞

令和 6 年度社会教育功労者表彰：目黒 強

受賞者：中谷奈津子・鶴宏史・木曾陽子・吉田直哉・関川芳孝

受賞名：一般社団法人日本保育学会 保育学文献賞

受賞理由：中谷奈津子編著（2024）『保育所等における子ども家庭支援の展開ー生活困難を支える園実践の質的分析ー』（晃洋書房）に対して。保育学の発展や保育実践の向上に非常に有意義であると考えられる優れた文献であると評価されたため。

受賞年月：2024 年 2 月 15 日

(7) 教育系の総括と課題

新型コロナウイルス感染による制限が撤廃され，国際的または全国規模の研究活動が幅広く実施されている。とくに本年度は，外部研究資金の獲得および研究を集約し世に問う著書執筆の成果が顕著である。また，複数分野の研究科教員や指導学生と連携・共同した研究成果発表も多い。教育実践現場に寄与する研究成果の還元については，シンポジウム・セミナー等を多数実施することができた。今後さらなる共同研究，著作出版や国内学会を軸とした成果発表，および地域に根差した研究のバランスの取れた発展が期待される。

（人間発達専攻長 木下孝司）

7.7.2. 人間環境学専攻

研究プロジェクト（専攻研究者が代表者で、研究費総額 200 万円以上）

＜自然環境論＞

研究代表者（本専攻教員）：青木茂樹

研究分担者：中野敏行（名古屋大学）、連携研究者：高橋覚（本専攻教員）

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による GeV/sub-GeV 宇宙ガンマ線の謎の解明

研究資金：科学研究費補助金・基盤（A）、2023-2025 年度、総額（直接経費）3,590 万円

研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し、天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

研究課題：流動と拡散の協働現象の一般的な定式化

研究資金：科学研究費補助金・若手研究、2024-2028 年度、総額（直接経費）360 万円

研究概要：移流が拡散挙動に与える実効的な影響について、一般的な定式化を試みる。

研究代表者（本専攻教員）：谷篤史

共同研究者：竹家啓（分子研究所）

研究課題：氷天体表層に存在する塩水和物の識別に向けたテラヘルツ分光計測

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C）、2024-2026 年度、総額（直接経費）350 万円

研究概要：氷天体表層に存在するとされる各種塩水和物の識別のため、そのテラヘルツ領域の吸収分光スペクトルを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：テラヘルツおよび低波数ラマン分光法による高分子の高次構造解析と分子間相互作用の直接観察

研究資金：NEDO ムーンショット型研究開発事業／地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現／非可食バイオマスを原料とした海洋分解可能なマルチロック型バイオポリマーの研究開発、2020-2024 年度、総額（直接経費）4,409 万円

研究概要：テラヘルツおよび低波数領域のラマンスペクトルより高分子の海洋分解機構を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤春実

研究課題：3 次元低波数ラマンイメージングによる生分解性ポリエステル分子間相互作用の可視化

研究資金：科学研究費助成事業（基盤研究（C））バイオポリマーの研究開発、2024-2026 年度、総額（直接経費）350 万円

研究概要：低波数ラマンイメージング測定より、生分解ポリエステルの生分解の様子や結晶相転移、結晶化過程における分子間相互作用の変化を可視化する。さらに、ラマンスペクトルの深さ方向分析により、分子間相互作用の 3 次元イメージングに挑戦する。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：中濱直之（兵庫県立大学）、倉田正観（北海道大学）

研究課題：半自然草原の植物相の多様性・固有性に基づく保全価値評価：自然草原との比較

研究資金：科学研究費助成事業（基盤研究（B）），2024年度，総額（直接経費：340万円）

研究概要：半自然草原の植物相の固有性を草原性植物種の種組成や多様性，遺伝的な特徴を自然草原のものと比較することで明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：源利文（本専攻教員），佐藤真行（本専攻教員），石井弘明（本学農学研究科）

研究課題：令和6年度里地里山の生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

研究資金：神戸市・受託研究，2024年度，総額（直接経費：600万円）

研究概要：神戸市の放棄された里地里山の管理導入による生物多様性再生の検証および市民への波及効果について調査を行う。

研究代表者（本専攻教員）：佐賀達矢

研究課題：スズメバチ類の食性解析から絶滅危惧種・外来種をモニタリングする

研究資金：住友財団環境研究助成，総額（直接経費）250万円

研究概要：スズメバチ類の食性解析を行うことで絶滅危惧種や外来種をモニタリングする手法の検証と開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：源利文

共同分担者：山中裕樹（龍谷大学），坂田雅之（北海道大学）

研究課題：環境DNA分析による種間交雑の検出

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2023-2025年度，総額（直接経費）1,490万円

研究概要：環境DNA分析によって魚類の交雑状況を把握するための手法を開発する。

< 数理環境論 >

研究代表者（本専攻教員）：Escolar, Emerson Gaw

研究課題：トポロジカルな視点による様々なプロセスの新しいデータ解析技術の開発

研究資金：学術研究助成基金・基盤研究（C），2024-2026年度，総額（直接経費）350万円

研究概要：多様なプロセスについてその全体像を理解し，その中にまだ生まれていない新たなプロセスをどのように見出すか，という課題を踏まえ，これまでのデータ解析手法では十分に扱うことができなかったプロセスデータに対して新たなトポロジカルデータ解析手法を開発することで，その解決を目指すものである。

研究代表者（本専攻教員）：桑村雅隆

研究課題：特異摂動法の新しい理論と応用—細胞極性に関する反応拡散方程式モデルの数理解析—

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2024-2028年度，総額（直接経費）330万円

研究概要：細胞極性に関する反応拡散方程式に内在する保存量に注目して、方程式の解を構成する手法の1つである特異摂動法の新しい枠組みを確立する。

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：データに内在する誤差が代数問題に与える影響とその構造的な除去に関する研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2024-2028年度，総額（直接経費）360万円

研究概要：現実の問題に現れるデータに含まれる誤差の影響を構造的に除去する数値数式融合計算の開発と検証を行う。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：福田博也

共同研究者：兵頭政光（高知大学），村田機械株式会社

研究課題：嚥下動作検出のためのウェアラブルセンサの開発

研究資金：産官学連携共同研究経費，2021-2024年度，総額（直接経費）400万円

研究概要：介護施設での食事介助における嚥下動作モニタリングのためのウェアラブルセンサを開発する。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：片桐恵子（人間発達専攻教員），田畑智博（本専攻教員）

研究課題：バイオフィリック・デザインによる都市緑地の展開ー多様な街路樹を生かした Living Nature Kobe を目指してー

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸，2024-2025年度，総額（直接経費）250万円

研究概要：街路樹の新たな可能性を発掘し，すべての人々が都市に求める心地よく居続けたいと思う緑豊かな神戸のまちづくりを提案する。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：田畑智博（本専攻教員）

研究課題：植物利用の変遷および地域差異から探る持続的人文景観要素の解明と現代的地域性の担保

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2021-2024年度，総額（直接経費）320万円

研究概要：祭祀植物から捉えた人文景観形成の要素とライフスタイルの変化時期やその程度などを総合して検証し，持続的人文景観要素の解明，現代的地域性の担保と展開を論考する。

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同分担者：蔡佩宜（九州工業大学）

研究課題：近年のエネルギー価格高騰と家計の脆弱性に関する実証分析

研究資金：住友財団・環境研究助成，2023-2025年度，総額（直接経費）220万円

研究概要：近年の電気代の上昇度合いと社会的弱者の家計負担に与える影響の度合いとの関係性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）： 内山愉太

共同研究者： 喜屋武亨（琉球大学），高倉実（琉球大学），佐藤真行，丑丸敦史（本専攻教員），原田和弘（人間発達専攻教員），香坂玲（東京大学）

研究課題：日常生活全般における生態系サービス受給の格差と効果：都市地域環境と健康の改善手法

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2023-2026 年度，総額（直接経費）1,430 万円

研究概要：環境保全と健康の改善に資する政策や取組の促進に向けて日常生活において受給されている生態系サービスの評価と効果検証を行い、都市内や都市地域間での格差を解明する。

研究代表者（本専攻教員）： 内山愉太

共同研究者： 佐藤真行，丑丸敦史，源利文（本専攻教員），Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M. Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III (International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwidodo, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題：Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation method for developing policy and action networks

研究資金：Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023-2025 年度，総額（直接経費）715 万円

研究概要：気候変動下における都市のレジリエンス向上に向けた各都市の政策等の実施、準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

研究代表者（本専攻教員）： 村山留美子

共同研究者：Escolar, Emerson Gaw（本専攻教員）

研究課題： 高次元のリスク認知構造の新たな表現に関する検討

研究資金： 科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2023-2025 年度，総額（直接経費）490 万円

研究概要： 位相的データ解析手法に着眼し，リスク認知の構造を明らかにするための新たな方策の検討を目的とする

研究代表者（本専攻教員）： 田畑智博

共同分担者：蔡佩宜（九州工業大学）

研究課題：近年のエネルギー価格高騰と家計の脆弱性に関する実証分析

研究資金：住友財団・環境研究助成，2023-2024 年度，総額（直接経費）220 万円

研究概要：近年の電気代の上昇度合いと社会的弱者の家計負担に与える影響の度合いとの関係性を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）： 井上真理

共同研究者：阪上隆英（神戸大学）

研究課題：繊維製品の資源循環のための選別・分離技術の研究開発

研究資金：NEDO 先導研究プログラム エネルギー／環境新技術先導研究プログラム，2023-2024 年度，

総額（直接経費）4,290 万円

研究概要：繊維 to 繊維リサイクルによる資源循環システムを構築することを目的に複数の素材が混在している繊維から単一繊維へ分離する前処理技術の研究開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

共同分担者：小泉智（茨城大学），兒玉隆之（京都橘大学），中西康雅（三重大学），山田由佳子（大阪教育大学），武内俊次（京都工芸繊維大学），金田理子（神戸大学附属中等教育学校）

研究課題：持続可能な材料（繊維・糸）とテキスタイル製品を直結させるための感性評価の体系化

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2022-2025 年度，総額（直接経費）1,350 万円

研究概要：繊維製品を使用する際に心地よいと感じる布を繊維・糸の特性から理論的に設計する評価システムを開発し，体系化することを目指す。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同分担者：丑丸敦史（本専攻教員），源利文（本専攻教員），内山愉太（本専攻教員）

研究課題：都市化と人口構造のもとでの生態系サービス評価と保全政策に関する学際的研究

研究資金：科学研究費補助金・基盤（B），2022-2025 年度，総額（直接経費）1,270 万円

研究概要：都市生態系の評価と保全に関する研究を行う。

<社会環境論>

研究代表者（本専攻教員）：井口克郎

共同研究者：浅野慎一（摂南大学），阿部紀恵（本専攻教員），岩佐卓也（専修大学），太田和宏（本専攻教員），岡田章宏（本学名誉教授），澤宗則（本専攻教員），橋本直人（本専攻教員），原将也（本専攻教員），加戸友佳子（摂南大学），洪シネ（本専攻教博士後期課程修了）

研究課題：国連「健康権」枠組みに基づく新型コロナウイルスへの各国対応の評価と理論的再構成。

研究資金：科学研究費補助金・挑戦的研究（萌芽），2021-2024 年度，総額（直接経費）：320 万円

研究概要：新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的流行に対する各国の動向について，国際人権規約第1規約（社会権規約）12条に規定される「健康権」（right to health）の枠組みから検討する。

研究代表者（本専攻教員）：原 将也

研究課題：熱帯作物キャッサバを通して考える地域社会におけるグローバル時代の食料主権

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2023-2027 年度，総額（直接経費）350 万円

研究概要：グローバルな構造が前提となった現代において，地域住民が主体的に作物を選び，みずからの食を決定するという「食料主権」のあり方について，熱帯作物キャッサバの生産—消費を事例として実証的に探究していく。

研究代表者（本専攻教員）：阿部紀恵

研究課題：国際法における人権保障と環境保全との関係の再検討

研究資金：科学研究費基金・若手研究，2023-2026 年度，総額（直接経費）360 万円

研究概要：人権保障と環境保全という国際法規範が実現すべき 2 つの価値が，どのような関係にあると理解され，いかにして関連する複数の法規範の立法（改正）・解釈・適用に反映されているのかを，その多元的構造に着目しつつ検証するとともに，そこで観察される人権保障と環境保全との調和と齟齬が生じるメカニズムを解明する。

研究代表者（本専攻教員）：坂井晃介

研究課題：自己言及的システム理論に基づく福祉国家の比較歴史社会学的研究

研究資金：科学研究費補助金・若手研究，2022-2024 年度，総額（直接経費）280 万円

研究概要：政治制度と他の諸制度の関係を踏まえた政策形成のメカニズムに関するシステム論的理論枠組みを精緻化し，それに基づいて学術的知見の政治的参照という観点から福祉国家形成を比較歴史社会学的に考察する。

研究代表者（本専攻教員）：太田和宏

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2022-2025 年度，総額（直接経費）310 万円

研究概要：フィリピンにおける民主主義の実態を事例として実態調査を踏まえながら，民主主義の原理そのものを再検討し，各社会に固有の社会編成と関連した民主主義制度や民主主義価値観が機能しているのではないかという問題を考察する。

研究代表者（本専攻教員）：橋本直人

研究課題：テキスト計量による思想史研究の方法的革新—ウェーバーとドイツ社会科学を事例に

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2023-2025 年度，総額（直接経費）260 万円

研究概要：ドイツ社会科学の古典であるマックス・ウェーバーと同時代の思想家・理論家を対象として，テキスト計量分析の導入による思想史・理論史研究の新たな研究技法を開発する。

研究代表者（本専攻教員）：澤宗則

研究課題：南アジア系移民の家族の戦略とトランスナショナルな領域化に関する比較考察

研究資金：科学研究費補助金・基盤（C），2024-2029 年度，総額（直接経費）320 万円

研究概要：南アジア系移民の家族の戦略とトランスナショナルな領域化のプロセスを比較することにより，南アジア系移民社会の特質を明らかにする。

（2）国際共同研究

＜自然環境論＞

研究代表者（本専攻教員）：小谷野由紀

共同研究者：Krishna Kanti Dey (Indian Institute of Technology Gandhinagar)

研究課題：Activity Induced Diffusion Recovery in Crowded Colloidal Suspension

研究資金：一般財源

研究概要：酵素反応がある溶媒中ではコロイド粒子の重心移動が大きくなることが実験的に明らか

となってきた。コロイド粒子や酵素からなる粒子系において排除堆積効果を考慮し、ランジュバンダイナミクスを解析することにより酵素反応がコロイド粒子に与える影響について考察を行う。

研究代表者（本専攻教員）： 黒澤耕介

共同研究者： Gareth S. Collins, Thomas M. Davison (Imperial College London), 石橋高, 岡本尚也, 松井孝典 (千葉工業大学)

研究課題： 隕石の衝撃変成度 2 分性の成因

研究資金： ひょうご科学技術協会学術研究助成金

研究概要： 隕石模擬物を用いた高速度衝突実験と数値解析によって、隕石に刻まれた衝撃変成度の 2 分性の成因を調べている。これまでの研究成果は 2025 年 3 月 11 日に米国テキサス州で行われる月惑星科学会議にて報告する予定である。

研究代表者（本専攻教員）： 佐藤春実

共同研究者： Marlina Dian

研究課題： 赤外およびテラヘルツ分光法による薬剤用試薬の分別

研究資金： JSPS Core-to-Core Program

研究概要： 赤外分光法およびテラヘルツ分光法を用いて、薬剤用試薬に混入した他成分の検出について検討した。

研究代表者（本専攻教員）： 佐藤春実

共同研究者： Sunee Jungtheerapanich

研究課題：テラヘルツ分光法とケモメトリックス法による米粉に混入したグルテン成分の微量検出

研究資金： JSPS Core-to-Core Program

研究概要： テラヘルツ分光法とケモメトリックス法を用いて、微量に混入したグルテンの量を検出する手法を開発するための基礎研究を行う。

研究代表者（本専攻教員）： 佐藤春実

共同研究者： Yeonju Park

研究課題: 低波数ラマン分光法と 2 次元相関分光法による生分解性ポリエステルの海洋分解機構の研究

研究資金： JSPS Core-to-Core Program

研究概要： 生分解性ポリエステルの海洋分解過程における低波数ラマンスペクトルを 2 次元相関分光法を用いて解析することにより、生分解性ポリエステルの海洋分解機構を解明することを試みた。

研究代表者（本専攻教員）： 近江戸伸子

共同研究者： Stefan Wanke (Senckenberg Gesellschaft für Naturforschung, Goethe-Universität Frankfurt, Germany), Tony Heitkam (RWTH Aachen University)

研究課題：神戸のアジサイ遺伝資源の解析と日欧育種への応用

研究資金：2024年度 人間発達環境学研究科「研究推進支援経費」

研究概要：ドイツと日本で観賞用植物として人気の高い園芸植物アジサイについて、RepeatExplorer2によるリピートーム解析により特定された反復配列について、染色体上での局在性を見る蛍光 *in situ* ハイブリダイゼーション（FISH）法による細胞学的解析を行う。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Jung Sung KIM 准教授（Chungbuk National University）

研究課題：リピートームと染色体核型による日韓キク属の進化

研究資金：一般研究経費

研究概要：日韓キク属のリピートーム解析と染色体解析を通じて、その遺伝的多様性と倍数性進化の過程を解明する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Aveek Samanta 講師（Prabhat Kumar College）

研究課題：グラスピーの染色体ならびにゲノムに関する研究

研究資金：一般研究経費

研究概要：グラスピーを新規抗がん剤化合物のスクリーニングおよび評価のための植物モデルとして活用する研究である。

研究代表者（本専攻教員）：佐賀達矢

共同研究者：Robert Brown (Manaaki Whenua Landcare Research, New Zealand)

研究課題：クロスズメバチの女王とオス、働き蜂はどのような餌種を分配されているのか？

研究資金：ひょうご科学技術協会学術研究助成

研究概要：クロスズメバチ属の蜂におけるカースト間の餌種分配について、日本とニュージーランドの複数種を用いて比較解析することでそのメカニズムを解明する。

<数理環境論>

研究代表者（本専攻教員）：Escolar, Emerson Gaw

共同研究者：Woojin Kim (Korea Advanced Institute of Science & Technology)

研究課題：位相的データ解析におけるマルチパラメータ・パーシステンスの研究

研究資金：科学研究費補助金・学術変革領域研究(A) 研究分担金（分担者：Escolar）

研究概要：複数のパラメータを持つデータの位相的データ解析に向けて、様々な特徴量を調べて理論整備を行なった。

<生活環境論>

研究代表者（本専攻教員）：内山愉太

共同研究者：佐藤真行，丑丸敦史，源利文（本専攻教員），Mario R. Delos Reyes, Mark Anthony M. Gamboa (University of the Philippines), Victorino Aquitania, Jose Bernardo B. Gochoco III

(International Council for Local Environmental Initiatives), Sigit D. Arifwidodo, Orana Chandrasiri (Kasetsart University)

研究課題：Unraveling urban resilience using City Preparedness Index: Scientific evaluation method for developing policy and action networks

研究資金：Asia-Pacific Network for Global Change Research, Collaborative Regional Research Programme, 2023-2025 年度, 総額（直接経費）715 万円

研究概要：気候変動下における都市のレジリエンス向上に向けた各都市の政策等の実施, 準備状況の評価指標の構築と研究者及び政策立案者等のネットワーク形成を行う。

＜社会環境論＞

研究代表者（本専攻教員）： 原 将也

共同研究者： Muhammad Yusri Zamhuri (SDGs Center, Hassanuddin University, Indonesia)

研究課題： インドネシア・西スラウェシにおける伝統文化資源と経済発展に関する研究

研究資金： 一般財源

研究概要： 西スラウェシの伝統工芸品である綿織物の生産と流通の実態と課題を明らかにし, 観光資源としてのポテンシャルを評価する。

(3) 教員の受賞

＜自然環境論＞

受賞者： 源利文

受賞名： 土木学会環境賞

受賞対象： 研究活動

受賞日： 令和 6 年 5 月 16 日

受賞理由： 環境 DNA を活用した生物モニタリングに向けた調査手法の構築と建設現場への適用が評価されたため。

受賞者： 源利文

受賞名： 応用生態工学会廣瀬賞

受賞対象： 研究活動

受賞日： 令和 6 年 9 月 20 日

受賞理由： マクロ生物の環境 DNA 分析の発展に多大な貢献を果たしてきたことが評価されたため。

＜生活環境論＞

受賞者： 井上真理

受賞名： Flexible Hybrid Electronics Technical Committee Award (SEMI)

受賞対象： 国際基準の進展における業績

受賞日： 令和 7 年 1 月 31 日

受賞理由： テキスタイルを始めとする柔らかい材料の風合いの客観的評価方法を国際基準として制

定することに対する貢献が評価されたため。

受賞者： 田畑智博

受賞名： 令和5年度廃棄物資源循環学会奨励賞

受賞対象： 災害廃棄物処理の体系化に係る方法論の開発

受賞日： 令和6年5月31日

受賞理由： 受賞対象に関する研究が優れたものであると評価されたため。

<社会環境論>

受賞者： 坂井晃介

受賞名： 日本保険学会賞（論文の部）

受賞対象： 「ポリツァイにおける〈保険〉と〈保険監督〉の歴史社会学——近代ドイツにおける私的保険組織への国家介入をめぐる」（『生命保険論集』222号）

受賞日： 2024年10月26日

受賞理由： 当該論文が保険分野の研究として、独自性・独創性・新規性のある見解を示すものであって、日本保険学会としての研究成果の蓄積に貢献するところが顕著であると認められたため

(4)国際共著論文（海外との研究）

<自然環境論>

Abe K. et al. (T2K Collaboration) (2025), First Joint Oscillation Analysis of Super-Kamiokande Atmospheric and T2K Accelerator Neutrino Data, Phys. Rev. Lett., 134, 011801, <https://doi.org/10.1103/PhysRevLett.134.011801>

Maiti A, Koyano Y, Kitahata H, Dey K K (2024) Activity-induced diffusion recovery in crowded colloidal suspensions. Phys. Rev. E, 109, 054607.
<https://doi.org/10.1103/PhysRevE.109.054607>

Tada, T, Kurosawa, K, Tomioka, N, Nagaya, T, Isa, J, Hamann, C, Ono, H, Niihara, T, Okamoto, T, Matsui, T (2024). Detailed occurrence of feather features in quartz in experimentally shocked granite. Journal of Geophysical Research Planets 129, e2024JE008409, <https://doi.org/10.1029/2024JE008409>

Ishiguro S, Taniguchi S, Schmidt N, Jost M, Wanke S, Heitkam T, Ohmido N (2025). Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace Hydrangea evolution and domestication. Ann. Bot., mcae184. <https://doi.org/10.1093/aob/mcae184>

Sartsanga C, Phengchat R, Wako T, Fukui K, Ohmido N (2024). Localization and quantitative distribution of a chromatin structural protein Topoisomerase II on plant chromosomes using

HVTEM and UHVTEM. *Micron*, 179, 103596. <https://doi.org/10.1016/j.micron.2024.103596>

Sota T, Liang H, Pham HT, Lin CP, Hori M, Takami Y, Ikeda H (2024) Molecular phylogenetic relationships among lineages in the genus *Carabus* (Coleoptera: Carabidae) and radiation of the subgenus *Apotomopterus*. *Zoological Journal of the Linnean Society* 202, zlae125.

Matsuo R, Togetani A, Adisakwattana P, Yoonuan T, Phuphisut O, Limpanont Y, Sakata MK, Sato MO, Sato M, Minamoto T (2024) Improved environmental DNA detection sensitivity of *Opisthorchis viverrini* using a multi-marker assay. *Parasitol Res*, 123, 419.
<https://doi.org/10.1007/s00436-024-08423-7>

Osawa R, Jo TS, Nakamura R, Futami K, Itayama T, Chadeka EA, Ngetich B, Nagi S, Kikuchi M, Njenga S, Ouma C, Sonye GO, Hamano S, Minamoto T (2024) Methodological assessment for efficient collection of *Schistosoma mansoni* environmental DNA and improved schistosomiasis surveillance in tropical wetlands. *Acta Trop*, 260, 107402.
<https://doi.org/10.1016/j.actatropica.2024.107402>

<生活環境論>

Yamaura Y, Shoji Y, Schmaljohann H, Unno A, Yao R T, Yong D L, Kawamura K, Kitazawa M, Sato, S, Aoki D, Okahisa Y, Takahashi M, Toma T, Sato M, Senzaki M, Soga M. (2025) "Subjective connection with nature, rather than provisioning visual information, can support conservation measures in distant countries: A lesson from migratory songbirds in the East Asian-Australasian Flyway", *Animal Conservation*, forthcoming

Lyu L, Sho K, Zhao H, Song Y, Uchiyama Y, Kim J, Sakai T (2024). Construction, assessment, and protection of green infrastructure networks from a dynamic perspective: A case study of Dalian City, Liaoning Province, China. *Urban Forestry & Urban Greening*, 101, 128545.
<https://doi.org/10.1016/j.ufug.2024.128545>

(5) 著書

分担執筆

三宅 崇, 佐賀 達矢 (2025) 「4 章 生物種間の関わりあい」 畑田彩, 佐賀達矢, 丑丸敦史, 中田兼介 (編)『未来を生きるすべての人の教養の生態学』東京化学同人, 73-87

西脇 亜也, 佐賀 達矢 (2025) 「5 章 5 節 地球上のさまざまな生態系をみてみよう」 畑田彩, 佐賀達矢, 丑丸敦史, 中田兼介 (編)『未来を生きるすべての人の教養の生態学』東京化学同人, 124-131
丑丸敦史, 曾我昌史 (2025) 「6 章 1 節 ヒトによる生態系の改変」 畑田彩, 佐賀達矢, 丑丸敦史, 中田兼介 (編)『未来を生きるすべての人の教養の生態学』東京化学同人, 133-150

大澤剛士, 丑丸敦史 (2025) 「7 章 生態学 X 異分野と, 持続可能な社会の形成」 畑田彩, 佐賀達矢, 丑丸敦史, 中田兼介 (編) 『未来を生きるすべての人の教養の生態学』 東京化学同人, 171-189

富永美穂子, 湯浅正洋 (2025) 「第 3 編 加熱処理とおいしさ, 第 11 章 分子調理とおいしさ, 第 3 節 分子調理の基礎技術エスプーマの活用事例と嗜好性」 山野善正 (監修) 『調理のおいしさの科学』 エヌ・ティー・エス, 326-331.

湯浅正洋, 中村絵美 (2024) 「第 2 編 野菜のおいしさ, 第 1 章 葉物野菜, 第 4 節 タマネギのおいしさ」 山野善正 (監修) 『青果物のおいしさの科学』 エヌ・ティー・エス, 185-191.

阿部紀恵 (2024) 「気候変動による人権侵害をめぐる因果関係の問題状況—判断枠組みの複雑性の要因分析」 『新国際法人権講座 第 6 巻』 信山社, 187-209

坂井晃介 (2024) 「福祉貸付と医療保障——療養資金の機能と「ボーダー・ライン層」の健康」 相澤真一, 渡邊大輔, 石島健太郎, 佐藤香 (編) 『戦後日本の貧困と社会保障: 社会調査データの復元からみる家族』 東京大学出版会, 135-159

(6) WoS 論文 (10%論文には, 文頭に*を付す)

<自然環境論>

Abe K. et al. (T2K Collaboration) (2025), First Joint Oscillation Analysis of Super-Kamiokande Atmospheric and T2K Accelerator Neutrino Data, *Phys. Rev. Lett.*, 134, 011801, <https://doi.org/10.1103/PhysRevLett.134.011801>

Y. Nakamura et al. (GRAINE Collaboration) (2025), New high-precision measurement system for electron-positron pairs from sub-GeV/GeV gamma-rays in the emulsion telescope, *Astroparticle Phys.*, 165, 103055, <https://doi.org/10.1016/j.astropartphys.2024.103055>

Maiti A, Koyano Y, Kitahata H, Dey K K (2024) Activity-induced diffusion recovery in crowded colloidal suspensions. *Phys. Rev. E*, 109, 054607.
<https://doi.org/10.1103/PhysRevE.109.054607>

Ikeda K, Kitahata H, Koyano Y (2024) Existence and stability of a quasi-periodic two-dimensional motion of a self-propelled particle. *JJIAM*, 41, 1413-1449.
<https://doi.org/10.1007/s13160-024-00661-7>

Tomioaka, N, Kurosawa, K, Miyake, A, Igami, Y, Nagaya, T, Noguchi, T, Matsumoto, T, Miyahara, M, Seto, Y (2024). Progressive change in dislocation microstructures in shocked calcite with pressure: Characterization of micrometeoroid bombardment on asteroid Ryugu. *American*

Mineralogist, in press, <https://doi.org/10.2138/am-2024-9540>

Tada, T, Kurosawa, K, Tomioka, N, Nagaya, T, Isa, J, Hamann, C, Ono, H, Niihara, T, Okamoto, T, Matsui, T (2024). Detailed occurrence of feather features in quartz in experimentally shocked granite. *Journal of Geophysical Research Planets*, 129, e2024JE008409, <https://doi.org/10.1029/2024JE008409>

Matsumoto, Y, Kurosawa, K, Arakawa, S (2024). Chondrule destruction via dust collisions in shock waves. *The Astrophysical Journal*, 966, 162. <https://iopscience.iop.org/article/10.3847/1538-4357/ad3ba7>

*Kimura, Y, Kato, T, Anada, S, Yoshida, R, Yamamoto, K, Tanigaki, T, Akashi, T, Kasai, H, Kurosawa, K, Nakamura, T, Noguchi, T, Sato, M, Matsumoto, T, Morita, T, Kikuri, M, Amano, K, Kagawa, E, Yada, T, Nishimura, M, Nakato, A, Miyazaki, A, Yogata, K, Abe, M, Okada, T, Usui, T, Yoshikawa, M, Saiki, T, Tanaka, S, Terui, F, Nakazawa, S, Yurimoto, H, Okazaki, R, Yabuta, H, Naraoka, H, Sakamoto, K, Watanabe, S, Tsuda, Y, Tachibana, S (2024). Nonmagnetic frambooid and associated iron nanoparticles with a space-weathered feature from asteroid Ryugu. *Nature Communications*, 15, 3493. <https://doi.org/10.1038/s41467-024-47798-0>

Shimada J, Sugahara T, Tani A, Ueda T, Tsugaya R, Tsunashima K, Hirai T (2024). Effects of halide anions on the electrical conductivity in single-crystalline tetra-n-butylammonium salt semiclathrate hydrates. *Energy & Fuels*, 38, 6471–6477, <https://doi.org/10.1021/acs.energyfuels.4c00161>

Tamai N, Isogai S, Yokoyama Y, Tani A (2024). Hydrogen atom in γ -irradiated synthetic isopropylamine silica clathrate. *Radiat. Phys. Chem.*, 218, 111606, <https://doi.org/10.1016/j.radphyschem.2024.111606>

Benzid K, Tani A (2025). Correlation between $[AlO_4/h^+]^0$ and E' centers in γ -irradiated natural quartz: thermal kinetics and the origin of non-optically bleachable $[AlO_4/h^+]^0$ centers before and after visible light stimulation. *Next Res.*, 2, 100198, <https://doi.org/10.1016/j.nexres.2025.100198>

Gao J, Sato H (2025). Study on the Brill transition of polyamide 6 with different crystal forms using low- and high-frequency Raman spectroscopy. *RSC Advances* 15, 2224–2230, <https://doi.org/10.1039/d4ra08523j>

Anshari R, Tsuboi M, Sato H, Tashiro K, Ozaki Y (2025). Raman and ATR-FTIR Unmask

Crystallinity Changes and Carboxylate Group and Vinyl Group Accumulation in Natural Weathering Polypropylene Microplastics, *Scientific Reports* 15, 2518.
<https://doi.org/10.1038/s41598-025-85837-y>

Uda A, Sato H, Ozaki Y (2025). Melting/crystallization mechanism of biodegradable Polymer, Poly(3-hydroxybutyrate), studied by quantification of temperature-dependent IR spectra by Nonlinear deconvolution. *Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy*, 329, 125576. <https://doi.org/10.1016/j.saa.2024.125576>

Kitamura A, Matsuzoe Y, Okitsu N, Sato H (2025). Quantitative analysis of branched high-density polyethylene content using far-infrared spectroscopy, *Spectrochimica Acta Part A: Molecular and Biomolecular Spectroscopy*, 329, 125492.
<https://doi.org/10.1016/j.saa.2024.125492>

Segawa T, Ito K, Hatayama M, Maruyama Y, Gao J, Ueno N, Sato H (2024). Visualization of Changes in Crystallinity and Intermolecular Hydrogen Bonding of Poly(ϵ -caprolactone) during Marine Degradation Process by High- and Low-frequency Three-dimensional Raman Mapping. *ACS Applied Polymer Materials*, 6, 6408–6415. <https://doi.org/10.1021/acsapm.4c00621>

Maruyama Y, Tamura K, Akao K, Ozaki Y, Sato H (2024). Structure of Molecular Chains of Poly(trimethylene terephthalate) Studied by Low-frequency Vibrational Spectroscopy and Quantum Chemical Calculations: In comparison with that of poly(ethylene terephthalate) and poly(butylene terephthalate) from the point of parity of methylene chain length. *Macromolecules*, 57, 5340–5349. <https://doi.org/10.1021/acs.macromol.4c00683>

Kato Y, Kamasaka K, Matsuda M, Koizumi H, Ohbayashi R, Ashida H, Kondo A, Hasunuma T (2025). Metabolic analysis reveals the contribution of mechanosensitive channel MscM to extracellular release of glutamate in glycogen-deficient *Synechococcus elongatus*. *J. Biosci. Bioeng.* 139, 187, <http://doi.org/10.1016/j.jbiosc.2024.12.003>

Ishiguro, S., Taniguchi, S., Schmidt, N., Jost, M., Wanke, S., Heitkam, T., & Ohmido, N. (2025). Repeatome landscapes and cytogenetics of hortensias provide a framework to trace *Hydrangea* evolution and domestication. *Ann Bot.* <https://doi.org/10.1093/aob/mcae184>

Sartsanga, C., Phengchat, R., Wako, T., Fukui, K., & Ohmido, N. (2024). Localization and quantitative distribution of a chromatin structural protein Topoisomerase II on plant chromosome using HVTEM and UHVTEM. *Micron*, 179, 103596.
<https://doi.org/10.1016/j.micron.2024.103596>

Shimomai, H., Taichi, N., Katsuhara, K. R., Kato, S., Ushimaru, A., & Ohmido, N. (2024). Allopolyploidy enhances survival advantages for urban environments in the native plant genus *Commelina*. *Ann Bot*, 134(6), 1055–1066. <https://doi.org/10.1093/aob/mcae141>

Taichi, N., Nakahama, N., Ohmido, N., & Ushimaru, A. (2024). Habitat diversification associated with urban development has a little effect on genetic structure in the annual native plant *Commelina communis* in an East Asian megacity. *Ecol Evol*, 14(2), e10975. <https://doi.org/10.1002/ece3.10975>

Watazu T, Hiraiwa MK, Ushimaru A and Hosaka T (2025) Pollinator is a housemate: *Aeinettia indica*, a parasite on *Miscanthus sinensis*, is pollinated by *Ceratina* bees nesting in its host. *Plant Species Biology* <https://doi.org/10.1111/1442-1984.70005>

Hirayama GS, Inoue T, Kenta T, Ishii HS and Ushimaru A (2025) Long-term management is required for the recovery of pollination networks and function in restored grasslands. *Journal of Applied Ecology* xx:xx.

Nammoku Y, Nikkeshi A, Terai Y, Ushimaru A and Kinoshita M (2025) Morphological and DNA analysis of pollen grains on the butterfly individuals reveal their flower visitation history. *The Science of Nature–Naturwissenschaften* 112:13.

Asada AA, Ohwaki A, Yaida YA, Kawakami F, Masuda M and Ushimaru A (2025) Prescribed burning effectively maintains threatened species in semi-natural grasslands on lava flows *Plants, People, Planet*

Hirayama GS, Tomita M and Ushimaru A (2025) Impacts of agricultural intensification and abandonment on plant and pollinator diversity, their mutualistic networks and pollination services. *Agriculture, Ecosystems & Environment* 381:109437.

Hirayama GH and Ushimaru A (2024) Habitat preference influences response to changing agricultural landscapes in two long-horned bees. *Journal of Apicultural Research* 63:1067–1077.

Katsuhara KR, Ushimaru A and Miyazaki Y (2024) Does coexisting congener of a mixed mating species affect the genetic structure and selfing rate via reproductive interference? *Oecologia* 206:37–45.

Yaida YA, Nagai T, Oguro K, Katsuhara KR, Uchida K, Kenta T and Ushimaru A (2024) Negative

legacy effects of past forest use on plant diversity in semi-natural grasslands on ski slopes
Journal of Environmental Management 368:122120.

Nakahama N, Konagaya T, Ueda S, Hirai N, Yago M, Yaida YA, Ushimaru A, and Isagi Y (2024)
Road to extinction: archival samples unveiled the process of inbreeding depression during
artificial breeding in an almost extinct butterfly species. *Biological Conservation*
296:110686.

Yaida YA, Inoue T, Kenta T and Ushimaru A (2024) Seed dispersal limitation causes negative
legacy effect on restoration of grassland plant diversity on ski slopes. *Ecology and
Evolution* 14:e11654.

Saga, T., Kanai, M., Shimada, M., Okada, Y. (2024). Adaptive significance of early
reproduction in *Vespula shidai* social wasps. *Insectes Sociaux*, 71(3), 245-252.
<https://doi.org/10.1007/s00040-024-00953-8>

Ujiie M, Kubota K, Takami Y (2025) Interspecific difference and frequency dependence in
habitat use of coexisting *Ohomopterus* ground beetle species under reproductive
interference. *Population Ecology* 67, 6-14.

Kuroda K, Kuroda T, Nishino H, Takami Y (2024) Sex-specific manipulation of sexually
cannibalistic mantid mating behavior by hairworms. *Behavioral Ecology* 35, arae071.

Nishino H, Morimoto K, Kuroda K, Takami Y (2024) Male mate guarding in a polyandrous and
sexually cannibalistic praying mantid. *Behavioral Ecology and Sociobiology* 78, 82.

Terada K, Furumoto C, Nishimura T, Hirayama A, Takami Y (2024) The development of extremely
large male genitalia under spatial limitation. *Evolution & Development* 26, e12488.

Matsuo R, Togetani A, Adisakwattana P, Yoonuan T, Phuphisut O, Limpanont Y, Sakata MK, Sato
MO, Sato M, Minamoto T (2024) Improved environmental DNA detection sensitivity of
Opisthorchis viverrini using a multi-marker assay. *Parasitol Res*, 123, 419.
<https://doi.org/10.1007/s00436-024-08423-7>

Uchiyama Y, Kyan A, Sato M, Ushimaru A, Minamoto T, Kiyono M, Harada K, Takakura M (2024)
Local environment perceived in daily life and urban green and blue space visits: Uncovering
key factors for different age groups to access ecosystem services. *J Environ Manag*, 370,
122676. <https://doi.org/10.1016/j.jenvman.2024.122676>

Hirayama IT, Wu L, Minamoto T (2024) Stability of environmental DNA methylation and its utility in tracing spawning in fish. *Mol Ecol Resour* 24, e14011.
<http://doi.org/10.1111/1755-0998.14011>

Osawa R, Jo TS, Nakamura R, Futami K, Itayama T, Chadeka EA, Ngetich B, Nagi S, Kikuchi M, Njenga S, Ouma C, Sonye GO, Hamano S, Minamoto T (2024) Methodological assessment for efficient collection of *Schistosoma mansoni* environmental DNA and improved schistosomiasis surveillance in tropical wetlands. *Acta Trop*, 260, 107402.
<https://doi.org/10.1016/j.actatropica.2024.107402>

Hashimoto N, Iwata T, Kihara N, Nakamura N, Sakata MK, Minamoto T (2024) Detection of environmental DNA of finless porpoise (*Neophocaena asiaeorientalis*) in Osaka Bay, Japan. *Conserv Genet Resour*, 16, 255-261. <https://doi.org/10.1007/s12686-024-01361-7>

Asai T, Ikushima S, Sugiyama M, Morimoto T, Sudo A, Minamoto T (2024) Application of dietary content analysis using dropped feces to assess damage to fisheries by great cormorants. *Ornithol Sci*, 23, 125-128. <https://doi.org/10.2326/osj.23.125>

Nakagawa H, Fujiki D, Numata H, Wu L, Mori T, Minamoto T (2024) Regional-scale effects of deer-induced forest degradation on river ecosystem dynamics. *Pop Ecol*, 66, 196-216.
<http://doi.org/10.1002/1438-390X.12174>

Kato-Unoki, Y, Mayama S, Kurihara A, Minamoto T. (2024) Development of specific detection assays from environmental DNA of invasive diatom *Cymbella janischii* in Japan. *Limnol*. 25, 247-254. <https://doi.org/10.1007/s10201-024-00751-y>

Sato T, Uemura K, Yasuda M, Maeda A, Minamoto T, Harada K, Sugiyama M, Ikushima S, Yokota S, Horiuchi M, Takahashi S, Asai T (2024) Traces of pandemic fluoroquinolone-resistant *Escherichia coli* clone ST131 transmitted from human society to aquatic environments and wildlife in Japan. *One Health*, 18, 199715. <https://doi.org/10.1016/j.onehlt.2024.100715>
Hidaka S, Jo TS, Yamamoto S, Katsuhara KR, Tomita S, Miya M, Ikegami M, Ushimaru A, Minamoto T (2024) Sensitive and efficient surveillance of Japanese giant salamander (*Andrias japonicus*) distribution in western Japan using multi-copy nuclear DNA marker. *Limnol*, 25, 189-198. <http://doi.org/10.1007/s10201-023-00740-7>

Katsuhara, K. R., Ushimaru, A., & Miyazaki, Y. (2024). Does a coexisting congener of a mixed mating species affect the genetic structure and selfing rate via reproductive interference?. *Oecologia*, 206(1-2), 37-45. <https://doi.org/10.1007/s00442-024-05607-x>

Yaida, Y. A., Nagai, T., Oguro, K., Katsuhara, K. R., Uchida, K., Kenta, T., & Ushimaru, A. (2024). Negative legacy effects of past forest use on native plant diversity in semi-natural grasslands on ski slopes. *Journal of environmental management*, 368, 122120. <https://doi.org/10.1016/j.jenvman.2024.122120>

Yaida, Y. A., Inoue, T., Kenta, T., & Ushimaru, A. (2024). Seed dispersal limitation causes negative legacy effect on restoration of grassland plant diversity on ski slopes. *Ecology and evolution*, 14(7), e11654. <https://doi.org/10.1002/ece3.11654>

<数理環境論>

Escolar, E. G., Shimada, Y., Yuasa, M. (2025). A topological analysis of the space of recipes. *International Journal of Gastronomy and Food Science*, 39, 101088, <https://doi.org/10.1016/j.ijgfs.2024.101088>

Aoki, T., Escolar, E. G., Tada, S. (2025). Bipath persistence. *Japan Journal of Industrial and Applied Mathematics*, 42(1), 453-486, <https://doi.org/10.1007/s13160-024-00681-3>

Kuwamura M, Teramoto T, Ikeda H (2024) Single transition layer in mass-conserving reaction-diffusion systems with bistable nonlinearity, *Nonlinearity*, 37, 115013, <https://iopscience.iop.org/article/10.1088/1361-6544/ad7fc4>

Nagasaka K (2025) Approximate GCD of several multivariate sparse polynomials based on SLRA interpolation. *Journal of Symbolic Computation*, 127, 102368. <https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0747717124000725>

<生活環境論>

Yamaura Y, Shoji Y, Schmaljohann H, Unno A, Yao R T, Yong D L, Kawamura K, Kitazawa M, Sato, S, Aoki D, Okahisa Y, Takahashi M, Toma T, Sato M, Senzaki M, Soga M. (2025) "Subjective connection with nature, rather than provisioning visual information, can support conservation measures in distant countries: A lesson from migratory songbirds in the East Asian-Australasian Flyway", *Animal Conservation*, forthcoming

Kobayashi Y, Sato M, Uchida K, Mori A. (2025) "Misalignment between ecologically rapid and economically optimal forest restoration designs", *Forest Policy and Economics*, 172, 103426. <https://doi.org/10.1016/j.forpol.2025.103426>

Zhang Y, Uchiyama Y., Sato M. (2025) "Combined Effects of Urban Blue-Green Spaces on the Thermal Environment: A Case Study of Kobe, Japan", *International Journal of Economic Policy*

Studies, 19, pp.59–88. <https://doi.org/10.1007/s42495-024-00140-4>

Tsurumi T, Uchiyama Y, Sato M, Morioka M. (2024) "Green spaces and mental health in the context of materialism: A comparative analysis before and during the COVID-19 pandemic", *Urban Forestry and Urban Greening*, 102, 128567.

<https://doi.org/10.1016/j.ufug.2024.128567>

Uchiyama Y, Kyan A, Sato M, Ushimaru A, Minamoto T, Kiyono M, Harada K, Takakura M. (2024) "Local environment perceived in daily life and urban green and blue space visits: Uncovering key factors for different age groups to access ecosystem services", *Journal of Environmental Management*, 370, 122676. <https://doi.org/10.1016/j.jenvman.2024.122676>

Kinoshita S, Sato M, Ida T. (2024) "Bayesian probability revision and infection prevention behavior in Japan: A quantitative analysis of the first wave of COVID-19", *Research in Economics*, 78(4), 100986. <https://doi.org/10.1016/j.rie.2024.100986>

Lyu L, Sho K, Zhao H, Song Y, Uchiyama Y, Kim J, Sakai T (2024). Construction, assessment, and protection of green infrastructure networks from a dynamic perspective: A case study of Dalian City, Liaoning Province, China. *Urban Forestry & Urban Greening*, 101, 128545. <https://doi.org/10.1016/j.ufug.2024.128545>

Miyake Y, Nakagawa Y, Uchiyama Y, Takatori C, Kohsaka R (2024). Decision dynamics and landscape approach by individuals and collective groups: the case of Japanese rural land use in agricultural, forest, and boundary areas in an era of population decline. *Discover Sustainability*, 5(1), 281. <https://doi.org/10.1007/s43621-024-00494-x>

Kyoi S, Uchiyama Y, Mori K (2024). Simulation of policies to promote pro - environmental behavior in a dynamic learning model of social networks: Cases of Brazil, the United States, Japan, Germany, China, and India. *Sustainable Development*, 33(1), 1085–1103. <https://doi.org/10.1002/sd.3165>

Tabata, T. and Tsai, P. (2025) "Analysing the Impact of Energy Price Increases on the Vulnerable Using the Fuel Poverty Index: A Case Study of Kobe, Japan", *Energy Efficiency*, 18, 5. <https://doi.org/10.1007/s12053-024-10292-z>

Chen, X. and Tabata, T. (2024) "Circular Economy in Fashion: Consumer Awareness and Lifestyle, and Environmental Impact on Second-Hand Clothes", *Journal of Material Cycles and Waste Management*, 26, pp.3876–3892. <https://doi.org/10.1007/s10163-024-02091-6>

Suzuki, M. and Tabata, T. (2024) “Role and limitations of the in-store waste collection system at supermarkets”, *Heliyon*, 10, E29011.

<https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2024.e29011>

Escolar EG, Shimada Y, Yuasa M. (2025) “A topological analysis of the space of recipes”, *International Journal of Gastronomy and Food Science*, 39, 101088.

<https://doi.org/10.1016/j.ijgfs.2024.101088>

Shimada R, Sasaki K, Kuwano T, Eguchi S, Nakatani M, Yuasa M, Yoshimura M. (2024) “Physical properties, palatability, and mastication of breads with different compositions of soy protein isolate and soybean soluble polysaccharide”, *International Journal of Gastronomy and Food Science*, 37, 100961.

<https://doi.org/10.1016/j.ijgfs.2024.100961>

Sato S, Tabuchi H, Katayama K, Matsumoto K, Myamoto H, Kannno S, Sekiguchi H, Tanaka Y, Inoue M, Murata C, Hotta H, Tsujin Y (2025) Synthesis of a New Amino Acid Derivative with Long-Lasting Hair Shape Control Effects and Elucidation of its Mechanisms. *The International Journal of Cosmetic Science*. 2025;00:1-12. <https://doi.org/10.1111/ics.1305>

(7) その他論文

< 自然環境論 >

Oyabu A, Wu L, Matsumoto T, Kihara N, Yamanaka H, Minamoto T (2024) The effect of artificial light at night on wild fish community: manipulative field experiment and species composition analysis using environmental DNA. *Environ Advances*, 15, 100457.

<https://doi.org/10.1016/j.envadv.2023.100457>

黒澤耕介 (2024) 「衝突孔(クレータ)の大きさをみつめる」『日本惑星科学会誌 遊・星・人』No. 33, 日本惑星科学会, 323-331.

佐藤春実 (2024) 「テラヘルツ・低波数ラマン分光法で見る高分子」『高分子学会誌』73, 6月号, 267-268 .

佐藤春実 (2024) 「ラマンイメージングによる高分子の海洋分解の研究」『日本接着学会誌』60, No. 8, 217-223.

佐藤春実 (2024) 「ラマン分光法・ラマンイメージングを用いた高分子の結晶化度と分子間相互作用の可視化」『繊維学会誌』80, 3月号, 109-112.

佐藤春実 (2025) 「低波数振動分光法による高分子の高次構造と分子間水素結合の研究」『分光研究』総説, 73 巻, 6 号 (掲載予定) .

佐賀達矢 (2024) 「蜂の子を食べる文化はどのような自然環境に支えられているか」『アサヒグループ財団 2022 年度研究紀要』, 37, 59-71.

Kobayashi Y, Terada K, Hirayama A, Oosawa Y, Niikura K, Takami Y (2025) What are the epipleuron, cryptopleuron, and pleuron in the prothorax of the adult Carabidae (Coleoptera, Insecta)? : redefinitions based on the muscular system. Proceedings of the Arthropodan Embryological Society of Japan, in press.

<生活環境論>

Hiroki Ito, Hideaki Yamaguchi, Mari Inoue, Hikaru Nagano, Ken Kitai, Kiichiro Morita, Takayuki Kodama (2024) Novel Evaluation System for Analysing Arthrokinematic Ankle Motion Using a Rotary Encoder. Biomechanics(MDPI) 26:591-601.

吉良美緯, 井上真理 (2024) カニユーレホルダーの物理特性と使い心地の評価『日本重症心身障害学会誌』第 49 巻, 3 号, 521-528.

秦堯史, 井上真理 (2024) インストルメントパネル表皮材料の触感と物理特性との関係『Journal of Textile Engineering』Vol. 70, No. 4, 日本繊維機械学会, 52-60.

秦堯史, 井上真理 (2025) タオルの触感に対する嗜好と物理特性との関係『Journal of Textile Engineering』in press, 日本繊維機械学会.

齊藤壮一郎, 田畑智博 (2024) 「防災・減災対策を意図した住宅移転の費用便益分析」『都市計画報告集』Vol. 23, 1-4.

渡邊敏明, 花村衣咲, 湯浅正洋, 榎原周平, 前川隆嗣 (2024) 「植物性原料のみから作ったプラントベースだしの持続可能な開発」, 『微量栄養素研究』, 41, 66-74.

前川隆嗣, 香西彩加, 湯浅正洋, 榎原周平, 根來宗孝, 渡邊敏明 (2024) 「味覚センサーを利用しためん類スープの特徴についての科学的評価」, 『微量栄養素研究』, 41, 13-18.

根來宗孝, 湯浅正洋, 森本雅子, 渡邊敏明, 石田達也, 松井博之, 松田芳和 (2024) 「牡蠣肉エキス添加により認められた乳酸菌 ATCC8014 株の増殖促進効果」, 『微量栄養素研究』, 41, 62-65.

中村絵美, 湯浅正洋 (2024) 「‘難波’ネギの呈味特性および抗酸化性」, 『微量栄養素研究』, 41, 54-61.

Tominaga M, Sakoi C, Yamada K, Akimoto S, Kurushima T, Ishikawa S, Yuasa M (2024)
"Characteristics of Chemical and Volatile Components of Beef-Based Consommé Prepared by
Experts and Non-Experts", Available at SSRN.
<https://dx.doi.org/10.2139/ssrn.4956768>

湯浅正洋 (2024) 「データサイエンスと調理」, 『分子調理研究会誌』, 13, 3-7.

湯浅正洋, 烏山菜摘, 古場一哲, 松澤哲宏 (2024) 離島の未利用魚介類を用いて製造された魚醤油
の呈味特性と色調, 日本家政学会誌, 75(2) : 70-79.

<社会環境論>

原 将也・中澤芽衣・黒崎龍悟 (2024) 「群馬県におけるキャッサバ越冬栽培の試み」『農耕の技術
と文化』33号: 1-14.

原 将也 (2025) 「大学教育におけるオンラインを活用した国際理解フィールド学修—神戸大学国
際人間科学部 GSP の実践報告」『兵庫地理』第70号.

阿部紀恵 (2024) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理—人権条約による包摂が示す現代的展
開— (五)」『法学論叢』193巻4号, 74-96

阿部紀恵 (2024) 「国際環境法の諸原則の一般的妥当の法理—人権条約による包摂が示す現代的展
開— (六・完)」『法学論叢』194巻3号, 84-100

杉木志帆・阿部紀恵・堀口悟郎・久保朗・鈴木正行・小方直幸・神野幸隆「公立学校の教員多忙化
問題に関する三大学合同ゼミの実施—法学, 教育学, 教育現場・行政での実務経験のある研究者に
よる三学部の学生への授業—」『香川大学教育実践総合研究』50巻, 47-60

澤 宗則 (2024) 「在日バングラデシュ人の集住地形成—「リトルダッカ」東京都北区東十条・十
条を事例に—」『移民研究』第20, 1-48.

橋本直人 (2024) 「学説史を通じて「社会学」とは何だったのかを問う 2: 1920~1960年代 諸理
論パラダイムの形成」『社会学史研究』46, 3-12.

井口克郎 (2024) 「貧困・生活不安、民主主義の機能不全・解体、軍拡の連鎖を防ぐために : 戦争
防止のための社会保障の重要性」『中小商工業研究』159号, 9-18

井口克郎 (2025) 「『復興』制度・政策と住民自治」『法学セミナー』842号, 22-24.

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

(1) (一社)大学都市神戸産官学プラットフォーム主催の「KOBE アカデミックトーク」にて障害のある方々向けの超短時間勤務に向けた新たな雇用モデルの研究提案を通じた障害者雇用の促進について発表し参加した企業関係者・市民と議論を交わした。

(人間発達専攻 山本健太)

(2) 石本雄真（鳥取大学）とデコボコベース株式会社の産学共同研究として、障害児通所支援事業所における発達障害児の感情調整支援プログラムの開発と効果検証を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(3) 労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる Well-being Monitor に関する研究株式会社テアラクソンとの共同研究として、インタビュー調査をおこない大型商業施設の労働者を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求し、アプリ開発につなげた。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(4) 株式会社ベネッセヘルスケアの介護付き有料老人ホームに入居されている高齢者のサービス向上に向けて、学識経験者として指導・助言を行った。

(人間発達専攻 古谷真樹)

(5) アート体験によるビジネスパーソンのパフォーマンス向上に関する研究

共同研究者：岡田猛（東京大学）、株式会社 SIGNING

研究資金：株式会社 SIGNING 共同研究費

研究概要：アート体験が有する人々の創造性、特にビジネスと関連する創造活動に与える影響について、ワークショップの企画・実施とその効果検証により検討する。特に、複数名と共に行うアートの鑑賞・創作体験がもたらす機能に着目し、その効果を心理解析と力学的解析により実証する。

(人間発達専攻 清水大地)

(6) 運動・スポーツが子どもの社会性に与える影響とその神経基盤—fNIRS ハイパースキャニング研究—

共同研究者：高岸治人，寿秋露，丹波夏希，橋本紳之亮

研究資金：公益財団法人明治安田厚生事業団 第38回若手研究者のための健康科学研究助成

研究概要：運動・スポーツが子どもの社会性の発達に与える影響とその神経基盤を検討する。

(人間発達専攻 石原暢)

(7) ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立に関する研究

共同研究者：谷口隆晴・原田和弘・近藤徳彦

研究資金：大学発アーバンイノベーション神戸・大学研究者提案型（複合領域・民間企業連携区分）

研究概要：社会的つながりを定量的に評価する手法を開発する。

（人間発達専攻 増本康平）

（8）地域在住高齢者の認知機能及びウェルビーイングに対する ICT を用いた行動変容が及ぼす影響の検討

研究代表者：秋末敏宏

共同研究者：近藤徳彦・増本康平・原田和弘・打田篤彦・古和久朋・園田悠馬・沖侑太郎

研究資金：住友生命保険相互会社

研究概要：歩行数などの身体活動要素を ICT にて計測するとともに、行動変容を惹起させる ICT を用いたプログラムにて介入することにより、認知機能の経時的変化および社会参加に対する変容をとらえることを本研究の目的とする。

（人間発達専攻 増本康平）

（9）着圧ソックス・パンツ・サポーター等の商品開発

研究資金：コア・テクノロジー株式会社、丸紅インテックス株式会社

研究概要：着圧ソックス・パンツ・サポーター等の効果を筋活動の側面から評価する。

（人間発達専攻 木伏紅緒）

（10）歩行研究に関する学術相談

研究資金：株式会社本田技術研究所

研究概要：フレイル予防に効果がある歩き方または運動を提示し、継続的に続けられるような仕組みに関して、研究背景や事例、介入方法の紹介を行った。

（人間発達専攻 木伏紅緒）

（11）お風呂と well-being

共同研究者：ノーリツ株式会社

近藤徳彦・木村哲也・原田和弘・石原暢・木伏紅緒

研究概要：社会科学・自然科学から複合的に入浴による well-being の研究を行っている。

（人間発達専攻 佐藤幸治）

（12）運動を通じたつながりの多様性が高齢者のウェルビーイングに及ぼす影響

共同研究者：太田幸志

研究資金：公益財団法人戸部眞紀財団・研究助成

研究概要：運動を通じたどのような内容の社会的つながりが、高齢者のウェルビーイングに最も密接に影響しているのかを通じて明らかにする研究を進めている。

（人間発達専攻 原田和弘）

(13) 地域コミュニティを対象としたeスポーツの展開

共同研究者：岡田修一・近藤徳彦・原田和弘・石原暢

研究資金：西日本電信電話株式会社

研究概要：地域コミュニティの住民を対象としeスポーツ体験がコミュニケーション活性や気分に及ぼす影響を明らかにする。

(人間発達専攻 増本康平)

(14) コープこうべとの連携によるESD拠点づくりプロジェクト

本専攻研究者：松岡広路・後藤聡美

概要：2024年12月より、20世紀末以来喧伝されてきたESD運動のリスタートを促すことを目的に、コープこうべと協働して神戸市東灘区のこーぷこうべ生活文化センターにESD推進の拠点を整備するための計画が始まった。主担当は後藤聡美（特命助教）。2025年7月にオープン予定。

(人間発達専攻 松岡広路・後藤聡美)

(15) 共同研究先：旭化成株式会社との共同研究

研究課題：分光分析を用いた高分子材料の物質構造解析技術の研究

内容：テラヘルツ分光法およびラマン分光法を用いて、高分子材料の構造解析に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(16) 共同研究先：株式会社デンソーとの共同研究

研究課題：テラヘルツ分光による結晶化度の評価技術開発

内容：テラヘルツ分光法を用いて高分子材料の結晶化度の評価を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(17) 共同研究先：株式会社ダイセルとの共同研究

研究課題：バイオマス試料の結晶性評価

内容：赤外分光法を用いたバイオマス試料の成分分析と結晶性評価を行った。

(人間環境学専攻 佐藤春実)

(18) 共同研究先：スカイワークスフィルターソリューションズジャパン株式会社との共同研究

基板材料の評価に関する研究

加工プロセスを経た基板材料の評価技術としてSTEMを用い、基板内での面内ダメージの分布の把握に取り組んだ。

(人間環境学専攻 谷篤史)

(19) 共同研究先：中国四国地方環境事務所からの受託研究

研究課題：アユモドキ分布状況調査

内容：岡山県内に生息する天然記念物のアユモドキの保全のため、県内の河川において環境DNA調査

を実施し、アユモドキの分布域について調べた。

(人間環境学専攻 源利文)

(20) 共同研究先：ひょうご環境創造協会との共同研究

研究課題：環境 DNA 分析による生物調査方法に関する研究

内容：兵庫県内の淡水域および沿岸の海域を対象に、環境 DNA 分析による生物多様性調査を実施するとともに、新規マーカーの開発などを行った。

(人間環境学専攻 源利文)

(21) 共同研究先：神戸市からの受託研究

研究課題：里地里山生物多様性向上に向けた整備及び生態系サービスの評価に係る調査研究

内容：神戸市内の環境省指定自然共生サイトを中心とした里地里山の生物多様性モニタリング、生態系サービスに関する調査などを行った。

(人間環境学専攻 丑丸敦史，佐藤真行，源利文)

(22) 共同主催先：Studio Phones との共同開催

セミナー名称：Kobe Studio Seminar

内容：Studio Phones と数理情報環境論が中心となって産学連携で実施する少人数と分野横断などをコンセプトとするセミナー活動である。2024 年度は、オンラインにて 1 回、学内にて 5 回のワークショップやセミナーを実施した。

(人間環境学専攻 長坂耕作)

(23) 共同研究先：Bird fab studio 株式会社との共同研究

研究課題：AI 生地検索システムの最適な教師データ研究

内容：生地の力学特性・表面特性などの物理データを測定し、それらのデータとパリコレクションなどの衣料写真から得た感性的なデータを抽出し、これらを AI 学習させるために最適な教師データの在り方について研究した。

(人間環境学専攻 井上真理)

(24) 共同研究先：青山商事株式会社との共同研究

研究課題：特別縫製仕様によるスーツ着用時の衣服内圧の比較検証

内容：紳士スーツについての着用感向上について従来品との比較検証を行う。特に、着用時に肩回りや背中にかかる衣服圧を測定し、圧迫感、動きやすさを客観的なデータとして表す研究を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(25) 共同研究先：アシックス会社との共同研究

研究課題：テキスタイルの風合い評価方法および、その数値化に関する研究

内容：スポーツアパレルを想定し、テキスタイルの開発や訴求のために、テキスタイルの風合いを客

観的に表す評価方法およびその数値化に関する研究を行っている。

(人間環境学専攻 井上真理)

(26) 委託研究先：岡山県産業振興財団「Go Tech 事業」からの受託研究

研究課題：布地の『肌触りと耐久性』評価装置，評価方法の開発

内容：ニット素材を含む布地の力学特性を正確に計測可能なシステムを構築することを目的として，主にデータの集積を行う。また，ヒューマンインターフェースとしての繊維製品の心地よさを標準化，デジタル化するために，データベースの構築を行っている。

(人間環境学専攻 井上真理)

(27) 委託研究先：NEDO「先導研究プログラム／エネルギー・環境新技術先導研究プログラム」からの受託研究

研究課題：繊維製品の資源循環のための選別・分離技術の研究開発

内容：回収繊維製品の高品位な繊維製品への水平リサイクルによる資源循環システムを構築することを目的として，繊維 to 繊維リサイクルに係る技術開発を行った。

(人間環境学専攻 井上真理)

(28) 共同研究先：村田機械株式会社，高知大学との共同研究

研究課題：導電糸を用いたニットセンサによる人間計測に関する研究開発

内容：スマートテキスタイルとしてのニットセンサの機械－電気特性を理論的・実験的に明らかにし，主に，人間計測における「嚥下センサ」の開発に取り組んだ。現在，開発したニットセンサの医療機器認証など，製品化に向けての最終段階に入っている。

(人間環境学専攻 福田博也)

(29) 共同研究先：小泉製麻株式会社との共同研究

研究課題：プラスチックキャップの環境負荷計算

内容：ライフサイクルアセスメント(LCA)手法を用いて，プラスチックキャップに関する環境負荷の計算と比較に関する研究を行った。

(人間環境学専攻 田畑智博)

(30) 共同研究先：株式会社ゆめみらいとの共同研究

研究課題：食品廃棄物の栄養機能性・嗜好性評価と新規有効利用法の提案

内容：兵庫県内の食品加工工場で生じる廃棄部位の乾燥パウダーを調製し，その栄養機能性，嗜好性などを調べ，食品としての特性評価や乾燥パウダー製造方法の設計を行った。また，この食品廃棄部位の乾燥パウダーについて，加工食品としての利用法の開発に取り組んだ。

(人間環境学専攻 湯浅正洋)

(31) 共同研究先：京丹波栗工房との共同研究

研究課題：食品廃棄物・栗の皮の新規有効利用法の提案

内容：栗の加工時に生じる食品廃棄物の有効利用方法の開発を共同で行うとともに、開発した手法をもとに共同で特許出願を行った。

(人間環境学専攻 湯浅正洋)

(32) 共同研究先：農事組合法人アグリファーム

研究課題：日本におけるキャッサバ栽培技術に関する研究

内容：2020 年より農事組合法人アグリファーム（群馬県邑楽郡邑楽町）と高崎経済大学、摂南大学と連携し、日本における熱帯作物キャッサバの栽培実践の定量的な把握に取り組んでいる。日本でのキャッサバ栽培の先例はほとんどなく、現在の実践を把握して分析することで、日本におけるキャッサバの栽培技術の確立につながることを期待できる。

(人間環境学専攻 原 将也)

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) 兵庫県立兵庫高校の創造科学科における学校設定科目「創造応用Ⅰ」について、認知科学班の学生の課題研究について指導と助言を行い、発表会などで講評も行った。

(人間発達専攻 林 創)

(2) 兵庫県立学校養護教諭研究会淡路支部の構成員である養護教諭を対象に「兵庫県養護教諭研究大会発表にむけて」研究計画を作成するための支援を行った。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(3) 特定健診実践者育成研修 生活習慣改善における行動変容に関わる教材を開発し、兵庫県や大阪府との共同事業として、特定保健指導に関わる保健師、管理栄養士などを対象に、実践的な研修を行った。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(4) 兵庫県立夢野台高校の教育・心理類型における学校設定科目「教育・心理」において、心理学入門の講義を行い、課題研究についての指導と助言を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(5) 神戸市立児童センターの発達支援事業感覚運動指導教室において、知的発達障害児の療育活動の指導助言を行った。

(人間発達専攻 山根隆宏)

(6) 大阪府茨木市健康医療部健康づくり課と共同で小・中学生の親子を対象とした睡眠教育を実施し、地域における睡眠教育の実施方法と効果検証の助言・指導を行った。

(人間発達専攻 古谷真樹)

(7) 令和6年度「芸術・文化の薫るまち・灘」魅力発信事業『音で彩るアート作品～Nada～』

補助金：灘区総務部地域協働課

研究概要：灘文化軸の地域資源を活用した「芸術・文化の薫るまち・灘」の魅力発信を目的とし、2024年4月にJR灘駅前広場に設置された7つのアート作品からイメージされるオリジナルの音楽を制作し、アート作品と音楽を合わせて鑑賞できる仕組み作りを行った。

(人間発達専攻 余田有希子)

(8) 令和6年度「れきはくロビーコンサート」

連携担当：兵庫県立歴史博物館

研究概要：姫路市の兵庫県立歴史博物館のデジタルミュージアム「ひょうご伝説紀行—妖怪・自然の世界—」の物語をもとに、4つのスピーカーのための音楽作品の制作を行い、2024年10月12日に兵庫県立歴史博物館にて『ひょうご伝説紀行～妖怪の世界～ マルチチャンネル音楽作品コンサート』を実施した。

(人間発達専攻 余田有希子)

(9) 兵庫県立兵庫高等学校「創造応用Ⅰ」における特別講義

研究概要：2024年7月～2025年2月に兵庫県立兵庫高等学校の学校設定科目「創造応用Ⅰ」において、表現科学分野の探究活動を行う高校生3名へ講義・研究指導を実施した。

(人間発達専攻 余田有希子)

(10) 「Santoor Journeys ~Indian and Iranian Santoor with Tabla and Tombak」出演

藤澤ばやん主催 2024.4.20 京都

(人間発達専攻 谷正人)

(11) 「イランの音楽——アジアの音楽コンサート」出演

2024.10.20 C.A.P. (特定非営利活動法人 芸術と計画会議)

(人間発達専攻 谷正人)

(12) 「坂の街神戸」と地域住民の Well-being：坂に息づくコミュニティの構築

研究代表者：片桐恵子

共同研究者：原田和弘・打田篤彦・Kim Nahyun

研究資金：大学と連携した地域課題の調査研究（神戸市）

研究概要：坂の街神戸における坂に注目し、坂が住民の well-being に与える影響について検討する。

(人間発達専攻 片桐恵子)

(13) 地方教育委員会との連携による学校改善支援

本専攻研究者：岡部恭幸，山下晃一

研究概要：兵庫県三木市教育委員会からの依頼を受け、「三木市未来を創る学力育成プロジェクト会議」に参画して，社会的構成主義等の理論的基盤に基づき授業改善のための基本視点を開発すると同時に，市内の小学校・中学校・特別支援学校の全教職員を対象とする授業づくり研修を実施した。

(人間発達専攻 岡部恭幸，山下晃一)

(14) 神戸市教育委員会「これからの市立高等学校のあり方に関する有識者会議」

本専攻代表者：エルッキ・T・ラッシラ（委員）

概要：これから市立高等学校が育成すべき人材とそのために必要な教育内容など今後の市立高等学校のあり方の検討を行うにあたり，専門的な見地から幅広い意見を求めることを目的として，2024年1月から「これからの市立高等学校のあり方に関する有識者会議」を開催した。

(人間発達専攻 エルッキ・T・ラッシラ)

(15) 子供のための美術館ワークショップ「びじゅつかん大作戦」の実施

本専攻研究者：勅使河原君江

研究概要：2024年度に神戸市立小磯記念美術館で開催された展覧会ごとの特徴に合わせて美術館教育普及担当者と協働的にワークショップを企画立案し，学生もスタッフとして関わりながら年間5回開催し，美術鑑賞と表現活動を連携させた教育実践に取り組んだ。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

(16) 尼崎市総合文化センター白髪一雄記念室と連携した「美術鑑賞と制作体験セッション」の実施

本専攻研究者：勅使河原君江

研究概要：神戸大学ジュニアドクター塾「神戸みらい博士育成道場」におけるプログラム「美術鑑賞と制作体験セッション（2024年9月15日実施）」の企画，実施を尼崎市総合文化センター教育普及担当者と協働的に取り組み，鑑賞活動と制作活動を連携させた活動を通して受講者の観察力の育成と拡散・収束思考の育成を目指した。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

(17) 知的障害者のある青年の地域文化施設を活用した学びの推進支援

本専攻研究者：勅使河原君江

研究概要：西宮市地域学習推進課とともに知的障害のある青年を対象とした地域の文化施設を活用した学びの推進を目指し，西宮市貝類館が所蔵する標本を活用した学習活動の開発に取り組み，ワークショップ「お気に入りの貝をみつけて友達になろう」を2025年1月21日に実施し，体験鑑賞活動の推進に取り組んだ。

(人間発達専攻 勅使河原君江)

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. 災害地への支援活動

東日本大震災被災地活性化支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成 23）年 3 月 11 日に津波によって大きな被害を受けた岩手県大船渡市への復興支援を続けて、14 年になる。2024 年 5 月、10 月に、小規模で赤崎を訪問し、再開された地域行事や赤崎復興市（2012 年より始まり、2 年にわたり中断されていた復興マーケット）の運営支援を行った。また、2025 年 3 月 7 日～12 日にかけて、ESD プラットフォーム WILL（ヒューマン・コミュニティ創成センター支援組織）のメンバー 15 名で、岩手県大船渡市赤崎町を訪問することができた。3 月 11 日の慰霊式典の準備・運営補助をはじめ、災害公営住宅・高台移転団地への友愛訪問のほか、今後の復興支援計画についても地域住民とともに協議することができた。

現在、大船渡市では、防災集団移転、災害公営住宅移転、防潮堤建設が終わり、復興道路も完成した。ハードの整備はほぼ終わった。教育・福祉・医療の仕組みも徐々に正常に戻りつつある。しかし、津波やコロナ禍によって失われた人・町の活力は、いまだ回復していない。むしろ、漸減的な活力の低下が見て取れる。公民館活動の減少、地域自治会の弱体化、婦人会などの地縁組織の解体、人口減少を引き金とする学校の統廃合など、あまりいい話はない。

しかし、発災以来継続して支援を続けるボランティアプログラム（現在の名称は、ESD プラットフォーム：旧大船渡支援プロジェクト）は、単に現地の活動支援というだけではなく、被災地の子供と高齢者の交流、近接地域間の関係創成などの観点で大きな意味を見出している。まちづくり・まちおこしに不可欠なヒューマンリソース（社会関係資本）の充実に貢献しているといえよう。

R6 年能登半島地震・水害復興支援 石川県輪島市・珠洲市

上記の東日本大震災活性化支援とセットで、令和 6 年能登半島地震・水害被災地の支援プロジェクトを断続的に実施した。北陸学園大学と協力して、輪島市門前町や珠洲市の避難所・仮設住宅を中心に、支援物資の配給、長椅子製作提供企画、カフェ事業などを展開するとともに、他大学のボランティアと共に隆起した海岸の整備活動を行った。

2024 年度は 5 月の GW を皮切りに、ほぼ月 1 度のペースで活動した。参加延べ数は、今年度 100 名をくだらない。経済的には、本学ヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよび都市安全研究センターの運営基金及び神戸大学基金によって支えられているが、他学の志を同じくする研究者仲間や ESD プラットフォーム WILL 会員に支えられて具体化を見ている。また、今年度は、特に日本赤十字社やひょうごボランティアプラザ等の学外財団からの助成金も得た。学外他団体と連携して活動していることが特徴である。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は近藤徳彦発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、伊藤俊樹心理教育相談室長、源利文サイエンスショップ室長、北野幸子教育連携推進室長、長ヶ原誠アクティブエイジング研究センター長及び佐藤春実先副研究科長で構成される。

また、長谷川浩樹事務部長、豊嶋江梨子総務係長も出席した。

各センター・室等の連携を図るために、令和6年度からは全学附属センターの枠組みから研究科内のものに変更し、運営を開始した。この関係で発達支援インスティテュートと各センター・室等の関わり、研究科構成員へ発達支援インスティテュートの活動紹介方法、研究科内のプロジェクトとの連携の検討が必要となった。令和6年度も本委員会を毎月1回程度のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。

なお、本委員会での主な検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月22日）	1. 現況分析 KPI 2. 発達支援インスティテュートの検討課題 3. その他 4. 各センター・室からの報告
第2回（5月24日）	1. その他 2. 各センター・室からの報告
第3回（6月28日）	1. その他 2. 各センター・室からの報告
第4回（7月26日）	1. その他 2. 各センター・室からの報告
第5回（9月27日）	1. 各センター・室からの報告
第6回（11月19日）	1. 部局内センターについて
第7回（1月28日）	1. 各センター・室からの報告 2. その他
第8回（3月14日）	1. 各センター・室からの報告 2. その他

（発達支援インスティテュート長 近藤徳彦）

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期

のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関する事など、多岐にわたっている。また、平成 30 年度より本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて、国家資格である公認心理師の養成が始まり、心理教育相談室はその実習の一部を引き受けている。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450 時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等 270 時間以上）の一端を担う役割をしている。なお、心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の相談室長をはじめ、副相談室長、ほか 2 名の委員からなる。また、本年度の相談室スタッフは、教員 5 名（臨床心理学コース担当、臨床心理士、公認心理師）、博士後期課程こころ系講座院生 3 名、前期課程臨床心理学コース院生 24 名（M1：12 名、M2：12 名）、事務補佐員 1 名である。

新規の相談申込みは、基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も、臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており、修士課程 1 年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は、月曜日の午後 1 時～2 時 45 分、火曜日～金曜日の午後 1 時～6 時（いずれも祝日は除く）である（年末年始、夏季のお盆期間は閉室）。毎年 30 件弱の新規相談申込があり、受理面接、インテークカンファレンスを経て面接受理、担当者、継続面接の形式等が決定される。

年間相談件数は、コロナの影響は低下し、従来の相談件数に近づいてきている。引き続き、地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として、ならびに、臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な活動をしている。なお、詳細な面接受付件数、面接受理数、面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。平成 22 年度より心理教育相談室は、年 1 回『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』を発刊しており、院生たちに心理臨床の実践研究をまとめる場を提供している。今年度第 15 号は、事例研究論文 1 篇、相談室活動報告、相談員・研修生活動報告から構成される。なお、掲載された事例研究論文の題目は以下の通りである。博士課程後期課程 2 年加藤哲子「オンラインゲームに多額の課金を行った中学生男子との面接」。

（心理教育相談室長 伊藤俊樹）

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

2024 年度はすべての行事や研究会が対面となり、本部門も新しい一歩を踏み出した。国内外で分断や格差の問題がますます深刻化している。異なる課題をもち、異なる立場にいる人々が葛藤しつつ共生できるコミュニティのあり方を考え直す必要性が出てきた。自己と他者に向き合い、社会で起きている問題を共に考えようとする試みの一つが「哲学対話」の実践である。本部門は、一人一人が日常生活のなかで抱えている問題を共に考える探究のコミュニティ（哲学カフェ）を創成する試みが続けてきた。それらの課題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場から捉

え直そうとする臨床哲学的な対話実践を行った。ジェンダーやセクシュアリティに関する差異、障害の有無、世代間や文化間などの違いを踏まえ、「生きづらさ」の経験についてゆっくりじっくり考え続けている。2024年度にジェンダー・コミュニティ支援部門が実践した5つの活動について報告する。

1. 「神戸大学附属特別支援学校での保護者向けの哲学カフェ」

2024年7月10日、9月11日、11月13日、12月11日、2025年1月29日に、兵庫県明石市にある神戸大学附属特別支援学校に現在通っているお子さんと過去に通っていたお子さんの保護者（母親）向けに哲学カフェを実施した。毎回9時半～11時半の間に、10名前後のお母さんたちと特別支援学校副校長の殿垣亮子氏、主催者の稲原と大学院生・研究員の井上太一氏が集まり、対話実践をした。2024年度は、計5回の哲学カフェを実施したが、毎回異なるテーマを掘り下げて話し合ってきた。テーマは次の通りである。①「学校とは？」、②「親とは？」、③「幸せとは？」、④「友達とは？」、⑤「SNSでのつながりとは？」という一見、障害と関係のないテーマを設定していると思えるかもしれない。しかし、対話をしているうちに、それぞれのお母さんが障害のあるお子さんとの経験を振り返りながら、普段の会話には出てこないような事象について語ってくださっていたのが印象に残った。生きづらさだけではなく、嬉しかったことや楽しかったことなど、沢山の語りが出てきた。来年度も神戸大学附属特別支援学校での保護者向けの哲学カフェを続けていくことになっている。お母さんたちや教員との関係性も構築されたので、今後は語りを丁寧にまとめて、研究として発信していきたいと考えている。

2. 神戸大学附属中等教育学校での哲学プラクティスに関する国際交流

2024年7月17日、神戸大学附属中等教育学校にデンマークからLouise Nabe-Nielsen氏が訪問し、中学校1年生の道徳の授業（中川雅道教諭によるp4c実践）を見学した。本部門の専任研究員である稲原は学生3名と共に同席し、通訳をしながら、研究交流を行った。Nabe-Nielsen氏はp4c（子どものための哲学）の実践者であり、非営利活動法人Rum for Undrenを立ち上げて、子どもたちと若者と一緒に哲学する活動を続けている傍ら、p4cの教育学的な効果について実践研究もしている。Rum for Undrenでは、学校や社会教育施設で子どもたちと一緒に哲学対話の実践することをサポートできる教材の開発に特に力を入れているそうだ。授業見学の後、Nabe-Nielsen氏から実際の教材（対話カード）を見せてもらい、教材開発について意見交換を行った。今後も哲学プラクティスの教材開発についての国際交流を続けたい。

3. 兵庫県立須磨友ヶ丘高等学校での哲学対話実践（特別非常勤講師―臨床哲学）

2024年9月17日の午後、本部門の専任研究員である稲原が兵庫県立須磨友ヶ丘高等学校に行き、2・3年次生を対象とした選択科目「臨床哲学」で、「マイノリティってなに？（普通ってなに？）」というテーマで話題提供をした後、哲学対話を行った。「臨床哲学」では、生命、身体、ころなど「人間」に関することを中心に対話を進めている。稲原自身の経験を話しながら、障害があり女性であることの複合差別やジェンダー問題について考えられるように工夫をした。車座になって参加者の顔が見える状態になり、対話しやすいように、高校生からの素朴な質問に対して丁寧に答えた。「臨

床哲学」の授業をコーディネートしている藤本啓子氏とは、「カフェフィロ」という任意団体が長年ご一緒している。2025 年度も臨床哲学の特別非常勤講師の依頼をいただいている。

4. Learning Creators' Lab 2024 講師

2024 年 10 月 20 日の午前中、教員や教育関係者などに向けたオンラインセミナー「対話で深める」を立教大学の河野哲也氏と一緒に開催した。本セミナーは、一般社団法人こたえのない学校が主催し、本部門の専任研究員である稲原はアドバイザーとして関わっている。Learning Creators' Lab (LCL) は、探究学習の主要な理論に触れながらも、チームで決めた探究プロジェクトを共に開発・実施していく約 8 か月間のプログラムである。河野氏と稲原はそのなかの 1 コマを担当した。LCL は、参加者が自らプロジェクトを生成していく教育者育成プログラムであり、自分自身の経験を振り返り、自ら能動的に学び、行動することによって、探究学習に対するスキルや自信などを得ることができる。本セミナーでは、子ども哲学 (P4C) における探究を主軸にし、講義をした後、参加者が 2 グループに分かれて対話実践を行った。探究学習には対話実践が不可欠であることから、学校ですぐに取り入れることができる子ども哲学を行うための簡単なスキルを参加者に伝授した。なお、一般社団法人こたえのない学校の代表理事である藤原さと氏とは、実践交流を続けており、2025 年度も対話や探究の活動を一緒に実践してことが決まっている。

5. B03 班「ケイパビリティ毀損と人間の尊厳」主催のワークショップ

学術変革領域研究 (A)「尊厳学の確立」(研究課題番号 23H04855) B03 経済・福祉政策班「ケイパビリティ毀損と人間の尊厳 — 福祉経済政策の倫理と哲学 —」(研究代表者：後藤玲子) が主催、本部門が共催でワークショップを 2 回実施した。1 回目は 2024 年 12 月 14 日に神戸大学鶴甲第 2 キャンパスで「ディスアビリティとジェンダーの交差性：尊厳・人権・倫理」を開催し、障害のある女性について調査している研究者 5 名 (小森淳子氏・岐阜協立大学、土屋葉氏・愛知大学、橋田慈子氏・千葉大学、松波めぐみ氏・大阪公立大学、安井絢子氏・関西大学) が講演を行い、コメンテーターとして B03 班の日笠晴香氏 (岡山大学) が登壇した。2 回目は、2025 年 2 月 15 日に神戸大学鶴甲第 2 キャンパスで「現象学と尊厳—経験と差別を考える」を開催し、差別の問題と尊厳の毀損について探究している現象学者 3 名 (有坂陽子氏・南山大学、小手川正二郎氏・國學院大學、稲原美苗・神戸大学) が講演を行い、コメンテーターとして B03 班の研究代表者である後藤玲子氏が登壇した。それぞれのワークショップで建設的な議論が行われた。その他に本部門と B03 班が共催した研究会 (スウェーデンの Japanstiftelsen という研究助成団体が主催) として挙げられるものが 1 点ある。ジェンダー論を専門に調査を続けている研究者 2 名 (Lisa Folkmarson Käll 氏・ストックホルム大学、Maria Lönn 氏・ウプサラ大学) を迎えて、国際交流セミナー「Hauntings and Death as an Integral Part of Life」を 2024 年 5 月 25 日に神戸大学鶴甲第 2 キャンパスで開催した。ジェンダーとコミュニティ、そして尊厳について考える上で重要な議論ができた。

(担当 稲原美苗)

(2) 社会教育・サービスラーニング支援部門

2017年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスラーニング支援部門」が創設され、8年になる。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育（社会教育）の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそつ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスラーニング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動（インフォーマル・エデュケーション）を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか？」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの＝学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育（フォーマル教育）としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、HCセンターの他の部門のキーワードでもある、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、が総合化されたフィールドがターゲットとなる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環的様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD(持続可能な開発のための教育)」およびSDGs運動をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。SDGs運動の萌芽期に合って「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。具体的には、以下の5つの実践フィールド研究を実施している。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織（RCE 兵庫-神戸：「ESD 推進ネットひょうご神戸」）の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ（参与観察・関与観察など）を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明することをねらいとする。

本年度は、コロナで停滞したRCE 兵庫-神戸の運営委員会の組織化を改めて図ることが主であった。阪神間のNP0・市民団体・ボランティア団体のメンバーに連絡をとり、改めてESD推進の組織づくりを行い、中断していた「ESD 実践研究集会」を12月に行った。

2. ESD プラットフォーム WILL 支援事業

HCセンターが主催・支援する高校生・大学・若手社会人を中心とするESD関連事業の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を、参加者

自らが主体となって実験的・研究的に推進する事業である。「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」が所管する「大船渡 ESD プロジェクト」,「障害共生支援部門」の「あーち」関連事業,「自然共生地域支援部門」の農村レジリエンスプログラム,あるいは,「国際開発支援部門」の PEPUP の活動,さらには,RCE 兵庫 - 神戸の各団体の SD 関連活動をネットワーク化し,だれでも,気軽に ESD に触れられるとともに,そのなかで,自己・社会変容の契機を得る空間の実践方法とその理論を,参加者と研究者などの関係者が協力して探求しようとするアクションリサーチである。

ESD が立ち現れる,すなわち,持続可能性をめぐる学習が生まれることが期待される本事業で発見された学習理論である「当事者性学習論」は,現在,関係学会でその有効性・妥当性が検討・協議されている。

3. ESD フォーマル教育推進事業 (フォーマル教育×ノンフォーマル教育)

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして 2006 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎」「ESD ボランティア論」は,上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービスラーニングの在り方,および,その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を,比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。他の部門の教員とともに,ESD 総合コーディネータの協力の元,学習者の学びのプロセスをデータ化し実践モデルの再構築を進めている。

4. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・尼崎市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは,兵庫県嬉野台生涯教育センター生涯大学やいなみ野学園(高齢者大学校)のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は,特に,神戸市職員研修所と協同して,SDGs 学習プログラムを開発・運営した。

5. 研究・学会活動

部門研究員の協力を得て,日本社会教育学会,日本福祉教育・ボランティア学習学会などでの学会活動の推進・支援を試みてきた。学会員等の定期的な公開研究会(月 1 回)をはじめ,両学会の理事・課題別研究の世話人・幹事を務める協力研究員が増えてきた。また,研究発表や学会誌投稿も積極的に行われ,2024 年度実績は,著書 4 冊,研究発表:3 本,投稿論文(査読付き)2 本である。

以上の 5 つの活動を通して,ESD としての教育の形成過程の研究,すなわち,教育哲学論,学習論,主体論,方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行ってきた。

(担当 松岡広路)

(3) インクルーシヴ社会支援部門

A. 2005 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において,「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。火曜日から土曜日まで開館し,隔月で連絡協議会を開催して多方面の機関と

連携しながら運営を行った。

「よる・あーち」は、2006 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、2016 年秋から開始した「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の 4 つの活動を柱とする複合的な場づくりである。毎週金曜日の夜に実施し、住民や学生が集う。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援を関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。

B. 文部科学省受託により、知的障害者に大学教育を開く実践研究を行った。10 月～2 月に特別の課程として週 3 日の授業を展開し、知的障害者 12 名を受講生として受け入れた。その成果に基づき報告書『神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム』を編集・刊行した。また、同じ文部科学省受託により、兵庫県全域で障害者の生涯学習推進のための情報収集や整理・発信、ネットワーク形成を行った。特に、県内各地に博物館を中心に社会教育施設、学校、障害者福祉関係機関等のネットワークにより、学びの場を創設・拡充していくための組織化を行った。10 月 5 日には、文部科学省、兵庫県教育委員会との共催で、近畿ブロック「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を実施し、本部機能を担った。

C 学内の交流ルームに 2008 年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。

D 障害児の放課後保障の観点から 2008 年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。ほぼ毎月 1 回の編集活動を支援し、11 月に第 27 号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

(4) 自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生する地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は、主に以下の 4 つの内容を中心に研究・実践に取り組んだ。

1) 地縁型・テーマ型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

野生動物による農作物食害および生活被害は「獣害問題」と呼ばれ、全国各地で様々な対策を講じている。本部門では、NPO 法人里地里山問題研究所と連携し、野生動物を「害」と考えず、被害軽減のみならず地域住民の生きがいを創出する対策（＝獣がい対策）を全国に発信している。兵庫県丹波篠山市畑地区では、人里に慣れた野生動物と地域住民との棲み分けを目標に、放棄柿を早期収穫し野生動物の集落への出没を防ぐ取り組みが 10 年前から行われている（さる×はた合戦）。この取り組みは都市農村交流や、地域住民の獣害対策に関する情報共有の場としても活用されている。さらに、当該地区では、イノシシやシカの被害防除を目的に設置された集落柵の点検補修作業を地域外の人材で補う可能性を模索するため新たに「さく×はた合戦」を展開している。これは、野生動物の集落への出没を防ぐ集落柵の点検作業に地域外人材が参加して行うもので、獣害対策をめぐる関係人口の創

出に寄与する実践研究として支援を続けている。これらの取組みの成果を、地域の方々自らが第 7 回獣がいフォーラムで発表する機会を設け、発表支援を行なった。

2) 野生ニホンザルの九州地域における分布実態の解明

日本には、北は青森県・下北半島から南は鹿児島県・屋久島まで野生のニホンザルが広く分布している。それらの分布調査は、環境省等によって定期的に進められてきたが、メッシュ内にニホンザルが生息するか否かの結果であり、群れで生活するニホンザルの実際の分布状況を把握できているとは言えないことが度々指摘されてきた。特に、九州地方はメッシュ内のニホンザルの有無のみならず、群れの分布情報も乏しく、国内の他地域と比べて、保全管理に必要な情報が不足している。そこで、ニホンザルの調査経験のある研究者等でニホンザルワーキンググループ（代表・森光由樹、兵庫県森林動物研究センター）を結成し、九州地方を対象に、ニホンザル分布調査を踏査によって行なった。

3) 丹波篠山市史編纂

兵庫県丹波篠山市は、平成 11 年 4 月に多紀郡 4 町合併により発足し、令和元年に市政 20 年を迎え、新たに丹波篠山市として歩み出した。そこで、地域が歩んできた有史以来の歴史を振り返り、神戸大学人文学研究科と丹波篠山市の共同研究事業として丹波篠山市史編さん事業に着手することとなった。市制 30 年となる令和 10 年度の刊行をめざし、既刊の町史をはじめとするこれまでの市内外の研究成果や今後取り組む新たな調査研究成果をふまえ、丹波篠山市の歴史を通史的に記述する「通史編」のほか、「地域編」、「歴史資料編」で構成される。通史編は、さらに「原始・古代・中世」、「近世」、「近現代」、「自然環境・文化財」で構成される。本部門では、「自然環境編」の編集を行なっている。

4) 市町村の政策立案支援

岡山県高梁市の天然記念物臥牛山のサル生息地保護管理委員会として、天然記念物であるニホンザルの保全管理に向けた指導助言、丹波篠山市の農都創造審議会や農都ささやま外来生物対策協議会への参加を通じたアドバイスを行なった。

（担当 清野未恵子）

(5) ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

① 健康あーち：子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を行った。

乳幼児、児童の保護者を対象とし、食生活や心の健康を中心テーマとして取組を行った。

食生活に関する取り組みでは、健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもとその保護者の心身の健康の維持増進を旨とする事業を展開した。プログラムは、企画会議で保護者およびスタッフと話し合い前年度の振り返りを経て作成、実施した。具体的には野菜作りと親子クッキングを行い、体験を通じた実践的な学びと支援を行った。実習観察園での取り組み後には、それぞれの感想を述べたり、実習観察園で収穫した野菜を各家庭で実際に調理した料理等について、写真でアップしたりと情報交換が活発に行われた。親子クッキングでのピザづくりは、黒田久恵氏（甲子園大学）から専門的な支援を得ながら実施した。参加者はそれぞれの創造性を膨らませ、オリジナリティあふれるピザが作成された。

食生活に関する事業に参加の子どもも多くは、小学生となり、事業内容を再検討する時期に来ている。現在、のびやかスペースあーちに訪れる保護者と子どもを対象としたプログラムの検討を進めている。

またのびやかスペースあーちに訪れる保護者を対象に、スタッフとの連携のもと子育てを中心とした相談支援を定期的に行った。次年度も引き続き相談支援を行い、事業の充実を図る予定で去る。

【場所】神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち
神戸大学大学院人間発達環境学研究科実習観察園

② 健康の専門職を対象とした事業

保健師や管理栄養士など健康の専門職と連携し、健康の専門職を対象として生活習慣改善における行動変容に関する事業を実施した。

具体的にはこれまでに開発した特定健診・保健指導者向け研修プログラムについて検討を深め、プログラムの改定を行った。今年度は兵庫県に加え、大阪府や岩手県からも依頼を受け特定保健指導に関わる保健師、管理栄養士などを対象に行動変容に関する実践的な研修を行い高い評価を受けた。そして国立大学法人神戸大学産官学連携本部とも連携を図り、社会実装に向けた基盤づくりについて検討を開始した。

③ 労働者の well-being

労働者のモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being monitor に関する研究として、株式会社テアラクソンとの共同研究を行った。インタビュー調査を行ない大型商業施設の労働者を対象にモチベーション・エンゲージメント強化に繋がる well-being について探求し研究の成果をまとめた。研究の成果は Internatioanl Positive Psychology Association でのポスター発表として受理された。

④ 国際的な事業

心の健康のための国際プログラムの開発をめざした研究活動:心の支援にあたる支援者を対象とした心の健康に関する国際調査を行うために、オーストラリアに研究拠点を築き、海外での研究を進めた。野上慶子氏（独立行政法人日本学術振興会 特別研究員）が研究プロジェクトに加わり、国際学会での発表、国際共著の執筆等の準備をはじめ、2025 年度の事業展開に向けて準備を進めることができた。

（担当 加藤佳子）

(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援

2012 年 11 月以後、継続的に、学生・院生及び教職員が岩手県大船渡市赤崎地区公民館（2012 年 5 月 1 日に、本研究科と連携協定と締結）に赴き、支援活動をしてきた。本年も、学生・教員、これま

で活動に携わってきた OB・OG らが現地を訪問し、2025 年 2 月・3 月の大船渡山林火災問題への対応や、3.11 慰霊の集いの支援等をした。

◇石川県能登半島地震への対応

2007 年 3 月の石川県能登半島地震被災者の居住保障をめぐる問題について、支援等を行った。また、2023 年 5 月および 24 年 1 月の石川県能登半島地震について、人々の生活の復興の視点から調査研究や支援の取り組みを継続的に展開した。

◇社会保障裁判等における市民支援

2013 年の国による生活保護基準引き下げの違憲性を問う「新生存権裁判・いのちのとりで全国裁判アクション」について、人々の人権保障に寄与するための支援を行った。

(担当 井口克郎)

10.1.4. のびやかスペースあーち

1. 沿革

のびやかスペースあーち（以下「あーち」）は、本研究科・ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの附属サテライト施設である。「あーち」は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となるべく、地域住民に対して多様なサービスやプログラム等を提供してきた。また、本研究科を中心とした教員・院生・学生の実践的研究の場（研究フィールド）、授業・実習やボランティア活動の場としても機能してきた。

- ・2005（平成 17）年 9 月 神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署 2 階）において運営開始
- ・2007（平成 19）年 4 月 地域子育て支援拠点事業者として神戸市より補助金を受ける（現在に至る）
- ・2007（平成 19）年度 「ユニバーサルまちづくり賞」（兵庫県より）
- ・2009（平成 21）年度 「市民福祉奨励賞＜児童福祉＞」（神戸市より）
- ・2010（平成 22）年度 「学長表彰」（神戸大学より）
- ・2015（平成 27）年度 「ひょうご子育て応援賞」（兵庫県より）
- ・2016（平成 28）年 10 月 神戸市補助金事業「子どもの居場所づくり事業」を開始（現在に至る）

※2017 年 4 月からの全面移転に先行して灘区民ホールにて実施

- ・2017（平成 29）年 4 月 灘区民ホール（3 階）に全面移転する（現在に至る）

2. 取り組みの概要

「あーち」の中核事業は、神戸市からの補助金を活用して運営されている「**A. 地域子育て支援拠点事業**」と「**B. 子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）**」である。なお、「子ども食堂」は「灘区連合婦人会」との協働事業でもある。

A. 地域子育て支援拠点事業

本事業は、地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を通して、子育ての孤立感や負担感などの低減・解消を図るなど、地域の子育て家庭を支える国事業（第 2 種社会福祉事業）であり、補助金交付が始まった 2007 年度には全国約 4,400 箇所、2023 年度には全国 8,016 箇所において実施されている。「あーち」では、補助金交付の条件である基本 4 事業（① 交流の場の提供・交流促進 ② 子育てに関する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報提供 ④ 子育て・子育て支援に関する講習等）

を週5日型（1日当たり6時間）で実施している。

B. 子どもの居場所づくり事業

本事業の背景には「子どもの貧困対策の推進に関する法律（2003年成立）」があり、貧困対策のうちのひとつとして位置づく国事業である。各地域の実情に応じた多様な取り組みが可能だが、全国的には「子ども食堂」「学習支援」が主流である。「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践と神戸市からの補助金事業（子どもの居場所づくり事業）とを融合させた「よる・あーち」の取組を週1回（金曜日 16:30～20:00）実施している。地域の未就学児・小学生・中学生・高校生や青年、保護者、市民ボランティア、大学生・院生（他大学含む）が参加する。子ども・青年たちは学習支援を受けたり（講師は市民ボランティア・大学生らが担当）、ボランティア・保護者と夕食を共にしたり（調理は「灘区連合婦人会」の登録会員約50名がシフト制で担当）、遊びのプログラムを楽しんだりしている。

3. 2024年度の取り組みの概要

【新型コロナウイルス感染拡大の収束を受けて】

2023年5月8日付で、新型コロナウイルスの感染症が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」における「5類感染症」に変更されたことを受け、昨年度よりゆるやかに様々な制限を解除し、ランチタイムも復活させたところ、本年度に入ってからランチタイムの利用者が増加した。感染防止については、他の地域子育て支援拠点の対策を参考に、以下を継続している。

- ・ 毎日の館内換気・清掃の徹底、毎日2回のおもちゃ・備品の消毒の徹底を継続
- ・ スタッフの健康管理・手洗い・マスク着用の継続
- ・ 利用者への手洗いの依頼の徹底を継続

【2024年度における主な利用・運営状況】

<年間利用者数>

コロナ禍における多様な制約は、本年度に入ってから上述のように緩和された。その影響で、「あーち」の年間利用者数（表1参照）は、昨年度の利用者数に比して回復傾向にあり、2025年2月末現在、延べ12,212（昨年比+4,085）人である。内訳は、子ども5,638人（昨年比+1,292人）・おとな6,574（昨年比+2,155）人である。年間の開館日数223日から1日あたりの平均利用人数を算出すると、約55人（昨年比+18人）となる。

<プログラム開催状況>

本年度のプログラム開催状況を集計（2月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は203回、大学の正規教育プログラム（GSP等）の実施回数（延べ数）は81回である。

<学部生・院生による研究利用>

学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用した実績については、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの教員のゼミ生に限っても、これまで、卒業論文9編・修士論文14編・博士論文3編が提出されている（2006～2024年度）。

<授業・実習の場としての活用>

2012 年度より園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の 4 年次生（経験値統合実習）を継続的に受け入れており、本年度は 4 年次生の実習のみを受け入れた。また区民ホールで活動していた「トライやるウィーク」の灘区公立中学校の生徒 4 名に対して「あーち」を案内、事業などの説明をした。

<運営に必要な会議等>

・「あーち 連絡協議会（隔月に 1 回開催）」

本会議は、大学の「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する。本年度は市民ボランティア、灘区連合婦人会、教員・スタッフなどが参加した。

・「あーち通信編集会議（毎月 1 回開催）」

プログラム予定表、学生やスタッフによる絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するための会議である。この通信は、利用者への配布だけでなく、灘区役所、灘区社会福祉協議会、灘区内各児童館、連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。また、「あーち」のホームページ上で順次掲載されている。なお、2025 年 3 月号が 235 号となる。

表 1 年間および月別利用者数：延べ数（2024 年 4 月～2025 年 2 月）

2024 年度		ふらっと		こらぼ／ゆーす		実習観察園		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	21	440	432	64	165	0	0	504	597	1101
5	20	327	309	55	196	0	0	382	505	887
6	21	448	438	74	209	4	3	526	650	1176
7	22	389	359	50	150	0	0	439	509	948
8	18	305	282	60	131	0	0	365	413	778
9	20	457	439	111	223	0	0	568	662	1230
10	23	488	459	47	136	0	0	535	595	1130
11	21	493	476	76	223	0	0	569	699	1268
12	19	496	473	71	148	0	0	567	621	1188
1	19	481	441	48	151	0	0	529	592	1121
2	19	587	555	67	176	0	0	654	731	1385
合計	223	4911	4663	723	1908	4	3	5638	6574	12212

4. 2024 年度の取り組みの詳細（教員・職員が中心に進めている主な活動を中心に）

【ドロップイン・サービス（地域子育て支援拠点事業）】

地域子育て支援拠点事業を神戸市からの補助金を受けて引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。昨年度より再開した「ランチタイム」が再び周知された結果、ランチタイムの利用者は増加傾向にある。また土曜日には、父親をはじめとする家族での利用者が増加しているのを受け「プラレール広場」を開始し好評であった。

【子育て相談事業（地域子育て支援拠点事業）】

上記ドロップインの場に、助産師・保健師・保育士などの資格を持つ相談員の他に、本年度より公認心理師の資格を持つ大学教員が月に1回来館し、保護者への個別相談に応じた。また、灘区の保健福祉課所属の保健師が月に1回健康全般にかかわる健康教育をした後に、個別相談に応じた。相談内容として多かったものは、子どもの生活に関する相談、発育・発達に関する相談、離乳食・幼児食に関する相談、育児不安に関する相談、地域資源に関する相談であった（※この相談内容に関する分類・集計結果は別途神戸市に毎年報告している）。

【よる・あーち】

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムであり、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが大勢集まり、相互に学び合う場を形成している。本年度も時間短縮は継続しているが人数制限は設けなかった。その結果、院生・学部生、そして子どもや青年、保護者、市民ボランティアらは相互交流をより深めることができた。さらに本年度はJICA 関西から大学院生（留学生）4名の活動を受け入れ参加者との交流を図った。

<学習支援（「子どもの居場所づくり事業」）>

神戸市からの補助金を受け、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。学習面や社会性などに困難さを抱える児童・生徒・青年が参加している。支援者は学生を中心に構成され、学習支援を契機とした支援者の学びにも焦点を置いた取り組みをおこなった。卒業生や地域住民、保護者も支援に加わり、参加型研究のフィールドにもなっている。

<子ども食堂（子どもの居場所づくり事業）>

神戸市からの補助金を受け、灘区連合婦人会と連携して実施している。「よる・あーち」プログラムの一環として位置づく。本年度から本格的に食堂形式も再開させたところ、毎回、主に子どもや青年（25～30名）の参加者があった。

<居場所づくり>

「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し、さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

【健康あーち（食育等のプログラム）／（個別相談 新規プログラム）】

子育て中の親子の健康に関する疑問や悩みに対応しながら、食生活や子育ての方法を考えるセミナーと交流会である。参加者である親たちが主体となり運営できるよう、教員や学生らが支援している。本年度は、大学の実習観察園での活動とキッチンを活用した「親子クッキング」を1回ずつ開催した。また、本年度より、公認心理師である教員が「ふらっと」で、保護者からの個別の相談に応じた（月1回）。

【灘区保健福祉課や公立保育所等との情報交換】

奇数月に灘区役所において開催される「子育て連絡会」に「あーち」の職員が出席し、灘区保健福祉課、やはた桜保育所（地域子育て支援担当）、灘区社会福祉協議会、灘区地域活動支援コーディネー、おやこふらっとひろば灘との情報共有・交換をおこなった。

【地域の医療機関との協働実践】

長年、近隣の産婦人科の医師や助産師が日常的に「あーち」の広報を行うことで、生まれてまもな

い乳児がいる家庭の利用促進を図っている。

5. 2024 年度に実施したプログラムの概要

本年度に実施したプログラムを以下に掲載する。また、プログラムの回数やプログラムにかかわったボランティアの人数を表 2 に示す。表 2 には、大学の授業・実習などもプログラムとして掲載しているが、毎日提供されているドロップイン・サービスおよび諸会議は掲載していない。なお、「よる・あーち」の利用者数（子ども・おとな・保護者）は表 1 に、「よる・あーち」にかかわった一般ボランティア・学生ボランティアおよびスタッフの人数は表 2 に含まれているが、改めて別途、表 3 にそれらの内訳をより詳細に示す。

【子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム】

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）週 5 日
- ・ベビーマッサージ：元利用者である母親がリーダーとなって実施 講座と交流プログラム 月 2 回
- ・リフレッシュ YOGA：元利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム 月 1 回
- ・ふらっとリトミック！：元利用者による親子で楽しめる音楽遊びを提供 月 1 回
- ・あらかると音楽あそび：手づくり紙芝居や絵本に音をつけて、一緒に音楽遊びを楽しむ 月 1 回
- ・おはなしの国：ストーリーテラーによる絵本の読み聞かせ 月 1 回
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが壊れたおもちゃなどを修理する 月 1 回
- ・プラレール広場＜新規プログラム＞：広いスペースで自由に電車遊び等ができる場 月 2 回

【発達障害等のある子どもの保護者を対象にしたプログラム】

- ・パパママほっと：おもに自閉症の子どもを持つ保護者のための、語らいと情報交換の場 月 1 回
- ・月イチ with：参加者それぞれの困りごと悩みごとについて語り合う場 月 1 回

表 2 プログラム数およびボランティア数：延べ数（2024 年 4 月～2025 年 2 月）

2024 年度		プログラム数				スタッフ・ボランティア数			
月	開館 日数	一般 のプロ グラム	大学の 授業お よび実 習等	プログ ラム 総数	プログラ ム数 1 日平均	スタッフ（含むプログラム リーダー）数および一般 ボランティア数			学生
						スタッ フ	一般	合計	学生
4	21	20	6	26	1.24	56	15	71	16
5	20	21	6	27	1.35	60	12	72	48
6	21	20	8	28	1.33	68	14	82	31
7	22	19	6	25	1.14	60	8	68	57
8	18	18	6	24	1.33	49	11	60	32

9	20	17	8	25	1.25	50	17	67	22
10	23	17	8	25	1.09	52	15	67	32
11	21	21	10	31	1.48	73	18	91	40
12	19	16	6	22	1.16	51	6	57	14
1	19	15	9	24	1.26	68	17	85	51
2	19	19	8	27	1.42	52	15	67	40
合計	223	203	81	284	1.27	639	148	787	383

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数：延べ数（2024年4月～2025年2月）

内訳	利用者							ボランティア				スタッフ			合計 (人)
	未就学	小学生	中学生	高校生	保護者	おとな	小計	一般	学部生	院生/研究生	小計	教職員	灘区婦人会	小計	
合計	26	160	153	166	295	1114	1,914	118	191	151	460	197	182	379	2,753

6. 2024年度の見学・視察数

大学のサテライト施設として、社会的責任や地域貢献を果たす手段、また、アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として、見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。受け入れた機関・組織別に以下に整理する（個人の見学者に関しては省略）。

【「よる・あーち」見学・視察者】

文部科学省 5名 こうべ市民福祉振興協会 1名 相模女子大学 関係者 8名
相模原市発達障害支援センター 2名 灘区社会福祉協議会 2名
都留文科大学 教員 1名 神戸女子大学 学生 1名 NP0 まなびと 2名 木の芽福祉会 2名
JICA 関西 3名・留学生 4名 他 個人多数
＜テレビドラマ撮影協力＞ NHK 大阪 2名 神戸フィルムオフィス 1名 六甲技研 1名

【その他（「よる・あーち」以外）の見学・視察者】

神戸市地域協働局 1名 灘区地域協働課 1名 灘区保健福祉課 保健師 2名 灘区社会福祉協議会 1名 園田学園女子大学 教員 1名・学生 4名 神戸女子大学 学生 1名 上野中学校 生徒 4名
神戸大学こども教育学科 学生 1名 他個人

7. 2024年度の連携・協力先

「あーち」の運営にあたって、本年度に連携・協力を得た組織や団体名を、その内容とともに以下の表4に整理する（個人の協力者に関しては省略）。

表4 連携・協力関係にある組織・団体等とその内容

組織・団体名等	連携・協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市こども家庭局こども未来課	運営協力
灘区保健福祉課	運営協力／情報交換
灘区民ホール	運営協力／情報交換
灘区地域協働課	地域活動支援コーディネーターの派遣・なだ桜まつり協力
灘消防署	消防訓練（区民ホールでの訓練に参加）
やはた桜保育所（地域子育て支援担当）	情報交換
灘区地域コーディネーター（助産師）	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート／情報交換
灘区内児童館（10か所）	情報交換
おやこふらっとひろば灘	情報交換
灘区連合婦人会	「よる・あーち（子ども食堂）」の調理担当
社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
はしもと産婦人科	広報協力／情報交換
おもちゃ病院（地域の有志）	「おもちゃ病院」の実施
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	「なだぽっとらっく」運営
一般財団法人神戸観光局	テレビドラマ撮影協力

（のびやかスペースあーち運営委員会委員長 相澤直樹）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の科学に関わる活動への支援等を行うことを目的とする。(a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展への市民の関与・参画を促す仕組みづくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

令和6年度は、研究科専任教員（室長、副室長、ほか2名）と、学術研究員2名（非常勤職員）、事務補佐員4名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当者を含む）。

2. 令和6年度の主な取組

(1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学を共同機関として4大学の連携で実施する、高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラムの事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは、国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス（GSC）」の企画として同機構の支援を受けて実施されている。平成29年度から令和2年度の4年間、「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for innovative scientists in the future）としてJSTの支援（第Ⅰ期）を受けた後、令和3～6年度の4年間も採択され（第Ⅱ期）、「“越える”力を育む国際的科学技術人材育成プログラム」（英語名：Research-Oriented On-site Training Program for young scientists to go beyond the boundaries）として実施してきた（企画の実施責任者を神戸大学学長、実施主担当者をサイエンスショップ副室長が務めている）。プログラムの略称は、第Ⅰ期、第Ⅱ期を通じて「ROOTプログラム」とした。

第Ⅱ期において、神戸大学では大学教育推進機構等が主体となり、人間発達環境学研究科を含む全学の幅広い部局・組織の参画のもとで企画が進められている。その企画立案、実施等について審議するために、大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置された。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端的研究機関（理化学研究所放射光科学研究センター、同計算科学研究機構、同生命機能科学研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学西はりま天文台）や、公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し、実施機関である神戸大学、共同機関を含めてGSC ひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは、毎年、科学技術分野で優れた潜在的資質や高い意欲をもつ受講生を募集し、50名程度を選抜して受け入れる。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題提案を策定し、評価を受けて選抜された20名程度が、約1年間、大学等において研究を行なう「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。

令和6年は、5月から6月にかけて第8期基礎ステージ生の募集を行い、98名の応募者（所属学校所在地：兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、徳島県、岡山県、岐阜県、石川県、愛媛県、長崎県）から50名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。令和7年1月には、その中から実践ステージ受講生候補者12名が選抜され、令和7年度の研究活動に向け、大学教員の指導・助言のもとで研究計画の具体化などを進めた。

また、令和5年度に基礎ステージ生から選抜された第7期実践ステージ生22名が研究に取り組んだほか、令和4年度に選抜された第6期実践ステージ生11名が、引き続き成果の取りまとめ・発表を含む研究活動を進めた。令和6年度も、受講生により、多くの研究成果発表が行われた（国際会議での英語による発表9件、その他の学会や研究会等での研究発表29件、修了生による国際誌への論文掲載1件等）。また、これらを通じて以下の受賞があった。このように、優れた科学技術人材の発掘・育成の形ある成果が見られた。

- ・第22回高校生・高専生科学技術チャレンジ（JSEC2024）：文部科学大臣賞
 - ・サイエンスカンファレンス 2024：文部科学大臣賞
 - ・第68回日本学生科学賞：科学技術政策担当大臣賞
 - ・2024年度バイオサミット 第14回大会：優秀賞
 - ・日本金属学会2024年秋期(第175回)講演大会 第12回高校生・高専学生ポスター発表：優秀賞
 - ・日本陸水学会 近畿支部会 第 36 回研究発表会：高校生奨励賞
- ほか

なお、神戸大学ではROOTプログラムの実績・成果も踏まえて、令和4年10月に設置された「高大接続卓越グローバル人材育成センター」が、小中高から大学・大学院へとシームレスに繋いで優秀な博士人材（みらい開拓人材）を育成することを目的として、令和6年4月に「みらい開拓人材育成センター」に改組された。サイエンスショップの室員2名が同センターの取組に参画している。

（2）地域社会における科学コミュニケーションおよび市民の科学活動支援

以下のような取組を行った（主要な項目については、年次報告書資料編に、開催場所、テーマ、参加人数等を記載する）。

- ・平成 19 年度以降実施している、市民が科学者とともに IPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル) の報告書を読み解く会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を 16 回開催した（第 3 期，第 30－45 回）。
- ・六甲山小学校児童を対象とした放課後居場所づくり事業「山の子会」在籍児童を対象として、「ちりめんモンスター」を実施した（2024 年 7 月 31 日，六甲山地域福祉センターにて開催）。ちりめんじゃこの観察を通じて、瀬戸内海の生物多様性や海の豊かさについて学ぶことを目的とした。この活動は GSP のフィールド実習の一環として、学生が中心となって運営した。
- ・神戸市灘区大和公園内「あすパーク」における子どもの居場所づくりの活動「子どもリビング」からの依頼を受け、小学生を対象として人間発達環境学研究科教員による科学に関する体験プログラム 2 件を実施した（2025 年 2 月 18 日および 3 月 11 日）。
- ・欧州微生物学会連合（FEMS）と神戸大学科学技術イノベーション研究科主催によるイベント「国際微生物の日を記念して：微生物とわたしたちの暮らし」の企画・開催に協力した（2024 年 9 月 16 日，神戸酒心館にて開催）。
- ・市民による科学コミュニケーション活動への支援として、伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ開催に協力した（12 回：サイエンスカフェ開催支援のリストについては年次報告書資料編に記載）。
- ・淡路島で地域コミュニティ活性化などに取り組む認定 NPO 法人ソーシャルデザインセンター淡路による「島と神戸を結ぶ つながりカフェ」キックオフフォーラム（テーマ：わたしたちの食卓は地球環境につながっている）の企画・開催に協力した（2025 年 2 月 1 日，神戸教育会館にて開催）。

(3) 科学教育への支援

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては、項目(1)に記したが、それ以外の取組について以下に記載する。

- ・兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2024」を神戸大学百年記念館六甲ホールにおいて開催した（令和6年11月）。兵庫県、大阪府、奈良県、広島県、鳥取県、徳島県の高等学校18校から生徒152名、教員28名、本学関係者9名を含む214名の参加者があり、活発な発表、交流が行われた。口頭発表15件、ポスター発表34件の発表があり、優れた研究に対して、サイエンスショップより優秀賞を授与した。
- ・サイエンスショップが窓口となり、神戸大学共催として、兵庫「咲いテク (Science & Technology, Sci-Tech)」運営指導委員会主催の高校生の科学研究発表・交流会 “10-th Science Conference in Hyogo”（英語による発表、令和6年7月、神戸大学百年記念館六甲ホール）および「第17回サイエンスフェア in 兵庫」（日本語による発表、令和7年1月、神戸大学統合研究拠点および兵庫県立大学、甲南大学のキャンパス、理化学研究所計算科学研究センター）が開催された。
- ・地域のハナバチ類の保全と花との関係、生物多様性の重要性について学ぶ出前授業として、学生とともに「ビーホテル」を用いた実習を実施した（令和6年5月・10月、兵庫県立上郡高校、5月・11月、長野県立上伊那農業高校、6月・10月、兵庫県立淡路高校）。各校では、参加生徒が自らビーホテルを作成し、地域の在来ハナバチやカリバチの訪花状況を観察・記録した。身近な花との関係性を通して、地域に根差した生物多様性保全の必要性について理解を深めた。
- ・軽度知的障害、視覚障害、身体障害のある子どもたちを対象に、環境DNAを用いた地域の魚類相調査および食文化との関連に焦点を当てた実験教室を実施した（令和6年6月・9月、兵庫県立視覚特別支援学校、6月・9月、静岡県立藤枝特別支援学校焼津分校、7月・8月10月、希望者対象・合計70名）。参加者は環境DNA分析により地域の魚種を特定し、検出された魚種に触れたり食べたりする体験を通して、生物多様性と食文化の関係についての理解を深めた。

この他、サイエンスショップに関わる教員は、様々な形で高等学校の科学教育活動への支援も行っている。

(4) 学部・大学院教育

本年度も、国際人間科学部のグローバルスタディーズプログラム（GSP）の国内フィールドとして学生を受け入れた（新規3名、および前年度からの継続2名）。学生は、フィールドワークとして、「佐用川のオオサンショウウオを守る会」の活動への参加・協力、市民グループが開催するサイエンスカフェ等の科学コミュニケーションイベント、高校生の科学研究発表会等、サイエンスショップに関わる諸活動に参加した。

また、項目(2)に記したように、大学院人間発達環境学研究科の授業「サイエンスコミュニケーション演習」にフィールドを提供した。

このように、サイエンスショップは、大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

表 神戸大学サイエンスショップ 令和6年度の主な取組

科学コミュニケーション・市民の科学活動支援
・つるかぶと科学教室（3回） ・サイエンスカフェ開催支援（12件） ・国際微生物の日イベント（国際微生物の日を記念して：微生物とわたしたちの暮らし）開催協力 ・「島と神戸を結ぶ つながりカフェ」キックオフフォーラム「わたしたちの食卓は地球環境につながっている」開催協力 ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための、IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（16回） 他
地域の科学教育支援
・グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営 ・兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催 “Science Conference in Hyogo” および「サイエンスフェア in 兵庫」開催協力 他
大学教育・学生の活動
・国際人間科学部グローバルスタディーズプログラム国内フィールド 『『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ』提供 ・大学院人間発達環境学研究科「サイエンスコミュニケーション演習」へのフィールド提供 他
研究会等の主催
・「高校生・私の科学研究発表会 2024／兵庫県生物学会 2024 研究発表会」開催（主催：神戸大学サイエンスショップ、兵庫県生物学会）

（サイエンスショップ室長 源利文、副室長 伊藤真之）

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

1. 教育連携部門

教育連携部門では、各所と協力し、研修の提供や、学術指導による連携を実施した。また、研修開発にかかわる共同研究を実施した。以下対象ごとに報告する。

(1) 神戸市教育委員会

神戸市教育委員会と共同して、神戸市立の、幼稚園・保育所・小学校及び私立の幼稚園・保育園・こども園等の教員・保育士を対象に、幼小接続期教育をテーマにして「つばめセミナー」（研修講座）を開催した。開催方法は、対面による集合型と、オンライン型のハイブリッドによった。加えて、今年度も昨年度に引き続き、神戸市による保育士等のキャリアアップ研修の「幼児教育」の科目として

位置づけられ、市から証明書も発行された。セミナーの実施内容は以下の通りである。

【令和6年度 つばめセミナー実施内容（全6回）】

回	月日	講師名	内容（キャリアアップ研修項目番号）
1	8/21(水)	田中 孝尚 附属幼稚園長	幼児期の学びと児童期の学びをつなぐ架け橋期の教育（幼保小の架け橋プログラム）の充実に向けて（⑤）
2	9/25(水)	北野 幸子 教授	乳幼児教育の遊びを通した学びについて考える —小学校教育を見通しながら—（⑤）
3	10/16(水)	渡邊 隆信 教授	接続期にふさわしい遊びを通した教育 —道徳性の育ちを中心に—（①）
4	11/6(水)	浅原 麻美 附属幼教諭	子どもの姿に応じた指導計画、記録および評価（④）
5	12/18(水)	岡部 恭幸 教授	発達を踏まえた資質能力の育ちと学び —数理認識の育ちの幼小接続—（③）
6	1/28(火)	目黒 強 准教授	接続期における絵本を通した言語感覚の育成（⑤）

【令和6年度 参加者内訳】※集→集合型 オ→オンライン型 キ→キャリアアップ研修（集合型に含む）

回	月日	参加人数	合計	参加者校種内訳							こども家庭局等
				学校	市立幼	市立保	私立幼	私立保	私認こ	小規模	
1	8/21(水)	集 42 キ 15 オ 19	61	集 1 オ 4	集 3 オ 9	集 9 キ 1 オ 2	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 0	集 12 キ 12 オ 0	集 0 キ 0 オ 2	集 15 オ 2
2	9/25(水)	集 54 キ 17 オ 25	79	集 1 オ 6	集 5 オ 10	集 14 キ 1 オ 3	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 1	集 16 キ 15 オ 2	集 0 キ 0 オ 2	集 16 オ 1
3	10/16(水)	集 41 キ 17 オ 20	61	集 0 オ 5	集 3 オ 9	集 10 キ 1 オ 1	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 1	集 14 キ 14 オ 1	集 0 キ 0 オ 2	集 12 オ 1
4	11/6(水)	集 41 キ 19 オ 18	59	集 0 オ 3	集 2 オ 9	集 6 キ 1 オ 2	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 0	集 15 キ 15 オ 1	集 3 キ 1 オ 2	集 13 オ 1
5	12/18(水)	集 46 キ 17 オ 10	56	集 3 オ 2	集 4 オ 5	集 9 キ 1 オ 1	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 0	集 15 キ 14 オ 0	集 0 キ 0 オ 2	集 13 オ 0
6	1/28(火)	集 39 キ 14 オ 16	55	集 1 オ 7	集 1 オ 6	集 10 キ 1 オ 1	集 1 キ 1 オ 0	集 1 キ 1 オ 0	集 12 キ 11 オ 1	集 0 キ 0 オ 1	集 13 オ 0

(2) 舞鶴市

学術指導契約をむすび、「乳幼児教育の質の向上と保育者研修・育成」について、研修の実施と、同市の研修や実践研究への助言指導、公開保育への参加、フォーラムの企画等を行った。また、同市

の乳幼児教育センターの運営について共同参画した。

直接経費：154,000 円，間接経費地，46,200 円

(3) 白藤学園

学術指導契約をむすび、同法人の乳幼児教育推進体制の強化にかかわる助言指導を行った。遠隔による会議や、提供資料の分析等を行った。公開保育を含む研修開発に参画した。

直接経費：304,600 円，間接経費地，91,400 円

(4) ベネッセ教育総合研究所

学術指導契約をむすび、同研究所が日本全国のすべての保育施設に無料配布している機関冊子「これからの幼児教育」についての監修を行った。

直接経費：53,400 円，間接経費地，19,100 円

(5) 株式会社 エプソン

学術指導契約をむすび、幼児へのプロジェクター機器等の活用における効果検証に向けた研究計画指導を行った。

直接経費：400,000 円，間接経費地，120,000 円

2. 研究開発部門

研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、6回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は5名であった。その他、研究開発を以下の各所と行った。

(1) 神戸市こども家庭局

2018年から継続している神戸市こども家庭局との共同研究の契約を継続し、研修開発研究を行った。神戸市内の9区の園から、計43名のプロジェクト会議メンバー及び神戸市こども家庭局と神戸市教育委員会のメンバーとともに、プロジェクト会議を年二回（5月23日、12月26日）、本学大会議室にて開催した。のべ参加人数は約100名であった。また、公開保育を各区35施設において実施した。のべ参加合計人数は、812名に上った。神戸市全体会を令和7年3月6日に神戸市総合教育センターで開催した。参加者は約300名であった。公開保育実施園におけるシンポジウム、テーブルトーク「こどものせかい ～こころとこころがつながる瞬間～」を行った。

直接経費：769,230 円，間接経費地，230,769 円

(2) ベネッセ教育総合研究所

「子どものウェル・ビーイングにつながるレジリエンスをどう育むか」について、8か国の国際比較研究を行った。同研究成果は、冊子として日本語、英語、中国語で発行された。

直接経費：84,600 円，間接経費 25,440 円

(3) その他科研等

1) 国際共同研究

①研究代表：山口悦司

共同研究者（海外）：Clark A. Chinn (Rutgers University), Qiuyu Lin (Rutgers University)

共同研究者：望月俊男（専修大学），大浦弘樹（東京理科大学）

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築
（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

②本専攻研究者：北野幸子（共同研究者）

研究代表者：榊原洋一（CRN 所長，お茶の水女子大学名誉教授）

共同研究者（海外）：Prof. Aminah binti Ayob (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Christine Chen (Association for Early Childhood Educators, Singapore), Prof. Sasilak Khayankij (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Poh Tin Tan (Tan Specialist Child and Family Clinic, Malaysia), Dean Dr. Sofia Hartati (State University of Jakarta, Indonesia), Fasli Jalal (Professor, State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Thelma Rabago Mingoa (De La Salle University, Philippine), Dr. Lee-Fong Wong (National Taipei University of Education, Taiwan), Dr. Felix Hung (National Taipei University of Education, Taiwan) Mazlina Che Mustafa (Sultan Idris Education University, Malaysia), Dr. Sirithida Chinsangthip (Chulalongkorn University, Thailand), Dr. Anita Chu (National Taipei University of Education, Taiwan), Sri Indah Pujiastuti (State University of Jakarta, Indonesia), Dr. Jiaxiong Zhu (East China Normal University, China), Dr. Nianli Zhou (East China Normal University, China)

共同研究者（国内）：星三和子（十文字女子大学），佐藤朝美（愛知淑徳大学），深見俊崇（島根大学）

研究課題：子どもへのレジリエンスの育成を実践につなげるためのインタビュー調査

研究資金：Child Research Net Asia, ベネッセ教育研究所研究資金

研究概要：8 か国を対象に，レジリエンスと社会情動的スキルという用語を保育者がどのように認識しているかを明らかにするためのインタビュー調査を実施した。また子どものレジリエンスや社会情動的スキルの育成に関する実践例を収集した。同調査の報告書は公開され

（<https://www.blog.crn.or.jp/lab/10/59.html>）ており，また，日本語，英語，中国語の印刷物も発行された。

2) 国内共同研究等

①研究代表者：山口悦司

研究課題：科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築
（課題番号 23H01021）

研究資金：2023～2026 年度・基盤研究（B）（一般）

研究概要:科学関連情報の評価と活用に基づく科学技術社会問題の意思決定能力の育成モデル構築を行っている。

本専攻研究者:山口悦司, 坂本美紀, 増本康平, 木村哲也, 佐藤幸治, Erkki Tapio Lassila

研究代表者:山口悦司

研究課題:高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発
(課題番号 23K17592)

研究資金:2023~2025 年度・挑戦的研究(萌芽)

研究概要:高度情報化社会に必要な科学関連情報評価能力の育成を促進する教師教育プログラム開発を行っている。

②研究代表者:山口悦司

研究課題:高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルの開発(課題番号 20K20829)

研究資金:2020~2023 年度・挑戦的研究(萌芽)

研究概要:高度情報化社会に求められる科学関連情報評価能力の育成手法と実践モデルに関する基礎研究を行っている。

③研究代表者:北野幸子(神戸大学)

研究課題:位置測位システムを活用した保育者養成教育方法と教材の開発

研究資金:挑戦的研究(萌芽)(課題番号 23K17616)

研究概要:位置測位システムを活用して園における子どもと保育者の位置データを収集し,養成教育の教材として活用すべき内容の抽出を行った。それらを検討し,保育者養成教育における活用方法と,活用可能な教材の開発を試みている。

3. 拠点形成部門

拠点形成部門では,国内外の拠点形成を目指して,本学の産官学連携本部を通じた,教育連携推進室とChild Research Net Asia/ベネッセ教育研究所との研究助言指導契約のもと,新型コロナウイルスが全世界で猛威を奮い,子どもたちのウェル・ビーイングに大きな影響を及ぼしている中で,具体的にどのような課題があるのかを探り,その課題解決のためにどのような方策があるのかについて検討するアジア8か国の国際比較研究を行った。

国内については,附属幼稚園と連携して神戸市こども家庭局との共同研究等を行った。附属学校と連携したプロジェクト研究としては,附属小学校,附属幼稚園における,歴史的資料のデータベースの作成を継続して行った。財務的には,現在多くの科研等の採択を獲得してきているが,今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請及び申請の準備をする予定である。

4. その他

その他,本年度連携推進室の主催・共催により企画・運営したシンポジウム等は以下のとおりであ

る。

(1) 「適応的スキル発達をめぐる異分野共創研究」

日時：2024 年 11 月 28 日（木）16:00～18:00

テーマ：環境と調和するスキルの可能性を探る VOL.5 ワーキングメモリの基礎と児童発達支援の
実際——Warabeuta Approachわらべうたアプローチからみえてきたこと

参加者：24名

(2) 環太平洋乳幼児教育学会日本支部2025年研究会／第9回神戸こどもの発達支援研修会

日時：2025 年 2 月 22 日（土）13:30～17:00

テーマ：「共生社会のこれからを考える～医療・療育と保育の互恵的連携協働をめざして～」

場所：神戸大学鶴甲第2キャンパス 大会議室

共催

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教育連携推進室／乳幼児教育学研究室 附属幼稚園

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野小児神経学・発達行動小児科学部門（神戸市
寄付講座）

神戸市こども家庭局 神戸市乳幼児保育研究部会

環太平洋乳幼児教育学会日本支部

後援

神戸市

神戸市医師会

神戸市小児科医会

兵庫県小児科医会

参加者：85 名

（教育連携推進室長 北野幸子）

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

1. 運営体制：運営委員

教員：長ヶ原誠（センター長），増本康平（副センター長），原田和弘（副センター長），近藤徳彦，
片桐恵子，井上真理，田畑智博，近江戸伸子，木村哲也，石原暢，木伏紅緒，佐藤幸治

2. 研究プロジェクトの推進

(1) プロジェクト内容：メンバーと内容

令和6年度は以下の12件の研究プロジェクトが実施された。

「鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して」

メンバー：原田和弘，増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，学外研究者

期間：2010年度～2025年度

内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に、多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた、安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし、大学をコミュニティの中心に位置付け、このサロンを通して、住民同士のネットワークを形成するとともに、サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し、住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

「サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名

期間：2015年度～2025年度

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

「生涯学習・多世代交流プロジェクト」

メンバー：片桐恵子，学外研究者2名，海外研究者1名，大学院生1名

期間：2018年度～2025年度

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する。

「高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト」

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

期間：2015年度～2030年度

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

「関西ワールドマスタースゲームズ2027レガシー創造支援研究」

メンバー：長ヶ原誠，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者3名

期間：2015年度～2027年度

内容：関西広域で2027年開催予定の生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

「活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト」

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

期間：2017年度～2025年度

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

「アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策」

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

期間：2024年度～2027年度

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうか注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

「社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立」

メンバー：増本康平，原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究者，神戸市，企業

期間：2022年～2024年

内容：良い社会的なつながりは、健康増進、認知症罹患率の低下、幸福感の向上など個人にとって良い影響をもたらすだけでなく、地域の安心・安全や災害時の孤立者の減少等、地域コミュニティの問題を解決する上でも重要である。しかしながら、社会的つながりを客観的に測定可能な指標は極めて限られている。本プロジェクトでは、スマートフォンを用いたコミュニケーション量の計測と、調査データによって収集可能な人とのつながりのデータから数理モデルによって社会的つながりを推定する二つの手法の開発と社会実装を目的とする。

「エンド・オブ・ライフにおける感情調整の機序と役割」

メンバー：増本康平，佐藤幸治，原田和弘，学外研究者

期間：2019年度～2024年度

内容：身体、認知機能が低下し自立した生活が困難となっても、社会的つながりを維持し、幸せな生活をおくるために重要な機能として、近年、感情調整が注目されている。本研究では、感情調整機能の加齢による変化について遺伝的、心理的、文化的側面から検討する。

「高齢者のソーシャルサポート授受とICT：コロナ禍での活用と有効性の東アジア比較」

メンバー：片桐恵子，竹内真澄，学外研究者1名

期間：2021年度～2025年度

内容：コロナ禍での活動や人との交流の制限は高齢者の心身に大きなストレスを与えている。しかしコロナ禍において従来のようなソーシャル・サポートを得ることは難しい。ICTを活用したソーシャル・サポートが代替として想定されるが、その現状や有効性は明らかではない。デジタル化が進み、日本に似た家族規範を持つ韓国と香港において、高齢者のICTの利用と効果について精査し、日本でのICT活用にも有効な施策について提言する。

「身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的基盤の解明」

メンバー：石原 暢（代表者）

期間：2023年度～2024年度

内容：身体を健康に保つライフスタイルは、脳老化の減速と関わることを示されている。例えば、習慣的運動に伴う体力の向上は、中高齢期の脳老化の減速と関わる。一方で、過度な座位時間、喫煙、睡眠不足、肥満、高血圧は脳老化の加速と関わる。それでは、これらの身体的健康要因は、どのような分子生物学的メカニズムで脳の老化と関わるのだろうか？本研究は、DNAメチル化の役割に着目し、身体的健康が脳の老化を遅らせる分子生物学的メカニズムを調べることを目的とする。

3. 地域貢献活動によるアクションリサーチ

【2024年度春 健康体操教室】：延べ141名

【2024年度春 園芸教室】：延べ75名

【2024年度春 いきいきウォーキング】：延べ135名

【2024年度秋 健康体操教室】：延べ142名

【2024年度秋 園芸教室】：延べ120名

【2024年度秋 いきいきウォーキング】：延べ112名

以上の地域貢献活動によるプロジェクトを通じたアクションリサーチの結果は、国際学術雑誌に採択されている。住民のネットワークの拡充やwell-beingの向上に役立っていることを科学的エビデンスに基づき示したものとして評価されている。

（センター長 長ヶ原誠）

10. 2. 実習観察園の運営利用状況

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

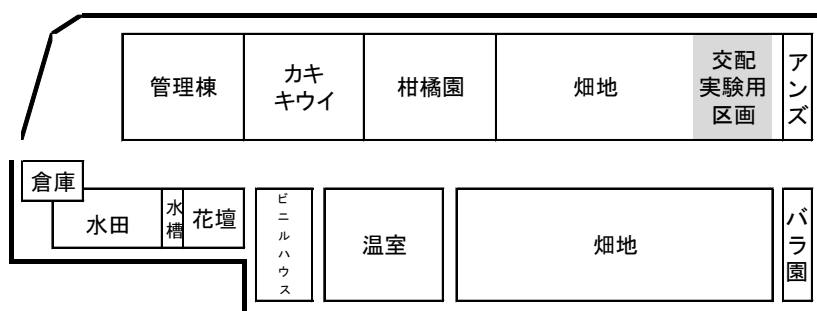


図1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表 1 および表 2 に示した通りである。

表 1 作付面積 (㎡)

種 別	面積	備 考
畑 地	352	教 材 ・ 実 習 用
果 樹 園	255	教 材 ・ 実 習 用
水 田	70	実 習 ・ 研 究 用
バ ラ 園	35	園内美化・実習用
花 壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表 2 作付植物

種 類	植 物
野 菜	コマツナ、ホウレンソウ、カブ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
	サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果 樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
	ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ スモモ、キウイ、ウメ
花 卉	ヒャクニチソウ、マリーゴールド、ペチュニア、
	サルビア、ナデシコ、ヒマワリ、アサガオ ハボタン、チューリップ、バラ ナデシコ、パンジー

表 3 授業と研修の利用者数

授 業 名					
	2020	2021	2022	2023	2024
保 育 内 容 研 究 (環 境)	23	16	11	16	18
園 芸 教 室	0	30	54	60	60
鶴 甲 幼 稚 園	0	0	0	60	60
計	247	201	136	136	136

北

[illegible][illegible]

北

園芸教室	園芸教室	園芸教室	園芸教室	園芸教室				ソラマメ	自然環境論コース 実験用ビニール
------	------	------	------	------	--	--	--	------	---------------------

[illegible]

189

○教育活動

「保育内容研究(環境)」(履修生 18 名)において、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、収穫、花壇・緑化設計と制作などを行っている。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導をおこなうことを想定した授業をおこなった。校内緑化法について講義、能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習をおこなった。鶴甲幼稚園児(60 名+指導者 5 名)が学生とともに田植え、稲刈りを行った。

○研究活動

人間発達環境学研究科の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本実習園を活用している。

1) スミレとその変種の栽培実験(丑丸)

人間発達環境学研究科の M1 の「修士論文研究」の研究(指導教員: 丑丸敦史)として、国内で採取したスミレと海岸型変種アナマスミレとアツバスミレの植物体の栽培を温室脇で行い、葉および根の形質を観察し、結果を修士論文「内陸-海浜種間の形態・遺伝分化: スミレ種群に着目して」としてまとめた。

利用者: 丑丸敦史, 学部生 1 名, 協力大学院生 1 名

2) アジサイ属の栽培実験(近江戸)

神戸市立森林植物園との共同研究としてアジサイ属について、挿し木実験を行った。博士研究の「リピートームと染色体解析から見たアジサイ進化の研究」ため DNA 採集ならびにゲノムサイズ測定用の植物体をガラス温室内で育成した。

利用者: 近江戸伸子, 大学院生 1 名

3) ツユクサ属植物の栽培実験(近江戸)

関西ならびに関東の里山および都市部の水田でサンプリングした温室内で栽培したツユクサならびにケツユクサを対象にした研究の「ツユクサの属における都市化と多倍体化」研究を行なった。

利用者: 近江戸伸子, 大学院研究生 1 名

4) ノジキクの栽培実験(近江戸)

姫路市でノジキクの保全・譲渡を社会貢献活動として行っている有限会社エヌ・エス・グリーン(日本触媒)から分譲頂いたものを栽培し種子を採取した。

利用者: 近江戸伸子, 大学生 1 名

○他機関の利用

以下の 2 つについて取り組んだ。

- 1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 連続講座 2024「園芸教室」の開催
- 2) 健康あーち HC センター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

3) “越える”力を育む国際的科学技术人材育成プログラム ROOT

4) 長峰中学校職業体験

1) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」を立ち上げた。当実習観察園で2014年から開催されてきた園芸教室はその一環の活動である。

小学生から80歳代までの多世代が参加し、参加者（春30名、秋30名）がグループに分かれ、以下の実施日にそれぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ（図3、4）。

春の園芸教室 5月11日、6月8日、7月13日

秋の園芸教室 9月7日、10月15日、11月9日、12月8日



図3 5月11日開催
野菜播種



図4 9月7日開催
野菜畝作り

2) 健康あーち HCセンター ヘルスプロモーション・健康行動支援部門（加藤）

HCセンター、ヘルスプロモーション・健康行動支援部門の活動の一環として、健康あーちに参加している地域の子ども（8名）とその保護者（7名）を中心に、花や野菜の育て方について学び、収穫体験などを行った。子どもや保護者との交流を行いながら、食体験を深めた。本学教員の加藤佳子が活動の引率を行った。

6月8日 野菜の収穫と花の苗の植え替え

3) “越える”力を育む国際的科学技术人材育成プログラム ROOT（谷）

管理棟2Fに設置されているインキュベーターを利用して、ROOTプログラム第7期実践ステージ生の研究テーマ「植物の外音に対する応答（アドバイザー：近江戸伸子，サブアドバイザー：谷篤史）」を実施した。シロイヌナズナの種子を蒔種した寒天培地を二つのグループに分け、これらをLED照明とタイマーを用いて12時間ごとに明暗となる二つの防音ボックス内に設置した。一方のボックス内にスピーカーを設置し、2000 Hzの音を常時発生させることで、外音がシロイヌナズナの発芽率や初

期の成長に与える影響について研究を行った。

利用者：近江戸伸子，谷篤史，ROOT 実践ステージ生 1 名

4) 長峰中学校職業体験

職業体験の一環で飲食店の仕事を学ぶことを目的とし，食材が実際にどのように提供されるのかを理解するため，中学生が収穫から提供までの流れを体験する。

飲食店で使用する食材の調達として，野菜や果物の収穫を行った。長峰中学校 2 年生 3 名は食材がどのように店に届き，調理されるのかを理解し，飲食業の仕事の流れを実感することができた。

11 月 12 日 サツマイモ，カキ，キウイ，ユズの収穫

来年度は地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ，授業ならびに研究で，利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)